

---

# 魔王物語

ragana

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王物語

### 【Nコード】

N8831K

### 【作者名】

r a g a n a

### 【あらすじ】

極普通で極一般的な何の変哲も無い犯罪者が神によって別世界へと飛ばされた！

貰った魔力で魔法を練習したい所だが神は見たい番組があるらしく適当な説明と少しの練習で別世界へと転移させられる。

飛ばされた世界で穩便に、しかし出来るだけやりたい放題に新たな人生を謳歌したい！

最近はどうもそんな気配もなくなってきて、相当やりたいようにやり始めている様だ。

何だかんだ言って目立たない事は二の次になりがちになってしまっている。

そんな話です。誤字脱字は当然の様にありますので、発見したら是非是非教えてください。

2/17に主人公普通じゃねえだろってツツコミが来ました。ですよねー。当初はもう少しまともにするつもりだったんですがね

## 第一話 - 選ばれた救世主は犯罪者 - (前書き)

小説処女作と言える作品です。

小一時間問い詰めたくなるような出来の可能性が高いですが、心を広く、穏やかにもち、穏便に済ませていただけると幸いです。

一応、完結までの概要は考えていますが、外的要因により随時変化していくモノだと思います。

誤字脱字は余裕であります。

気が付き次第修正していますが恐らく全てではないでしょう。

それでは皆様、宜しく願います。

## 第一話 - 選ばれた救世主は犯罪者 -

「早く探せ！」

と、最初の頃は全員がそう叫び慌てた。同僚も、普段は偉そうにしている太った上司も、信頼の置けるポーカーフェイスの上司も例外なくだ。

その時は幸いにも被害は少なかった。

が、被害が無かったわけではないので上としては黙認することは出来ず、俺たちとしても不安にかられる

だけでしかないので普段は不満に思う上の判断に歓喜した。

数日後、その対応は甘かったと思いきや知らされる羽目になった。そして、それを補った対応もまた意味はなかった。

次は一ヶ月後であったので更なる対応を施された時はもう次は無いか随分先の話になるだろうと皆安したが、警戒は怠らなかった。安心はしたが嫌な予感はいしただ。

他と比較しなくても異常と思われる施設と24時間体制での見張りを行ったにも関わらず何時の間にかそれはまた姿を消した。これは先の事件からまた数日後である。

今度こそ、と上は今までに考えられないほどの資金を使って警備を強化した。

もうヤツに食事を運ぶことさえ困難になってしまった。

だが、そんな事など無かったかのように一カ月後にまたヤツは姿を消した。もう俺たちは慣れたもので不安には思わないし、最初のように焦る事も無い。「またか」と誰かが呟くと、それに呼応するように俺の口からため息がこぼれた。見てみると、上司や同僚も同じであった。

この出来事の循環はそれから何度も行われることになった。職務怠慢に聞こえるだろうが、今では俺も慣れたものだ。

「まったく、毎回警備をきつくしやがって。今じゃ刑務所よりも危険なダンジョンの方が表現としてあってるんじゃないか？」

と、誰にといい訳でもなく愚痴をこぼすが、どうも自業自得であるためこれ以上は何ともいえない。

足元にある隠された罠を跨いで回避しつつ目の前に広がる光に目を細めた。

前回脱走して以来なのでおおよそ一ヶ月ぶりの日光なので日光浴でもして堪能しつくしたいが、生憎と目的があるし時間も無い。

ここまでできて連れ戻されたらしやれにならないからな。

幾多の罠はこれにて打ち止め。次に俺の障害となるのは視界いっぱいに広がる青。

嵐でもないのに酷く荒れたそれは潮の流れによるものだろうか、見る度に荒れている。

「いたぞ！」

刑務所内部から聞きなれた声が聞こえた。

どうやら、時間は本当に無いらしい。背後から感じなれた気配を感じる俺は躊躇無く荒れ狂う青へと飛び込んだ。

最初はこのまま飲み込まれてしまうのではないかと思えた荒波も、何度目かの挑戦となれば慣れたものだった。

「人間やっぱり慣れだよなあ」

荒波にクローリングで抗う事およそ3時間。慣れない最初の頃は飛び込んで数秒で意識を失い漂流することになったが、今は海を制せると思えてしまうほどだ。大航海時代なら海賊王になれる気分という事だ。

抗ったかいあってようやく陸地へと到達した。

当然、陸へは連絡が行った後なので安直に海岸から進入すれば国家権力で正義の味方と自称する野郎どもに捕縛されるか、少なくとも対峙する事になる。

二回目の脱走の際に対峙した時は、戦時中隊並みの武装集団と格闘したときはそれはもう本当に死ぬかと思った。

やつ等はこういう訳か俺を捕縛するというよりブチ殺すつもりで襲い掛かってきているとしか思えない装備と行動であきれ果てそうになった、とは言っても呆れている余裕など微塵もなかったのだけだ。

俺は海岸からそれでどう見ても90度を超えている傾斜の崖に手をかけた。

人間は大昔の頃から何事にもルールを制定してきていた。

「難しいものだなあ」

そのルールの一つである、商品の対価にお金を支払うというルールを守る為にお金を入手したのだがその為にルールを破らなければ俺にはどうしようもないとは困ったものだ。

これには最初の脱走の際から行ってきて、成功し続けている素晴らしい方法があるのだ。

銀行という施設はお金を大量に保管している。それを奪うことは難しいとされ、成功例もあるのか怪しいほどだと聞いていたのだが、欲張らずに目的の金額のみを奪って全力疾走すれば国家権力と鉢合わせする前にその場を後に出来る。

国家権力の到着を円滑にする為に、職員には幾つかの連絡手段が設けられ、更に手がかりとする為に防犯カメラが複数設置されてい

る。通常はこれですぐにかなってしまいうらしい。

そこで俺は単純に対策を行うことにしたのだ。

防犯カメラに写される前に全て死角から破壊し、連絡を行うのを防止するために全ての職員と客に気づかれる前に意識を奪う。

俺はそうする事で目的の金額を迅速に入手することに成功し続けていた。

単純故に対策を打たれにくらしく、この方法はまだまだ使えそうだ。

心なしか防犯カメラは徐々に頑丈になっていっている気がするし、職員もどう考えても動きが違う。戦いを知るものが混ざり始めている気がする。気のせいかもしれないが。

今回も例外無く数枚の福沢さんのプロマイドを手に持ち鼻歌を奏でつつ町へと向かって闊歩している。

もちろん、なるべく隠れられるように森やビル街を選んで進んでいる。

こういう場所も国家権力が見回りに来ているが、死角に上手く入ることが出来事なきを得ていた。危うい事であるけれど一時の安心は許されるだろう。

今回も何の問題もなさそうだ。俺の目的を果たせる。

「確か、今日は待ちに待った漫画だったな。ゲームは無かったよな？」

と、記憶を確認する。万が一買い損ないがあれば目も当てられない。

そう、俺の目的は俺にとっての嗜好品の域を超えた存在に位置するこの世界以外を連想できる為の必須となる物品であるゲームや漫画といった物入手すべくここまで脱走してきたのだ。

流石に今捕まってまたあの島に入れられてまたここまで来るのは御免だ。

いや、ここまで泳ぎ着いて銀行からお金を拝借する事は何の問題でもないのだ。

何が問題かといえは、高所恐怖症故に崖を登れないので緩やかなトンネルを素手で掘るのは両手が大変なことになるのであまりやりたくないのだ。

トンネルを通り抜けるのも閉所恐怖症が発動しかけて発狂しかねないのだ。

俺としては自我を失って生きる屍やら狂人の様になりたくはない。つまりはゲーム中毒で無い方の廃人。

### 閑話休題。

俺としては目当てのゲームやら漫画の入手さえ出来れば特に問題ない。強いて挙げれば新たな対策が出てきたらその確認が出来れば問題ない。

今回は今までに無いぐらいに上手く国家権力を撒けたので比較的焦りは無い。寧ろ無駄な余裕があるぐらいだ。

そうだ。その無駄な余裕が俺の運命を変えることになったのだ。所謂、フラグを立てた、ということなのだろう。

どう考えても普段の精神状況なら宙で座標を維持し、何の補助も無く出現し続ける光など見かけた瞬間逃げ去つただろう。決して見つめたり呆けたり触つたりなんてするはずが無い。それはもう天変地異が起きてても、防ぐためにそれをしなくてはならない状況であっても例外ではないだろう。

そんな偶然と呼べるのか良くわからない条件が重なって今がある。非現実　まあ、今居る世界外という非日常であればなんだった良いのだが、それに関与できたことは好ましいが感謝できることではなかった。

「で、どうするんじゃ？」

白い世界。地面、地平線は辛うじて認識できるが空も全て白い。

ただの白ではなく、仄かに蛍光的な白である。その世界は端が見えず、どこまでも続いていそうだった。

その中の唯一の住人 尤も確認はとったわけではない が目の前でそう問いかけてきていた。

この白い世界に合わせたかのような白いローブの様なものを羽織って白い髭を手で撫でている。

一見して爺さんであだ名が仙人とかになりそうな外見である。

「そんなに唐突に言われてもわからんだろ。一応、聞く耳はあるから説明してくれないか？」

非現実に見舞われたのだが、俺は何とか慌てふためくことは無かった。

そのお陰で今の様に現状把握しようと言話を聞くという試みを行うことに成功した。

この成功は、この不幸かどうかわからない現象に遭遇するよりも奇跡のように思えて仕方なかったが触れることなく耳を傾けた。

「とある世界がある一人の人物のせいで終りそうだな。そいつは魔王、と呼ばれておる。お前さんにはそいつを倒してほしいのじゃ」

よくありそうな話だ。テンプレというやつだろう。

その内容としては良くあるので先がおおよそ見当が付きそうなので問題は無い。

引き受けるか否か、ということに関しても一見問題は無い。俺は

この世界に未練はないし愛着も無い。寧ろ飽き飽きし嫌いと思える。「現状としては全く問題ないどころか願ったりかなったりだが、俺がその魔王とかいう大層な呼び名を持つている野郎に勝てる気がしないぞ。ファンタジー的になら俺は魔法が使えるわけでも特殊な能力があるわけでもない。凡人が訓練さえすれば扱える事でその域でしか出来ることは出来ないぞ？ それに、俺は誰か知らないヤツからの頼み事を即答で承る様なお人よしじゃない。どうやってかは知らないが、俺の事をここに連れてきたのが偶然かどうか知らないから言っておくが、俺は善人やら正義の味方どころか、真逆の存在である犯罪者だ。人違いなら俺を元に戻せ」

後で希望に沿わないから戻ってね、何て事は御免だからな。

それに、こう言っておけば何らかの恩恵を得られるんじゃないだろうかと下心が満載である。

爺は少し考えたそぶりを見せて話し始めた。

「ワシは所謂、神という存在じゃ。それではお前さんの質問に答えるとするかの」

そういうと、神は何処からとも無く現れた椅子に腰掛けた。

神という発言もだが何処からとも無く椅子が現れた事に対して突っ込みを入れたい所だが、瞬間移動的にこの場所へと誘われた身としてはある程度予想は出来ていたので声荒げて問い詰めることを思い留まれた。

神は何処からとも無く緑茶を取り出し啜り初対面の人間と話しているとは思えないほどの寛ぎ具合だ。

「ふう、まずお前さんがここに居ることは偶然じゃないのじゃ。ワシはお前さんが犯罪者であること所か何でも知ろうとすれば知ることが出来る。面倒くさいからその辺は調べておらんがアカシックレコードとか言う便利なモノがあるからの。……無数にある世界の中からある程度の知能があり、自身の居る世界が嫌いで消えても世界に行く修正が少ない人物がお前さんだったという訳じゃがな」  
それは偶然というものじゃあないのだろうか。

というか、その異論で行くと、少なくとも俺はあの世界でどうでもいい存在だったって訳か。いや、確かに偉業を成し遂げたわけでもないから仕方ないのだけれど少し落ち込みそうだ。

「そういう訳じゃからお前さんの力を期待しとる訳じゃない。それにこの世界には魔法が無いからの。幾ら強くとも敵いつこないじゃる。じゃからその辺りはワシがお前さんにくれてやろうと思っておるよ。間違いなくその世界で最大の魔、それとお前さんが望む固有の能力をな。先ほど聞いた事はこの能力をどうするかという事じゃよ。何、それ程悩まなくても慣れさえすれば魔力だけで力負けはしないはずじゃ」

そういうことか。なんとなくはわかったが、魔王の事が全くわからない。いや、魔王自体は目的じゃないのだ。神の口ぶりからして世界が終らなければ手段は問わないといったところだろう。

神を見てみると、心を読んだのかうんうん、とうなずいている。俺としては全く問題が無いどころか願ったりかなったりの申し出と言っても良い。

俺としては魔法を使ってみたい誘惑に非常に駆られたりしているのだ。断ることの方が難しく感じられる。

「魔王を殺すことが目的で無く、世界の終わりを回避する事が俺への依頼か？」

「そうじゃ。回避したならそれを引き起こさない程度であればお前さんはその後何をしてもかまわん。例えば再び犯罪者になろうとワシはお前に関与はせんよ」

よくあるゲームの様に魔王は絶対悪という訳ではないのか。言うてしまえば、世界さえ何とかすれば魔王を仲間にしようと問題は無い、と。

ならば、行幸。

これで答えは定まった。いや、最初からほぼ選択肢は一つと言っても問題ない様な具合の比率だったけれど。割合的には、引き受けるが9で断るが1ぐらいだ。

「その依頼、引き受けた」

「ふむ、そうか。ならお前さんに魔力を授けようかの」

神が俺に向かって何かを呟きながら指をかざすと異変は起きた。

「これ、が？」

おぼろげにオーラのようなものが見えるようになったが、それ以上を感じられる。

視認出来るのはおまけ程度としか思えないくらいにはつきりと感じる。

俺の内部、体内とかいう物理的なものじゃない。魂とか精神とか言った様な漠然とした認識しづらいものから何か溢れている事が感じられる。

それが膨大な量だという事は感覚的に理解できたが、それでさえちっぽけと思えるほどの魔力という力を目の前の神から感じ取れる。それだけで目の前の存在が神であると裏付けられそうなるほどである。

力を得て力の差を知る。元いた世界で薄々気が付いていたがあるもんなんだなそういうの。

「そうじゃ。その今、見て感じているものが魔力じゃ。お前さんの世界には無いものじゃからな。ここで少し慣れてから行くが良い。何せ、全開すればこれから行って貰う世界の許容量ギリギリじゃからな。下手をすればお前さんが世界を終らせかねないからのう」

それってすごく危なくないか？

まあ、制御さえ何とかすれば問題なさそうだし構わないが。全開にさえしない程度であれば出来そうな気がする。

不思議なことに魔力はある程度俺の思うように動いてくれる。

最初は気のせいかと思っただが徐々に動かせるようになってきていた。

「魔法はその魔力を対価に発動するものじゃ。魔力には体内魔力であるオドと、空間に保有されているマナが存在するのじゃ。通常の魔法はオドを対価として行使するのじゃが、マナを対価とするもの

もある。お前さんに向ってもらう世界は、お前さんの出身世界で言う科学ぐらいに古くから存在するから色々派生や派閥等が存在するんじゃないよ。普通は固体に保有されるオドよりも世界の空間に保有されるマナの方が膨大で強力なのじゃが、お前さんはお前さんという個体でマナに匹敵、もしくはそれ以上のオドじゃから注意するんじゃないよ。行き成り言われてもわからんじゃないやろうから補助程度のもはサービスしてやろうかのう」

神は何が面白いのか笑みを浮かべながらそう言った。

神が俺の掌を掴むと光が溢れ、俺の手には携帯のキーホルダーにありそうな大きさの黒一色の本があった。

「その本は魔道書の様なもんじゃ。その魔力だけで十分じゃが、それ有効活用をしたいと思ったときに役立つぞい。それを手の平の上に置いて大きくなる様イメージすればよい。それで当分は魔力のコントロールだけで何とかなるじやろう」

俺は言われるがままに本が大きくなる様イメージすると、大判の書籍程度の大きさに入れ替えたかのように瞬時に変化した。

同時に、様々な魔法についての情報が頭を巡った。どうやらこれは魔法についての辞書の様な物らしい。

「それを使えばあらゆる魔法の構築方法と対策がわかるようになっておる。頭がパンクせんように魔道書を展開しておるだけの知識じゃがな。魔力はワシが最大級にしておいたから後は操作技術じゃが、幸いにもお前さんはそれに優れておる。通常なら先にお前さんがやった様に魔力を自在に移動させる事でさえ住民のエリートでも数ヶ月かかるからのう。天才の域を超えておる。魔法はイメージが重要じゃからのう。お前さんの出身世界での行動が良い結果になったのう」

確かに、もう身体の一部のように自在に移動させられるようになっていことがわかる。

神が手を前に突き出すと、手のひらから球体状の魔力の塊が射出された。それは俺からしても消えそうなほどで、神からすれば無い

ような程度の魔力量だった。だが、それについて褒められても素直に喜べない。厨二病と言われている気になるというか、そのまま厨二病だからなあ。

「向こうの住民の平均的な魔力量はこのぐらいじゃな。普段はこれぐらいにしておくが良い。魔力量が異常に多い者でもこれぐらいじゃな」

と、言う神は込める魔力を増やす。すると、光は淡く光りだした。

だが、それでもそれは些細な量だ。異常に魔力が多い者でさえ微かな量に感じられる。

言い終わると神はまた込める魔力を変化させる。

「これが向こうでの国の軍のE級魔力じゃ」

だが、それも極僅かな魔力量。しかし、住民よりも遥かに多い魔力 大凡、数十倍程度だろうか である。 とうか、チートすぎるだろ俺の魔力量。E級でも片手所か小指で飛ばせそうな魔力量を俺は得ている。

まあ、実践は魔力量で決まるものではないが、それでも圧倒的過ぎる。

俺がそう考えている間に魔力球の魔力量はまた変化していた。

「魔物の大半はおおよそ住民半分じゃな。中には強いものがあるがそれでもE級以上の二十倍程度じゃ。お前さんからすれば無いようなもんじゃ。それで、この魔力量じゃがな、これはお前さんに倒してもらおうと思っておるヤツの魔力量じゃ」

それは圧倒的に巨大な魔力量だった。

とはいっても、その世界の生物からすれば、である。

魔力量は、おおよそE級の三百倍。E級で平均的な住民の数十倍であるからその強大さがわかる。

確かにそれだけの差があれば倒せない。神が俺のような外部の人間に頼みたくなる気持ちは理解できるといふものだ。

住民やらを強化すれば良いのではないかと思わなくも無かったが、

世界に干渉できないやらのルールがあつたりその世界に関与しているものなら自身の利益のためだけに力を使いそうで信用にならないなどがありそうであるからそれに対しての質問は自重することにする。

閑話休題。

何にしても俺は選ばれ、膨大な魔力量を誇るようになった。

思わず漏らした程度の魔力量で常人所か魔王さえも吹き飛ばしてしまえそうだ。

「魔王についてじゃがな、お前さんがその世界に行つた瞬間からお前さんが魔王になるぞい。その世界での魔王の定義は『最大の魔力量を誇るもの』じゃからな。当然お前さんが魔王になる。元魔王は、世界を貶める者として『霸王』と呼ばれることになる。何、その事は住民もとある方法で知つておるから万が一魔王だと知られても迫害されたりはせんよ。気になるのなら練習がてら魔道書を使って封印系の装飾品でも作れば良いじやろう。ああ、それと魔力量はあくまで平均を教えたにすぎんからな。例外はあるだろうし例外に成れる方法も能力もあるじやろうよ」

魔力は、個々によつて微細に量が違うということか。

封印　大きすぎる力の制限は良いと思う。行き成り得ても扱いきれないだろうし。

頭を巡る知識の中に封印系の魔法があり、魔法道具作成の知識もあつた。精錬や生成、錬金等を駆使すれば作成できるのであろう事ははじき出される。俺が頭の中で念じ、知識どおりに魔力を動かすと魔法が発動したことがわかつた。

手には5つの腕輪。腕輪といつても針金のようなものが螺旋状になつた形状である。それらをDNAの様に絡ませ装着すると大幅に魔力が封印　蓄積された事が感覚的にわかつた。

これで最大開放量が大幅に制限された為、異常な魔力量の放出は

防がれた。魔力量はバレても問題ないとはいえ、バレたら十中八九注目されてしまうだろう。生憎と俺はアイドル思考ではないため注目されたくは無い。注目されれば必然と厄介ごとに見舞われる。

出来れば次の世界　次の人生では穏便に、平和に生きたいものだ。魔力量などを考えるとそれは難しいだろうが。

「おし、まあ魔法については現状問題無いな。後は、その世界の言語や金があるならその辺りについてだな。無一文で始めるというならある程度の稼ぎ方を教えてくれ」

「言語は問題ない。転送する時に頭の中に送っておくわい。金銭は、合金貨、白銀貨、金貨、銀貨、銅貨の順に価値がある。銅貨はお前さんの出身世界で言えば千円程度の価値じゃろう。尤も、この世界と出身

世界では物の価値は異なるじゃろうがな。銅貨100枚で銀貨一枚、銀貨100枚で金貨1枚となる。残りの二種も言わずもがなじゃ。

住民の平均月収はおおよそ銀貨数十枚。お前さんには無一文で行ってもらうことになるが、猟兵所と呼ばれる　実質は何でも屋じゃが　その様な役割の集団がある。お前さんならそこで登録して魔物でも狩れば金銭などすぐに手に入るじゃろうよ」

よくある異世界系と考えて問題ないか。なら、なんとかこの魔力量で押していけるだろう。

「んじゃ、最後に。魔王　霸王って言ったほうが良いか？　そいつは何処にいる？　それともソイツの目の前に転移したりするの？」

最後になってしまったが、これが本題である。俺としては放置したいが、生憎と放置しておけば世界が滅びる。どうやら世界移動の魔法なんてものは存在しないらしいので何とかしなければならぬのだ。

「霸王は数年はブリゴラという大陸の北の方にある国を統治しておるよ。何、放っておいても数年後には色々な国と戦争するじゃろうからわかるじゃろう。戦争前に倒せば楽じゃろうが、戦争が始まっ

てからでも良い。じゃが、戦争が終って二年以内になんとかしてくれ」

それぐらいに霸王は何かやらかすって事か。未来的なモノがわかるとは流石アカシックレコードを閲覧できるだけはある。

それにしても穏やかじゃない。口ぶりからして神としてはブチ殺してほしい様だし。まあ、その辺りは俺に選択権が有る訳だから適当に俺が判断するけどね。

「さて、そろそろ見たい番組が始まるからさっさと送ってしまうぞい」

コイツ、ふざけてるのか？ というか、この世界にもテレビとかあったのだろうか。見当たらないどころか何も無いけれど。

俺の一生がかかっているのに。俺の状況よりも番組が気になるなら、良くある小説の様な向こうの世界に飛んだらどうせコイツは現実的にも俺的にも空気になるんだろうな。呼んでもめんどいとか言って協力してくれないに違いない。下手すれば返事さえしないと  
思う。

そんな事を正しいかは兎に角、悟った俺は転送に対して抵抗もせず、異議も唱えなかった。どうせ無意味だろうし。

神が両手を俺に突き出して踏ん張り顔を真っ赤にしていると、俺の視界は白に覆われた。

いや、元々背景は白かったけれどね。

「能力については後で適当に決めるがいい。それでそれをイメージすれば後はこっちでやるからの」

そうして俺は新たな世界で新たな人生を謳歌することになったのだった。

## 第二話 - 運がいいのか悪いのか -

「そっぴや、環境の事について何も聞いてなかったなあ」  
転送され、一呼吸してふとそう思った。

万が一、酸素がない星であればどうなっていたのやら。まあ、結果オーライだろうから別に良いだろうと、背中に嫌な汗をかきながら頭を振って思考をクリアにする。

周囲からは住民程度の魔力量の魔力は感じず、代わりに魔物の魔力と視線を感じた。どうやら俺は人里から少し離れた森に転送されたらしい。

既に臨戦態勢に入っても問題無いほどに魔物達には目を付けられているようだ。

生憎と、魔物の餌になる気は毛頭無いので仕方なく構えることにした。

「武器は無いから…… 肉弾戦は久しぶりになるかな」

元の世界での戦闘は主にエモノを持って、有利な状況を作ってから挑んでいたからなあ。

それに、人生の後半は刑務所にいたわけだからブランクは凄まじいのではないだろうか。

俺が気づいたことに気づいたのか、構えると同時に四方八方から気配が近づき襲い掛かってきた。

「つと！」

初撃を運動能力に物を言わせて回避しつつ敵を目視する。

無数に感じられる気配は、どうやら狼の様な魔物の群れらしい。

「つたく、安全地帯に転送しろよなあ……」

ぼやきつつ追撃を狙った攻撃が迫る前に手当たり次第に狼の腹を拳と足で打ちぬいた。

攻撃を受けた狼は3メートルほど吹き飛んだが、空中で器用に体制を整え着地し他の狼の陣形に混ざっていった。

どうやら、元いた世界の犬とは違い、外皮と全身を覆う毛髪が衝撃を緩和するらしい。

着弾した際に感じた手ごたえは些か物足りなかったのでおそらくそうだろう。

数が多いので魔道書を展開している間もない。

いきなり役に立たないなコレ。

息をつく間所か、瞬きさえさせてくれないほどの連撃が俺を襲うが、その全てを回避してみせる。

せっかく貰った魔力も使用する機会を与えられないのだから何の脅威にも戦力にも安心にもならない。

不意に、少し離れた位置に魔力を感じた。

視線を向けると、白を主軸とした所々に黄色と赤色で模様が描かれたローブを身に纏う人間 聞こえる呪文の声色から女性であるが は、火炎を放ち数匹の狼を飲み込んだ。

食らった狼は、それで地にふすことは無く未だに走り続けていたが、どうやらダメージは通っているらしくその動きには先ほどのキレはなかった。

仲間を傷つけられたからかそれとも危険だと感じたのか、その女性（仮）へと目標を変え襲い掛かった。

「やべえ！」

と、俺が叫び、狼の間に割って入ろうとした所で女性（仮）の魔力に変化が現れた。

足に魔力を集め、俺より少し遅いが、狼よりかは格段に早い速度で移動し回避して見せた。

更に、余裕があったのか数匹を魔力を込めた拳で殴り飛ばしている。

その拳の威力は俺以上で、殴られた狼は動かなくなった。

どうやら、魔力は魔法に使用するだけでなく収束させることで身体能力などを強化できるらしい。

幸いにも俺は魔力の扱いは得意らしいので、狼が女性（仮）に注

目している間に足に収束させることが出来た。

このまま魔法を放てば良いのではないだろうかと思っただが、下手をすれば女性（仮）を巻き込みかねないので自重することにした。俺は通常は命の恩人と言う程ではないがそれに近い存在を見捨てる程非情には成れない。

脚の要領で拳にも魔力を収束させた後に女性（仮）の付近まで疾走し、その軌道上と女性（仮）付近にいた狼を全て殴り飛ばした。魔力での強化は相当素晴らしい効果を示すらしく、その全ての狼は動かなくなるどころか、殴り飛ばした部分はえぐれていた。

「助けは余計なお世話だったかしら？」

と、女性（仮）ローブの隅から微かに見える口の端を吊り上げて俺に背中を預ける。

「いや、かなりピンチだったよ。助かった」

女性に背中を預けそう答える。

一応、逃げ果せることは可能だったが最善ではなかったからな。さて、女性にあまり負担をかけるものじゃあないからさっさと片付けてしまおうか。

取りあえず、視界に入っていた30匹程を殴り殺す。

後ろで女性の息を呑むのを感じたが、魔力での戦闘は初めてだったし、肉弾戦も久しかったのでそれに構う余裕は無かった。

「ん？」

狼が攻撃を止め、逃げ始めた。

その逃げ方が怯えから来るものであった。

同時に、遠くから高速で近づく魔力を感じた。それも空からだ。

「ボンドラ!？」

女性が叫び空を眺めた。いや睨んだ。

俺がそれを追い空を見ると巨大な鳥がこちらへ向かってくるのが見えた。

「あんなに大きなボンドラ……間違いない。隠れないと　いえ、もう見つかつてるだろうから逃げられないわね」

そう女性は呟くと魔力を高め何やらブツブツと　呪文を詠唱し始めた。

女性から感じられる焦りと余裕の無さからあの鳥が少なくとも先ほどの狼の群れより酷いと感じ、魔道書を展開してボンドラとかいうあの怪鳥を迎撃したい所だが、成るべく手札は切るべきではない。もう少し粘ってみるべきだろう。幸いにも魔道書の補助が有れば無詠唱で術を行使できる訳だから最悪の場合でも素早く対処できる。横からの詠唱が聞こえなくなると同時に、雷がボンドラへと向かっていき襲いかかった。

命中したが、ボンドラは多少怯んだ程度でこちらへ向かう事をやめようとしなない。現状だと、死亡時刻が多少延長された程度の効果しか見いだせない。

それは女性も同じようであった。

「貴方、何か出来ないの!？」

少々　状況に合わず少々程度で済んでいる慌て方の声でそう俺に問いかけてきたが、俺は肩を竦めるだけで対応した。

まだ、ボンドラとの距離は多少ある。それに、思ったほど速度は速くない。俺単独であれば襲撃が有ろうと不意打ちであろうと回避できるかもしれない程度の速度である。

「っ！　仕方ないわね」

彼女にとつては脅威である距離だったのか、俺には回避できないと思っただのかまでは判らないが彼女の魔力が増大したという事だけは判った。

膨大な魔力の放出による力場の乱れが発生し、それによる風により女性のローブのフード部分が用をなさない位置に移動した。

女性　いや、少女と言った方がいいか。年は俺と同等か1〜2歳程しただろう少々焦り顔を歪めているがかなり整っていると判る外見はこの場に似合わなかった。だが、それ以上に、肩ほどまである金髪が根元から青いオーラの様なモノを纏い始めているところに目が行った。

感じられる気配から、そのオーラは膨大すぎる魔力の残滓の様だ。彼女の足元にはネックレスが放り投げられていた。どうやら、そのネックレスは俺の螺旋形状の腕輪と同じく封印の効果が付加されたモノなのだろう。

それを外す以前はエース級より少し少ない程度の魔力であったが、今ではエース級を凌駕する魔力量である。

少女は再び詠唱を行う。魔道書を展開していないので内容は判らないが感じられる魔力から相当強力な術を構成しているであろう事がわかる。

今回は先よりも少し長い詠唱。ボンドラの攻撃が迫りくる、という寸前で再び雷が放たれた。

先ほどよりも強大で、魔力を感じられずとも判るだろう雷がボンドラを襲い、迎撃した。

肉の焼ける匂いが漂い、ボンドラだったタンパク質は無様に地に激突しその衝撃でバラバラになった。

一応、魔道書を随時展開できるよう構えていたが規格外の少女によりそれは無駄になった。いい事ではあるのだが。

少女がネックレスを拾い装着すると魔力が封印され髪の毛のオーラが空気に溶けるように薄まっていった。

「おー助かったわー」

と、妙に明るく声をかけてみるが、肉片が飛び散るこの場では酷く場違いであった。

「貴方、なんでこんなところでうろろしてるのよ！　ここは立ち入り禁止だって赤ん坊でも知ってるわよ！」

そういえば、言語は兎も角、常識等についてのフォロー頼むの忘れていたな。まあ、あっても結果は同じだっただろうが　テンプレで記憶喪失つー事にするか。

「どうやら記憶喪失つーヤツらしくてな。大半の記憶が無い。というより、言語以外は殆ど覚えてないな」

少女は少し驚いた表情をしてみせ、悲しさそうな表情をみせた。

その表情を見て若干の罪悪感を感じたが度外視することに徹した。  
「私はフィニア・クランタ。貴方は 覚えてないのよね……」  
と、申し訳なくするフィニアに笑みを浮かべる事だけはした。  
記憶喪失設定から名乗りだせないのは辛いが若干の緩和程度は努めてみようと思う。

「ま、適当に呼んでくれたらいいよ。俺は別に気にしてないしな」  
フィニアは若干表情を緩めうんうん唸って悩み始めた。おそらく俺の呼び名を考えてくれているのだろう。いや、自意識過剰かもしれないけれど。

「俺の呼び名は急いで考えてくれなくていいよ。今は、この危険地帯から脱出しようか」

「そうね」

返事をする、未だに難しい顔をしてまだ悩んでいるのだろうか競争と言えそうな速度でずんずん進んでいった。

それから一時間もしない内に森から出る事が出来た。

森を囲むように柵が有り、所々に骸骨が描かれた看板が地突き刺されていた。これを見るだけでどれ程ここが危険かわかる。

記憶喪失設定が無かったら完全に俺は頭がオカシヤツ扱いだっただ。危ない危ない。

「ここまで来ればもう安全よ」

森の入口付近にあったテント群の1つに入るとフィニアはそう呟いた。

「そっか。助かったよ。んじゃ、俺は行くわ」

と言って踵を返そうとすると服の裾を引っ張られる感覚を得た。

「貴方、記憶喪失なんですよ？ なら、私と一緒に来ると良いわよ。もしかしたら貴方の身元が分かるかもしれないし」

面倒だから断りたい所だが、身元の情報可得られるかもしれないという条件で断るのは聊か不自然すぎる、か。

「それは嬉しい申し出だけど、ただの少女が見知らぬ人物を調べるなんて現実的じゃないだろう。無理はしなくていいぞ？」

「うっん。大丈夫。私、これでも軍の部隊に所属しているからそのくらいなら簡単よ」

いや、そんなことや顔をして胸を叩いてアピールまでしてくれなくてもいいぞ。いや、それ程に自信が有るのか。

「そうか？ 問題ないならお願いしようかな」

まあ、調べても判らんの明白だけれど。

「まっかせなさい！ じゃあ、さっそくだけど行きましようか」

そういうと、フィニアは呪文らしきモノを呟き始めた。

同時に、テント内部の床に魔法陣が浮かび上がった。それは、淡い黄色の光を放ち発光していた。

俺は特にする事が無いのでそれをぼーっと眺めていると一瞬の浮遊感を感じ、慌てて頭を上げると見知らぬ場所にいた。

フィニアに尋ねようと辺りを見回したがフィニアの姿は見えず、変わりに所狭しと蔓延る人が見える。

ここは所謂、町の大通りを逸れた横道というやつらしい。

おそらくフィニアによって転送されたのだろうが、逸れる等という事前説明は無かったはずなので、現状は不測の事態というやつだろう。

現状把握はこれぐらいにして今後の動きをどうするかだ。

一番まともそうなのは、この場から動かずに待機し待ち続けることだが、それは叶いそうにない。

どうやら、大通りから外れると治安が良くないらしく、先程から好意的でない視線どころか、殺気を放っているといっても過言ではない視線を感じるし、何人かは物陰から姿がちらちら見えたりする。

その際に人影の手にあるナイフは何かの間違いであってほしい。そういう訳で俺は大通りへと歩を進めることにした。無駄な戦闘を行うぐらいなら迷子になった方がいい。個人的にはおさらばしたいわけだから万々歳だ。

どこに行けば良いとかわからないし神が言っていた獵兵所にも行ってみるか。もし、城を見かけたら顔を出してみてもいい。

フィニアは嫌いじゃないからな。まあ、殆ど知らない内での評価だから変動するかもだけれど。

神の恩恵で言語はどうにかなるので看板を読めばすぐに猟兵所は見つかった。

街並みを見る限り、木製の建造物か石製の建造物ばかりであり、鉄は剣や包丁やナイフの様な刃物ばかりで、武器屋に売っているようだった。ぱつと見は中世ヨーロッパのイメージだ。

猟兵所は平均より大きめの木造の建物だった。手入れをして小奇麗にしているが、内包する年期は隠せないでいる。

俺は早速神の言うとおりにここを利用してようと登録と書かれた看板がぶら下げられたカウンターへと足を向け ようとした。

「あ、俺、戸籍も何も無いんだった。登録とかどう考えても出来ないだろ」

よく考えなくてもわかることだった。

俺は自分に憤慨することを通り越して呆れつつ、ため息をついてからカウンターへと進んだ。

「すみません。登録に必要なものを教えてもらえませんか？」

カウンターに座る赤毛の女性に声をかけた。所謂、受付嬢という人物だ。

「はい、身分証明書だけで結構です。身分証明書になるものは、戸籍書類、無ければ身分の確かな方に保護者として登録して貰う事のどちらかになります」

「そうですね、ありがとうございます」

いきなり詰みましたねありがとうございます。

ゲームやら小説なら気にせずポンポン進むところでやたらと現実的な問題によって阻まれたなあ。

現実的過ぎるが故にどうしようもないな。通常なら放置すりゃ良いんだろうけれど、生憎と財布は飢餓状態どころか、この世界で一度も腹を膨らませていない。

「登録しないと猟兵所で働くことは出来ないのですか？」

「はい、難しいです。魔物の必要部位と呼ばれる、何らかのモノに使用できる部位があれば登録の有無に関わらず買い取らせていたただく事もあります。この辺りには必要部位のある魔物はあまりいませんので現実的ではないです」

んー、これもテンプレではなかったかあ。

真剣に詰みそうだ。

やっぱり、フィニシアを見つけて出して登録だけでもやるしかないかなあ？

「そうですか、ありがとございました」

俺はにっこりと笑みを浮かべて（多少引きつっているのはご愛嬌だろう。引きつっているのは見なくてもわかる）獵兵所から立ち去った。

大通りに出るが、何もすることは出来ない。

お金があればそれはもう嬉しいのだろうが、お金の無い現状では、そこら中にある見たことの無い料理や見たことのある料理を売っている出店とその店主と商品を買って頬張っている奴等が恨めしい。

それとなく中身が空気だけになってきた胃を装備しているので尚更だろうが。

そんな危機的状況になっている俺だ。この世界に来る原因でもある無駄な余裕の際に生じた無駄なハイテンションに似た状態のテンションになりつつあるのは自分でもわかった。

漂う良い匂いに誘われて腹の住人が合唱を唱えだす頃に俺は既に限界状態になっていた。臨界点ギリギリというレベルではない。寧ろ、表面張力的にギリギリである。

空を見ると赤くなる事を通り越して少し暗くなってきている。

暗くなるにつれて行き交う人も段々といなくなり、賑わっていた大通りも静けさを取り戻してきていた。それに比例し、よくない気配、つまりは横道の気配が大通りへと浸食してきている。

ふ、と見てみると今大通りを歩いているのは、馬車を引き連れた商人らしき人物や、剣を携えた冒険者らしき人物やらばかりで、近

隣の住民らしき恰好の人々は見当たらない。

「すぐく、嫌な予感がする。」

行き交う人々以上に視線の数がある。つまりは横の住民の視線。

「おわっ！」

横道の前を通りかかると服を引っ張られ引きずり込まれた。

もしかすると何らかの用やら俺の不注意による弊害が生じた可能性があるので暴力に訴える訳にはいかないし、折角新しい世界で新たな人生を始めたのだから無意味で無理由の暴力は差押えにしておきたいのだ。

俺は前の世界で暴力的過ぎたし思考もそうだった。

そんな訳で無抵抗のままに引きずられていったのだ。

普段なら逃げる程度はしたかもしれない。そもそも、俺の不注意による弊害だった場合は面倒しかない訳だし。

「やっぱり、悪い癖と言えるかもしれない変なハイテンションのせいなのもかもしれない。いい加減に自分へ注意を促すべきかなと真剣に悩む。」

「黙って金目の物を置いていけば命は取らねえし怪我もさせねえよ」

眼前に刃渡り20cm程のナイフが突き付けられていた。

「どうやら俺を引っ張ってきた異様に痩せ細った男は俺の腹の虫の暴動を活性化させる貢献をするつもりで引っ張ってきたらしい。」

御苦労様である。

「……」

「こっそりため息をつきつつ、通常ならここで顔を青くしてガタガタと震えておけば良いのかなあ、等と思っていると、男は俺が俺の思考通り面白おかしく怯えているので口を稼働できないと思ったのか調子に乗って「早く出せや」とか若干の笑いを含みながらナイフを握っていない手で脇腹を小突いてきた。」

「おい！ 大物だ！ そんな貧乏そうなヤツなんて放っておいてこっちを手伝え！」

俺よりも大通り側から声

おそらくこの男の仲間がこの横道の

住人だろう　の方に視線を移すと、少し太っているという意味での身体が大きい男を三人のガタイの良い男達が三人がかりで引つ張つてきていた。

その太った男は、白の生地金色の細工を拵えた高価そうな服で身を包み、何らかの商品が入っているのか、一杯になっているサンタクローズよろしく大きな袋を持っていた。その姿からはどう考えても商人にしか見えぬ、怯えるばかりでなすがままになっているので力もとしか言えない存在だと傍目から見ても断言できるような存在だった。

「剥ぎ取り程度ならお前から出来るだろうが！　俺はこつちを片づける！」

面倒を避けようと行動していた　殆ど何をすればいいのか判らず途方に暮れていたただけだけれど　のだが、裏目に出ている。泥沼へと片足を突っ込んでいるこの現状を見る限りはそれ以上な気がしなくもないが気にしても仕方ないので肩を竦めるだけにしておいた。

新たに引つ張られてきた商人らしき男は怯えるばかりで目はきよるきよると見回している。明らかな挙動不審だが、現状を考えれば脱出経路やら解決につながる何かを探しているだろう、なんて悠長に構えていた訳だが、商人らしき男と目が合ってしまった。

今の俺は傍から見れば刃物を不審者に突き付けられているにもかかわらず気にも留めずにあらぬ方向を見ている、阿呆か強者か紙一重である男に見えるだろう。

おそらくこれが失敗だったのだろう。いや、正解だったと言った方がいいのか？　兎に角面倒に巻き込まれた。

「おい！　そのナイフを突き付けられている君！　助けてくれ！　謝礼は払う！」

なんて言われてしまえば相判つたと頷くしかあるまい。

この申し出は希望の光（主に腹の住民にとって）であり、断るなどという暴挙を行えば腹の虫一揆が勃発するであろう事は明白だった。

た。

断るなんてとんでもない！

「と、言う訳だ。残念だけど俺の為に散ってくれ」

ナイフを突き付けていた男は俺への注意を逸らしていたので、その顔へ俺の拳をピクニツクに向かわせることは容易だった。

男が鼻血を撒き散らし地に伏せる前に商人らしき男を追い剥ぎごうとしていた三人の男の脇腹へと次々と足でクレーターを作成しようと試みてみた。

結果としてクレーターを作成する事は叶わなかったが、全員が全員地に伏したので、その間に商人らしき男を肩に担ぎ大通りへと走った。

それにしてもこの男、異常に重い。ダイエットしたらどうだろう。90kgを超えているんじゃないかと思える体重である。

それを肩に担いで走っているのだから腰を痛めそうだ。

「あ、ありがとうよ。この恩は何れ……」

大通りに出るや否や商人らしき男は飛び降りる様に俺の方から移動し距離を取りそう言った。

そのままあらぬ方向へと方向転換を始めたので、明らかに俺への謝礼を有耶無耶にして逃走しようという魂胆であるという事が理解できた。

当然、逃がすわけがない。

「飯、奢ってくれよ。あとお小遣い頂戴ね」

肩を掴んでにつこりと笑みを浮かべて言うと、男は顔を青くして何度も頷いていた。

いやー、人助けって良いモノだな。前の世界ではやった事なかったからな。

「あ、あのうそろそろ財布が辛いのですが」

「そうか、んじゃ、そろそろ止めるか」

俺が大凡、大皿を20枚分程の料理を平らげたところで制止がかかった。

現状でも腹の虫の一揆は先送りになったので、目的が商人らしき男の財布を飢餓状態へと追い込む事ではないのでここで止めることは吝かではなかったのだ。

「んじゃ、ごちそうさん」

「は、はい。ありがとうございました」

リアルで俗に言うゴマすりとかいう動作を見たのは初めてだったので若干の感動を噛み締めながらそこそこに早足で店を出た。

商人らしき男の支払いを考えると少し後ろ髪を引かれるが俺には物理的にどうしようもない事だったしどうもするつもりも無かったので忘れることにした。俺の腹の肥やしになったとはいえ、追い剥ぎにやりたい放題されるよりかはマシだっただろうと考えると罪悪感は緩和された。

腹が良い具合に膨れて空は暗くなってきている。

そうなれば次の問題は宿であった。宿は身分証明書等無くともいけそうだったのだが、生憎と一番重要なものが無かった。

俺は何処の世界でもお金に困る存在なのだろうかと自分が嘆かわしかったが、運命だろうと悟りを開けそうな勢いで諦めることにした。

「今日は野宿で良いかなあ」

横道付近には行かないようにしないと、寝て起きたら装備は無しで、下手すれば敵つい男達に手錠だけ装備させられて監禁されてしまつかもしれないと思うと背筋がゾクリ、とした。

「……やっつと、見つけた！」

聞きなれてはいないが聞き覚えのある声が聞こえた。鼓膜が急に

大きな仕事を寄越されたので慌てふためき過ぎて阿波踊りをしてしまいそうな程大きな声であった。通るような声であったのでそれも拍車をかけたのかもしれない。

「よう」

見るとフィニアが少し息を切らせていた。

フィニアは呼吸が整うのまで掌で制止の意を示し、俺はそれに従った。

「貴方、魔力の耐性があるのかちょっと転送に失敗しちゃったのよ。記憶が無かったのに放り出されて困ったでしょう？ ごめんなさい」

息が整うや否や、また息を乱すのではないかと思える程度に早口でそう並べ立てた。

困ったのは困ったが、俺は寧ろフィニアを避けるというか逃げようとしたから特にきつくは言えないんだよな。

「いや、良いよ別に。気にしてないし」

「そう？ そう言うてくれて安心したわ」

鉢合わせしてしまったし逃げるといふ事は出来なくなってしまった。何だか思うように行かないどころか寧ろ思わない方へと率先して進んでしまっている感があるので余計な考えは捨てて成るがままにやってみた方が良いかもしれないなあ。

「もう暗いし、身元については後で話すわ。取りあえず、今日貴方に泊まって貰う場所へ案内するわね。こっちよ」

俺は言われるがままにフィニアの後を金魚の糞の如く付いていた。

それは傍から見ればどう考えても不審者でありストーカー的であったが、その時気が付かなかった。

宿について部屋を教えられベッドに潜り込んでから一日を思い返していたところ気が付いた。

俺のその日の最後の教訓というか自分が注意すべき点は、俺はどうやら適当に行動していると怪しすぎる行動を容易に取ってしまうので何とかしたほうが良いという事だった。

その結論に至って、俺は生粋の変質者なのかと本気で悩みこんでしまった。

### 第三話 ・面倒は避けてもやってくる ・

ようやく明るくなってきたなという時間帯にフィニアアが訪れた。彼女の服装は、昨日のローブと同じ形状であったが、どうも布の品質が良いモノに感じた。気のせいかもしれないけれど。

「おはよう。昨夜は眠れたかしら？」

「ああ、お陰さまでね」

本当によく眠れた。中々に良い宿である事は一見で理解できる程であった。それ故という事もあるだろうが、フカフカのベッドに身を任せる事等、何年振りだろうか。

牢獄のベッドはベッドと呼ばれているだけでベッドではなかった。あれは唯の鉄塊でしかない。

「それじゃあ、朝食を食べに下へ行くわよ」

「わかった」

朝食という単語を聞いて腹の住民共々うきうきしながら準備をした。準備と言っても特に荷物は無いので、寝るには不適切だと机の上に置いていたナイフ辺りを装着しなおす程度である。

腹の住民が急かすので少々急ぎつつ装備を整えると数秒で事が済んだ。

それを見てフィニアアは下へと向かったので俺も後を付いていくことにした。

結論から言うと朝食は素晴らしいものだった。味もそうだが、ボリュームもまずまずだったのでそれはもう好評だった。腹の住民も一揆を起こすつもりは無く、今の俺の腹の中はラブ&ピースを謳歌できる状態へと改善されていた。

俺が食後に水で喉を潤しているとフィニアアが声をかけてきた。

「さっそくだけど、今から向って貰う所があるわ。貴方の身元情報はそこで調べてもらっているのよ」

仕事が早いな。この時間帯に調べてもらっていて俺が行くという

事はおそらく結果が出たのだろう。と、言う事は夜通し誰かは俺の為に奮闘してもらった事になるのか？ 申し訳ないばかりだ。

朝から慌ただしく動く事になったが気にすまい。気にすべきはその後どうするかだ。身元が無い事は明白なので、その後に身元がもらえるかだ。貰えなければ俺が単独でなんとかするしかなくなるのだ。昨日、単独でどうにかしようとしたが途方に暮れるばかりといても過言ではない状況だったから心配すぎる。一応、この世界の常識やら何やらを学べばもう少し対処法が見いだせるかもしれないが自力で学ぶには時間が必要になってくるだろう。

俺が頷くとフィニアは「行くわよ」と言い、すぐさま立ち上がって代金を支払ってから店を出て行った。

何か味気ないな。別に良いけれどね。

フィニアの姿を見失いそうになったので小走りでフィニアの横に並んだ。

「でつか！」

フィニアに連れられた場所は、市役所のような場所だった。

住民の情報を管理する重要な機関であるからなのか、管理所という看板がぶら下げられた建造物は凄まじく大きかった。横にもだが、縦にも大きい。他の建造物が2〜3階程度にもかかわらずここは5階である。壁も他の建造物はゲームでよくある木製建造物であったりするのだが、ここは白い何かで壁が構成されていた。見た目はアスファルトの様な感じである。更に魔力も感じられるので魔法での強化でも施されているのかもしれない。

フィニアは俺を無駄にちらちら見ながら管理所へと進んでいくので、俺が記憶喪失だという事をまだ気にしているのだろうか。ここに連れてくるまでに記憶が戻ったか聞かなかった所を見ると恐らくそうなのではないかと思当をつけられるというものだ。

「驚くのも無理は無いわ。ここ、ヌーダイセ国の最大の管理所は他の国の管理所よりも遥かに大きくて、それだけで観光名所になっているほどなもの」

と、言われてもヌーダイセとかいう国なんて聞いたことも無いのだからわからない。別に良いけれど。

フィニアが受け付けカウンターへ行くと、受付嬢が急に背筋を伸ばした。シャキッとかいふ擬音が聞こえそうな拳動であった。フィニアが受付嬢に何だか話しているので、俺はポーッと突っ立つことになった。

「ねえ一応聞くけれど、貴方って身分証明書ある？」

「……ん？ ああ、ちよつと待って」

もしかしてもしかすると神が気を利かせてポケットの中にも入れておいてくれるかもしれない。

なんて言うのは淡い期待で無駄でした。

「……今着てる服とナイフしか無いわ」

若干なみだ目。流れる的に身分証明書無いときついのはわかってますよ。

「えっと、顔で検索しますね」

と、受付嬢が気を利かせてかこの場の空気に耐え切れなくなっっては判らないがそう切り出した。

暫く受付嬢が書類の束を探していたが、申し訳なさそうな顔でこちらを見た。

「うん、結果は聞かなくてもその表情でわかるよ。」

「やっぱり？」

「ええ、残念ながらお力になれそうにありません」

フィニアも俺と同じ事を感じ、一応確認を取ってくれたが結果は予想通りだった。

はい、俺詰んだな。

身分証明書も保護者もないんじゃないじゃ何も出来ないじゃんよ。

「お！ フィニア！ どうした？」

出入り口のほうからやけに高価そうな西洋鎧を着込んだ青年が右手を上げて挨拶の意を表しつつこちらへと歩んできた。

背は俺とは違い高い。180程だろうか。160前後の俺からす

れば羨ましいどころか妬ましい。顔も整っているので今すぐしばき倒したい気分になれる。

「……ユウト様」

と、俯き加減で青年の名前を読んだ。

「……どうした？ フィニアか疑ってしまっぐらい落ち込んでいるじゃないか」

「その、彼は記憶喪失で、身元を調べようにも何も手がかりが無くて……」

俺を指差しぽつぽつと話し始める。

ユウトが俺のほうを向いて驚いた顔をしてから哀れみの目線を送ってきた。

俺は肩をすくめるばかりである。

「いや、俺は身元がわからなくても良いんだけどね。問題は身分証明が出来ないから働くことも出来ないのでもうしようもないって事ぐらいしか困ってないよ」

と、苦笑いを隠せず素直に気持ちを話してみる。

「よし！ 僕がグレイン王に何とかして貰える様に言ってみるよ！」

好青年も好青年。素晴らしい好青年笑顔で手を握った状態から親指を上立てて歯がキラリと光りそうなポーズでそう言って来た。

ところで待って待て。

「……王？ 王って王様の事か？ そんな偉い人に物言えるなんてユウトさんは国の重鎮か何かか？」

敬語にはしないけれど一応、さん、付けにしている事で多少汲み取ってほしい。俺は俺を曲げてまで生きるつもりは無いからな！

「ユウトさんはこの国の勇者なのですよ」

と、フィニア。彼女が彼に向ける目線は尊敬の眼差しであったので事実かもしれない。信じがたいが、いや信じたくないが。

勇者ってあのRPGゲームとかでよく主人公を努めている野郎の職業とも呼べない職業の事か？ 何か別の職業があるんじゃないかと淡い期待を抱くがおそらく予想通りだろうな。

「マジか？」

「ああ、僕は魔王を倒す5人の勇者の一人『剣』の勇者さ。この剣がその証である神に与えられた剣『エル・メキ』だよ」

腰を見ると、観賞用でも実践用でも使えそうな片手剣が携えられていた。装飾の施された鞘の形状と剣全体の重心から片刃剣である事が見て取れた。

うん、やっぱり勇者か。確かに見るからに勇者って感じだもんなあ。

「そうなのか。ところで、霸王つてのを倒すのか？」

魔王つて聞こえたんだよね。聞き間違いだと信じている。

「うん？ 霸王？ 今、世界的に危険なのは魔王だけのはずだよ？もしかして他にもいるの？」

「……いや、霸王つて聞こえたから何かなと思ったただだよ。聞き間違ひみたいだから気にしないでくれ」

神の野郎、言ってる事と全然違うじゃねえか。このままだったら俺が殺されるよ！

勇者が魔王を討伐しようとするのはまだ良い。誤解をとけば良いだけだ。だけれど霸王の存在も知らないんじゃ俺の妄言と笑って切り捨てられるだろうが！

「そうかい？ じゃあ、グレイン王の所へ行こうか」

見も知らぬヤツを王様の所へ連れて行っても良いのだろうか。

コイツ、お人よしにも程があるぞ。

「いや、何処の馬の骨かもわからないヤツが王様の近くに行くなんて良くないだろう。良いよ、何とかなるだろうし」

討伐される可能性があるからボロが出る前におさらばしたい。

怖くて怖くて仕方が無いぞ。足が震えそうだ。

「大丈夫だよ。君は悪い人には見えないからね」

「え……おい！ 大丈夫だって！」

俺の言葉を見無視し、ユウトは手を引つ張って俺を強制的に移動させた。

進む先には大きな城が見える。帰りた。

「じゃあ、グレイン王と話してくるからこの辺りで待っていてね」と、さわやかスマイルを浮かべ大きな扉を開け中へと入っていた。

「つか、あんな勇者いるなら俺要らないだろ。しかも、5人って言うてたから後4人もいるんだろ……。」

「ん？ これは？」

廊下をうろついていたら大きな絵の前に行き着いていた。

そこには、5人の武装をした人が描かれ、それと対峙するように悪魔の様な形状をした人物が描かれている。

一人は剣、一人は盾、一人は斧、一人は箱、一人は薬。

「それは二代前の勇者様ご一行と魔王との最終戦の一シーンを予言した絵よ」

俺の呟きに態々対応してくれるフィニアもやっぱり良いヤツだな。この世界にはお人よししかないのだろうか。

「予言？」

「ええ、勇者様がいない時は何も描かれていない真っ白の状態なの。勇者様が現れると絵が浮かび上がってくる仕組みなの。これは未来を写すから偶に変わることもあるわ。現勇者様の絵は少し離れた場所にあるけど、それ以外は全てこの廊下に置かれているわ」

「見てみると、あと幾つか同じサイズの絵が規則正しく飾られていた。」

ここに6枚の絵があるので、現在は7代目の勇者ということか。

「それと、絵の下に勇者様の能力の言い伝えが書かれているわよ」

絵に注意を取られがちで気が付かなかったが、確かに絵の下に黒い石版に白い文字で何かが記載されていた。

文字によると、俺の今見ている絵は、5代目の勇者達の絵らしい。

剣の勇者は、剣の一振りですごい傷跡をつける事が出来、盾の勇者は、あらゆる魔法を防ぎ、斧の勇者はあらゆるものを叩き切り、箱の勇者は箱に入れたものの時を止め、薬の勇者は死者をも奮い立たせる事が出来たらしいと刻まれている。

他の絵も見るが同じように少し大雑把に能力が書かれていた。

全ての絵は共通して、片手剣の勇者と盾の勇者、大剣か斧の勇者と箱や鞆といった入れ物を持つ勇者、それに医療系統に関連するものを持つ勇者が刻まれ、それと対峙するように誰かが一人描かれていた。

全てが同じ構図ではなく、ひとつも同じものは無い。魔王 霸王 王と思いたいが は、毎回格好が違った。

「そついえば、魔法使いつて勇者にはいないんだな」

勇者パーティーに魔法使いは必須なのだと思うのだけれど。

「魔法は、魔王 つまり魔族が扱うものとされ、初代勇者から三代目勇者までは私たちも使えなかったそうよ。勇者様達は魔法とは違い、加護と呼ばれる神の業を用いられるのよ。加護は勇者様と神様にしか扱えないから、加護を使うことが勇者様である証とされているわ」

はい、俺使えないですねありがとうございます。

いやー、もしかして俺勇者かも、とか思ってたんだけど口に出さなくて良かった。凄く恥ずかしい。

ところで、俺なんでこの世界に転送してきたんだろうな？ 意味ないよな。

「勇者様は神様に別の世界からこの世界へと転送されて来られるのだけれど、その際に貰う神の武器も証になってるわね」

「そつかー」

なら、俺は魔道書が神の武器になるんだな。でも、勇者は魔法使わないらしいからなあ。隠しといてよかったよ。バレたら碌な事になりかねん。

「今回は今までと何かが違うみたいなのよ。魔王が倒されていない

のにそれ以上の魔力を持つものが現れて少なくとも魔王級の存在が二体以上存在することになるし。まだ、何か起こるような気がするよね」

「だからなのか、今回から勇者以外にも魔法使いが同行することになったのよ」

と、言いつつファイアーネは袖からバッジらしきものを取り出した。見てみると勇者補助、と書かれている。どうやら彼女がその同行する魔法使いらしかった。

だからあんなに強かったのか

俺が驚いて見せていると誰かに肩を叩かれた。

振り返ってみるとユウトがさわやかスマイルを浮かべていた。

「グレイン王の許可が出たから僕が君の身分を仮で保証して登録しても良いことになったよ」

自分の事のように嬉しそうな顔をしている。

本当に良いヤツだ。

「おお！ ありがとう！」

となると身分貰った瞬間働くかドロンだな。

なるべく勇者関連から離れて いや、でも恩があるからな。

ドロンは流石に止めておこうかな。身分証明取り消しとか妙にありえそうだし。いや、恩があるってのがデカイんだけどね。

うん、この恩は忘れるまで覚えておくよ。

「お安い御用だよ。じゃあ、早速身分証を作りに行こうか」

ユウトに保証人になってもらえるなら安心だ。

俺は今後それを裏切らないように行動すれば良い。

「ああ」

「 それでは、この書類に本人のお名前と保証人のお名前をお書きください」

手続きとかよくわからないからとフィニシアに書いてもらった。

「 ねえ、貴方の名前はどするの？ 呼び名ぐらい無いとどうしようもないわよ」

そういえばそうだった。

呼び名、ねえ。俺としては”お前”とか”君”とかで全然問題ないんだけどな。名前持つと”不審者A”から固有名詞を持つ重要人物へと昇華してしまいそうで怖いのだけれど。

「 なー君」とかって昔は呼ばれていたな。今の今まで忘れている程に昔の話だけれど。

子供の頃の記憶は、というか、それ以降は碌な事をしてこなかったからな。今から考えたら阿呆の極みだよ本当に。

ん？ なんでユウトは訝しげにこつちを見ているんだ？

「 ナークっていつの？ 貴方、記憶が無いんじゃないの？」

おお。もしかしてもしかしなくても、なー君って口に出てたか  
いや、恥ずかしい じゃなくてだな。

「 お？ 何かそう呼ばれてた気がしたんだよ」  
テンプレ的な徐々に記憶復活してますよーパターンでいくとしてよ。下手にボロっても記憶復活してきたわー、で済むしな。

いや、無意識って怖いな。名無しの権兵衛的に適当な名前を考えて貰うつもりだったんだけどまあ、こつちの方が慣れてるっちゃ慣れてるから結果オーライでいいか。

まあ、問題点としては怪しすぎるってところか。どう考えてもこんな都合の良い記憶の復活の仕方無いだろう。

「 そう、よかつたわね！ 何かお祝いしなきゃかしら！？ なら、早く」

「 あのお名前を」

またしてもお人よしは自分の事のように喜んでくれていたのだが、

時と場合は選んだほうが良いだろうと思う。いや、自分の事で喜んで貰っていたから凄く言いにくいんだけどね。

受付嬢も彼女という人に当たりが付いているのかとても言い辛そうに言っていた。いや、それはもう悪戯したら母親を泣かしてしまったかのような程にだ。

「ああ、御免ね。今書くわ。えっと、ナーク、と……」

ユウトも先の訝しげな表情は嘘だったかの様に今は満面のさわやかスマイルだ。

コイツモてるんだろうなあ。羨ましい限りだ。

ユウトの顔は凄く整っているからなあ。俺は散らかるばかりだ。

「ユウトさんの様な名前って珍しいのか？」

フィニアが書類を書いている間は完全に待ちの体制だった。

「ん？ ああ、そうみたいだな。この世界には俺　というか、俺達勇者がやってきた国の名前の形式は無いみたいだ」

そうだったか。いやいや、俺のあだ名を聞いた時のユウトの表情で大方の予想は付いていたけれども。

そして、もしかして勇者全員日本出身だったりするのか。名前だけでは判断できないけれど。

「と、言つと勇者全員が同じく国の出身だったのか？」

「ま、そうなるね。どうも、俺達の世界の俺達の国　日本は妄想豊かで都合が良かったらしいよ」

あー、そうか。俺もその口だな。

只の偶然かなって思っていたけれどそうでもなかった訳か。

「そうか。まあ、大変だったね」

「ナーク！　書類書き終わったわよ。ほら、これが身分証！」

何時の間にかこちら側へと来ていたフィニアに手渡されたそれは一枚のカードだった。

ICカードと同じような物だ。

表面には何時の間に撮ったのか俺の顔写真。それに名前が記載され、あとは空欄になっていた。

「この空欄はなんなんだ？」

「ああ、これを持って」アクセプト 認証” って言えば埋まるわよ」

と、渡されたのは鉄の延べ棒みたいなものだった。手触りや重量感は鉄そのもので、色は黄土色だった。決して金ではない。

「アクセプト 認証」

と、呟くと延べ棒が僅かに発光し、おおよそ半秒でそれは収まった。

身分証を見てみると確かに空欄がひとつ埋まっていた。

「それで二つ名が埋まったでしょう？ 普段は使わないけど、魔法を全力で扱う際に世界に許可を得る際に宣言する必要があるのよ。今ではそんな機会は魔王との決戦ぐらいだから殆ど飾り扱いだけだね」

つまり、気にしないでいいと。

ユウトとフイニアを見る限りは凄く知りたそうにしているが。

「俺の二つ名は …… ひでえなこれ。何かのいじめか？ 『張りぼて』 だってよ。役立たずなのは違いないがなあ」

「ええ！？ 冗談でしょ？ ナーク程の実力ならもっと凄い二つ名が付けられてもおかしくないのに！ 寧ろ、付かないとおかしいわよ！」

と、言われても俺は嘘は言っていないし不可抗力というものだろう。俺も全力を出すようなシリアスシーンで張りぼてなんて名乗りは無いがな。

「ナークはそんなに強いのかい？ 張りぼて いや、すまない。

何か隠された意味があるのかもしれないと思ってね。その二つ名制定板は持っていくといいよ。流石にそんな二つ名は嫌だろう？ 二つ名は3種類まで登録できるから時間を置いてやってみるといいよ、ふつむ。

まあ、貰える物は貰っておくけれど別に名乗らないからこのままでも良いのだけだ。

張りぼて ああ、もしかしてもしかするな。

ユウトの言う様に意味があつたかもしれないな。

一応、張りぼて 魔力だけの野郎にならない為に能力を決めた  
ほうが良いかもしれないなあ。

まあ、候補は決めておいたから後は神と相談できれば相談し、無理ならよく考えて 『それ、全部使えるようにしておいたからのう。いやーこれで心置きなく番組見れるわい』 ちよつと待てや。

……おい？ ああ、最初予想したとおり本当に神は空気になっている。返事さえしないとはどういう事だ。

問い詰めたいことが幾つかあつたのだが逃げたか？

「ナークは強いわよ。猟兵所に入ったら高ランクにすぐ入れると思うわよ。どんな魔法が使えるかは知らないけど、魔力による肉弾戦だけで数十体のライウルを撃破して見せたから相当強いはずよ？」

「そうなのかい？ それは凄い。ここに来て数週間は僕でもライウル数十体は単独撃破出来なかつただろうね。ジュンヤに知れたら戦いたがるだろうなあ」

二人は話し込み始めた。

一応、公共の場なのだが良いのだろうか。いや、このお人よしが統治する国だつたら別に良いんだろうな。

いや、それにしても二つ名が”魔王”とかじゃなくて良かったなあ。

二つ名って聞いた瞬間にその辺りからバレるかと思つたけど杞憂で済んでよかった。

「それにしても 認証アクセラトつて呟くだけで身分証に刻まれるのは良いとして、どうやって決めてんだ？ マジでわかんねえなこれ」

お、やべえ。板持つたままだつたわ。

これ、同じ二つ名が登録されちまつたらどうなるんだろ。

3つ全部張りぼてだなんて格好が付かないにも程があるぞ。

「……」

俺は慌てて身分証と板をポケットにしまった。

幸い、二人は答弁に熱中しているのでこちらを注目していなかつ

た。

「ユウト様！ フィニア様！」

大凡、十分。

それだけの答弁が繰り広げられ、内容は俺の二つ名から、戦ったらどうなるかの構想に至っていた。

それは扉を開け放って息を切らせながら飛び込んできたと言ってもさして問題が無い程度の挙動でやってきた兵士の声によって中断させられた。

少し不満そうにする二人であったが

「未来の絵が！」

引き締まった。

それを聞くや否や俺なんて放って兵士と三人で走っていつてしまった。

俺も慌てて登録所を出て通りを見回すが、人ごみのせいもあってもう姿は見えなかった。

「まあ、未来の絵とかいうヤツを探せば良いか」

俺は『張りぼて』の下に刻まれた『歩く戦場』という文字を眺めてから少し煩い方向へと歩を進めることにした。

あれだけの慌てようなら、たくさんの兵士も慌てている事だろう。さてさて、俺のせいで面倒ごとが起きて、本当に面倒だ。

第四話 ・不幸という面倒は魔王へ注ぐ・（前書き）

PV2000突破しました。

皆さんありがとうございます。

喜びを表して投稿させていただきます。

#### 第四話 - 不幸という面倒は魔王へ注ぐ -

未来の絵とは、文字通り未来を表す絵のことだ。

そこに辿り着くまでに聞いた話だと、今代の勇者の決戦の絵は、それはもう素晴らしいものであった。

5人の勇者と一人の魔法使いに対峙する魔王。

ただ対峙するだけでなく、見るからに魔王が疲弊している絵であつたらしい。つまり、未来は安泰であり、望むものだった。

「いやー、これは傑作なまでに真逆だなあ」

絵は全く別のものになつていた。

5人の勇者と一人の魔法使いが手前で傷を負っている。

それだけでなく、服装から何処かの姫様の様な人物と、本来、対峙してしかるべき魔王も同じ様に傷を負っている。

その奥にこちらへと迫る軍勢。

それを支配しているかのように何らかの影が大きく上空に描かれている。

特に目をひきつけるのは、軍勢の殿を担っているのか、対峙しているのか、黒いオーラを纏う存在が描かれているところであろうか。

「専門家が言うには、どうも魔王と前魔王が協力したか、魔王と第三勢力が強力して軍勢を引き連れてくるらしい」

そう言うユウトの表情はいつものようにさわやかスマイルを浮かべているのだが、少々引きつっている。

絵に描かれた人物は本人に非常に似ている。

剣を持つ勇者は当然、ユウトと瓜二つだ。が、あくまで形であり、顔などの詳細までは描かれていないので、似ている誰か、なんて事がありえそうだ。

上空に描かれている影

おそらく、描かれている戦闘の黒幕なのだろう。は、よくわからないが、黒いオーラを纏う人物は、前

魔王とは違う形である気がする。

手前で前魔王が傷ついていることから明らかに登場人物が増えている。

寧ろ、軍勢側は全員新たな登場人物だ。

俺が傷ついている側に交じっていないので、おそらくこの戦には参加していないのだろう。

さて、ここでの問題は、俺がこの戦に参加せずどこでふ抜けているのかも、第三勢力、第四勢力なる敵がいることでもない。

問題は、未来が望ましくない事であるという事だ。

「グレイン王、前魔王が魔王と協力した線はありませんよ。見てください、構図から言って前魔王は私達勇者の味方になっている方が可能性があります」

とユウト。俺と同じ様な考えに至っているのではないだろうか。

絵を眺めていた、とても貫禄のある男は頷いた。

彼がグレイン王なのだろう。

周囲を眺めると、流石は王と言ったところで、グレイン王だけが焦りを表面上に出さず隠せている。他はユウトを含め焦りを隠せずにはいた。

「魔王が味方である可能性は十分にあると思うが、逆に言うと、仲間にしなければこの未来は訪れない事になる。私は早急に魔王の治める地へと赴き手を結びたいが、他の国が許さないだろう。未来の絵の解釈が違い、魔王は味方にならないのではないかという意見の方が多いと思う。どちらにせよ、各国に使者を送り、集まりを行いたい。おそらく、魔王を繰り上げて討伐することになってしまいうだろうから、誰か信頼のおける獵兵に使者を頼む事になるだろう」

魔王討伐の準備で軍は動かせない、か。

口調からして数年は魔王は大丈夫であると神に聞いたのだろう。

この世界に来て二日目だが、神から聞いた助言は全て意味を成していないなあ。別に良いけれどね。

「では、直ちに獵兵所へ依頼してきます」

と、若い兵士。

「いや、使者とはいえ、魔王からの妨害を受けかねないのではないかの？ 弱い者が幾ら来ようと意味は無い」

と、大臣とか摂政といったイメージしか見いだせない老人が被せる様に言った。

確かに、使者と舐めてはいけない。使者を殺してしまえばその分伝令が遅れ、襲撃が遅れる。

俺なら真つ先に王と使者をブチ殺すだろうしな。

「それに僕は獵兵で信頼を置ける人物を知りません。殆どの有名な方々はこの国ではなく、ウヌク国に滞在していますから使者として雇用することは難しいでしょう。無い物ねだりは意味が有りませんから、募集という形で無く、獵兵所で選別してもらう方法が良いと思いますよ」

と、意味ありげな視線を向けながらユウトはそう提案した。唸るお偉い方を見る限り、この提案が進められる事は明白だった。

その提案を聞いたからかフィニアも意味ありげな視線を向けてきていた。

いや、記憶喪失の頼りない碌でも無しに頼るとは何事だろう。

確かに、誰もが同じ様に知らない人物であれば多少知っている俺を頼るのは頷けるけれど、人選ミスな気がするけどなあ。知らないだろうけれど俺は犯罪者なのだけだ。

そんな思いが有ってため息をつく、それをどう受け取ったのか、二人は笑みを浮かべて視線を元に戻した。

どうやら、想像通り、ユウトの案が進めるらしく、兵士が命令され獵兵所の方へ走って行った。

俺もこの場においても仕方が無いし、何やら難しい顔をして話す重鎮や、兵の配備でもするのか慌てて走っていくユウトやフィニアを視界から外しその場を後にした。

俺は俺で期待に心えるとしようか。

ああ、期待なんてされたのは久しいからうれしいこの気持ちは嘘じゃないんだろうな。

「……使者の選別って今から獵兵所に登録してもいけるのかなあ」  
そこは心配だが、大丈夫だろう。制限なんて行って強い者が募集  
できなければ本末転倒無訳だし。

まあ、使者が魔王につぶされるってのは予想に過ぎないからそん  
なに頑張つて集めなくてもいい気がするが、万が一が有るから、な  
んて不安を抱くんだろうな。

この国って、お人よしばかり、なんて事は無くちゃんと疑り深い  
奴もいるからバランスが取れているんだろうなあと、何だか納得し  
てしまった。

いざ、獵兵所へ登録をしようと思つて足を向けてみたが、どうも  
登録は必要無いらしかった。

決して、獵兵所が登録なしで利用できるものではなく、使者を選  
別する集いが一般市民も含め、誰でもいいいらしかった。流石に、前  
魔王の家来である魔族は無理らしいが。

そんな訳で、よくわからない可能性のある獵兵所の登録を行う手  
間が省けてよかった。

更に嬉しかったのは、その選別の集いに申請するには身分証を見  
せるだけでよかった事だった。

今回はユウトとフィニアは忙しいので来れないために頼れる人  
物がいなかった。なので、書類の書き方が判らなければ一巻の終わ  
りである。

どうやら、予想以上に重鎮はこの事態を重く見ているらしく、大  
凡一時間後に選別が始まるとか。

申請者同士での大会が開かれるらしい。うん、テンプレだね。好  
ましくないけれど。

平和的で安全な方法で決めてくれるとありがたいんだけどそれは  
叶わなかったなあ。

なにはともあれ。

「さてと、装備を整えに行くかな」

服装はどうでもいいとして、武器が心もとなさすぎる。

最初はいけるかなって思ったけれど、ぱっと見える範囲で槍使いやら、自分の背丈ほどの大剣を扱う人間が多かったからなあ。

一応、記憶喪失者として国から補助として少しのお金を受け取っているのもので多少整えた方がいいかもしれないな。

国側としては使者は時間がかかるし危険だと判断しているからだろうが、報酬が前払いなので後の事はあまり考えなくていいだろう。もし、選ばれなくてもその足で獵兵に登録して仕事をこなせばいいと、考えている間に武器屋へと到着した。

中に入ると店主らしき男からそこそこの礼儀を弁えた業務的な歓迎の声が聞こえた。

所謂、いらつしやいませというヤツである。

中々に繁盛しているのか、恰幅の良いその男は顔に笑みを浮かべていた。これもまた、業務的な笑みである。

そう取れる内はそう呼ぶ事さえ憚られるのだが今はそれについて言及している時ではないので気にしない事にした。

男はこの世界では珍しい いや、元の世界でも一般市民はあまり着なかつたか 服を見て笑みを消した。

変貌した顔は、さっさと商品を購入して立ち去るか、今すぐ立ち去れと物語っていた。

男からすれば、少なくとも外見は変人であるヤツに客面して店内を闊歩してもらいたくは無いのだろう。

俺もこの服は着なれない。寧ろ、俺ならば着ないだろう。だが、今はこの服しかないのだ。神の計らいによるモノなのだろうが、やっぱり神は碌な事をしないようだ。

この服なら、以前の白と黒の二色を惜しみなく使用した囚人服の方が着なれていた分良かったというものだろう。ポケットが大量にあり便利と言えば便利なのではあるだろうが、ポケットに入れるも

のが無いので、その便利さを実感するに至る事は出来なかった。

詰まる所、俺の恰好は迷彩服であった。俺は何処かの砦に潜入するわけでもないし、戦争するわけでもないのだ。そう、思い、称号はこの服が原因じゃあるまいな、と思わなくもなかったが服装程度でコロコロと変わる称号ではないだろうし、そもそもこの世界に来てからずっとこの服であったので、最初の判別の時もこの服であったと思ひ至り考えるのは無駄だと止めることにする。

そんな無駄な思考を巡らせつつ店内の武具を見回ったが購入に至らなかった。

決して粗悪品ばかりが置いていた、なんて訳ではない。

男の恰幅の様に景気よく品質の良いモノが置かれていた。いや、寧ろ品質の良いモノばかりであった。

そこで購入に至らないのは明確で絶対な問題があったからだ。

他にも武具を取り扱う店の看板が目に入るが、俺は店を出た後、ほかの店を回る事無く猟兵所で事が始まるのを大人しく待つことにした。

「やっぱり武器って高いなあ」

よくあるRPGの様にそこいらの魔物を倒せばお金を落とす訳ではないし 換金できる部位が無くは無いが 物価もゲームの様に安くは無い。

そう、武器が高くて買う気が出ないどころか、買う気が出ていても買う事を許されなかったのだ。

国から金を受け取った時は無知であるが故に何も思わなかったが、ところがどっこい、いざ武器を買おうと街に出て商品の値段を目にすると、それは雀の涙どころかそれ以上に意味の無い金額であった事を知る事になった。

今の手持ちだと新しい服にする事さえ叶わないだろう。

それ故に至れる未来は唯一つだった。

ナイフ一本で頑張りましょう！

一応、魔道書が有るわけだけど、下手に使用して神の武器なんて

思われたら困る。規定以外の勇者。既存の勇者と俺のどちらが規定外の存在かはすぐにわかってしまう。

勇者は魔法を使わない。そう考えると、俺の魔道書はその勇者でない事を証明する事に徹底的に反抗した存在と言う事だ。

強ち、魔王という呼び名はそれ故に相応しいのではないかと思えてならない。

と、言う訳でだ。

魔道書の使用は大いに控える必要がある。調子に乗って乱用すれば、もしかすると、規定外の勇者と思われるってしまうかもしれないし、魔王だとバレる可能性もある。

それに比べ、メリットはあまりないのである。

考えてみればわかるだろう。大凡使用するタイミングというのは戦闘ぐらいである。

日常生活での魔法は、街並みを見る限りは俺がいた世界でいう科学の様に発展し溶け込んでいる。

魔法の生活用品も、魔力の補充さえすれば動くようなのだ。

俺が夜を明かした部屋では、蛇口のようなモノから魔力を感じ、そこから水を出すと、それだけ魔力が小さくなってきていた。

そして、目に入った店を見る限りは、魔力を補充する為の魔力の固まりの様な液体が売られている事も目撃していたことから、誰もが使用している技術なのだろう。

全部が全部、魔力を補充しなければならぬのが面倒そうだったが、誰でも扱えるという事は素晴らしく思った。

閑話休題としておこうか。話が逸れ過ぎた。

俺の所持するお金が予想以上に価値を持たない少額であった為に、ユウト達の期待に応える事もそうだが、現状ではそれ以上に生きる為にならなければならないと思う。

ある意味では俄然やる気が出てきているので良い事だけれど、生存本能からくるものなので聊か気に入らない。

どうしようもないのだけれど。

他に何かをするにしても、この慌てふためいた状況では国の仕事を斡旋して貰う事は難しいだろう。余裕が無い様に見えたり。

町で仕事をするのにしても、仕事は無い。全て人が足りていてという不思議な状態だ。足りているだけであればそうでもないのだけれど、どうもきつちりと足りていないらしい。

見る限り、店員同士が異常に仲が良かったりしているし、顔つきが似ていることから、血族総出で、というか、血族やら知り合い同士のみで店を切り盛りしているのではないかと当たりを付けるにいたったが確認するには至れなかった。

確認したところで意味は無いわけだし。

「ん？ そろそろか？」

水のみで猟兵所の一角に粘る事数十分。集まっていた人々が動き始めた。

これから行われる事の詳細は知らないが、大凡見当がつく。だからこそ武器を見に行ったのだ。結局意味は無く無駄足だったが。見てみると、人の流れは二つに分かれている。

一つは装備を固めた者たちが、一つはよくわからない。恰好がばらばらだ。多分、野次馬的な観客だろう。

大会というぐらいなのだ。観客がいてもおかしくは無い。

俺としては晒されれば晒される程手札を切りにくくなるので望ましくないのだが、仕方ないか。

俺は出場者らしき者たちの列に並ぶ事にした。

少し進むと、大きく開けた場所に出た。

通常であれば広大で、一人で佇めば心細さを感じそうなその広場は円形で、それを覆うように壁が有り、その上に観客席らしき座席が多数設置されていた。

これ程の座席は埋まらないだろう、と思えるのだが、現在ではそ

のほとんどが埋まっている。

彼らの何とない雑談の重なりあいさえかなりの大音量となり活気が感じられる。

そして、その活気につられ、その雑談が勢いを持ち、今では際限なく勢いが付いていく一方であった。

入場して最初に、観客の量に圧倒される訳だが、実の所、それ以上に出場者の方が多い。

広場の殆どが人で埋まっているのだ。そして、入口からはまだまだ人が入場してきている。

焦りを感じるところだろうが、俺は口元を緩めざるを得なかった。人が多ければ乱戦になり、回避に努めていれば勝手に数が減る。

それだけでなく、例えば手札を切ったとしても、それを確認する人間 確認する余裕のある人間は少ないだろう。

大凡、その状況で確認できる余裕のあるものは、手札の意味を知っているだろうから口外する事は無いと信じている。まあ、確証が無い訳だけれど。

なにはともあれ、タイマンよりかは少々都合がいい、と考えておけばいいかと思う。

入場は開始しているのだが、全員が入場するまでまだ時間がかかりそうだった。

暇なので入場する際に渡された紙を眺める事にする。  
「ふうむ、ルールか」

大会というからにはやはりルールはあった。

ルールとは言っても簡易的なものだ。故意に殺さない、程度である。

つまり、やむを得ないならば殺してもいいという事である。それを知ると、周囲より明らかに小柄で、筋肉の少ない俺に向けられる嫌な視線を感じる。

いやはや、弱者は咀嚼されるべき、弱肉強食ってか。

観客のテンションが急激に増大した。叫んでいるものも多数みら

れる。

出入り口が閉ざされたことから、どうやらそろそろ始まるらしい。「さー！ もうすぐ歴史に残るかもしれない人物の選定が始まります！ 強き者が選ばれ、弱き者は消え去る弱肉強食！ この会場は法に定められる国の中でありながら無法地帯！ 観客の皆様はこの歴史の動く瞬間をその目に焼き付けてください！」

少し距離を置かれた場所に設置された座席。そこに声の主はいた。20代前半の男である。恰好はよくいる村人というイメージであり、少し赤色の入った髪は適度に切りそろえられ男を格好良く見せていた。

この台詞に反応して、観客は更に大きな声で叫んだり、誰かを応援したりしている。

出場している者達は、その声に応えるかのように武器を手に取り構え、周囲を睨みつけ牽制している。

「それでは、選定！ 開始！」  
実況の男がその声を上げると、観客席以上に出場者からの声が響いた。

開始してすぐに俺は四方八方から剣や斧や槍といった武器が襲いかかってきている事がわかった。

現状で狙われているのは、明らかに弱そうな者、又は強い者。

前者は為すすべもなく端の方へ弾かれていった。

弾かれると同時に転送魔法が何かによって姿を消した。

どうやら、一定以上端へと飛ばされるとどこかへ転送されるらしい。

後者の強き者は二つに分かれる。

善戦するが数の暴力により消えていく者。はたまたその暴力を見せつける者。

前者は既に会場から姿を消していた。後者は見る限りは3人程。現在もその力を振るっている。

俺は当然、ナイフ一本でどうにかできると思っていないので回避

に専念していた。

時には脅威を見切り避け、時には脅威同士を衝突させ間を掻い潜り、時には脅威の軌道を逸らし避ける。

俺は一切の反撃を行わなかった。

鎧の着込んだ人間もいるのだ。ナイフでどうにかなるはずが無いと目に見えている。

鎧ごと切り裂く事も出来なくはないだろうが、ナイフが持たないだろう。

現在でも攻撃を晒すだけで耐久値が減っていつている。

能力の恩恵によりその辺りが理解できなかったなら俺は既にナイフを消費した後だっただろう。俺が回避を続けるだけでも、結構相手にはダメージというか、損失を与えられているのでこのまま続けるつもりだ。

床が強固な石畳なので、攻撃が外れた延長線としてそこへと衝突している。それだけでそこそこ武器の耐久値が減っていつているのだ。

このまま続けていけば武器は壊れる。

それを知ってか知らずか、顔には焦りが浮かんでいた。

「ぐわああああ！」

開始直後から辺りから聞こえていた叫び声。大凡誰かが誰かにやられた時の叫びである。

それが段々と近づいてきている。

「!？」

見ると、俺の周囲に人が固まっていたのだが、そこからある一定の方向はガラガラであった。最初は人が奔めいていたその場所には一人しかいない。

圧倒的な暴力を振るっていた人間である。

背丈は180cm程で、赤い線が所々に見られる金色の髪。短く切られたそれを振り乱して、笑みを浮かべながらこちらへと向かってきていた。

その軌道上の人間は例外なく吹き飛ばされ消えていつている。背筋がゾクリ、とした。

俺の生存本能が避けろと逃げろと叫んでいるので特に思考もせずそれに従った。

跳躍による空中への回避が尤も容易であったが、諸所の事情で却下。

襲いかかる何人かをナイフと全身を駆使して吹き飛ばし、人の間を縫って包囲網を突破した。

その突破に要した時間は2秒程。

その直後に包囲していた人間全員が吹き飛んで消え去った。

原因は一つの剣。

「よう。もう俺達だけみたいだな。ひよろりとした身体だが中々やるらしい」

背丈以上の剣を肩に担ぎ嫌な笑みを絶やさず話しかけてきた。

「……どうも」

と、会釈をする。

「いやいや、まだいるよ」

と、上空から二人降ってきた。

どうやら俺が却下した空中への退避を選択したらしい。

「そうか！ そりゃあ良い！ 一筋縄でいかなさそうだ！」  
笑みが深くなる。

その笑みは非常に恐怖を与える笑みであった。今すぐ逃げ出した  
い気持に駆られながら重心を低くした。

「確かにそうだ、本気を出さねば名乗らねば」

降ってきた二人 双子なのか、顔つきが似ていて、服装は統一  
されているのでどちらがどちらかは俺には判別できないが の大  
凡15〜6の少年も笑みを浮かべてそう言った。

余計な事を、と思い、苦虫をかみつぶした気分になる。

少ししか見ていないが、大凡見当をつけた大剣を持つ男の性格が  
らして望まない方向に進む。

「そつだな、では名乗ろう！ 俺は『巨大な恐怖』エドル・ヴァンド！」

”名乗る”と大剣の男から感じられる力が増大した。いや、増大程度で表現できるのだろうか。

この世界に来て初めて他者の本気を見る訳だが、前の世界の比ではない恐怖を 危険を感じる。

双子の片割れは弓を構え少し驚いた表情で呼応した。

「あのエドルなんて大物が名乗ってくれるなんて恐悦至極。ボクも名乗ろう、『半月の雨』クライス・エドミン」

残る片割れもエドル程ではないが、常人では扱えないであろう大剣を軽々と構えそれに続く。

「これで名乗らないなんて失礼だな。なので名乗らせてもらおう、『水面の砲月』グラヌ・エドミンと」

”名乗る”と共に双子から感じられる力が、エドル程ではないが大きくなった。

流れからいえば俺も名乗るべきなのだろうが、そんなつもりは毛頭ない。

「悪いが俺は名乗れない。決してお前たちに失礼を働くつもりはないが、大目に見てくれるとありがたい」

なんて、言ってみたが、どうも俺は蚊帳の外。

エドルと双子の戦闘は既に始まっていた。

エドルの振るう大剣は風圧だけで強固であるはずの石畳をえぐっていた。

対する双子は、片方が大剣でエドルの攻撃を逸らしたり受け止めたりしているが、剣の耐久値が著しく減っている。このままでは長くは持たない。

片割れの双子はそれを感じ取っているらしく、矢を連射と言える速度で射出するがすべて切り落とされている。

どう見てもエドルの方が上手である。

矢が通じないとわかると、詠唱を行い魔法での攻撃を試みるが、

事如くが剣圧によってかき消されていた。

あの、エドルという男、どうやら規格外的な強さらしい。力事態もエース級程を感じるのだが、それ以上に、あの思うがままに振るっているように見える暴力から、長年の積み重ねを感じなくもないのだ。

一見、力に物を言わせた暴力的な戦闘だが、実際の所、剣技の極地へと片足を踏みこんだ戦闘であり、驚嘆するばかりである。

対する双子はそれさえ気がつけてない様子。いや、実際は気がつけていたのだろうが現在はそのままで余裕が無い。

傍観に徹している俺だが、流れ弾的に飛んでくるエドルの剣圧に直撃して吹き飛ばされそうになり焦っているという醜態を晒していた。

「あつぶねえ。もし双子がいなかったら真っ先に吹っ飛ばされて死ねてたなあ」

余裕ぶって見せているが、本当の所は危なかった。

剣圧を辛うじてナイフで反らせられたから良いものの、直撃していたら端に飛ばされるところか観客席まで突っ込んでいた所だ。

逸らせたからと言って樂觀視できない状況にそれとなく追い詰められている事には変わらない。

「終わった俺」

ナイフの耐久値がもう少しで底をつきそうだった。

視線を上げると、双子を剣圧にものを言わせて吹き飛ばし消し去り、更に嫌な笑みを深くし大剣を肩に担いだエドルがこちらを見ていた。

俺は背中に嫌な汗を大いにかいた。これが俗に言う冷や汗というものなのだろうか。

## 第五話 ・恐怖は魔王をも襲う・（前書き）

お蔭様でPV5000突破です。

投稿しています現在、ユニークも1000を突破しそうな勢いです。ありがとうございます。

今回は3話よろしく文量が比較少ないです。申し訳ないです。

文章も書き方がよくわからず、文が右往左往しています。不安定ですが多めに見て頂けると幸いです。

## 第五話 - 恐怖は魔王をも襲う -

「さて、とんだ邪魔が入ったがそろそろ殺<sup>や</sup>ろうか」

エドルの担ぐ大剣が光を反射する。

俺からするとエドルは死神の様だった。

「……平和的に解決出来んかねこれ」

およそ無理だろう事を思わず呟く。

どうも、俺は恐怖とやらを感じているらしい。

よくよく考えてみると、この世界に来てから戦闘は一度のみ。それも背中を預けられる存在が居たからであった。

少なくとも、信頼度は兎も角実力面では優れたフィニアがいたのである。

今はどうなるかと助けは来ない。殺される可能性も無くは無い。

「こんな戦場に足を踏み入れてるんだ。平和的なんて言葉は幻想でさえないな！」

エドルは笑みを絶やさない。

ユウトの笑みとはまた違う笑みである。

巨大な恐怖。

彼のその二つ名の意味をひしひしと感じざるを得ない笑みであった。

出来れば今すぐ逃げ出したい。

だが、ユウト このお人よしの国の維持に貢献するにはここで勝ち残ること以外現状はわからない。

何で。

俺はそう思う。

ここに来てからの俺の行動を見れば誰もが思うのではないだろうか。

何でそこまで関係の無い国の為に動けるのか。

俺の目的は霸王の討伐であってこの国の守護では無いのだ。

だが、俺は守る為に動く。  
理由は簡単だ。

前の世界でこんなお人よしの国があればな、と。  
ただ、ただそう思った。

そう思い、俺の胸には何か暖かいものが感じられたのだ。  
子供の頃は持っていたかもしれない失くしたソレを。

「 負けられない」

そう、負けられないのだ。

負ければその暖かい何かをまた見失うかもしれない。

それでも問題は無い。問題は無いが、再び感じたそれを失くすこ  
とは非常に苦痛だろう、と。

「俺は、負けられない」

負けられない その言葉は久しかった。

目標があつたその時はよく口にしていたように思う。それが間違  
つた目標であつたとしても だ。

エドルは大剣を構える。身体が大きいのだが大剣を持つと小さく  
見える。

だが、感じられる気配は凄まじい。

回避を続けてその武器が壊れるまで粘ろうかと思つたが、業物な  
のか耐久値は他の出場者の武器のソレではない。

「どうした！ この場に立っているのだから実力はあるはずだ！

……俺から仕掛けよう」

ヤツは俺が格下であると悟つたのだらうか。

少なくとも双子と相対している時よりも警戒はしていない。

ならば、と思う自分が居ることに驚いた。

やはり、ここで負けられない。

「俺をがっかりさせてくれるな！」

エドルの言葉は尤もかもしれない。今の俺の体たらくは酷いもの  
だ。

昔は 　そう、昔はもつと 　。

エドルの足が動き俺にとっての死は近づいてきた。  
自身があの大剣の餌食になる光景を容易にイメージできる。

迫り来る死は、この腑抜けでは成すがままだろう。

だから俺はまた戦おう。抗おうと思う。

大剣が振るわれるが、その軌道の下を潜り抜け何とか回避に成功し、その勢いに乗ってエルドの胸へと天を突くように蹴りを入れる。手ごたえがあつたにも関わらず、エドルはそのまま距離を開けるだけであつた。

その足つきはずっしりとしたもので、俺の蹴りなど無かつたかのようにだ。

俺は壊れかけのナイフを構え睨みつける。

エドルの息を呑む声が聞こえた。

「……そんな目が出るなんてな。お前何者だ？」

そんな目といっても殺気はそれほど込められていないから目つきが悪いつてだけなんだけれども。

「生憎と名乗れない。名はナークとなっている」

都合上、真実の名前は名乗れない。それが惜しいが仕方の無いことだ。

「そうか。まあ、事情があるんだろうよ。そんな目が出るって事は訳ありだと語っているようなモンだしな！」

刹那、エドルが肉薄していた。

「つく！」

咄嗟に身体を捻るが俺の前髪の一部を大剣が持っていった。

「エドルが何かをブツブツ呟いていることに気が付いた。

感じられる魔力が　　気配が増大している。

双子のときでさえ本気ではなかったのか、と驚愕が思考を染めた。そのせいで俺はヤツの呟き　　詠唱を許してしまった。

「ウィンド・アーマー！」

エドルが叫び、風がエドルへと収束していく事が肌で感じられた。気配は詠唱時と変わらない。だが、感じる死は増大した。

「はあっ！」

出遅れたの内心響め面をしつつエドルの顎を狙って蹴りを放つ。ナイフでの攻撃を行いたかったが耐久値が芳しくないので却下。

エドルの顎まで後数cmという所で未だにエドルの視線は脚へと追いついていない。

当てた！

そう、思ったが、寸前で俺の脚は何らかに遮られ　いや、逸らされた。

だが、完全ではないらしく多少当てられたのだが掠っただけであった。それも、顎ではなく頬であった。

エドルが俺を引き離す為に大剣を振るう。

先程の様に軌道の下を通り抜けて回避するが、エドルはその隙に俺と間合いを取っていた。

今回の回避はかなりぎりぎりであり、文字通り紙一重であったので追撃が来ていたらやられていたかもしれない。

瞬きひとつの瞬間

それだけでいろいろな事ができるらしい。

その証明をエドルは行ってきた。

と、いつもの、瞬きの間程でエドルは肉薄し、更に大剣を振るい始めていた。

当然、ここまで肉薄している状況であの大剣のリーチと速度を考えると回避は絶望的であった。

「ぐうう！」

咄嗟に手にあったナイフで防ぐも瞬間的に砕け俺へと大剣は襲い掛かってくる。

「っぐう！」

反射的に切断されない様逸らすが、衝撃を殺しきれず手が痺れる。

直ぐに反撃を行おうと拳を握る。

が、それは中断された。剣が再び同じ軌道で再来する。

俺としては永遠の別れとなって欲しい剣であったが戻す動作なく再び現れたのだ。

どれだけ俺と会いたいのだこの剣はと、悪態をつきたく思い、同時にそれどころでないを知る。

どうも、振りぬいたまま一回転して再び寸分狂わず剣を振るっらしい。

速度は一回転した分先よりもある。と、なると威力も相当である。それ以上に、再び同じ軌道へと振るう技術に驚愕しつつ回避は不可能であると悟った。

もう既にナイフは砕けている。あるといえばあるが、刀身が砕けているのでナイフと呼べるか疑問である代物に変貌してしまっている。

「くっそ！」

今まで却下し続けた空中への回避を致し方なく選択することにした。

もしかすると、耐えられるかもしれないと一途の望みを胸に抱き

俺の意識は闇へと落ちた。

「つく、ここは……」

目を覚ました俺はすぐさま辺りを確認し、俺へと覆いかぶさっている布団と、背面に接触しているシーツを確認し、横たわっている事を認識した。

詰まる所、俺は寝込んでいる状態だった。

幸いにもあの後攻撃を加えられることはなかったらしく五体満足である。

「実践なら死んでたな……。ブランクで訛ったかなあ」と、あの状況へと陥った自分へと叱咤しつつ体を起こす。

某汎用決戦兵器の主人公の如く知らない天井を眺めて無駄な時間を過ごすつもりはない。

結果として俺が負けたのは明白であるのだ。

次の方法を考えねばなるまい。

当面は生きることを優先して避けたいところであったが猟兵所に登録して仕事をこなすべきだろう。しかも、当分は素手である。

ベッドの横にあった机の上にそれが置かれていたが、やはり刀身は粉碎して無くなっていった。

それを見て試合 死合という名の一方的なリンチを思い出し、非常に心配になり身体を確認してみると別段やばそうな怪我は無く、些細な擦り傷程度だけであり心から安堵した。

この傷とも呼べない傷だけであり安堵していた訳なのだが、問題はあった。

同時に、なぜこのようになったのかが分かった。いや、それ自体は問題じゃないんだ。

問題は十中八九、俺が醜態と失態を繰り広げてこの現状が有るのだろうということだろう。

場面は民衆に公開されている場であった。つまりは、その醜態と失態が晒されてしまい、戸が緩いおばちゃんの口の餌食にでもなってしまうばそれは瞬く間に感染汚染してしまうだろうという事は容易に想像できるような事なのである。

あ、死んだ俺。主に精神的に社会的に羞恥心的に！

さてと、部屋に誰もいない訳だが勝手に出て行ったら問題になるだろうな。

あ、やべえ。金無いから参加したのに医療費なんて請求されたら終わりだぞ俺！

払えるかも怪しいどころか寧ろ払えなく首をつるしかない程度の金銭しかないのでどうしたものか。

「……逃げるか？」

国家権力から逃げ回る所業を繰り広げていたから逃げる事には自信があるぞ、と意気込んでいると扉の開ける音が聞こえた。

逃げるかどうかと判断に窮していた状態で既に本能は答えを出していたらしく窓に添えていた俺の自由意思満載な左手を急いでひっこめた。

入ってきた人物はコートとしか思えない白衣と肩ほどまでの緑と茶色が混ざった様な限りない黒色の髪を靡かせている女性であり、こちらへと歩を進めていた。

恰好から医者であり、おそらく俺が目覚めている事に気がつくとい医者のような言葉を吐くだろうことは予想できた。

「あら、目覚めたのね」

何とかバレないだろうかと願っていたがどうもバレてしまったらしい。

「……お陰さまで」

「身体の調子は」

「大丈夫ですね。すこぶる爽快、快調、絶好調。と、言う訳で

もう立ち去っても良いですか？」

と、これでもかと上半身だけでもポーズングを決めてみせ希望を漏らしてみるが彼女の申し訳なさそうな表情を見ればよくわかる。

「ええ、出て行ってもらう分には問題ないけれど、ボランティアではないから代金払ってね？」

ビキリ、凍ったかの様に固まってしまった事が自分でもわかってしまった。

その不自然さは初対面の人間でも一見でわかってしまう程明白で、露見していたらしく彼女は苦笑していた。

「いやはや、心苦しい限りである。そして、どうなる俺。」

「貴方みたいな細い体つきの子があんな危険な大会に出るぐらいですもの。何となくわかってたわよ。そして当面の運命もね」

と、意味ありげな言葉をさらつと言いのけつつ紙を俺の頭の上に

乗せた。

似非キヨンシーみたいになってしまったが、俺にはコスプレの趣味は無く、そうなるので当然、コスプレにerを付けたレイヤーであるはずもなかった。

そういう訳なのですぐさま頭に設置された防御力皆無の頭装備を手に取り眺めた。

「これが幸運か不運かはたまた悪運なのかは疑念を抱かざるをえないですね」

「貴方にとっては幸運かもしれないわよ？ 給料が出る訳だし」  
それに、関与できる。

当初の目的とは形が違うが、結果は同じと言っても問題ないだろう。

「どちらにしても貴方が彼に返答すべきだから待つていればいいわよ」

と、いつの間にかお茶を淹れてくれたらしく、コップが手渡される。独特の匂いであるが嫌いではない匂いだ。

兎に角、結果的には一部安心して所か。当面の収入は良いとしても、問題はここの医療費なのだ。

服も買えないから医療費なんて払える気もしないのだ。まあ、兎に角今はどうしようもないから

「どうも。 了解しました。 んじゃエドルが来るまで茶でもシバいて」

「おう！ ナークは目覚めたか！？」

まさに噂をすれば、である。

試合というなの殺し合いをしている最中はそれはもう死神か死そのものが服を着ている存在かと思えたり、そうとしか見えなかったけれど今はただのデカイお兄さんだった。

金の髪に混じる紅い髪は、対峙していれば血にしか見えなかったが今はそれも何だか愛嬌の1つに見える。 いやー、不思議なことだ。

「おお！ 起きてたか！ で、申し出の紙は読んだか！？」

こいつは語尾がエクスクラメーションマークなのだろうか。

いや、まあそれは良いとしていやうるさいから良くないけれども。「まあ、結論から言うと引き受けるよ。寧ろ願ったりかなったりだったりするんだよな」

「おお！ それは良かった！ 俺一人だと不安だったからな！」

いや、エドル一人でいけるだろう。無理だったら俺がいても変らんだろうよ。と思いつつ眺めているとそれをどう取ったのか笑みを深くし、封筒を渡してきた。

「……これは？」

「前金だよ。何せ危険度が未知数と来てるからな。これぐらい当然だろう」

投げ渡されたそれはかなりの分厚さである事はすぐにわかった。

これで医療費の心配が消えた。問題はもう無いから心が解放された気分だ。今なら空も飛べそうだ。いや、冗談だけれど、試す気も出ないけれど。

「大した怪我もないだろうしすぐに出られるだろう？」

「まあ、いけるかな」

怪我は皆無と言って問題無い程度だしね。俺は病院の様な薬品の酔いはあまり好きではないのですぐさま退院する様手続きを急いだ。

およそ10分。

たったそれだけの手続きで俺は退院する事が出来た。

目立った怪我も無く、入院トータルおよそ3時間であつたらしく、予想よりもお金はかからなかった。

エドルは俺の様にあの双子も誘っていたそうだが断られたらしく、男二人のムサ苦しい旅の始まりである。が、よく考えてみると双子の両方が男であつただろうからどちらにしてもムサ苦しい旅で更にあつた事に気が付き誰に気づかれる事無く身震いした。

ちなみに、今回の俺に課せられた任務は使者であるエドルの補助

となる。まあ、基本的には襲撃者とかがいたら一緒に、もしくは単独で迎撃するということだろう。

使者のエドルの仕事は各国にこの国へと勇者を、もし居るのであれば付き人　まあフィニアアみたいなやつだな。未来の絵的に居ないだろうけれど　を向かわせろという事を伝える事だ。

この世界には電話みたいなものが無いらしく、徒歩での伝達になる。

軍備はこの国でのみ行うらしいので他の国はその様な準備が無いらしく期限はおおよそ軍備が整うまで。

と、言われてもそれが何時なのか俺には判らないのでエドルに聞いてみたが、「あ、そういやわからんな。ま、なんとかなるだろ！出来るだけ急げばいいだけだろう！」と、熱気が押し寄せそうな笑顔でそして、鼓膜が流浪しても仕方が無いと諦めてしまっそうな音量の返事という名の騒音が響いた。俺は耳を押さえつつ、そうかと返事をし話を終えた。そのまま話し続ける元気は今の俺には無かったのだ。

そのまま脈略も無くはっはっは、と笑いながらエドルは肩にちよつとした食料を担いで町の外へと向かって行ったので俺はそれにっついていった。

そして、今、俺は暗くなってきた空を眺めながら歩を進めている。「そういえば、大会でナイフを壊してしまったが新しい物は買ったか？」

と、声がかかったのは月が出て心地よい虫の声が聞こえる中で道の端で火を起こしている最中だった。

「あ、そういえば買ってないな。今、素手　どころか、荷物さえないな」

食料も買ってない俺は阿呆かと。

「おい、大丈夫なのか！？」

うるせえやい。俺としては自分がこんなにうっかりさんだとは微塵も思っってなかつたんだよ！

ま、問題は無いんだけど。

「食料はそこら辺で調達するわ。魔物とかよく出るし、それ食べばいいだろ。武器は無くても素手で戦うよ」

というか、俺、ここに来てからの戦闘でまともに武器を使った事って無いかもしれないな。大会でも基本的に受け流しとかに使っていらしたし。

それよりも、神の野郎がくれたんだからすごい良いナイフなんじゃないかね？とか思っていた俺の期待を返せよな本当に。

どう見ても普通のナイフ、どころか寧ろ粗悪品だったぞあれ。

これは能力の恩恵によるものだ。多少程度というか、まあ、ある意味での品質鑑定ができる。あくまである意味だから鑑定団にはならない。

ま、刑務所で生活し始めてからは専ら素手だったから問題ないかな、と思いたいけれど、この世界には魔力とかいう不確定要素があるから心配なんだよな。

普通に考えて、有名所というか、国が信頼できる程度の猟兵はあの国にいないという話だったから、真の意味での一流はあの国にいない事になる。つまり、エドルはその真の一流ではないということだ。エドルでさえ、だ。

俺の元いた世界であれば間違いなく達人と呼ばれて然るべき人物でその実力は十分以上であったのだがその程度の位置付け。

そうなれば、元いた世界で達人とさえ呼ばれていなかった俺はそれ以下であるのが必然である。

一応、多少の武術やらは学んだつもりだったがエドルとの戦闘を思い返す限りでは俺ではどうしようもないと思うばかりで自分の弱さにかっかりせざるを得ない。

そうだな。良い機会かもしれないからまた鍛えなおすとするか。もちろん、エドルに見つかりと煩いから見つからないようにこっそりと。

それに、折角の魔力だ。使い方を学んでも悪くは無いだろう。エ

ドルのウィンド・アーマーみたいな極悪的な魔法が使えるようになれば良いと思う。もちろん魔道書なしで。

毎日の食料となる魔物を狩るときにでも魔力練習がてら魔力で戦ってみると良いかもしれない。

と、思っていた時期が俺にもありましたよ。

いや、本当に侮っていたわ。魔物強い！普通に魔物の夕食になっちゃうかと思っただよ。

世の中甘くないよね。結局エドルに屠ってもらわなかったらマジで死んでたよ。

「ナークは普段魔力を使わないのか？」

と、大剣についた魔物の血痕を布で拭きつつそう問うてきた。

お、魔物の肉結構うまいな。何かラム肉みたいな味だ。

「使うようにしてるけど……なんでだ？」

「いや、魔力を一定量拳と足に込めているだけだったからな。並みの猟兵でももう少し魔力の扱いは巧いぞ？」

おうふ。そうか、そうか。

まあ、魔力で言えば初心者だからな。うん。正直自分でも思ってたよ。攻撃力上がるだけだなコレって。一応防御力もあがるけれども。

「攻撃をする時はそれで良いが、防御の際はもう少し皮膚表面上に停滞させるように 鎧みたいな感じだな そんな感じに魔力を留めないとダメージを食うぞ。まるで魔力を使った事が無い様な感じだった」

元いた世界で言う、気、みたいな感じかな？ 思い返してみれば魔力込め馬鹿にしか思えんごり押しだったな。よく考えてみれば俺は力が無いから受け流しとかの技術面で何とか補おうと画策していた口だからな。どう考えても真逆の戦いだ。それに、魔物も魔力を扱うのだからその増大した力はプラマイゼロに近いだろうし。

よく考えてみれば俺がこの世界で弱いのは必然の様に思える。

何せ、端から大きな差が有るんだからなあ。

「そっか、助言ありがとよ。わからんかったら聞いても良いか？」  
これでも俺は才能が無いからな。あるならとっくに達人と呼ばれる存在になれていただろうよ。寧ろ、達人ならもう少し上手く巧くやれていた気がする。

いや、本当に今日はがっかりする日だ。一番痛いのは、負けられないとか言ってたくせに即行意識を失って負けた事かな。黒歴史ラッキンクのベスト10に入りかねん勢いである。

「ああ、良いぞ。所で、俺から聞きてい事が有るんだが良いか？」

「ん？ 応えられる範囲なら問題ないぞ」  
本名とかじゃなければな。

「今日の試合で、なんでお前は唐突に意識を失ったんだ？ 俺の攻撃は当たっていなかったらどう？」

GYAAAAA！ ある意味本名聞いてくれた方がよかったですよ！

それは俺が弱いから！

「俺、重度の高所恐怖症なんだよね。おまけに閉所恐怖症。あの時回避の為にジャンプしただろ？ いけるかなってやってみたけど無理だったみたいだわ」

と、俺が涙目で笑みを繕いながら返答すると、エドルはにっこりと笑みを見せた。

「本当か！？ 俺はそんなヤツ見たこと無いぞ！ 跳躍をして意識を飛ばすなんて想像できないな」

ジャンプした瞬間に極度の恐怖が訪れるのです。それはもう魔物に囲まれるよりも酷い。エドルと対峙している時程じゃ無い気がいや、それ以上か。

と、考えている間に俺はエドルの太い両手で腰辺りを掴まれた。

おい、まさか、もしかしてもしかしなくても！

やってはいけない事をするつもりか！

「あの、エドル？ それ以上の行いは自重してくれないか？」

と、俺はひきつった笑みを浮かべつつ必死にエドルの手を引き剥がそうと暴れてみるが、エドルの手どころか、指さえびくともしていない。

あっはっはー。俺、死んだかな精神的に！

「どっせーい！」

それがその日の夜に聞いた最後の音だった。

## 第六話 - 悪なりにも規則はある -

目覚めると空は既に青く輝いていた。

焚き火は既に鎮火していてエドルの姿が見当たらなかった。荷物が置いてあることから近くにいるだろう。そう考えていると俺の腹の住人である虫たちが鳴き声を上げ自己主張し始めたので対処を置こうなうことにした。すきつ腹の状態であるなら飯を食うことは吝かではないのだ。

朝食は昨日狩った魔物の肉にし、野菜が食べたいなあ等と贅沢なことを考えつつ平らげた。

俺が食べ終えて一段落した頃にエドルが道の横に存在する草むらから現れた。草むらは俺からそう遠い位置には無かったので、前触れも無く暑苦しい笑みが現れたので俺は思わず叫び声を上げてしまったので少々恥をかいた。

そんな俺に笑いながらエドルは荷物から布を取り出し、蓄えていた水で浸し絞り汗をぬぐった。風呂代わりでもあるのだろうか。

曰く、鍛錬をしていたらしい。

あの實力は日々の鍛錬の賜物であったのかと感心しつつ暑苦しい笑みから目をそらした。暑苦しいがそれはもう真夏の気温が真冬の気温と誤認してしまいそうな具合に暑苦しかったが、それだけが理由で顔を背けたわけではなかった。昔は兎も角、十数年前から鍛錬を怠りに怠っている俺からすればエドルは眩し過ぎたので、それによるものが多いだろう。

エドルは俺をこの旅に誘う際に、任務を授かる際に謁見した王に態々許可を取り付けていたらしい。確かに、王が依頼している任務であるから筋は通っているのだがご苦労様である。

その際に王の横にいたユウトから俺が記憶喪失であると聞いたそうだ。俺は気にするなと言い、わかったと返事があったが、その顔はわかったという顔ではなかった。

俺がそれについて面倒くせえなと思っているとエドルはそれを察知したらしく急な話題転換を図った。

エドルは空気を換えようと口をうごめかす。それは目的である勇者についてであった。

曰く、勇者は合わせて五人いるらしい。

剣、盾、斧、箱、薬。

剣の勇者は、神から剣の神器と自身への加護を一つ賜る。

盾の勇者は、神から盾の神器と護りの加護の使用権を賜る。

斧の勇者は、神から斧の神器と力と守りを賜る。

箱の勇者は、神から箱の神器と微弱な加護を賜る。

薬の勇者は、神から薬の神器と治療の加護の使用権を賜る。

神は勇者の数だけ存在しているとされ、それぞれに信仰がある。

そう教えてくれていたエドルは信仰について全く知らないらしいから、たので知ることとは出来なかった。エドルの拳動を見る限りどう考えても興味がなさそうだったし、俺も無神信仰だから知る機会は今後無いかもしれない。

以前なら機会は出来なくは無かったかもしれないが、あのいい加減で役に立たない爺である神を見てしまっただけからはそうも思えない。勇者は魔王討伐の度にこの世界に現れる。それを幾度無く繰り返され、今は7度目。

魔王の現れる間隔はランダムらしいのだが、今回は大よそ500年ぶりだとか。

そして、魔王は魔王ではないという異常事態が発生している。魔王　元、だが　が現れ勇者が召還され始めたのは3年ほど前。国から市民に情報が回るのが遅いためもう少し前かもしれないが、兎に角それからきっかり三年後の二日前に異変が起きた。元魔王　その時は魔王であるが　を上回る魔力を持った存在が現れたらしい。が、隠蔽しているのかその所在は感知できず、国が総出で調べているが一向にわからないそうだ。

あれ？　もしかして、それって俺じゃないか？　いや、気のせい

である事を願いたい。

兎に角、今、俺たちのすべき事はその勇者全員にヌーダイセ王国に集まれと伝えることだ。

魔法があれば念話の様な所業が出来てもおかしくないのじゃないかと言ってみたが、どうもそれは高難度魔法で実現は現実的ではないらしい。

地図上では国同士隣接してるが、間に山があったりする訳なので、それを超える高度、または迂回する長距離での風魔法は魔王でないと無理じゃないかと言われてしまった。

エドル自身、魔法が得意ではないらしく詳しくなかった。以上はわからなかった。

当面の俺たちの目的は、斧の勇者に会う為にウヌク国へと向かうことだ。

ウヌクへ行けば有名な猟兵が数多くいるらしく、俺達使者の戦力を増大しようとも考えているとエドルは笑って言った。エドルは焚き火で焼いていた肉を手に取り、俺が止めるまもなく平らげ荷物をまとめだした。

腹の住人はある程度満足し、一揆を行わないと言ってきていたのでエドルに文句は言わず荷物をまとめた。と、言っても在庫の肉は平らげた為何も無いのだが。強いて言えばナイフの柄が。

昨日の魔物と戦っていて思ったのだが、やはり魔力の扱いは練習したほうが良いと思う。戦闘を行った魔物は一般市民でも武装次第では追い払える程度の魔物であつたらしいのだが、俺は非常に苦戦した。軽々狩つて来たそぶりをしていたが現実はそうであつたため、エドルにあれが雑魚中の雑魚で、ゲームで言うならスライム並であつたことを聞いて、命の危機を感じた。一見、何の変哲も無いウサギなのに強いなあと思つていたらまさかの俺が弱すぎるという事であつたからである。

元いた世界では少なくとも一般人よりは強いと思つていただけに必要以上にその衝撃は大きくなつていた。

荷物をまとめたエドルを先頭に俺はエドルに教えてもらった体内の魔力を認識する訓練を行うことにした。

普通は魔力を認識するまでに2〜3ヶ月かかるらしいのだが、魔道書のお陰で一時的に強制的に熟練の魔法使いになっていたのも、その影響がすぐに魔力を認識していた事から流石は神の神器（神器かは不確定であるが）は凄いなあと感嘆することになった。

最初の戦闘から二日が経過した現在は、あの時以上に魔力の認識が出来るようになってきている事を練習で実感した。

少なくとも以前より、昨日よりも魔力の流動が容易に行える。エドルほどではないが、エドルにそれを見せると驚いていた。

「昨日は手加減をしていたのか？ 昨日の戦闘だと一般市民に毛が生えた程度だったが、今はEランクの猟兵の平均程度だな」

Eランクとかよく知らないが、テンプレでくるなら低い順から少なくともE、D、C、B、Aと続くんだろう。場合によってはEの下にF、Gと続いていたり、Aの上にSがあつたりなどするのだろう。

エドルに聞こうと思ったが、身分証明書を入手した現在では猟兵に登録するつもりなど皆目無かつた為にそのまま聞くことなく練習に励むことにした。

今、体の指定した場所に魔力を移動させていく練習を行っているのだが、これが存外難しい。元いた世界で魔法どころか魔力なんてものは存在しなかつた為に間隔がつかめずにいたのだ。

魔道書での経験は残る為にある程度それは緩和されているのだろうが、エドルを見る限りその緩和は焼け石に水であるのだと頷かざるを得ない。

エドルという良い見本がいる為、滞りなく練習は進んでいるように思う。とは言っても上達具合には限界があるわけだが。

何、次の国に到着するまで大分時間がかかるらしいから気にせず気長にやれば良いだろう。最終的に軍勢との戦闘が始まるまでに魔法が扱えれば良いのだ。

時間は吐いて捨てるほどある。

次の国は交流が比較的あるらしく、道が出来ているため非常に楽な旅になりそうだ。尤も、道とは言っても田んぼ道のようなもので、左右に広がる草むらから魔物が襲い掛かってくる可能性はあったが、売り飛ばせる部位を持たない下位の魔物ばかりが生息しているらしいのでエドルがいる現状ではそれほど気を張る必要も無い。

リーダーよろしく、エドルは敵が現れるより早く、俺が気配に気がつくよりも早くに魔物の数と位置を言い当てるのでそれはもう安心である。

「……ん？」

特に何も問題なく進んでいたのでこのまま一気に行ってしまおうとしていた矢先であった。

俺の耳に何か聞こえる。何故だかひどく気分が悪くなる。

何だろうと耳を済ませるが日常的な音しか聞こえない。だが、気になった。

「エドル、この近くに集落みたいな場所はあるか？」

と、聞くとエドルも何かを感じたのか真剣な顔つきで「あっちだと、言つと道を反れて進んでいった。」

エドルは走っているらしく付いていくのでも大変だと思えそうな速度であった。

およそ5分。

その距離を走り抜けると村があった。木造の家が建ち並び、店も多数あるような村であった。

「おおおおお！」

エドルは剣を抜き剣を振るう。

村であったそれは魔物の襲撃を受けていた。俺が戦った魔物である狼のようなヤツでもウサギのようなヤツでもなく、悪魔のような人に翼が生えたような形状の魔物であり、感じられる気配はそれまでの魔物とは段違いで巨大だった。

そんな魔物が数十。

エドルが剣を振り活躍を見せるが、逃げ惑う住民を護りきれないではない。

「キキキキキ！」

そう叫びながら魔物は俺の近くにいた住民へと襲い掛かるうとしてた。

俺が啞然としていると急に剣を構え鎧を着込んだ青年が現れその攻撃を阻んだ。

鎧の下から見える服からこの住民であることが見て取れた。

青年が剣を振るうと剣から炎が飛び魔物を追い払った。

「逃げてください！ 今この村は魔族の襲撃に遭っています！」

言われなくとも襲撃に遭っているのは明白であったが、アレが魔族、か。

人間ならざる存在であるが、その容姿は人間のそれに近いと思う。

「いや、手伝うよ」

俺が魔力を込めた拳で魔族に殴りかかるが悠々と回避されてしまった。その翼を有効活用し空中へと逃げたので追撃は叶わなかった。ふ、と見ると近くの民家に弓矢が立てかけられていた。狩りに使うものなのだろうか。

今はそれどころではないだろうし非常事態であるから無断で借用することにした。

俺が弓を放つと面白いように魔族へと吸い込まれていく。

次々に命中してそれに危機を感じたのか魔族は空高く飛び逃げていった。

「よう！ 大丈夫だったか！」

エドルが剣を担ぎ笑いかける。

笑みとは真逆に、周囲には魔族の残骸がたくさん落ちている。それが何人分の魔族なのか判らないほどの数である。

「なんとかな。これがなかったら攻撃当たらん所だったわ」

と、良いつつ弓矢を元の場所へと戻しておいた。無断借用は良い

のだが、よく考えてみれば横にいる青年はこの村の住人かもしれないのだ。あるかは知らないがこの世界でも牢獄島に入れられるなんて事になってしまつては目も当てられないからな。エドルにも迷惑かかるし。

「助かりました。援助感謝します」

青年は礼儀正しく頭を下げる。

魔族が去つたと知つたのか続々と村人が集まり始め、頭を下げる「いや、それは良いんだ。それより何故この場所に魔族なんかか？」

エドルのせいで鼓膜が破れそうになり抗議をしようとしたがその台詞は重要であつたために話を促すことにした。

「新たに現れた魔王が見つからないので覇権争いになっているらしく、魔族は今の自由に自由に暴れ始めているらしいんです」

話から、魔王が居ないので命令するものが居ないから通常は現れない場所にまで現れてやりたい放題しているらしい。

「やっべえええ、俺のせいじゃん！」

「先程の魔族は最近、少し離れた場所に拠点を作り、近隣の村を荒らして回っているようなのです。そのせいで農作物は荒らされ、何人もさらわれたりし、復興もままならないのです」

「エドルこの村護つとけ」

俺はその悪役の風上にも置けないカスをつぶしに行くよ。と、言おうと思つたがエドルは既に村人から拠点を聞きだしたのかどこかへ走つていつてしまった。

俺よりも猪突猛進とは考えものだなあ、と頭痛がする頭を抱えた。

「……どうすつかな」

エドルが言つたんじゃないやすることないんじゃないだろうか。第一、俺の攻撃当たらんしな。

そう思つと、あのまま俺が言っていたら魔族のご飯になっていたのではないかと思ひ至り顔を青くしておいた。

「エドルとは、あのエドルさんですか？」

と、武装した青年が俺に問うてきた。

あのエドルと言われてもそれがどのエドルを指すのか見当もつか  
なかったが、双子が言っていた通りあのエドルなのだろうか。

「多分そうだけどそれがどうした？」

「多分、あのエドルさんでも魔族、特にリーダー格を倒すのは難し  
いかもしれないです。……僕、行って来ます！」

というと、微かに炎を纏った剣を握る力を強め走っていった。

俺は消え行く青年の背中を見送るという名目の中で呆然としてい  
た。

文字通り木偶の坊とならんばかりに突っ立っていたが、我に返っ  
た。

エドルがヤバイのならあの青年が言ったところで何の足しにもな  
らないのではないだろうか。青年の魔力は住民の平均程度しか存在  
していない。

いや、あの武装が、特に炎を纏った剣が強力であったので何とか  
なるかもしれないと思ったわけだが、青年が住民に襲い掛かる攻撃  
を防ぐために立ち回った動作を見る限りは剣は素人どころか、戦闘  
の経験もあまりないのではないだろうかと感じる次第である。

「猟兵の方！　どうか、どうかグンを救ってください！」

グン、とはあの青年のことだろうか。ならば今話しかけてきてい  
る女性は年齢から言って彼の母か。

「無理だ！　あきらめろ！」

「グンと戦うなんて出来ない！」

と、言っている。ん？

「グンとは炎を纏う剣を持っていた彼だろうか？　諦めるのはわかる  
として、何故彼と戦うなんて？」

彼の母親らしき女性に聞いてみると、なにやら限界が来たらしく  
涙を流し始めた。

女性の涙に慣れていない俺は内心慌てふためきつつも平静を装っ  
た。

「魔族は殺した私たちの仲間の死体を操って襲わせることがあるのです。毎回、動けないようにして埋葬しているので数は少ないですが」

「そういうと、両手で顔を覆って泣き始めた。」

「そうか。どうやら少なくともここを襲う魔族は罪人とも呼べないクズらしい」

やる気は出ないがやる理由は出来たという所か。

だが、どうやろうとも攻撃が当たらないのでどうしようもない。

エドルの足を引っ張るだけだろう。

「彼が持っていた様な不思議な武器は他に無いのか？ あるなら貸して欲しいのだけど」

「魔法武器はこの村にアレ一つしかないですよ」

と、奥から出てきた村長やらおば様としか呼べないおばあさんが出てきた。

「魔法武器？」

「魔法効果を付加された武器のことですじゃ。猟兵様ならば知っておられると思いましたがのう」

「いや、知ってたさ、はっはっは」

聞いたことも無いですありがとうござます。

よくゲームにある効果のある武器って事か。なら、何とかなるかもしれないな。

「魔族のリーダー格って一番魔力がデカイやつか？」

「そうですね。魔族だけなら依頼をすれば猟兵様でも十分に倒せるのですが、リーダー格の魔族だけは話は別なのですじゃ」

「そうかそうか。なら、俺は相手したくないからエドルに押し付けたいのだが。」

世の中巧いかないなだろうな。拠点らしき気配の密集していた場所は二人を残して エドルとグンだろう 消えていたのだが、大きな気配と多数の比較的小さな気配がこちらへと近づいてきている。

エドルが気がついたのかこちらへと向かっているようだが先にこの村へと到着するのは魔族だろう。

「この村から出るなよ」

俺は村から被害が出ないようにその気配の足止めをする為に脚を動かした。

「クロス！」

そう叫びながら空を滑空し村へと向かっている魔族が見えた。

よくある漫画のようにリーダー格だけ特殊な形状であったり体が巨大であったりなどはなく、特に変哲も無い魔族であった。いや、魔族の時点で人間である俺からすれば変哲ありまくりなのだが、他の魔族と比較すると変哲は無かった。

ただ、そこから感じられる気配が強大であるという差が圧倒的にあるだけである。

俺は弓を構え幾つもの矢を連射と呼べる速度で放ち、魔族全員を狙うが、数匹の魔族を狩るだけで後は回避されてしまった。

リーダー格は当然回避し、おまけに俺のほうを睨み殺気を飛ばしてきた。

「やべえな」

余裕で見つかってるよ。そして、全員に捕捉されている。

数匹の魔族が「キキキキ！」と、叫び、俺からすれば子供なら一生のトラウマになり、年老いていたり心臓が弱ければ白目をむいて泡を吹いて死に至っていただろう衝撃的映像を確認しながら弓を構える。弓は当然、ここへ来る際に再びパクった代物である。

矢を放つが、先程の命中は全て気がつかれていなかった賜物であり、一発も当たることなく空を突き進んでいった。

弓はそれ程やりこんでいないので技術が甘いことも原因だろう。

弓ももつと練習して置けば良かったと嘆く間も惜しく俺は魔族の攻撃をかるうじて回避した。

回避は転がり、土にまみれるというそれはもう無様な回避であったが危うく頭が持っていていかれそうな攻撃であったので仕方ないというものだろう。

数匹の魔族は数に物を言わせて次々に間もなく攻撃を繰り広げている。

魔力を込めた手であれば防御に使用しても持っていていかなければと思うが、下手をすれば腕がなくなるので恐怖を抱き、無様な回避を繰り広げるばかりであった。

エドルが来るまで時間を稼げばいいのだが、どうやら他にも魔族は居るらしく、気配が増えていた。

そして、エドルはそれに遮られているのかこちらへはあまり進んでいていない。

このままでは俺もそう長くは持たない。

反撃を行おうと試みたが、魔族は攻撃して直ぐに空へと戻るのでそれは叶わない。

「くっそ」

自身の弱点を恨みつつ魔道書を展開しようと考えたが俺の手は止まった。

ここは村から離れているとはいえそう遠くは無い。と、なると少々の規模の魔法でも見られてしまう。

魔法自体は扱える人間が居るのだが、エドルに知られると面倒である。

そんな事を言っている場合じゃないのだろうけれど俺からすれば死活問題と言って過言ではない。

「ならば」

神に与えられたのは、扱いきれない魔力と見せられない神器だけではない。

残されたそれを使えば良いだけの話だ。あれなら地味だろうし見つかからないだろう。

幸いにも同じ結果の技術がこの世界にあるらしいし扱っても怪し

まれることは無いだろう。

問題点としては、それをこの世界に来て扱ったことが無いことだろうか。

「だけどなあ、それどころじゃないしな」

明らかにである。

俺は矢を放ち魔族を追い払おうと奮闘するがそろそろ矢が尽きる。魔族は俺が雑魚であると理解しているのかリーダー格は見ているだけという遊びの時間が始まっている。

状況は危機的、隙は万端。

ならぶつつけ本番で失敗しても何とかなるんじゃないかと思う。

だが、その前に魔法を試してみようと思う。見られない程度の小規模の魔法であれば問題はない訳だからそれで撃退できれば最善だからである。

俺は小さい魔道書を引っつかみ「でかくなれやあ！」と、念じると応えるように淡く光り、本程度のサイズへと変化した。同時に魔法の知識が頭に入り込む。

「おらああー！」

火炎弾を作り出し襲い来る魔物へと放つ。

矢よりも早く襲うそれは、流石の魔族も回避が難しらしく命中し、叫びながら草むらへと落ちていった。

「何とかなる か？」

草むらに火が燃え移ることを懸念して氷の魔法へと切り替え氷柱を放つ。

次々に魔族へと命中し、先程の矢のデジャヴを覚え優越感に浸りそうになったが、それは叶わなかった。

どうやら俺は良い方向へ進んだと思っても随時運命とやらにでも妨害されているのだろうか。

規模を絞ったその魔法はリーダー格に何のダメージも与えられない。

命中はした。命中はしたのだが、魔族も魔法が使えるのだ。

エドルが使用したウィング・アーマーの様な魔法によってリーダー格には攻撃が通らない。

無駄だと思いつつも矢を放つが同じような運命をたどり、あらぬ方向へと飛んでいくか、衝突して粉々になって消えていくかの二つに一つであった。

「ぶつつけ本番って好きじゃないんだがなあ」

今度こそそう言っている場合じゃない、な。

俺は魔道書をキーホルダーサイズに戻し、神に与えられた最期のものを扱うことにする。

魔道書の展開を止めると同時に流れ込んできていた知識は霧散し、経験と記憶のみを残す。この感覚は何度体験してもなれないだろうなあ、と思いつつリーダー格の放つ氷をかるうじて回避する。

漫画だと固有能力は何らかの名称があり格好良い様に見えるのだが、そんなものは無いらしく、決めた際に神によって勝手に刻まれた扱い方に名称は無い。ただ能力の扱い方と効果、応用方法があるばかりだ。

能力は、魔法の一端なのかもしれない。

武器というものがこの世界にあり、あるのだから製造する技術もあるのだろう。

見たところ科学は発展していないので魔法で作られていることは容易に想像できる。俺のそれは測らずとそれと同じような能力になってしまった訳だ。

俺はポケットから刀身の無いナイフを取り出す。

リーダー格の攻撃を紙一重で回避し、冷や汗をかきながら辺りに落ちている石や、土を一箇所にかき集める。

この作業の時点で既に数回死ぬかと思っただが、背丈程ある草が俺を隠しているらしく命中が甘くかるうじて生きていた。

傷こそ負っていないが、精神的に折れてしまいそうだった。

最後に、ナイフを握っていない手でポケットを漁り、破損しているナイフの刀身を取り出した。

慌てて取り出したために誤って切ってしまい手のひらから血が出たがそんなことかまわない。

というより、迫り来る回避は難しいであろう氷を目の端で確認してしまったのでそんな余裕がなかっただけなのだけれど。

兎に角俺は何か準備を終え最後の締めに取り掛かる。

「リフト形状実装！！」

俺がそう叫ぶと握っていた柄と破損した刃、そして地面の土くれが空気と同化していくかのように徐々に姿を消してゆき、それと反比例するかのように俺の右手に重量が感じられ、増えていった。

手に握られるは俺の牙と成り代わるモノ。

俺は迫り来る氷に目を向ける。

扱いなれたその重量は懐かしく、安心感を俺に与えた。

迫り来る氷を切り裂き衝撃で氷は粉々になり結合が解かれ魔力へと戻っていった。

「さて、時間を稼がせてもらいますか」

俺は、犯罪者とも罪人とも呼べないカスの親玉に目を向け、自身の憤りに従った。

## 第七話 - 魔王は強さを望む -

リーダー格の魔族が氷柱を宙に精製する。

その際にリーダー格の口から漏れている詠唱を耳にした。言語が話せるのであれば意思疎通が出来、交渉の余地があるのではないか。「俺らに敵意は無いって！ 何で意味無く襲撃に来るんだよ！」

と、必死さを演出してリーダー格の魔族に声をかけるが、口の端を吊り上げるばかりで返答は無い。和解するつもりは無く、こちらが何をしようと関係なく潰すつもりなのだろう。

射出された氷柱を回避しリーダー格を睨むが、俺の右手に痛みが走った。

痛みの原因を探して視線を彷徨わせると先程墜落した魔族が鋭い爪を見せ付けるように構えていた。

どうも、リーダー格だけでなく、その威力や規模に差はあれど全員が障壁を展開していたらしく元気いっぱいに動いていた。

右手に力を入れるが、予想以上に傷が深いのか握力などが低下していることが感じられた。せっかく、ナイフを直したのだが、あまり意味はなさそうであった。

「っち」

思わず舌打ちをしてしまう。

空からは氷柱。地上では複数の魔族の爪や魔法による攻撃。八方塞であり傷を見るからに背水の陣とも呼べそうである。

余裕があるわけではないので、右手を庇う様な愚行はせずに反撃を繰り出そうとするも、握力低下によりナイフがすっぽ抜けてしまった。

またも舌打ちをし、更に悪態をつきたくなるが四方八方から迫る攻撃にその余裕も無く回避を努めた。

魔族たちの表情は笑みに覆われていた。その笑みはエドルと対峙していた時のようなものではなく、ユウトの笑みの様なものでもな

い。ただ、ただ単に冷酷な冷たい笑みであったが、自身の強さに溺れる優越の笑みであるようにも感じられた。

平和的解決は望めない、か　それを見て俺はそうとしか思えなかった。

やはり、先程思った通り犯罪者とも罪人とも呼べないカスなのだろうか。俺は悲しさを感じつつそう結論付けた。

がちり、と頭の中で音が響いた様に思えた。

見なくても判る。俺が俺でありながら俺を取り囲むカス共と同じ表情を浮かべている事が。

全力でその笑みを消す。同類にはなりたくは無。ならない事は出来ないのだからせめて外面だけでもならない様に抗いたいと思う無駄なあがき、というやつである。

必然と無表情になる。昔から戦闘中にあの表情を消すのにいつばいっっぱいになり他の表情を浮かべることは叶わなかった。

俺の周囲で自慢の爪を振り回すやからには拳をお見舞いし氷柱の回避に努める。ただそれだけで大半は地に伏した。身体構造は人間と同じらしく、その辺りを試しに突いてみるともろく崩れ今に至る。倒れる仲間を目にして驚愕を表すカスの残りなど興味の対象にならないかったので何の感想も出なかった。

機械的に淀みなく。

拳を急所へと突き入れ。時には手刀へと形を変化させ突き入れた。数秒の内に再びリーダー格以外が動けなくなった。動けなくなっている奴等は全員呻き声を上げていて肉体とおさらばしてあの世へと引越している人物はおらず不幸的にも未だ肉体に滞在し続けていた。

彼らには凄まじい激痛が襲い掛かっているだろう。それは箆笥の角に小指をぶつけた比ではなく、的確にあらわせば四肢の何れかが？げた時の4分の3程の傷みであるだろう。

ちなみに、俺があの攻撃を受け、あの激痛に襲い掛かれた時はあらゆる穴から液体を漏らして少ししてから泡を吹いて白目をむいて気絶したらしい。

らしい、というのは、どうもあまりにもショッキングな出来事であつたらしく記憶が曖昧どころか無いといった方が適切であると頷ける程度に記憶が欠落していた。

その記憶の補完は、俺がその様になつてしまった原因である当時の師匠に教えられたからであつた。

話をするときの師匠のニヤニヤとした不快感を収束させて拍車をかけたかのような笑みは今でも思い出すと殴り飛ばしたくなるものだつた。

「おおおおおおおおお！」

俺が氷柱を捌きリーダー格の障壁を素手でどうぶち破ろうか決めあぐねているとエドルが到着しリーダー格に切りかかった。

リーダー格の左腕が宙を待った。フリスビーの如く回転をしそこそこの飛距離を更新した後に草むらの中へと自由落下していった。

「ガアアアアアア！」と、悲鳴とも呼べない寧ろ咆哮じゃないのかと思える声を上げながらリーダー格は欠損した部分から赤い液体を噴出しつつ滑空し逃げていった。

これだけの事が起きればもう攻めてこないんじゃないだろうか。

住民が申し出てくれればになるだろうが、やはり全滅させておいた方が安心ではあるだろう。

エドルはリーダー格が逃げた事を確認すると、それに続くようにフラフラとしながら逃げていく他の魔族を殺す事無く剣をしまった。

エドルがやさしいのか、それともこの世界ではこうなのかは知らないが同族の安心よりも他の命を優先させるその行為は俺にとって新鮮であつた。

もし住人に俺を含む場合であれば間違いなく抗議するかせずとも自身で止めをさしに行っている所であるがそうではないので笑みを浮かべることにした。

ここでふと思った。

どうも俺は役にたてていないんじゃないだろうか。

今回の戦闘でも、音を聞きつけてエドルが走り出したから俺が動いたのだし、今の戦闘でもエドルが走り出したからである。全てが後手と言っただけで良い。

俺はエドルに雇われていると行って過言ではない立場である。であるのにこの体たらくであった。

それについて少々呆然とするもエドルはやり遂げたという顔を向けてからグンに声をかけて村のほうへと歩いていった。

人生の大半がブランクであるが、その良い訳を用いても酷い状態である事に呆れながら大きな背中を追った。

「グン！」

村に到着するとグンの母親らしき人物がグンに抱きついていて。

結果だけを見ればそうであるが、工程を考慮すると飛び掛つていると見間違えそうなのであったがグンは慣れているのか鍛えているのか、兎に角倒れこむ事無くそのまま背中に手を回すことで応えた。

こちらへ向かってくる村長らしき人物の顔を見るからにお礼をしますよ、という顔であったので俺は慌ててエドルに声をかけてその場を後にしようと画策した。

エドルも期限が不明確である任務であったので思い出したかのように歩を進めたのでこれ幸いであった。

俺は、罵られる事も攻撃される事も慣れてはいるがこういう空気は苦手であった。

逃げる様に立ち去る俺達の背後からありがとう、という声が聞こえたが聞こえなかったことにしてそのまま歩を緩めることはなかった。

声からしてグンであったろう。その声をお礼としておこつ。俺の限界はそこまでであった。

横のエドルを見るといつも以上にむさくるしい笑みを浮かべていたので案外俺と同じような性質であったのかもしれない。

そこから元の道まで戻るのはすぐであった。

だが、そこから目的地へ到着するのはかなり時間がかかるのではないだろうか。

俺は目的地へ行つたことが無い所か情報がほぼ皆無であるのでそれを予測する事さえ出来そうも無かった。

が、慌てても仕方が無いし出来るだけ早く到着するように努めれば良いだろう。

他にやることも無いわけだし。

そう思うと、先の見えなささもそう気にならないように思える。

どれぐらいかかるのかと聞いた際のエドルの顔を見るだけでおおよそ予測できそうだったが見なかったことにしておく。

「……俺とお前は似たもの同士らしいな！」

元の道に戻るとエドルは暑苦しい笑みを向けてきた。

似たもの同士。同類でなく似たもの同士という表現は良い得て絶妙であると思えなくも無い。

「ま、そうみたいだな」

と、笑みを俺は浮かべている事に気がついた。口の端が妙に引つ張られる感じがするそれは笑みというより苦笑に近いかもしれない。

「ん？ そういえばナーク、荷物減ってないか？ 寧ろ何も無いぞ！」

お？ ……あ！ 元から何も無いといつても良い荷物だったけれど唯一の荷物兼武器である詰まる所の生命線であるナイフを回収していなかった。

パクった弓もあのまま放置してきてしまっているし。

代わりになるものを作成することを考えたが、周囲を見渡すも道

と草ばかりであり碌な材料が無いため肩を落とすことで諦めることにした。

「あー、ナイフさっきの戦いで落としてきちまったわ。スマン」

「はっは！ ま、仕方ないな！ 魔族に狙われて生きていることだけ御の字にしとこうや！」

と言いつつ俺の背中を叩く。力加減のほうはどうなっているのだろうか。凄く痛く背中、主に背骨が軋みを上げているのだが。ご検討よろしくお願ひしますだな。

エドルの浮かべる笑みを見ると俺の引きつった笑みも少しは見られる笑みになつていのではないかと錯覚に陥りそうだった。

なんだかエドルとは仲良くやっていけそうな気がした。だからこそ迷惑はかけられないな、とも思うわけで。

「んじゃ、俺ここから別れるわ。出来ることなら俺が準備でき次第

間に合わんかもしれんが、兎に角、また会えたら良いな程度に考えといてくれ。ああ、金は返すよ」

あれから大凡5日程は何の問題も起こらなかった。

寧ろ、田んぼ道とやたら長い草しかない状況で問題が起こるとしたら何が起こるか教えて欲しい。

5日。決して短くはなく、寧ろ長いと言える時間の間考え至った結論がこれだった。5日の間に更に交友を深めた俺たちであったが俺の力不足で一方的に別れるといったのだ。嫌われることを承知で言っているわけだがそんな覚悟などなんのその。俺の目はエドルを直視できずにいた。

目を叱咤激励してやりたいところだが、生憎と俺に口はひとつしかなく、その唯一の口も叱咤激励する所では無く微かに震えていて断念せざるを得なかった。

だが、ずっとそうしている訳にもいかないししぶしぶ目を向ける。

憤っているか呆けている表情の二つを想定しつつ目を向けるわけだが、そこに写るは普段以上に暑苦しい笑みであった。

これだけ笑みを向けられると笑み以外の表情が見てみたいと思えてくる。そして、望んではないのだが憤ってくれていれば笑み以外が見れたんだな、と考えてしまう。

「なんで笑ってんだ？ 顔の筋肉の病気でも患ってるのか？」

想定外が発生したからか俺は少々混乱しているようだ。この世界以前の刺々しい部分の一端が漏れ出てしまった。

ああ、もしかして俺の役立たず具合に気が付いて寧ろよかったと思われているのかもしれない。

そうであれば気が楽である。

気が悪くは多少なるけれど。

いやいや、自業自得なので文句は言うまいよ。

「ずっと難しい顔をしていたからな。俺が誘って迷惑で断りきれずに来てしまっただけなのかと思っていただけそうじゃなさそうだとわかったからな。だから喜んでるんだ」

俺の宣言で委細を把握したか。それも驚きであるがその言葉は更に驚きであった。

役立たずであったことを謝罪しておこうと口を開きかけたが手で制される。

「金はいつか返してくれたら良いし俺はナークを役立たずだなんて思っていない。問題はナーク以上のヤツがこの国にいてるか？ 事か」

どれだけ俺を過大評価するのだこいつは。

十数年のブランクをなめてかかるな。

それはもう苦くて不味くて昏倒しそうなくらいに最悪であるぞ。

エドルは笑みを絶やさない。

「ああ、金の利子なんて野暮なことは言わんから安心しろ。強いて言えばお前の心が少し判った気がしてうれしいからそれが利子代わりで良い」

言いつつエドルは俺に何か投げてよこす。カードらしきもので、

サイズは文庫本の大よそ半分というところ。紙であり厚さは厚紙のそれである。

投げて俺に渡す為にある程度の速度　俺の腕に少しめり込んだが　であったので受け取るのに一人さびしくひと悶着が発生し、その対処に追われている間にエドルは姿を消していた。

カードは表面を見る限り何らかの紹介状らしい。

生憎文字は読めなかったがその様な雰囲気であった。

いや、もしかしたらそれっぽい呪詛的何かが刻まれた代物かもしれないが。

これについては道行く親切そうな人に尋ねるとして金を返し損ねたのは気がかりであった。

そもそもこの国が第一目的地であったけれどそれ以降の経路を知らないのである。

時間があけばあく程追いつけないし再会の目処は立たないだろうが俺一人で魔物が出る道を闊歩するつもりには到底なれない。

用心棒的な人を雇うという選択肢があるが無いようなものである。金はないし、いやあるが使ってしまうと返す金が無くなる　なので一人で行くかボランティアの用心棒なんて都合の良いものを発見して利用する。

もしくは一人でいくかになる。

一人は却下で用心棒も物理的に不可能。

と、なると当初の予定通りある程度人生の大半を注ぎ込んだプランクを緩和してからということになる。

有名な獵兵がいると聞き及んでいたウヌク国は予想通りであった。

右を見ると道場らしき建築物や武器店。

左を見ると道場らしき建築物や武器店。

右を向いたつもりだったが左を見ていて、左を向いたつもりが右を見ていても気が付かない様相であった。

文字が読めない俺がどうやって店の判別をしているかといえれば深い理由がある。

いや、格好つけた。看板が主に簡単に短く絵で表現されたものであるという事だ。

ヌーダイセ王国で多少は大通りやらをうるちよろしたので 時間的なものが最悪であったので中に入るのは叶わなかった、いや御用になっても良いのであれば入れたが 多少は見ているのでそれと照らし合わせれば判る部分もあるということだ。

魔物が居るせいか、武器屋、猟兵所は、特に武器屋はよくあるのですぐに覚えられたのだ。

看板の基準となるデザインは国ごとは知らないが、少なくともヌーダイセ王国とは多少デザインが違ったが、あくまで多少であるのでその差は許容範囲であった。

建造物は石や木が主な材料で構成されているのだが、看板は空中に投影したかのような、所謂未来的イメージの看板であった。

ヌーダイセ王国は普通に木で出来た看板であったのだが、大通りがヌーダイセ王国よりも広く規模も比較できるほどではないのでもしかするとそれが理由かもしれない。

見回してみると、徒歩が大半であるが、中には馬の様な生物、悪魔のような角が生えていて魔物を連想しそうであったが、それに馬車を引かせた人物や、馬車であるがそれを引く動物はおらず、それどころか支えとなる車輪さえなく、もはや筏ではないかと言いたくなる形状の物が浮遊して移動していたりと、昼間のヌーダイセ王国は見えないが、馬車などの大きさを考えると、それらが頻繁に行き交うほどヌーダイセ王国は発展していなかったように思う。

看板は、それらの乗り物が激突しないように、という事なのではないだろうか。

少し探せば見つけることが出来る大通りから逸れた店は大きな看板に文字が刻まれている形式であったので、これは裏づけになるんじゃないかと一人寂しく盛り上がった。

この世界での魔法は、科学の様に浸透しているのではないかという印象を抱かざるを得ない事柄である。

よく見ると、全てではないが一部の屋台では拡声器のような物を使用して客寄せを行っているのだが、その拡声器のような物に石がはめ込まれていて、そこから気配が感じられたので魔力でも込められた石がはめ込まれていて、あれは所謂、魔法道具なるものなのだろう。

これも全てではないが自動ドアの様に自動に扉が開く店もあったが、そこからも気配を感知することが出来た。つまりはそういうことなのだろう。

俺はそんな前のいた世界とはある意味で似ているが全く別であるそれに興味を抱き、それを見て回ること若干テンションがあがっていた。

およそ二時間ほどだろうか。正確な時間はわかるはずもなく、兎に角気が付くと腹具合から言って結構時間が経過してしまっていた。そういえば、当初の目的が達成していない所か、エドルに貰ったカードの謎も解けていない。

いい加減に切り上げておかないと人が少なくなってしまう。

そう思い、そこらにいる人に聞こうと思ったが、どうも急がしそうである。商売に集中して活気が出て良いことなのだろうが寂しく思う。普段であれば間違いなくそこら辺でうずくまって地面に”の字でも書いて地面か壁とブツブツお話をしていただろう。幸いにも今はテンションが高いのでその程度でめげることは無い。

心が挫けそうであったが折れそうではないのだ。

大通りにいる人には気軽に聞けそうも無いので店の店員にでも聞こうかと思っただが景気が良いらしくどこも客が大勢いて、値段交渉で急がしそうである。

いや、景気が良さそうなのは良いことなのだけだね。

心が折れそうだ。いや、ウソデスヨ。

「ん？ そーいや少し考えればわかることじゃん」

そこらで聞けないなら聞けそうな場所に行けば良いだけのこと。

市役所的な国の機関やら猟兵所のような場所であれば余裕で聞ける

だろう。

ゲームで言うならギルドやら酒場と言った所か。獵兵所なら最悪、依頼という形で誰かに聞ける。

酒場があるなら飲み物の一杯でも頼んでからマスターに聞けば良いだろう。

いくら繁盛していてもこれぐらいの文字を読んで貰うことは出来る。

客ならば！

流石に何も頼まず聞くだけ聞いてっつていうのは勇気が無いので出来かねる。

個人的には酒場が一番良いかもしれない。

ヌーダイセ王国で奢らした飯屋は酒場みたいな様相であったので、それと同じ様な雰囲気のお店を探すことにする。

そういえば、先ほど見て回っている時にそういう店があったように思う。

絵の看板は全ての国に普及させるべきです。

それが俺の今日の感想である。

酒場の看板がビールの絵とは判り易過ぎるにも程がある。

絵のイメージはゲームに出てくるそれと同じで良いと思うよ。

店の大半が武具やらの関連の店や旅に携帯する食料やら馬車などの足を扱う店ばかりであり、酒場は案外少なかった。

一応宿はあるのだが、食事だけはやっていないようだったのだ。

酒場は数が少ないこともあり相当込んでいた。

まるで宴会会場である。

まだ明るいというのに酒臭い男が大勢いて顔を顰めてしまったがこれはどうしようもないことであった。

宴会のような事をしているので、テーブル席は満員といって差し

支えなかったが、それとは反対にカウンター席は比較的空いていた。俺はカウンター席に腰掛注文をしようとメニューらしきモノを手取る。

しかし看板とは違い、メニューまでは絵で表現されていなかった。見慣れぬ文字の羅列は進数計算の計算式を見た時の様に少なからず目がチカチカさせる効果をコレでもかと発揮してくれていた。

その頑張りは迷惑でしかなかった。

「すみません、コレをひとつ」と、メニューの文字の羅列毎に設定された金額の最も0が少ない品目を指差しマスターらしき人物に声をかけた。

マスターの浮かべる笑みを見る限りは単品で頼んで問題のない商品であったようである。いや、もしかすると営業スマイルかもしれないけれど。

俺の言葉を受けて元気良く返事をし　後ろでどういふ訳か馬鹿騒ぎしている男たちの声量を考慮してかもしれない　近くに設置されているコンロらしきもののスイッチを押し火をともし調理を開始し始めた。

動作を見る限り飲み物ではなく料理のようだ。

とある漫画で酒場ではミルクを頼むな、という台詞を目にしたことがあるので、指差した商品が、畏商品であるミルクに価する何らかのモノではないかと内心無駄にハラハラしていたがそれは杞憂であった。幸いである。どうもこここのマスターは所謂強面であるのでそれはもう怖いのである。過去が過去であればマフィア的な何かになっっているもおおかしくなく、寧ろ現状がおかしいと思えるほどのコワイマスクである。

料理を本当にしたのか？　電子レンジでチンしただけじゃないか？　とこの世界では無い科学の利器による製品を取り上げて質問をしそうになる程の時間で俺の目の前に料理が出された。

それはお湯を注いで作成する魔法の麵製品の調理時間よりも早いのである。

計測方法が腹時計という事が気かりであるが概ね合っている。  
ろう。

短時間ではあるが料理は料理であり、マスターはマスターであり料理人であった。

「うめえ！」

味は美味い。それはもう！ と感想を述べそうである。

だがしかし。

だがしかしである。

トーストの形状でミートスパゲティの味は俺の固定概念やら先入観のせいだろうが微妙である。しかも色は若干緑である。

詳しく言うと黄色メインに緑が所々混じったような色である。

つまり、外見は明らかに失敗料理所か、料理とも呼べず、もはや毒である。

味は良いものであったので毒という表現は撤回しても良いが、そうなる毒という言葉の変わりに視覚毒という表現を限定的にした単語を添えることになる。

それ程であった。ちなみに匂いはミートスパゲティである。

よく食べたな自分！ と思いつつ自信に激励しようと思わざるを得ない。

流石にどういふ訳かにこやかな顔で 結局は強面である。

見ると尿道が緩んで液体が出てもおかしくない顔である 俺を見つめつつサービスといわんばかりに他の席と比較すると大盛りである目の前の目の毒を見ると食べないわけにはいかなかったのである。

自身の舌と胃にお別れ会を開いてお見送りをしなくて良かったことを安堵しつつ俺は無駄に数あるポケットのひとつからエドルから貰ったカードを取り出しマスターへと差し出した。

「これに書いてる文字読めるか？ 俺、文字読めなくてな」

少し険しい顔になるマスターを見て膀胱が少し重量軽減をしようとして液体を放出しようとし始めたので必死で妨害する羽目になり、右

足と左足のいつもの連帯感はどこへやら。

どうも喧嘩しているらしく自由奔放に右往左往しているので移動することも出来ない。

そこで敬語を使えばよかったよママン。

なんて感想を抱いたが後の祭りであることを悟り、心の中で念仏を唱えた。

当然、念仏なんて知らないのでナンマードーと南無阿弥陀仏の略称らしき言葉を繰り返すだけであつたけれど。

すみません、がサーセンになる様な仕様であるといっておこうか。そんな俺の心境の平穩を取り戻すかのようにマスターはにこやかな表情へと戻した。

危つくシヨック死する所であつたが峠は越えたらしい。

「お前、エドルの知り合いだったか。いやー、なんかあると思つてたんだよな」

突如マスターが消えた。

当然、よく漫画である高速移動などではなく、そうなると当然俺の背後を取っている訳でもない。

マスターは突如テーブル席の方向から飛来した物体が頭部に激突し、頭だけ壁を突き破り、一見、身体が壁から生えているように見える格好になつていた。

今、客が訪れたらシユールという感想以外何も抱けないのではないだろうか。

マスターの横に見慣れぬ男が伸びていた。

臭いから相当酒を飲んでいて、もしや酔った拍子に、地面と平行に少なくとも1メートルと少しを移動したのかと思つたが、それは人間の動きではないと思いついた。

しっかりしろ俺。しっかりしているつもりでもどう考えても動転している。

原因を探るために俺はテーブル席を見ると、判りやすくあらわされていた。

飛来した方向にはモーゼよろしく、人垣を掻き分けた道が作成されており、20代後半の鎧を着込んだ女性が拳を振り切った体勢で眉間に皺を寄せていた。

鎧を着込んでおり背が高かったので最初は男であるのではないかと思っただが、顔立ちと長い髪、そして女性特有の鎧越しでもわかる体つきでかろうじて女性と判断できた。

だが、放たれる殺気を鑑みてしまうと女性であるということは撤回したくなる気分であった。

いつからであるのだろう。

先ほどは凄まじい喧騒であり、鼓膜が仕事をして無駄である状態であったのだが、今は打って変わって鼓膜の独壇場である。

あらゆる音が消え、もはや原子が静止しているのではないか、もしくは空気が振動することを放棄したのではないかと真剣に考えってしまう普段であればそう居心地が悪いわけではないがこういう場では居心地は兎に角、すぐさま後にしたい空間で棒立ちしている事に気が付いた。

この静寂は嵐の前の静けさのようであり、その状態で棒立ちしている俺は、戦場で呆けている阿呆の如くである。

さて、マスターには悪いが代金をカウンターにおいてカードを回収して出口へと向かおうか やべえ。

俺と出口を繋いだ直線状に女性がいる。

間違いなく横切らないと脱出が出来ないではないか。

女性の周りには唾然としていたりするものもいるが、大半が睨みつけている男であった。

明らかにあそこを中心とした問題がある。

極力関わりたくない。

何せ女性は兎も角、男たちは顔を真っ赤にして怒っているのではなく酔っているのである。

面倒くさいこと極まりないしややこしい事極まりないのである。

触らぬ神に祟りなし。

そういう諺があるが、触らなければならぬ場合はどうすれば良いのだろつね。

第八話 - 意思は弱く墮落は一途 -

今すぐ「帰っていいですか？」と、聞いて返事が何であろうと飛び出していきたい気分である。

だけれど、賑やかであった酒場が打って変って静寂どころか音が何もないのではないのかと聞きたくなる不思議というより不可思議な空間になってしまっている原因である女性とそれの取り巻きの様な配置の人々を見るとそれも言えなかった。

寧ろ言ってしまうと、所謂K・Yとやらになりかねない雰囲気である。

幸いにも俺は空気を読めるのでその場で立ち去ることはせずに周囲の人々の様に立ちつくすことにした。

下手に動けばK・Yの称号を欲しいままにしかねないだけでなく、この騒動に巻き込まれるということでも望ましくない状態になってしまいう可能性があった。

寧ろ、そうならない可能性の方が低いと思える。

そう立ちつくすだけで自身の心音が聞こえてしまうのではないかという静寂を耐える事大凡10秒。

これが数分以上続くのであれば、不名誉の称号など気にせず窓から飛び出していた。

そんな阿呆みたいであり地味に現実で選択しかねない選択肢を考えつつ生命維持以外の余計な事をせず、学校などの劇で木の役になったつもりで突っ立っているとついに動きが見えた。

マスターは相変わらず壁から生えている。

殴られたらしい男は未だに動かず電池が切れているらしい。

動いたのは周囲にいた男の一人の口である。

「テメエ！ いきなり何しやがる！」

男が鎧の女性の肩を掴むが、女性は眉ひとつ動かさずその手を払い眉間にしわを寄せる。

「貴方達が不埒にも許可なく女性の触れてはならない部分に触れるからでしょう」

よく見ると女性の装備である鎧は、鎧と言う程の重装備ではなく、胸当て程度の軽い装備であった。

周囲の男の何人かはそれに隠された二つの夢と希望の丘に目が行っている訳だが、女性に気づかれていると気が付いていないのだからか。

気が付いているのなら相当の猛者である。

俺はもちろん猛者ではないので目をそむけるまでに至るまでも無く、そこに視線を向ける事さえせず無難に周囲の状況を伺い続けた。周囲の人々の中の数人の男は女性に向ける敵意の視線から吹っ飛ばされて糸の切れた操り人形のように動かない男の知り合いか仲間かは知らないが男の味方をするつもりらしい。

女性は複数の男に取り囲まれるように囲まれ睨まれているが気にもしていない。

寧ろ、侮蔑の視線を向けている。

「グツタはお前に話しかけたただけだろ！」

と、男の一人が先の台詞に反論してみせ、他の男達は続く様に、そつだそつだと言っている。

仕上りの悪い劇の村人的なモブですかこいつらは。

そんな男達の台詞を聞いて更に顔を陰しくする女性。

だが、彼女の表情に恐怖は感じられない。

俺ならあれ程の男達に囲まれて睨まれれば居心地の悪さに目をそむける程度はするだろう。

そつ思い感心していると男が女性の体に不用意に触れようとしているのが見えた。

ふむふむ、女性の発言に信憑性が見いだせる。

よくあるパターン　言う所のテンプレであればこのまま女性に助力してそこからイベントを起こしていくのだからうけれど、生憎と俺はテンプレに従うつもりは無いし興味も関心も何抱けていない赤

の他人を助ける酔狂な趣味を持つてもいないのである。

つまりはどうするか。

それは酷く簡潔で簡単である。

隙あらば即行でこの場を後にしたい。会計はこのままカウンターに置いておくか壁から生えているマスターが着こんでいる服のポケットに突っ込んでおくかは悩みどころであつたが女性と取り囲む男達が何やら言い合い、その後外へと出て行つたので俺もすぐさまこの場を去ろう。

気が変わって再びここへ舞い戻られてはたまつたものではないからだ。

騒動というか寧ろ静寂であつたが、その原因が去つたのですぐさま酒場は元の活気を取り戻していた。

ああ、だけれどマスターにまだエドルにもらつたカードに刻まれた文字の内容を聞いていない。

それにカードはマスターに渡したままだ。

マスターは壁から生えているけれど、その衝撃でカードが目も当てられない事態になつていないか心配に思った。

カードの文字については他の誰かに聞けばいいのだろうけれど先程の騒動を見た直後となると何かに巻き込まれる気がして誰かに聞く気分になれない。

仕方が無いからマスターが目覚めるまで待つ　　なんて程俺は気長で無いし余裕もあまりない。

「よつせい！」

特に必要もない掛け声を上げつつマスターを突く、概ね全力でするとマスターは更に壁へとめり込んだがピクリと動くとすぐにそこから飛び出てきた。

「何が起きたんだ……」

「いやそんな事はどうでもいいじゃん。金の請求はそこで倒れている野郎から請求すればいい。少なくとも事件の原因に噛んでいるから」

ふむ、と唸った後に考えても仕方ないな、と考えていると誰が見てもわかるような表情で何も無かったかのように話を続け始めた。  
とんだ猛者である。

「ああ、それでこのカードに書かれている文字だけだな、ここを出て右に曲がって道なりに進んでいけばある石造りのまるで城の様な大きな建物が有るんだが、そこに行つてこのカードを見せてアリナ・ベヒスに会えと書いてある　ッ!?」  
マスターの顔色が急によろしくなくなった。

壁から身体をはやした反動などの弊害が発生したのであるうか。

「どうしたんだ?」

先程、反動が何やらと考えたが、実際、嫌な予感がすごくするのでそう聞き返す。

俺は運が悪いというよりも悪運が良いと表現した方がいい程に碌でもない運であるのだ。

カウンターに乗り出して聞こうとしたが、食せばお齒黒よろしくお齒緑にでもなりかねないトーストラしきミートスパゲッティに肘を突っ込みそうだったのでその動作を諦めつつ危険物は脇へと追いやる事にした。

美味しいのだけれど文字通り目に毒であるのでなるべく関わりあいをもちたくない料理である。

「アリアリナ・ベヒスってのはな、言いにくいんだが会わない方がいい人物の筆頭と言つて良い人物だ。俺はあつた事が無いし知り合も無いが、流れる噂は肩が当たつただけで相手が吹き飛んだとか過去に単騎でというか酔つた勢いで砦を消したとか最悪な噂しか流れていない」

予想以上である。

肩が当たつただけで吹き飛ぶとかオカシイだろどう考えても!

そして、そんな人物に会えというエドルはもつとオカシイ!

気が狂つとる!

今の俺は自分でも自身の顔が真っ青で酷いモノであると理解出来

る程度に酷い顔をしていた。

それを押し隠す余裕さえ無い。

まあ、でもエドルが会えっという人物だし流石に人間なのだから人間の範疇を超える事は無いだろう。

そついや、エドルの時点で人間疑問に思う程オカシかったよな。

その人も人間の範疇を超えているような気がすごくする。

「アリアリナ・ベヒスは、二つ名が『ライトライン黄金色の断裂』で、おまけにエルフの血をひく人間らしい」

ああ、生物学的で既に人間の範疇を超えていましたか。

いやはや、折角エドルが会えと言ってくれているのだけれど残念ながら会えないねこれ。

人間には限界が有るんだよ、いや有ってほしいよ！

エルフって事は魔法が強力なんだろうなあ、なんて明後日の方向を向いて考えているとマスターにカードを渡された。

俺はトリップを止め、マスターを見るとマスターはどんまい、と言いかねない笑みを俺に向けている。

すごく強面なのでその表情は非常に不愉快という意味で無い気持ち悪さ　簡単に言うくと嘔吐感を伴いかねない方である　に耐えつつカードを受け取った。

「……とりあえず、その悪魔的な噂しかないヤツとは会わないようにするよ。エドルには悪いけれどね」

とりあえずアリアリナ・ベヒスの俺内イメージはムツキムキの悪魔である。

これは本人がどれ程払拭しようと当分は変わりようのない強固なイメージとなりそつだ。

「ああ、その方が賢明だろう。まあ、噂で大体想像できると思うが、実力は相当なもので勇者より強いんじゃないかって言われているぐらだから、相応の地位が与えられているらしいから敢えて会いに行かない限りは会えないような人物だろうし安心したらいいさ」

つまり、トチ狂うか極め付けに運が悪くない限りは会わないで済ませられるという事か。

うん、大丈夫だろう、後者の理由以外は。

運悪く出会いそうな気がしてならないのだが、生まれついで運の悪さ故の不安であると考えて気にしない事にしよう。

気にしていればそれだけ通常とは行動が異なり、それ故によろしくない出来事が発生しそうだからである。

まあ、筋肉ムキムキのヤバイヤツを見かけたら急いで逃げればいいだけだ。

「うん、まあありがとう。その悪魔みたいなヤツには注意するよ。どうせ悪魔みたいなやつだろうし」

鬼の形相なんて赤ん坊の様な言葉に聞こえる存在なんじゃないかな。

「ん？ ああ、気にするな。エドルの知り合いは無下には出来んさ」  
エドルは相当マスターに好かれているらしい。

あの性格を考えればそれは十分に頷けるものであるのだが、どうやら俺もエドルを予想以上に好いているらしく、俺はその評価を知り自分の事の様に喜んでいた。

以前の俺にはそんな存在はいなかったので何だかんだ言ってもこの世界に来て良かったかもしれない。

相当面倒なのは喜ぶるところではないけれども。

「あ、そうだ。この辺で道場みたいな修行場みたいな場所ない？  
出来るだけ金がかからない方向で」

「それならここから右に行った所にある坂の上のラクランって名前の道場が良いよ。そこは月謝が安い。…無料で一か所あるけど、そこは相当腕が無いと通う事さえ許されないよ。それに危険な訓練をしているのか、年に何人が死亡しているらしいし」

なら、金は無いからそこら辺で魔物と戦うなりすれば良いか。

俺の場合、とりあえずブランクをどうにかしたいだけだから何とかなるだろう。

よくある漫画よろしく近くの山なり溪谷なりに籠れって修行すれば良いんじゃないだろうか。

「わかった、ありがとう」

と、手を振り俺は酒場を後にした。

緑の何かは一口齧っただけで済んだので精神的ダメージは少なくなつて何か言い表せない安堵感を原因が分からない幸福感を感じ噛み締めた。

そこいらで野性的で経済的な修行を行う為にも良い立地の場所を探さなければならぬ。

この辺りに強力な魔物の気配は感じないので戦闘での修業は度外視し、地形での修業に良い場所を探すとしよう。

魔道書を使って周囲を即座に探査すればいいのだろうけれど、魔道書はあまり使う気になれないし歩いて探す事も修行だと考え町の外へ出る事にする。

綺麗に舗装されている場所は街ぐらいで、あとは土がむき出しの野生満開で一步間違えれば獣道なんていう具合であるので、丁度良さそうな場所はすぐに見つかった。

切り立った崖やその底で広がる足を滑らせそうなゴツゴツとした岩場。

おまけに少し離れた場所に川は有るし、上流までいけば泉が有る。魔物という名の野生動物もよく見かけるので相当生息しているようだ。

ただし、兎もどきや狐もどきばかりなので戦闘訓練は望めそうにない。

最初から無理だろうと考えていたので別段気落ちもせずにとりあえず食料を確保する為に足を動かす。

周囲を散策してみるがやはり、ウサギもどきやら狐もどきといっ

た小動物系の魔物しかうろついていなかった。

大凡10分程で兎もどき一匹と川に居た魚を数匹捉えることにした。

そこで俺は刃物を所持していないので獲物を食材へと昇華させる為に必須となる解体という作業を行えないことに気がついた。

今日は仕方が無い。

男料理にしてみよう。

周囲の気配を探り、誰も居ないことを確認した後、更に念のため誰にも見られないようにちよつとした洞窟のような場所に入り、魔道書を展開し火を通すことにした。

展開を終了しても経験は残るので、下位術の火の魔法ならば次からは行使する程度であれば魔道書の補助は必要ないだろう。

そう思いつつ魔力を魔法の形へと循環させ火を通す。

上手く火を通すことが出来た。

この世界の魚は初めて食べてみたけれど正直味気ないな。  
簡潔に言えばあんまり美味しくない。

調味料とか取れないからな。

川はあるけれどあとは少しの森と肌色というか黄色のような水気が完全に無い岩場や崖だけなのである。

訓練つばい事をするのには少し便利だけれど人が全く住んでいない地域らしくそういう辺りは不便の極みである。

刃物の調達もしておきたい。

石器を作るにも、それに適した石が見当たらないのでどうしようもないし、能力で作成するにしても材料が足りなかった。

「今日は腹もいっぱいになったしブランク解消に努めるか……」  
と、俺は立ち上がりかけるが、少し停止してから再び胡坐をかいた。

「そっぴやブランク解消って何すれば良いんだろう。ただ身体を動かせば良いってもんでも無いだろうし」

昔の修行の内容を覚えていればよかつたんだろうけれど残念なが

ら俺の海馬は職務怠慢をしているらしくそれに関する記憶が発掘されることは無い。

発掘の見込みは零といっても良い。

寧ろ逆の方向へとメーターが振り切っつていそうである。

時間はあまり無いので慌ててしまいうそうであったが、慌てても良い考えは寧ろ浮かばない。

敢えて落ち着きを取り戻すためにエドルに教えられた魔力の流動練習を行う。

体の局所へと順々と魔力を移動させていく。

この練習をしてから魔力を少しは認識できるようになった。

それまでは、気配といった勘に近い何かを感じ取っていた訳だが、この世界で強いものは大半魔力を内包しているのでこの技術は役に立つだろう。

「ん？」

危うく手段が目的になってしまう所であることに気がついた。

俺はエドルに恩を返すというか、職務を全うする為に強くなりたいのだ。

それが目的であった。

なのに今はなんだろうか。

ブランクの解消はできずとも、強くなれば良いのだ。

魔力の流動を練習すれば良いのではないだろうか。

身体を動かすような魔力の流動の練習になりそうなることをすれば良いのではないかと思える。

身体を動かしていれば少しはブランクが解消できる気がするからだ。

先も言ったとおり、身体を動かすことだけではブランクの解消は望めないが、他にしようが思いつかないので仕方が無い。

目的を魔力流動にし、副産物的にブランク解消とすれば良いだろう。

なら、もっと合理的に行こう。

「まずは、雨風を凌がないとな」

今俺のいる場所は川付近の岩場である。

火を起こす際に使用した洞窟のような場所は、洞窟というより窪みであったので雨風を防ぐ機能は持ち合わせていないのである。

川は、崖と崖の間　崖の底であるが、それを沿うように走っている。

洞窟は川を挟むように聳え立つ崖のひとつの根元付近に存在する。ここに拠点を構えれば高所へと移動して漆黒と仲良くならなくて済むだろう。

今日は、魔力流動を意識しながらこの窪みを洞窟へと昇華する事をしてみようか。

この世界と以前の世界。

その差は魔力の有無である。

つまり、そこに存在する物質は同じものがあれば基本的に耐久値は変わらない。

そうなるのであれば、今日の前にある崖を構成する力ピッカピカの岩は以前の世界にあった岩と変わらないのだろうか。

一応、予想以上に硬かった時の為に心構えだけはしておくし、手の骨が手の骨として機能しなくなることが無い様に力加減の調整も怠らない。

作業を開始する前に魔力流動をお浚いしてみる。

壁を抉るのであれば衝突する寸前に魔力が手に集まるように流れさせれば良い。

最初はゆっくりでも徐々に早くしていく。

俺は小心者であるので最初は大凡5秒かけて岩へと衝突させてみるが、岩など無いと言わんばかりに手はそのまま進んでいった。

無論、手が岩をすり抜けた、とか岩が実は岩でなくすり抜ける何か、であったりなどではない。

手には岩のかけらがあるのですり抜けたわけではなく、耐久性を視る限り岩と同じ成分であった。

「これ、なんだ？ 本当に」

自分でやって何だけれど自分でも理解できないし説明も出来ない。以前の世界で素手で一人用一方通行トンネルを作成する際にもこれ程楽という意味で手ごたえが無いものではなかった。

何かに比喻するのであれば、以前は輪ゴムを千切る様なもので、今は水にチョップをかました時のような抵抗である。

比喻を使わず簡潔に表現するのであれば、俺の動作を阻害するという意味で岩なんてあっても無くても変わらないということだ。

ただし、それから飛び降りるならば大いに意味はあるだろうけれど。

「うーむ」

神の恩恵による魔力が凄まじい事は理解した。いや、薄々どころか無理やり表すなら濃々と感じていたけれど。

何せ、魔力流動だけでなく魔力そのものをまともな師事もせずほぼ独学で学んでいるにもかかわらずコレなのだから。

もしかすると、魔力を扱える人間全員がこんなことをやっつけられるのかもしれないが、もしそうであるなら俺は人間不信になりかねないぞ。

人間が不信というより第三の恐怖症に人間を認定してしまう勢いで人間が怖いと考えてしまうかもしれない。

だけれど、人間よりも魔力に特化した種族であるだろう魔族があれであったのでやはり神の恩恵が酷いものであるのだろう。

以前以上に加減が難しくなりそうであったが何とかなるだろう。

洞窟作りなんてすぐに飽きて苦行の何ものでない事を考えて若干心していたのだけれど、面白いように岩が削れていく様を見ると案外面白く感じ没頭してしまった。

少々大きめに洞窟を作ることによって閉所恐怖症が発動しないように考慮され、更に横に倉庫的な洞窟まで作成してしまうまで一心不乱に掘り続けたという没頭振りであった。

先ほどの食事の残りは倉庫的な場所に保存しておこう。

そのまま地べたに置くことは憚られたし、気温も良い気温であったので腐らないか不安に感じたので氷を置くことにした。

氷は川の水を持ってきて魔法で凍らせたものである。

稀に流れない寿司屋さんやネタを置く場所に用いるような立方体の氷である。

良い感じである。うむうむ。

腕を組んで頷いていると、そろそろブランク解消からも魔力流動練習からもかけ離れた事になりつつあることに気がついた。

うーむ。しかしそうは言っても何をすれば良いのか皆目見当がつかないのである。

魔力流動を意識して金トレでもすれば良いのだろうか。

だけれど、脱獄を繰り返す為に筋肉は落ちていないのである。

体力はそれに在らずだけれど。

刃物や調味料といったこの場所ではどうしようもないものは明日調達することにしよう。

今の目的はなにやら強くなることを主体としているのでサバイバルが目的ではないし、趣味でもないのだ。

コレだけであるなら正直の所、ここに停滞する意味は無いのではないかという考えも出てきていなくも無い。

当初の予想を大幅にずれて目的が方法が変わってしまっているからである。

ブランク解消ならばこの崖が使えるそうだけれど残念ながらそれは現状ついで扱いであるのだ。

そうなっても国と国の移動時間を考えると調味料やは必須であるし、刃物等の汎用性に長けた武器も魔物や魔族を考えると必須だろう。

幾ら魔力が高性能であると証明されても素手であれと戦う気になれない。

あの時は妙に戦闘に当てられてテンションが素晴らしかったので垣間見せなかつたが、あのガーゴイルと表現せざるを得ない形状を

思い出すと背筋がぞくりとするものだ。

ガーゴイルそっくりの体つきはまあ大丈夫なのだけれど、ガーゴイルそっくりの顔で、ガーゴイルそっくりの鋭利な歯でこちらへと大口開けて襲い掛かってくる姿を思い出すと目が回りそうな恐怖に襲われる。

テレビから髪の毛の長い女性が出てくることを売りにしている様な映画を始めてみた際よりも怖い。多分、それに実際に遭遇してしまってもあれ異常ではないだろう。

妖怪といった精神的な恐怖ではなく、アレは本能的な恐怖を感じるのである。

あれから別段どうすれば良いか思いつくはずも無かったので、魔力を使用しながら腕立て腹筋背筋を数千回やっていると日が落ち始めていた。

「慣れない事はやるもんじやないというのは正しいことなのだろうなあ」

やけに疲労感が大きい。

この感じから明日筋肉痛になりかねない。

朝飯にありつけないなんて事になってしまえば腹の住民はもれなく一揆を勃発させて、更に同盟軍として筋肉痛から増援が来るに違いない。

最悪のパターンに見舞われ悶絶する俺を幻視した所で俺は落ち着いてられる状況じゃなくなってきたので当面の分の食料の確保へと勤しむ事にした。

ついでに言えば、文字通り手ごたえが無い作業であったのだけれど慣れない事であったそれを行った後のすきつ腹は先の残り物では賄いきれないと判断したから余計に動かざるを得なかったのである。牢が家であった時は俺の両足は生まれたばかりの鹿の如く足が反抗期になり、あらゆる作業をやりたくないとアピールしていたが、今の俺の足はそんな時期なんて無い、過去は振り返らないと言っているように聞こえそうであった。

鳶のようなもので籠を作成し、一度により多くの獲物を持ち運ぶ。今日の作業が効果を表したのか、魔力を使用して狩りを行っていた以前よりも早く、そしてより多く獲物を確保することに成功した。

食べきれない分は倉庫に放り込んでおけば良いだろう。

氷が配備されているので冷蔵庫の機能があるその洞窟に入れておけば長い間持つだろう。

焚き火をするために、近くの森から木屑やらやたらめったら大きい葉っぱを持ってきて火の魔法で発火する。

火が点った時点で辺りは既に暗くなっていた。

「火、通れや」

魔力を使用する際に、より強固なイメージを持って流動させてみると、通常よりも上手くいったので、詠唱とも呼べない詠唱をただ、目的を述べただけなのだけれど 唱えて魔法を使用してみると、上手くコントロールが出来た。

やはり、経験が残っているので一度魔道書で使用したものは後に自力で扱えるようである。

焼け具合は魔道書使用時程ではないが中々であった。

大分豪勢に食べたが、まだまだ食料は残っていた。

森に食べられそうな木の実もあったのでそれも相まってだろう。

まあ、良い。

「うむうむ。疲労ここに極めり」

お休みグンナイ。

俺は別段、恐怖症によって暗黒へと落ちる以外の方法で暗闇に身を任せる事に成功した。

起きると危惧していた筋肉痛は無かったが、全身を襲う妙な虚脱

感が感じられた。

いってしまえば体が重い。

魔力の流動と初歩の魔法数発だけと言っても消費魔力はある訳で、特に流動は半日ずつと行っていたと言っても過言で無い密度で行っていたのでそれに伴うものなのかもしれない。

感覚的に魔力が底をついたというわけではなく、寧ろ全回復している。

なので、よくあるパターンとして始めて魔力を長時間使用したとか、やたらと魔力を消費したからとかそういう理由を掲げて俺に重力以外の重力を超える圧力が襲いかかっているのだらう。

特筆して気にすることも無いと判断したので、朝飯を平らげながら町へと向かうとしよう。

町は朝早いにもかかわらず活気に満ち溢れていた。

朝は他の町や国へと向かう商人が多いのか、商人の格好の人間が多かった。

慌てているのか猛スピードで走る乗り物に数回轆かれ掛けたつ調味料を探した。

現状、済崩しにエドルから貰ったというか貸して貰っている金に手はつけたくなかったので手持ちの心ともない金だけで何とかしなくてはならない。

という訳で武器の方は諦めないといけないかもしれない。

前の国と物価はそう変わらなさそうなのである。

調味料は予想以上に安かった。

どうも、一般的に料理をするという習慣はあまりないらしい。

特に、一人暮らしの男は酒場で皆で騒いで飲み食いするらしいので余計にである。

よく金を持つなあと俺は関心しきりであった。

そんな疑問はすぐに解決することになる。

どうも、タバコや本といった嗜好品の様なものは高いのだが、料理や生活必需品のような必要なものは異常に安い。

前の国ではそうでもなかったのだが、ここの国の特色なのだろうか。刃物も、剣やらは異常に高いのだが、包丁といった戦闘用でないものは比較的安かった。

体験的に、もと居た世界の包丁よりもここの包丁は安い。

貿易が盛んである様相であったのだが、それに応えるように包丁ひとつでも様々な種類があり、品質も良かった。

一番酷い店では、包丁だけで数百種類置いていたので脱帽であった。

ホームセンターでもこれ程の品揃えは無いだろう。

俺は、比較的頑丈で壊れにくそうな包丁を購入した。

切れ味は最悪とは言わないが良いものでないことはわかったのだが、切る食材が野生動物というワイルド精神に則ったモノであるので別段問題ないか、と自身の食生活にため息ひとつについて感想とした。

当初の予定通り、調味料と刃物だけの購入であれば、限りなく無いに等しい俺の金は結果的に言うとなくなっていった。

四捨五入すれば0になる程度に無くなった。

この世界には料理はあまりされないらしいのだが、料理をする俺としては店頭で乱雑に置かれたフライパンとしか見れない物体は神に等しい神々しさが見えた。

いや、あの神を考えるならば、このフライパンの方が神々しいだろうか。

早速、うきうきしながら拠点である洞窟へと戻って昨日集めていた木屑などに火を灯しフライパンで調理を開始した。

調味料もあるので万全といえる。

いや、予想通り切れ味が宜しくない包丁を考えれば万全とは言えないけれど、俺個人としては満点を出したくなる設備である。

出来上がったそれは、昨日目撃した　というよりも、一口だけ食したあのカビ食パンと見間違えそうなアレなど最早ゴミとしか思

えないほどに良い出来であった。

「うむうむ美味しいなあ」

俺は一心不乱に目の前のものを平らげた。

それから二日。

俺は何も変わらず氷のお陰で快適空間と化した洞窟内部で寝っ転がっていた。

いったい何十時間魔力流動の練習を行っていないのだろう。

俺が身体を預けているのは、岩場ではなく草と蔦で作成した擬似ハンモックであった。

ゆらゆらと揺れるそれに誘われて修行の二日目は寝てしまい修行の三日目の今日に至る。

今日も今日とて、朝からその揺らめきにかまけてうとうととして過ごしている。

「あ、やべえ。これ快適すぎるな」

このままだと食材じゃなくて俺が腐る。

## 第九話 ・岩は役に立つけど脅威にもなる ・

元は窪みと表現せざるを得なかった洞窟は既に洞窟にあらず拠点やら家と表現できる程までに昇華していた。

横の倉庫的洞窟にはあらん限りの食料の貯蔵があるので狩りに出かける必要が無い。

保存は冷却系の魔法で行っているので貯蔵はそうそう痛まない。

俺が引き籠もりにしか見えない生活習慣へと墮落するまでそう時間はかからなかったというか、寧ろ時間など必要なく、気がつけば既に墮落していた。

あの時の決意など無かったかのように墮落していく自身を認識してはいるのだがどうにも脱出できない。

以前は、NEET何考えてるんだ本当に、なんて思っていたが今なら彼らの気持ちがとても理解できるだろう。

心の中で馬鹿にしている申し訳ない気分だ。済まない、自宅警備員たちよ。

そんな訳で修行という名の自墮落生活3日目であるのだが、修行という修行はそれほど進んでいる気がしない。

そもそも、誰の師事も無く学ぶこと自体が愚かである技術なのにこの体たらくなのだ。進歩しなくて当然と言えよう。

幾ら自墮落になっていようと流石に危機感を感じざるを得ない現実である。

初日はこの快適空間作成するという事で多少修行になった訳だが、二日目である昨日はそれは酷いモノだ。

描写の余地が無いというか、描写のしようが無いという程にござろと食っちゃ寝という自墮落ぶり満開である。

自墮落歴初日であったが、その自墮落の貫録は歴戦の自宅警備員に匹敵するのではないかという貫録であったのではないだろうか。

今回は何らかの奇跡が働いて我に返る事が出来たが、ネット環境

が有ればどうなっていた事やら。

そう考えると、エドルや魔族と相対した時とはまた別の意味で背中がゾクリとした。

「いい加減に起きないとな！」

と声に出してみるも身体は動こうとしない。

まるで首部分の脊髄が破損して全身不随になったかのように動かない。

我に返る事で精神は何とか支配権を取り戻したけれど、どうも肉体の支配権はそれ程取り戻せていないらしい。

排泄の際に動くからその時に支配権を取り戻せばいいだろうと樂觀視していたのだが、身体はどういう訳か魔道書を展開して、転送魔法をもってして排泄の動作を省くという技術の無駄遣いをやってのけた。

そうくるかあッ！

なんて恰好つけて言ってみても、葉っぱで出来たハンモックに体を預ける俺の現状を鑑みれば恰好悪いどころか阿呆の極みの様に見える。

決して、強者故の余裕などと言う良い解釈には転じない格好である。

一応、見る奴が見れば阿呆でないと分かるかもしれない。

低高度でハンモックが揺れるように風魔法を、しかも搭乗者に不快感を与えないような微妙な風を起こさせているのである。

魔法使いが見れば阿呆には見えないかもしれないのだ。

服装は相変わらず迷彩服である。

だけれどいい加減洗濯をしないと大変な事になる。病気になる。

なんていう尤もらしい理由を提示すると、しぶしぶながら身体はハンモックから降りる動作をしてのけた。

ハンモックは高所恐怖症対策としてかなり低い高度に設置されている。

高度は分かりやすく言えば足首程度である。

オカシク思えるかもしれないけれど、これが俺の最大の譲歩点なのである。なぜ譲歩しているのかは俺にさえ分からないが、強いて言うのであれば快適感に負けたのだと俺は言うだろう。

身体の支配権が修業とは関係のない理由付けで一時的に一部戻ってきているが、億劫であるのかその足取りは非常に重い。

快適空間の洞窟から出れば河原という位置付けである川まで2分程かかって到達する事になった。

牛歩戦術を乱用する場面ではないけれど、現状ではこれが最速であるので身体の反抗期具合と身体が感じているであろう億劫の度合いが分かるというものだ。

洗濯自体はそれほど時間はかからなかった。

快適空間を作成する際や、保持する際にそこその魔法を使用していたのでそれらが扱えるようになっていく現状だと洗濯は水を操作して汚れを落とし、風と水を操作して乾かすというふた手間だけでいいのだ。

服を着たまま洗濯を行えるという万能ぶりである。

時間も大凡20秒。

最初の水を操り服を洗う工程の際は水に体温を持っていかれるという代価が存在するが、冬で無い現状だと風邪をひく可能性はそれほど高くないので慌てる程でもない。

冬であれば間違いなく死んでいる事は明白であるので冬までに対策を講じる必要が有りそうだけれど。

「お、治ってるな」

命名自墮落病。

洗濯という作業を行った御蔭かは知らないが、おそらく快適空間から脱出したからだろうが、身体を自由に動かせるようになっていた。

危つくあの中で一生を過ごす羽目になる所であった。

そうなればエドルに向ける顔が無い。

「んじゃ、しゃーねーけどやりますかな」

魔力流動は自堕落病の最中でも出来ない事は無かったから多少初日よりかは錬度が上がっているだろう。知れているけれど。

とりあえず、エドルがやれといていた練習をやる事にする。

正直、それ以外の練習方法を知らないというだけなのだが。

これが終わったら早くもする事が無くなるのはそういう事から仕様である。

こういうことを教えてる場所に忍び込んで練習方法だけでも盗んでみようかと思わない事も無いどころか、解決方法はこれしか思いつかない。

一応、普通に通うという方法が有るが、有料の方は金を払いたくないし、無料の方は受かる気がしないので受ける気もしない。

こんな考えだから自堕落になるし、すぐに意志を曲げる事になるんだろうなってことぐらいは薄々気が付いているさ。

さて、そういう訳だから今日こそは動こうと思う。

流動の練習も終わったので今から行こう。

と、俺が決意し荷物も無いので足を動かそうとした所で轟音が響いた。

「な、なんだなんだ!？」

地面が揺れているので地震かと思ったが、起こる轟音が断続的であり、揺れもそれに合わせて起こっているのでそうでない判断を下したが原因は判らずじまいである。

耳を澄ませてみると崖の向こう側から喧騒が聞こえてくるようであった。

声からして数は多い。足音からして平和的なそれではない事がわかる。

「うんうん、巻き込まれない内にさっさと移動しようか」

これを人は戦略的撤退という。

聞こえる音やら感じる振動やらを統合する限り碌でもない事なのであるから誰も戦略的撤退を行う俺を責めないであろうと信じてい

る。

一際大きい轟音　もはや爆音と呼べるそれが聞こえた。危うく鼓膜が御臨終になられる所である。

俺は鼓膜に走る痛みに思わずしゃがみこんで蓋をするように耳を覆った。

すぐに上方から風を切る音が聞こえ、咄嗟にその音から距離を取る。

見ると倉庫用の洞窟が有った場所に何故だか岩の塊が一つ置かれていた。

よくよく見ると岩の塊が倉庫用の洞窟入り口にはまり込んだらしい。

仕組みは理解した。だが、原因はさっぱり見当がつかない。

どこかで山が噴火でもしたのだろうか。

何にしても、どう考えてもミラクルな現象であるように感じる。

どこからとも無く空襲警報発令してもおかしくない勢いと格好で飛翔・自由落下を行って偶々作成した、又は存在した穴にすっぽりと入り込むとが起る事は相当確率が低い筈である。

確立が何であれ、俺の大事な洞窟の一つ。

それも重要で手間のかかった食糧貯蔵側の洞窟が封鎖されたのである。

忌々しき自体だ。

洞窟自体は兎も角、中に貯蔵された食料を収集しなおすのが非常に億劫なのである。

「ったくよー、ふざけるなよなあ」

と、漏れるダレた様な台詞とは違い迅速に洞窟の蓋となっている岩の除去を行おうと岩に接近し手をかけた。

この洞窟から出る際とは凄いいである。

「やれやれ。もし食料に砂やらがかって駄目になったら俺はどうすれば良いんだよ本当に」

そうなれば、原因が火山噴火であるならその山の噴火を止めるか

山を消滅させて蓋をする。

これが人の成す諸行であるならそいつを肅清するか居なかったことにする。

それぐらい内部の食料は重要なのである。

岩に指を突き刺して持ち上げて内部を覗き込むと無事である食料が目に入った。

どうやら、本当にジャストフィットしていたらしく、内部に被害はないようだった。

俺が胸を撫で下ろしていると、再び轟音が響いた。

先の轟音から今までの間は大凡4秒ぐらいである。

この頻度で同じ様な轟音が響くとは何やら作為的な何かを感じる。いや、二度であるなら火山の噴火という可能性は拭いきれないかもしれない。

だけれど、飛んできた岩が別段高熱になってる訳ではなかった。なので火山の可能性は無いのかもしれないと思いつき直すことにした。

それに、爆音でなく轟音であるのだ。

これがまだあの二度目とは限らない。

ところで、岩の温度を確かめずに指を突き刺したが、もしこれが高温であれば俺は右手の指四本とおさらばしていた事になる。

顔が真っ青になってしまいそんな話である。

高温であった場合の想像をすると、全身の筋肉、主に骨盤周りの筋肉が緩んであらゆる宜しくないものが漏れそうな錯覚に陥った。

なんて事を考えつつ、思考を発展させ、そろそろ持ち上げた岩をどこかへ移動させようと考え付いた所であの爆音が響いた。

再び岩の飛翔が発生したのである。あの音の勃発である。

先のように思わずしゃがみこんで耳を塞ぎそうになったがそれは右手の岩によって阻まれてしまった。

未だに洞窟入り口辺りで数センチ浮かした程度の位置であったのでしゃがみこむ事さえかなわなかった。

飛んできた岩はお世辞にも頑丈とは呼べない岩なのである。

下手にしゃがんで洞窟入り口付近と衝突させてはらばらになって食料にその残骸がふりかけよろしくふりかけられたら目も当てられない。

鼓膜が訴える激痛に耐えながら慎重に岩を除去しようと手を動かした。始めた所で岩が消滅した。

「え？」

突飛な出来事に俺は思わず戦場で突っ立つような阿呆の様な声を上げてしまった。

台詞自体はそれほど阿呆ではないのだけれどイントネーションが阿呆なのである。

どの様なイントネーションであるかはご想像に任せる。

大凡、想像できうる中で最も阿呆だと感じるイントネーションを想定してそれで阿呆度合いが同等か、聊か不足しているという認識でかまわないだろう。

そんな事を考えつつ呆然としてみると、思考がそろそろ動けや、と突っ込んできたので、従うことにした。

俺の思考に従順になる事は吝かではないのだ。

まず、自身の確認である。

右手がどういう訳かロケットパンチ仕様を実装して肘から先が消え去って、それに装着されていた岩も一緒に消え去ったという考えに至ったが、それは未だにロケットになっていない俺の右手を見て却下された。

右手を振るうがロケットパンチは出来なかった。只のパンチである。

次に実は岩なんて無かった、という考えであったが、よく見てみると洞窟とは反対側に岩が落ちていたので却下された。

第三案としてこの転がっている岩がそれか、という考えに至る。

それで概ね正解であるのではないのかと考えたが、どういう現象が発生して岩が勝手に、それも目で追えぬ速度で移動してのけたのだろうか。

それほど移動したかったのか俺に触れられなくなかったのか。

後者であれば素手で洞窟を作成することは岩に嫌われるので嫌われたくないならやるなと肝に銘じておきたいし後世にも伝えていきたい。

俺は岩に嫌われたくない所か、普段からお世話になっているので寧ろ、嫌いという感情を抱いてさえ欲しくない。

後者である可能性を捨てきれないので俺は岩に謝罪しようと思えば手に取るがこれは先ほど俺が持っていた岩でないことに気がついた。人違いならぬ岩違いである。

その岩のどこを探してもボーリングの玉よろしく、指を差し込むための穴が見当たらなかったのである。

それに、大きさも少し大きい気がする。

小さいなら削れたと頷けるが、大きいとなるとなにやら砂と結合でも果たしたことになる。

岩が合体して大きくなったりするなんて話は聞いた事が無かったのでやはり岩違いなのだろう。

俺の装備していたアタッチメント的な岩を探すも見当たらなかった。

数秒、周囲を見回すと、努力が報われてそれらしいものを発見した。

「あああああああああああああああああ!!!」

食料に降りかかっているふりかけが目に入ったのだ。

主成分岩。それ以外の使用素材皆無である。

岩百パーセントの天然素材である。

俺は岩には嫌われたくは無いが、岩に私を食べてと言われるほどに好かれたくも無い。

残念ながら岩を俺の腹部、主に胃という臓器に輸出すると胃が瓦解するだけでなく、腹の健康という概念が一切財消滅し、排泄されるものが固形物で無くなる現象が発生しかねないのだ。

それに、腹の虫が一時的に騙されるが、あくまで一時的であるの

で、少し時間がたつと一揆を起こしてきかねない。

その一揆は誰の事も考慮されず配慮されず、強いて言うなら腹の虫自身の保身と満足感のみに左右されて他の意見は一切受け付けな  
いと言わんばかりの拒絶を悠々と見せ付けて行ってくれる。

俺の予想が正しいならば、その一揆が勃発する時期は、腸や大腸  
といった胃以外の、消化に関連する臓器達が非常に不調である時で  
ある。

たまったものではないし、下手をすれば最悪の重ねがけである。  
精神的に死んでしまいかねない。

俺は目をこすりつつも現実を認識することになる。

何度目をこすっても、何度水で目を洗っても俺の食料に無断で振  
りかけられて天然岩百パーセントのふりかけは消え無かった。

好き嫌いはいけないけれど、だけれど人間には限界があるのだ。

腹に岩を収めて平然としていられるのは赤い頭巾を装備した少女  
を食したオオカミだけで良いのである。

「うむむむ」

どうやら、そこに転がっている岩が俺の装着していた岩に激突し  
た故にこのふりかけトッピングが強制注文されたらしい。

凄まじいミラクルで、友達がキリストの転生体とかそういう事が  
発生するぐらい奇跡ではないだろうかと思える。

これが火山の噴火による原因ならば、やはり岩に嫌われていたの  
だろうと考えるけれど、先ほどから聞こえる多数の人の声と足音を  
聞く限りは火山でないと至ってもおかしくないだろう。

後で原因が火山の噴火であったと知っても知らぬ振りしよう  
心に決めた。

ならばやる事は一つである。

「うーむ」

どうやら多数の人は、洞窟側の崖とは反対側の崖の向こう側に  
いるらしい。

早く向かわなければ人々は逃げ去ってしまうかもしれない。

崖を上り下りすることを考えるだけで眩暈がしたので岩に嫌われることを覚悟で崖に手をかけた。

- Unknown side -

今回の戦闘も<sup>ライトライン</sup>黄金色の断裂一人だけで片がつきそうだった。

一介の兵士として<sup>ライトライン</sup>黄金色の断裂は憧れの対象であるだろう。

同じ様な存在になれるように日々鍛錬を行っているけれど到底及ばない。

入隊して数年になるが、未だに<sup>ライトライン</sup>黄金色の断裂の攻撃方法が分からないのだ。

<sup>ライトライン</sup>黄金色の線が走ったかと思うとその線が走った場所を縫うように切断されている。

今回もそうだろうと悠長に構えていたが、相手側にも同じ様な存在がいたらしい。

ただの山賊であるということを知りて舐め切っていたのだ。

山賊の中で一人。

ありえないぐらいに巨大な奴がいた。

背丈は3メートルはあるんじゃないかと思えるほどである。

見たくなくても見えてしまうほど強調された発達して膨張していると思えない筋肉を持ったその男は人とは呼べない容姿をしている。

種族は人ではなく巨人族なのかもしれない。

特徴は巨人族そのものであるのだ。

だけれど、巨人族が山賊なんて聞いたことも無かった。

巨人族は、持ち前の巨体に比例するかのような腕力を誇っているのだ。赤子の巨人族でも大の大人である人間の男以上の腕力を持っているのではないだろうか。

そんな彼ら巨人族は、当然その腕力を人に重宝される。

それに知能も悪くは無く、下手な人よりも優れている。

建築などは彼らに頼むと地震が起きても微動だにしないという触れ込みなのだ。

そんな彼らには仕事が殺到するので山賊なんて事はせずとも収入はあるはずなのである。

同期の奴らも同じ事を考えているのか、攻撃を躊躇している。

巨人族は善き仲間であつたはずなのだ。

人間よりも信用されている。

これがエルフであるならそういうこともあるだろうな、と考えたのだろうけれど。

戦況はいつももの逆であつた。

今回は<sup>ライトライン</sup>黄金色の断裂は後方待機であつたのでその巨人らしき男の独壇場であつたのだ。

## 二撃

たつた二撃の攻撃でこちらの陣形は崩れる所か崩壊の一途であつた。

拳を振るう際の踏み込みで地を揺らし、続く拳で地面がえぐれ幾つかの岩となつて滑空していった。

横にあるかなり高い崖を越えて飛んでいったのでかなりの腕力であることが見て取れたし、拳に直撃すれば消し飛ぶし、飛翔する岩に衝突すれば体のあちこちは拉げる事が理解できる。

こちら側の兵士は俺を含め顔を青くして慌てふためくだけであつた。

一応、攻撃を仕掛けようとするが、飛び交う岩と拳でままならな

いのだ。

その拳と岩の攻撃が二撃。

どれだけの恐怖が訪れたか想像することは憚られるし語る事も言語化が難しいので叶わない。

そんな異常があつた。

俺たちを哀れに思つたのか、頼りないと思つたのか。

後方からライトライン黄金色の断裂が歩んできた。

黄金の線が走ると、俺たちに降り注ぎそうだった岩々が粉々になつた。

巨人らしき男の動きもそれを見て止まる。

目に見える恐怖が止まり俺たちも落ち着きを取り戻す。

たつた腕を一振りするだけで戦況を変えるライトライン黄金色の断裂を見て更に尊敬を深める俺であつた。

周りを見ると、皆が皆同じなのだろう事が分かつた。

通常は畏怖の念を抱く人間もいるのだろうが、持ち前のカリスマかそれを抱く人間はいなかつた。

「ああああああああああああああああああ！！！」

一瞬訪れた静寂を狙つたかのように何かの叫び声が聞こえた。

その声は先の巨人らしき男の踏み込みや拳以上に地に響いた。

地震の様なあの響きとは違うが絶対的な響きである。

皆が異常に気がつきそちらの方へ目を向けた。

ライトライン黄金色の断裂も目を向けている。

普段は何の興味も見せず、ただ淡々と敵を撃破して帰還していくその姿に無い注目である。

俺はその姿に驚いたが、それ以上にライトライン黄金色の断裂に注目される存在に驚いた。

巨人らしき男は何かを感じたのか声の方向へと岩を投げつけ始めた。

辺りの岩が無くなった所でやっと動きを止める。

数秒で周囲の岩を投げ尽くす男にも驚きであつたが、音も無く崖

に穴を開けて出現した男に更に驚きであった。

「お前らかああああああ」

凄まじい形相で、再びあの響く声を発している男　いや、男なのだろうか。

声からして男であるだろうということは見当がつくが、その体つきは、変わった柄で少しぶかぶかの奇妙な服装越しても細かい事がわかる。

そんな少年を襲撃するように岩が殺到していた。

しかも、崖の上の方に幾つか衝突し、それで崖の一部が崩れ数を増やして少年に殺到していた。

視力を非常に強化する事に特化しているという微妙な俺の能力を行使してようやく少年と認識できる程度であったので、他の奴らからしたら米粒のようにしか見えない少年であるが、米粒どころか崖以上の存在感を放つ少年に全員の動きは完全に止まり、時が止まったかのようであった。

ライトライン 黄金色の断裂を見ると、口の端を吊り上げている。

ライトライン 黄金色の断裂が表情を浮かべているのは初めて見るかもしれない。

いつも無表情であるのだ。

ライトライン そんな黄金色の断裂に表情を浮かべさせた少年はあの岩に対して何をしてくすのか非常に興味がわいた。

岩が少年に激突する寸前でようやく少年は岩の存在に気がついたのか上を向いた。

それから少年が何かをした動作など見て取れず岩は地面に触れて、山を形作った。

崖の上り下りは慎重に慎重を重ねて、更に心構えを行って命綱を幾重か張れば何とかなるかもしれないが、それどころではない。

仕方が無いので、岩に嫌われることを覚悟でいつも通り直進するトンネルを掘った。

よく考えてみれば岩に嫌われる云々は俺が勝手に思い始めたことで、岩で辞書を引いてもインターネットを酷使してもその情報は出てこないように思えたので安心しつつ、崖を通り抜けた。

通り抜けた先には相当数の数の人間がいた。

一人、ありえない背丈の奴がいたので、人間かと疑問に抱いたが、人の形をしていた。

魔族だとあのガーゴイルみたいな奴だろうから違うとして、魔族がいるならそれ以外の種族がいてもおかしくないと取り敢えずは頷くことにした。

人々は大きくいうと二つに分かれていた。

彼らが手に持つ武具を見る限りは戦争のように思えるが、数の多い方は鎧を着込んでいるのに対し、反対勢力は、無骨な皮鎧が精一杯で、普段着じゃないだろうかという服装の奴までいる。

戦争ではなく、何らかの戦闘だろう。

規模は戦争だけねど。

それら全員がこちらを見ていることに気がついた。

普段なら何だ何だと気にしていただろうが、今回俺は憤慨しているのである。

今、優先すべきことは誰が俺の食料を駄目にした原因なのかということだ。

周囲を見渡すも別段火山が噴火していなかったので人々を探ることにした。

結論から言うと犯人らしき人物はすぐに見当がついた。

あり得ないほど大きな男である。

彼が犯人なのではないだろうか。

彼から敵対勢力側に向いて幾つか地面が抉れていて反対勢力は埃を被っている。

これだけで犯人確定としても良いんじゃないだろうか。極めつけは、拳についた多数の砂のかけらである。

見える範囲で彼以外に作爲的な配置で砂を装着している人物は存在しない。

良くて残骸を被っている位である。

ならば、肅清すべきは彼一人であろうか。

俺としては憂さ晴らしが出来れば問題ないので彼一人で留めて置こう。

と、結論に至った所でトンネルから出たにも関わらず未だに暗い事に気がついた。

それに上方で何やら空を切る音が聞こえるし、何やら岩と岩が接触したかの様な音が聞こえる。

「あん？」

上を見ると多数の岩が降り注いできていて、俺からすれば岩の天井が迫ってきている様に見えた。

目視した時点で岩と俺の後頭部との距離は一メートルも無く、岩の降り注ぐ範囲は半径数十メートルにも及ぶようであった。

辺りに岩が地面に衝突する轟音が響いた。

第九話 ・岩は役に立つけど脅威にもなる ・（後書き）

20000PV突破致しました。

これも皆様の御蔭です。ありがとうございます。

## 第十話 - 最強を望む者は最強でないが世の常 -

轟音が響き、結論から言うと俺は当然の様に下敷きになった。

岩の天井を殴り飛ばそうにもいかんせん物量作戦が実行されているので迎撃や脱出には時間が足りなかったたのである。

岩が崩れ、上手い具合に空間を作成したので俺はなんとかそこに滑り込み骨やら肉やらの一切合財の圧縮による空間節約なんていう匠も驚きの収納方法を確立済みそうであった。

岩は、長い間降り注いだように感じる。

徐々に空間と外界を繋ぐ隙間は失われ、音が鳴り止んだ今では酸素の供給もままならない地獄空間へと成り下がっていた。

そこで俺は恐れていて回避に努めていた閉所恐怖症が発動したらしく、視界が暗転した。

閉所恐怖症は今までに数回は防ぎきれなかったが、それでも出来るだけ回避してきたのだ。

高所恐怖症は意識を失う。

閉所恐怖症もそれであれば別段被害も無く迷惑も無いのでここまですべてに回避に努めなかつただろう。

閉所恐怖症は、言ってしまうえば某サ ヤ人の子供時代の尻尾がある状態で月を見た状態である。

あの漫画を読んでいた際は、目が覚めて辺りが潰れていたら自分のせいだと気が付けと言いたかったが、閉所恐怖症が発病してからその考えは改めることにしたのだ。

目覚めたら辺りが崩壊していれば自分がやったという考えでなく自分は運がよく偶々生きていた。その中で寝ているなんて自分なんて凶太い性格なんだ、と考えてしまっていたのだ。

その出来事が大凡3回繰り返されてから異変に気が付いた。いや、2度目からおかしくないか?とは思っていたけれど。

兎に角、閉所恐怖症は碌でもないのである。

意識の暗転を回避したかったが、既に俺の視界に光は無く、意識は闇を漂っている。

どれぐらいの時間が経過すればここから開放されるかはまちまちであるので見当はつかず、外界で何が起こっているかは完全にわからないのでこのまま漂うしかすることは無い。

非常に暇である。

ああ、そうだ。

一眠りしておこう。

どうせ目が覚めたら面倒が転がっているか、崩壊の犯人だという目撃が出る前に逃げおおせなければならぬのだ。

体力の温存やら回復は視界が暗転した今では必須行動であるだろう。

- l i g h t   l i n e   s i d e -

叫び声が聞こえました。

その響きようと威圧から威嚇術の一つである魔力を乗せた咆哮『拍車声』かと疑いましたが、魔力が一切感じられないのでそうではないのでしょうか。

魔力も無しに持ち前の咆哮でこれ程までの威圧を込め憎悪を込めたモノを放てるものなのでしょうか。

そう考えている間に気配が近づいてきています。

直進していることから崖を破壊しているのではないのでしょうかと考えましたが音が全く聞こえませんが違うのでしょうか。

距離があるからなのかもしれないかもしれませんが、崖の破壊の際に出る騒音を考えればそれは少なすぎるのです。

私にも同じ事をせよといわれると、出来るか凄く自信がありません。崖の破壊は容易いですが音が出てしまうでしょうね。

それに理由はそれだけではないのです。

何人でどうやっているかは不明ですが、魔力を一切感じないので

民間人でさえ少量の魔力は内包しています。様々な動作に微細な魔力はつきものなので、それが今は無いのです。

感知できない程隠蔽できる程に魔力の扱いに長けているのでしょうか。それとも逆に民間人以上に魔力の扱いに長けていないのでしょうか。

今は魔力社会となっているので後者は偏狭の人間でもありえないでしょうね。

故に相当の使い手であることになります。

気配の位置からもうすぐ崖を通過し終えます。

山賊の背丈3メートル程の巨人族の男がそれを感じたのか手元にある岩をそちらに向かって投げ始めました。

かなりの速度で飛翔するそれは崖の上部に激突していき、崖を崩し、数を増やして落下してきました。

それ以外に崖は崩れる事無く、ここからでは不確かであるが崖に穴が開き、何か動くものが出てきた事が辛うじて視認出来ました。

横の副長を見ると驚いた表情でそちらを眺めています。

対峙している山賊などそっちのけで。

遠見や先読みといった、視覚に関わる感覚に特化した能力を持つらしい彼ならば私に見えない何かが見えているのかもしれないですね。

見てみると、山賊側もそちらを注目しているようです。

あれほどの声を出し、崖を無視して直進してくれば当然だと思えますよ。珍しく私もそちらに気を取られてしまいましたし。

「お前らかあああああああ」

と、再びあの叫び声が聞こえました。

驚くことに叫び声をあげる人物は、只一人で崖を通過して来たらしくそれ以外に気配は感じられ、ません。

見る限り何かの機械を使った訳でも無さそうですし、本当に一人で、魔力も無しに素手で崖を通り抜けてきたとしか考えられません。そうでないなら副長があれ程驚くはずが無い。副長のそんな態度は、信じられないという情報を信じられるほど信用に足るモノでした。

岩がその人物にもうすぐ接触するところまで落下していましたが、その方の安否や、山賊の事よりも、その方がどのように動くかの方を気にしている私がありました。

私は遠くてよく見えないにもかかわらず見入っていたらしいですね。

あれから固まったと喋っていいほど呆けていました。不覚ですね。山賊も同じ様になっていなければ惨事になっていたでしょうね。

黄金色の断裂と呼ばれ恐れられている私がこのような失態を犯すとは修行不足ですね。

それ程その方が規格外という事もありますが、現時点では断定できないですね。

失態を犯した自分に零れそうになった苦笑の聲は抑えられたが、口の端は不自然に釣りあがってしまったのは自分でもわかりました。

そうしている間に岩はその人物を隠すように落下してしまいました。

ここにも振動が伝わるほどの凄まじい地響きを起こしながら岩の山が出来上がり、何か起こすかと思っただがその人物はそのまま岩の下敷きになったらしく見渡すも見当たりません。

「おおおお！ 今だー！！！！！！」

私達が呆けている間に山賊側がこちらへと攻め込んできたようで

す。

先の人物ほど面白くないですね。

「……ローム。今すぐ全員を後退させてください」

「は、はい！」

私の命令を聞いて慌てて下がるように命令を下すと、慌てた口調ながら迅速に他の方々に指示を出してくれました。

私の苦手なことは副長であるロームが全て代わりに行ってしてくれます。ロームがいなければ私は碌な指示も出来ず部隊は瓦解するでしょうね。

良い部下を持ったものです。

さて、私は敵をなぎ払うだけです。

詠唱を手短く済ませ右手に握っていた剣を掲げると剣が黄金色に煌めいた。

剣の延長線上に黄金色の線の様なものが見えますが、それが私がライトライン黄金色の断裂と呼ばれる所以なのです。

山賊全員を屠るのに必要な行動は腕を一度振るうだけで事足りません。

腕を横になくと山賊は全員黄金色の線に沿うように裂けていきました。

お子様には到底見せられない光景が繰り広げられ、到底聞かせられない断末魔が響きました。

最初は自分でやってなんですが、これを見た私の顔色は決して良いものではなかったでしょう。

油粘土で作った人形の方がまだ顔色が良かったのではないでしょうが。

今では顔色を変えないどころか、眉の1つも動かさずに直視できるようにになりましたが、それは喜んでいい事なのか悲しむべき事なのかは私としては酷く微妙です。

どっちつかずもいい所ですね。

二つをふよふよと行き交っています。

切断面が焼かれ、出血が発生しませんので、出血死は無く、少しの時間だけなら半分になったその身で生存し続けるので断末魔が響くのです。

手ごたえが無さ過ぎて失敗したのではないかと思う腕を振るう動作は、気軽さや手軽さとは打って変わって重大で異常な状態を作り上げるのです。

こんな力を振るう私がよく英雄扱いに慣れたものだと思議に思います。

化けもの扱いと紙一重だったのでしょね。

奇跡が起きて今が有るのだと私は思いますよ。

ふ、と異常に気がつきました。

よく見てみると、腕は振り切られておらず、途中で何かに引っかかったかのように停止していました。

「……？」

こんな出来事は初めてです。

不思議に思いつつ原因を探りました。腕に何かが引っかかっているのかと思い、腕を調べてみますが、特に何も腕の動作を阻害するものは見当たりませんでした。

あり得ないでしょうけれど念の為に、黄金色の線が何かに阻害されているのかと思ひ探りました。

「……ッ!？」

黄金色の線は、崖から出てきた方が埋もれている筈の岩山で停止しています。

何だか、酷く寒いと感じます。

気温はそれ程寒くは無く、寧ろ丁度いいのですが。

その寒さは絶対的な寒さで本質的な寒さ　私が英雄と呼ばれる以前の修業時代に感じた懐かしい感覚です。

死。

私は慌てて黄金色の線を消し、構えを幾久ぶりに取って警戒を敷きました。寒さは拭えませんが。



隊を見ると、半数以上が先の殺気というか覇気というか、死そのものの エドルが放つあの忌々しくいやらしい何かに当てられて意識を失っているようです。

残ったものもロームを含めて足元がおぼついていません。

これが千鳥足というものなのでしょいか。

少しの間が与えられ余裕が出た所でまた声が聞こえました。

「お前かあああああああああああ！！」

先程の様に絶対的な寒さを感じさせるものではありませんが凄まじい殺気が籠った声でした。

どうやらあの埋もれていた方はこちらに敵意が有るようです。

そうなら、私は迎撃しなければなりません。

私は部下を置いて逃げる事などしたくありません。

先程からの構えは崩さず、睨みつけ、何時でも応対できるように神経を張り詰める事しか私には選択肢は無いようです。

- main side -

意識が戻ると俺の棺になるんじゃないかと疑ってかかって問題の無かった岩達が消滅していた。

忌避していた閉所恐怖症が発動してしまったらしい。

今回は岩山が消滅した程度　どうやったのかはわからないがであったので比較的被害は少なくほっと息をつく。

俺が暗黒を自由遊泳している間に決着はついたらしく、やたら巨大な奴がいた側の人間　デカイやつは人間なのか疑問に思うのが全員上半身と下半身を分離させ、よくあるロボットものよう

なものでも体現して見せている。

反対側の騎士団の様な恰好をした勢力は半数以上が地に伏しているものの気配は感じるので死んでいるものはいないようだ。

かなり接戦だったのだろうか。その割に大地が足で乱されていないようだけれど。

何はともあれ岩を投げてきた張本人は上半身と下半身との仲が悪くなっているようなのでもう少しすれば生命と肉体の仲が悪くなっていくだろう。

つまり、俺が手を出す必要は無くなったという事だ。

戦わずして勝利を得る。

まさに今を指すのではないだろうか。

俺はうきうきとし、さっさと埃をかぶった食料たちを救出しようと踵を返すが

崖、無くね？

どういう訳か俺の体で言うと腰から肩辺りの範囲で誤差はあるが、その位置から上が無かった。

いや、崩れている。

となると必然として残された下はその崩壊に巻き込まれている。

結論から言うと、崖が岩山というか、瓦礫になっていた。

それで見当がつくと思うが、俺の快適すぎる拠点は目も当てられない状態になっているだろう。

無事な下部分の崖を見てみると、断面が焼けている。

岩が焼けているので相当な熱量の何かの影響なのだろう。

誰がやらかしたのだろうか。俺の快適空間は明らかに影も形も無いだろう。

食料に至っては埃まみれを超えて瓦礫まみれとなっているはずだ。やたらデカイやつがいた側にはこれ程の規模の攻撃を行えそうな者はいないし、見てみると、崖の断面の状態と彼らの上半身と下半身の断面の状態とで酷似しているものがみられた。

それは、焼けているという事である。

断面は酷く焼けているにもかかわらず他の部位が焼けていない事からゆつくり焼いたか熱が拡散しない何かで焼いたかである。

俺が意識を失ったのはそれ程長い時間ではないと腹と太陽の位置が伝えていたので残す可能性は後者のみである。

と、なると犯人は一人だ。

騎士側に一人、それを行える魔力量を持った人物がいる。

寧ろ、他の人物は意識を失っていたり足元がおぼつかなかったり、魔力量が少なかったりと理由は満載である。

理由が無さそうなのがただ一人であっただけであるので犯人と確定できるものではない。

だが、俺の怒りは相当なもので、そんなもの知ったこっちゃないと理不尽さ満載で事に取りかからざるをえない。

あの青が主軸の上着と黒に近い茶のズボンとブーツを着込み、その上に鎧を装備したどう考えてもあの部隊で上位、それもかなり上の方の位の人物がその疑わしい人物である。

もし、間違っけていてもごめんなさいである。

「うええ」

よく見ると、あれは酒場で悪目立ちをしていた女性ではないか。

金の髪に、腰辺りまでの三つ編みという髪型である。

酒場の際とは服装は違うが、あの関わってはいけないよ！という雰囲気は間違いなく酒場のあの女性である。

酒場で見かけた時にも思ったが、今の彼女の立ち位置を憶測するに、やっぱりとんでもない人だったんだな。

ふうむ。関わらなくて良かったなあ。

今からそれは言えなくなる言葉であるので取り敢えず言っておいた。これで堪能したので後悔はしないでらう。

いやいやしかし。

違つてたら悪いかなあなんて気持ちが無きにしも非ずだからなあ。

気が引けるといえば気が引ける。

だけれど理不尽さ満載で事に取り掛かると決めただけであるの

で、このまま気が引けたまま引けすぎて引いてしまふなんて事にはなつてはならない。

見てみると彼女は明らかに構えていた。

取り敢えず、間違えていたら弁明したいだろうし一応、犯人だと思ひ込むことにしていますよと伝えがてら宣戦布告でもしようかな。

「お前かあああああああああ！！」  
と、叫んでみた。

勘違いであるなら困惑を浮かべてみたり弁明しようとしてみたりなど何らかのアクションがあるだろうと思つてのことである。

台詞のチヨイスは聊か間違えた気がしなくも無いけれど。

周囲に居る気絶したお邪魔キャラが文字通り非常に邪魔で戦いくさうであるが致し方なくこの場を戦場としよう。

感じられる魔力やらを総合してエドルクラスの威圧を感じるので手を抜いてしまえばあの世への片道切符は優先して配布されてしまふいそつである。

いや、決して手を抜かなければ相手にあの世への片道切符を提供できるといふわけでもない。

どちらかといえば、手を抜かなくても彼女より俺の方があの世への片道切符は入手できてしまうのではないだろうか。

彼女の周囲に居る他の鎧を着込んだ人々がまともに動ける状態ではないのは幸いであつた。

彼らを気にして彼女と戦うことになればもれなく俺はあの世へと引越してきていただろう。

それ程に彼女から感じる気配は強力なものである。

更に幸いな事がある。

彼女との距離はかなりある。

一般人であれば認識さえ出来ない程度の距離であるだろう。お互いを豆粒の形なのかと誤認してしまふような距離なのである。

彼女が構えた剣に魔力を込め始め、気がついた時既に俺は黄金色の何かに襲われていた。

「おっひいひいひいひい!!」

リンボーダンスマスターという称号があるなら間違いない俺のものだ。

仰け反る形になって辛うじての回避。

前髪が少し焦げてしまった。

「洒落にならんコレ」

明らかに触らぬ神に触った弊害ですな。

ううむ。俺の勘は冴えていたらしい。

それにしても厄介である。

彼女の行使してきた攻撃方法は見たところ熱を拡散しないように凝縮した何かであるようだ。

イメージとしてはビームサーベルが適当なのではないだろうか。兎に角よく切れる。

コレを見る限り、崖を切断したのは彼女なのだろう。

前髪の断面が崖と同じ様にこげているわけだし。

これで勘違いかもと疑い始めるのならお人よしにも程があるし、そんな考えを抱くつもりなら犯人探しなど初めからするなと説教しなくなる。

それで、問題は切れ味でないところがミソである。

明らかに射程がおかしい。

彼女のあの位置から少なくとも俺の背後の崖を両断できるほどの射程である。

最早無限と称してもあまり差し支えない程度である。

「厄介すぎるよなあ」

つつか、最早チートだろうと思うよ。

射程が相手以上であるということはやりたい放題がリスク無しで文字通りやりたい放題にやりたい放題な事が出来るのである。

射程が広いのは相当デカイな。

この様な場面になってしまうと、先ほどは喜んでいた彼女との距離は、忌々しい死の宣告にしか見えない。

俺は神の恩恵を受けているはずなのだが等と嘆いて悪態をつこう  
と思ったが、よく考えてみると、俺は神の恩恵である魔力は使い慣  
れていないので戦闘時になると自然と魔力を抑えてしまっているし、  
魔道書は使う気さらさら無いし、能力は現状役に立たないし直接的  
な攻撃系であるかは頷きかねる。  
うつむ。

これは持ち前の力で何とかしなくてはならない空気なのだろうか。  
そんな空気欲しくないのだけれど。

同じ空気でもこんな空気でなく自然にあふれた山の頂上で採集し  
た空気とかの方が身体にも良さそうだし欲しいな。

現時点で彼女に戦いを挑んだ事は間違いであることは悟っている。  
だが、もうどうしようもないのだ。

やっぱりやめよう、なんて切り出したいが、彼女の目は狩る者の  
目だ……。

ああ、正直に言おう。俺は非常に後悔しているよ。  
だが、俺が引き起こしたことだといってまあ間違いでないし、仕  
方が無いか。やるだけはやっておきたい。

死ぬ際に悔いがあったては溜まったものじゃない。  
彼女の振り切った手を見ると、再び構え、魔力がそれに握られる  
剣に込められていつている。

いや、剣自体に込めているのではなく、剣に　　というか、その  
辺りの空間に魔法をかけているのではないだろうか。

ここで、思いついた今となってはもつと早く思いつけや！と小1  
時間ほど問い詰めたくなる事なのであるが、もしかして、彼女が黄<sup>イトライン</sup>  
金色の断裂なのではないだろうか。

彼女の扱うビームサーベル的な火と風の複合魔法は黄金色に輝い  
ており、少なくとも先の攻撃は黄金色の線が走ったかと思うと断裂  
されていた。

つまりはそういう事なのではないだろうか。

関わってはいけない人物の筆頭、アリアリナ・ベヒス。

彼女のうわさを聞く限り、おしつこちびりそうである。

触れられた部分は本当に吹き飛ぶのだろうか。

そうであるなら、彼女が異常に頑丈なのかそれとも異常に攻撃力が高いかの何れかなのではないだろうか。

どちらにせよ人外判定間違い無しの戦闘能力であるだろう。

アリアリナ・ベヒスとはそういう人物なのであるのだと思う。

出来ることなら俺の勘違いであって欲しい。

だが、油断は大敵なので、彼女がアリアリナ・ベヒスであるという前提で戦うことにしよう。

がちり、と頭の中でスイッチを入れた音が聞こえた。

第十一話 - 黄金色は死の色 - (前書き)

感想以外の案件、こうして欲しいという要望や修正した方が良くないかと言った助言を送ろうと思っただけどわざわざ感想を書いて送るのが面倒だなや、感想なのに苦情とか助言とかを送っていかわからんなあ、という方は活動報告の方にそういったものを設置しますのでそこにコメントとして記入していただければ幸いです。無論、感想としてそういったものを送っていただいても幸いです。

## 第十一話 - 黄金色は死の色 -

彼女が二週目の黄金色の線を振り回そうとしているので、俺はそれが大凡5度動く間に距離を詰め肉薄した。

彼女が息を呑む音が聞こえたが、よくある漫画とは違い、隙を見せるのではなく息を呑んだ音を放ちつつ反射で攻撃してきていたので余裕はあまり無い。

俺はその不意打ちに近い反射での攻撃をしゃがむ事で回避し、瞬時に体勢を整え左腕を振り上げ、振り下ろす。

「形状実装<sup>リフト</sup>」

俺のその一言で俺のそれは無意味で無いことが証明される。

「ッー！」

と、声にならなかつたが掛け声を上げようとしてつつ岩を切り抜いたかのような無骨な岩の剣を振り下ろす。

が、彼女には当たらず、変わりに地面が粉碎の運命を辿った。

岩の剣は地面にめり込み、その分周囲が押し広げられる。つまりは、小規模で無骨なクレーターの様なものを作り上げ、代償として岩の剣は粉々になった。

エモノが唐突に現れて焦っていた様だが、粉々になってしまったのでしめた、と思ったのか彼女は腕を振りかぶる。

体勢的にこのまま回避行動を行っても回避しきれないだろう。

足の一、二本をパージする羽目になりそうである。

そうなれば、俺のチキンハートはショックにより血液循環の役目を放棄してしまいそうである。

そんな必要が無く、寧ろ無い方が良い自信が俺にはあった。

が、俺は期待を裏切る男である。いや、初めてそう自負したけれど。

そのまま右手を振り上げる。

「形状実装<sup>リフト</sup>」

右手には先程砕けた岩の剣と酷似しているが決して同じものではない岩の剣が握られている。

捉えたかと思っただが彼女を見ると残念な事に回避してのけていたいや、まあ俺が捉えられなかっただけマシかもしれないけれど。一発くらったら消し飛べるからなあ。

絶賛ばらばら殺人勃発である。

少々筋肉的に無理が出そうな動作を行ったせいか否かはわからないが、少し右手が痛んだ。

痛みのでいで握力が緩み、勢いに任せて右手に収められていた岩の剣はそのまま飛んでいく。

「つく!？」

それがどうやら無駄ではなく、その延長線上に彼女はいたので少々無理な体勢を取らせることに成功した。

チャンスじゃんよ。マジで。

そのまま俺は追撃を行う為に、振り上げた右手は無視して先程使ったがクールタイムを消化し終えた左手を横に薙ぐ。

「形状実装」

その左手にはまた岩の剣が握られている。

捉えた、と確信できる軌道と位置である。

俺は腕を振り切ったが、彼女を迎撃する事は叶わなかった。

「それ、強すぎるだろ」

「貴方規格外では無いですよ」

俺の言葉に、返答とばかりに冗談を含める余裕が彼女にはあるらしい。

それもその筈だ。

彼女の黄金色の線は、別段、線という形に囚われる訳ではなく、その証明として、今、俺の岩の剣を防ぐ位置に黄金色の楕円形の厚さの無い盾が滞空している。御蔭さまで、それに接触した岩の剣は蒸発してしまった。

彼女の黄金色のそれは変幻自在、縦横無尽なのだろうか。

少なくとも変幻自在であるような気がしてならないし。縦横無尽であるかは遠隔操作ができるか否かで変わってくる。

どちらにしても厄介であることに変わりはない。

黄金色のそれは、熱を収束させたようなものだ。

誰でもできるだろうが、彼女のそれは錬度故に誰でも出来るものではなくなっている。

一般人がやれば 例えば彼女の奥で撤退を試みている奴等の中で最も実力があるものでも熱は同等まで高められるが、それを振るう前に熱で身体が燃えるか溶ける事になるはずだ。

つまり、黄金色のそれを再現するには、魔法精度、魔力精度共に絶対的に不足しているのである。

ただの熱であるので対処法は幾らか思いつく訳だが、それを実行できるかと聞かれると幾分か選択肢は選択肢として機能しない。

ゲームの選択肢で通常は白色文字で表記される所を灰色文字で表記され、カーソルを合わせようが関係なく反応をしてしてくれない選択肢ではなく項目と化したあれである。

そういう訳で情けない事に大半の選択肢が消滅してしまっている。主な理由は、選択肢の大半が扱えないが存在するであろう魔法の使用が必須であるものだからだ。

魔法書を使用すれば話は変わるだろうが、格好から想像できる交友関係を考えれば魔法書を使用するどころか展開さえしている所を見せたくない。

と、なると俺の技術でどうにかするか、能力でどうにかするか、使える範囲の魔法でどうにかするか、の三つくらいに絞れてしまう。

いや、細分化すればその三つの選択肢はもっと増えるけれども。今はその問題ではない。

まず、この中で一番選んで問題がなさそうなのは、使用できる魔法でどうにかするものだが、生憎と使用回数が絶対的に少ないので失敗するかもしれない。

次に、俺の技術でどうにかする、だが、身体がブランク以前と比

較すると別の人間というか、別の生物の身体を使用していると表現しても問題無いほどに自由自在には操作できない。

あまりの不自由さに身体が反抗期に突入したのかと考えたが、日常生活はそうでもない訳だしそういう訳ではなさそうだった。

最後の選択肢である能力でどうにかする。手持ちに岩があるのだが、全て溶かされてついでにそのまま勢いに乗って俺も溶かされてしまっただろう。

俺は別段気化したい程自由というか文字通り枠に捕らわれない生き方をしたい訳では無かったのでそれは丁重にお断りさせていただきたい。

おお。

残った選択肢全てが選択肢と呼べる代物じゃあなかった。

いやいや、八方塞がりとはこの事だろうか。

……一応、魔道書使えば何とかなるだろうかなあ。

逃げるという選択肢も無きにもあらずなのだけれど、ケンカの原因は俺じゃあないけれど彼女は更に原因から遠い存在だろうかからなあ。

元々は岩が飛んできたのが悪いのだ。いや、確かに彼女は俺の拠点を変わり果てた姿に変えて見せたけれど。

うん、思いたしたら怒りが込み上げてきた。

墮落から少なくとも少しの時間は脱出出来る機会を与えてくれたからそれに感謝しなくもないけれど、大切なものを破壊された俺の気持ちもあるってもんだ。

そう考えている間は隙となる訳で彼女がそれを見逃すはずもなかった。

「ほいほいっと」

何度も俺の身体すれすれに、時には服の一部を切り裂くんじゃないかという具合に寧ろ何故当たって無いんだ？ 偶然か？ ぐらいに回避に努める。

騎士たちが撤退した途端に攻撃が激しくなったのだが、撤退しよ

うとしていた騎士たちを気遣っていたのだろうか。

それで今まで本気を出していなかったのだろうか。

「お前、本気じゃなかったのか」

と、言うのと耳に届いたのか、口の端を釣り上げて見せてきた。

俺が焦つてるとでも思ったから故の余裕の笑みなのだろうか。

ならば、少し試合という名の死合いには合わないが語るとしよう。

「そういえば、俺って実害の無い他人を巻き込むのって嫌いなんだよなあ」

首を横断しようとする黄金色の線が通るが辛うじてかわしつつそう話しかけてみる。

これで返事が無ければ死合い中に一人で話している阿呆で頭のおかしい奴って認定になってしまいかねない事に発してから気がついた。

うげえ。

俺はそんな認定になりたくないぞ。

話かけているのであって一人で話していないし、阿呆かは何とも言えないけれど、頭はおかしくなくいつもりだ。それが、事実上認められないのである。

たまつたもんじゃあない。

「……何を言いたいのですか」

おおおおお！

返答が来た！ 俺の杞憂は無駄であった！ 幸いだ！ ありがた

やありがたや、なむなむ！

「いや、まあだから、それはお前の後ろにいた今は撤退していない騎士も例外ではなくその枠に収まるって事だ」

「……本気でなかったと言いたいのですか？」

と眉間に皺を寄せている。信じていない、というよりも信じられないはずが無いと言ったところか。

「お前、その戦い方を修得してから負けた事無いだろ？」

「……勝てる可能性のある人物に限られていますからね」

まあ、そうだろうなあ。

俺も今みたいに怒りにまかせて戦闘を勃発させてしまわない限り慌てふためいて逃げるな。

逃げるのが無理ならあらゆる汁を漏らしてでも土下座をしてでも戦闘を避ける相手だろう。

ビームサーベルで蒸発死って安易に想像できそうで寧ろ恐怖を巻んじるからなあ。

うっむ。

勝てる相手が限られているなんて自信満々って訳でもなさそうで寧ろ淡々と事実を述べているような素振りで言ってるのけるって俺の予想当たっちゃったかなあ。

いや、予想が当たっても当たらなくても彼女の实力は変わらないけれど。

気持ちの問題って事だ。

「お前つてもしかして黄金色の断裂ライトラインって呼ばれていたり……しないよな？」

おお。俺の恐る恐る、といった素振りを見て彼女から感じる余裕が増した気がする。

ああ、答えを聞かなくても想像できてしまった。

「私が黄金色の断裂ライトラインです」

あー、やっぱりかー。一応、それだと想定して戦っていたけどテンション下がるわ。

勝てる気がしないからな。

肩に接触して相手の肩爆発とか意味分からん噂を思い出す。

まあ、何にしても。

「黄金色の断裂ライトラインってだけで強者とは限らない。まあ、可能だったらそれを証明してやるよ」

黄金色の断裂と聞いても怯まない様子を見て少々余裕が薄まったようだが、その分癪に障ったのか怒気の様なものを感じる。

俺は黄金色の断裂ライトラインの攻撃を読み回避を続けるが疲労は着実に蓄積

されるのでずっとこのままという訳にはいかない。

「リフト形状実装」

ビームサーベルが頭の上を通り過ぎた所で岩の剣を右手に握り脇腹を狙って横薙ぎする。

が、脇腹に命中する寸前で黄金色の盾が出現し岩の剣を気化させた。

ああ、中々単純な攻略法が有るようだ。

黄金色のあれはやはり自動動作という訳ではなく任意動作であるらしい。

と、なるとそれ以上でいけば良いというだけである。

「んー、こう言ったら軽く聞こえるかもしれないけど敢えて言うよ

」

「っはあー！」

返事さえせずにビームサーベルが俺の横を通り過ぎる。

周囲の地形は結構変ってしまったているなあ。自然に悪い事をしたと無闇な罪悪感が込み上げてきたが、全てをライトライン黄金色の断裂のせいだから、と思ってやり過ぎす事にしよう。

「今から本気出すわ」

思うように身体が動いてくれないという反抗期なので限界はあるけれども。

とりあえず、全力で は、今の状態だと手を痛めそうだから最速程度にしておくでしょう。寧ろそれぐらいはやらないと絶賛死ぬる。

最終手段に全力は残しておく。

全力と本気はまた別物なのである。

「リフト形状実装」

「っな!？」

と、驚いている間に腕に魔力を練り込みつつナイフと表現して問題無い程度の小型の岩の剣で攻撃を5度程繰り出してみたが、見た目は軽鎧といった雰囲気なのだけれど、なかなかどうして結構な防

御力が有り、要所要所を堅実に守っている。

攻撃を繰り出すと、寧ろ岩の剣が砕けてしまった。

岩の剣で殴りつけるとよくて五度で耐久値は底をついて崩壊するらしい。

うつむ。やはりこの干からびた様な岩は耐久値があまりよろしくないらしい。

が、衝撃により黄金色の断ライトライオン裂は高度でいうと20メートル程まで浮き上がった。

通常ならこのまま飛び上がって追撃をかますのだろうが、俺は飛び上がるとそのままバッドエンドを迎えて意識は永遠に闇をさ迷う事になりかねないので飛び上がる事は出来なかった。

手元に岩しかないので弓矢を作成する事も叶わないので普通に攻撃する事にした。

手に負荷がかかるからやりたくないのだけれどそんな事を言っていられる相手ではないくらい理解している。

そろそろ在庫の無い岩の剣を総動員とは言わないが大半を取りだして先程と同じ様に岩の剣を作成する。

「形状実装リフト」

形状は同じで、何の飾り毛も無い無骨でそこいらに落ちている岩かと思うような造りである。

違う所は唯一つ。大きさである。

宙を舞っている黄金色の断ライトライオン裂に届く程の射程を持ち合わせたそれは、見た目通り重い。

車の下敷きになった時を思い出しかねない程の重さである。

両手で持ち上げるそれはその重さを遺憾なく発揮して支える両手を萎靡しなっている。

いやはや、役割だから仕方ないだろう受けけれど岩の重さが重力が自重おもしくないかなあ、と思わなくもない。

いや、本当は切実に思うよ！

両手の筋肉がかなり膨張しているのが分かる。

多分、今針を刺したら破裂音とともに俺の筋肉は縮んでいくんじゃないだろうかと意味の無い心配をしまいそうなほど両手が無茶をしている。

俺の筋肉が風船なら既に萎んで梅干しみたいになってしまっているだろう。

巨大な岩の剣を速度を落とさず瞬間的に持ち上げた所で両手が休暇を申請してきた。

うむうむ。

ここまで頑張ってくれたのなら吝かでは無い。

「よっこーいせー」

と自分で言っただが相当気の抜けた掛け声と共にそれを<sup>ライト</sup>黄金色の断裂へ向けて振り下ろした。

「やったか！」なんて発言して倒せてませんよフラグなど立てる愚行はせずに舞い上がった砂煙のせいで姿が見えないのでそのまま静観に努めてみる。

「っー！」

前触れも無く 一応、砂煙が動くという前触れがあったけれど殆ど気がつかないので予兆があったよなんて意見は却下しつつ巨大な岩の剣は放り投げてビームサーベルを回避する。

ビームサーベルの御蔭なのはわからないが、砂煙が晴れたので<sup>ライトライン</sup>黄金色の断裂の姿を確認する事が出来た。

砂煙が明けて、別段姿が見えなくて驚いた、という訳ではなく普通に剣を構えていた。

着込んでいた鎧の大半は砕けていた。

振り下ろした岩の剣に使用した大質量の岩達も報われるというものだ。

そろそろダメージが問題のある程度まで蓄積したのかビームサーベルでは無く、普通に剣できりかかってきた。

おおっ。

見た目通りだけれどかなり剣が出来るなこいつ。

なんて思いながらバックステップを持ってして初撃は回避する。  
「リイト形状実装」

その回避時間でナイフ型の岩を作成し、剣を受け流した。  
中々の剣速と剣筋だけれど俺の見てきた人達程じゃあない。  
生憎とこのレベル以上の剣を見慣れている。

見慣れていなかったら今頃ミンチにされて絶賛ハンバーグへと転生できそうであっただろうなあ。

ミンチもハンバーグも身体を張って再現したくは無かったので幸いである。

ライトライズン 黄金色の断裂は迫る剣戟を逸らす俺の動作を見て驚いた様子であったが、死合いという死合いが始まった今となってはそれは命取りである。

ライトライズン 黄金色の断裂は戦闘の経験はあれど死合いの経験は無いらしい。  
うつむ。

よく考えてみれば死合いを知らないのにここまでやってのけてしまっただけで、もう彼女を俺に紹介しようとしたエドルは何を考えていたのだろうか。

何だ？ 俺に死んでほしいのだろうか。

まあ、死んで当然というか死んでいるのかという人間が俺だから良いのだけれど。

さっきまで腐っていたし、文字通り腐る日もそう遠くないんじゃないかと考えてなくもないし。

まあでも俺はブランクを解消したい訳だから死合いの経験が有ろうとなかろうと兎に角強い相手がいれば良かったのでエドルの判断は間違っただけであってはいなかった。

問題は俺が訓練の事故で死んでしまいかねないという事か。

死因は蒸発死って所だろうか。

うつむ。

死体が残らない＝ゴミが残らない＝散らばって汚れないという考えを持ってすればエドルの判断には大いに頷くのだけれど。

剣戟を捌きつつちよつとした反撃をくり返していると彼女のリズムというか攻撃速度というか反応速度とでも良いのだろうか、兎に角幾ら以上は反応できないなどがわかってきた。

そうとなれば命は使う為にあると考える愚か者である俺は今までの様に岩の剣と言ったあの黄金色の盾に触れて蒸発して問題の無いものでのみ攻撃していたが、調子に乗る。

剣を弾き、壊れて出来た鎧の隙間に足をねじ込むように彼女をけり上げる。

「っかは」

と、彼女は肺の空気を幾らか吐き出して吹き飛ぶ。

平然とやってのけたが、足が蒸発しないか非常に心配であった。

今回は先程の様に縦に舞って高度を上昇させる事は無く、横に舞って距離を強制的に稼いだ。

その距離が出来た事により体勢を立て直されれば元も子も無いので、彼女が地面に墜落するよりも早くに大凡俺程の背丈の岩の棒を作成する。

「リッド形状実装」

数発投げ、それよりも早く回り込み地面と平行に強制飛翔しているライトライオンの黄金色の断裂の鎧の隙間を殴り、反対方向へベクトル変換する前に拍車をかける為に後6撃程両拳を往復させておく。

ベクトルの変換が済んだ辺りで先程投げた岩の棒が彼女の鎧の隙間を縫うように激突する。

血が出ていない様だし、打撃音だけしか聞こえなかったのどうやら運よく骨に当たって突き刺さりはしなかったようである。

だが、骨にヒビが入っただろうからどちらにせよご愁傷さまである。なむなむ！

彼女はその攻撃方法から攻撃をあまり喰らわれないからなのかはわからないが、痛み慣れていないらしく既に叫び声を上げる気力さえ無いらしい。

攻撃を食らっても少し呻く程度である。

うーん。

何か久しぶりに動いて気がついたのだけれど、身体がブランクか何か知らないけれどうまく動かないって気分になるのは事実なのだが、その状態で何故か以前以上の動きが出来ている気がする。

いや、本気じゃないから以前の本気を超えているってことは無いけれど、予想よりも結果を出してくれる。

ううむ、何かきな臭い。きな臭いってこの使い方で合ってるのだろうか。

目の前を見てみるとライトライズ黄金色の断裂が倒れて動こうとしない。

「ああ、もしかしてやりすぎたかなあ」

正直、攻撃している最中でやり遂げた感を得て怒りは大分軽減されていたのでここまでやらなくても良かったのである。

様子を見る為に近づいてみせると最後の力が黄金色の線では無く砲撃の様なものが放たれ、俺の視界は黄金色でいっぱいになった。

イメージ的には山吹色が軸で構成された道着を使用している亀印が映える例の流派の奥義である気功砲と同じ様な形状である。

黄金色のそれが邪魔で見える事は叶わないが、彼女はやり遂げた気分であるだろう。

これはいくら何でも回避できるものではない。

俺はボロボロの彼女が浮かべているであろう口の端をつり上げて笑みを表現している情景を思い浮かべながら黄金色のそれを諦めて受け入れ

「わけないわ！」

いくら何でも死んでしまう！

誰も見ていない訳だしそろそろ本気じゃなくて全力と言うものを出すかなあ。

死ぬ事に問題は感じないのだけれど、エドルやユウトやフィニーアに恩を返せていない。

このまま恩を返せないなんてカスの仲間入りである。それは御免だ。

と、言う訳で俺は文字通り死んでも死にきれないという事を体現して見せよう。

「<sup>リイド</sup>形状実装」

岩で出来た両手剣を作成し、構える。

「<sup>フースト</sup>特性実装」

作成した剣に魔法による能力付加を行使する。

以前見かけた魔法武器というヤツである。付加能力は氷結・冷却能力。

刀身から冷気が発せられ、それに接触した黄金色のそれと接触すると凄まじい水蒸気が発生した。

「いけるか？」

と、あまりの均衡具合にいけませんよフラグを立てる発言を漏らしてしまう。

ああ、フラグは忠実らしく良くない方向へ場が流れる。

手に持つ剣が冷気と熱気の両方に襲われ罅が入ってきている。このままでは明らかに黄金色のそれを防ぎきる前に剣が砕け、俺は蒸発死してしまうだろう。

背に腹は代えられないな。

「<sup>リイド</sup>形状実装」

自身の鉄分と大気中の炭素やストックの岩を総動員して手に持つ剣の形状を変化させる。

手に握られる両手剣は、先程までの岩を切り抜いた無骨な剣の形をした何かの様なものではなく、ちゃんとした鉄で出来ていた。

見る限りは耐久値が格段に上昇している。

これならば耐えきれぬだろう。ギリギリだが。

俺は別段少年漫画に出演するつもりは無いので、うおおおおおおお、とか、おおおおおおお、といった掛け声は発する事無く、寧ろ無言でそれに耐えきった。

よくやった自分！

危うく命日だったよ自覚しろ自分！

何とか俺は五体満足で死合いを終えたらしい。

力尽きて意識を失っている黄金色ライトラインの断裂を視認して俺はようやく死から解放された事を実感した。

これから彼女が目覚めたときにどう対処しようかと悩む訳だが、今は生を堪能しようとしよう。

とりあえず、逃げても彼女なら俺を見つけて出すだろうし、取り敢えず駄目元で交渉紛いの事でもして何とか許してもらえるようにしよう。

彼女は別段悪人でも俺みたいな罪人でも無さそうだし理解してくれるだろう。

多分。

第十一話 - 黄金色は死の色 - (後書き)

更新速度は遅いですが、もうひとつ作品を投稿させていただいていますので良ければそちらも宜しくお願いいたします。

そちらの方がチートな作品になるんじゃないかなあ、と思っています。す。

第十二話 - 触る神に祟りはあるのだろうか - (前書き)

あり得ない位に話に展開が見られません。  
反省しています

## 第十二話 - 触る神に祟りはあるのだろうか -

俺はどういう訳だか済し崩し的にとでも言おうか、兎に角避けられない運命的な何かが入り込んだとしたか思えない程の経緯を辿って恐らく、人間だと最強に位置するのではないかと勝手にランキングさせている一人と奮闘する羽目になった訳だ。

予想外というか、相性的に当然というか、俺はほぼ無傷と言える状態であるので実感はあまりわかない。

いや、そう思うのはそれだけではないだろう。

ここへと来た当初はやはり内心混乱していたのか、気がつかないが、どうも俺の身体が思うように動かない。

最初はブランクなのではないだろうかと思っただが、よくよく考えてみると出身世界にいた時とは別の違和感を身体に感じる。

これは一体全体何なのだろうか。

神が何か仕込んだという線が濃厚なのではないだろうかと疑ってかかっている。

俺の中での神の信頼度は底辺と表現するのはまだ甘い。最早奈落の底まで失墜している。

元々、俺は神など信じてはいないのでそれ程信頼度は高くは無かったのだけれども。

神に貰ったナイフは即行壊れて いや、これは身体が上手く動かない程度で力量を落とした俺の落ち度かもしれないが 貰った魔道書型のおそらく神器は、周囲の思想的に使用そのものが迂闊に出来ない。

貰った服もあまり人と接していない今は露見していないが、世界観を無視した迷彩服である。

簡単に言えばサバゲをやっている人々や陸上自衛隊が着ていそうなあれである。靴も軍用ブーツという徹底ぶりの世界観無視である。あまり数を見ていないから断言はできないが、この世界の住民は

昔のRPGゲームによくいるような魔法使いのローブやら鎧姿　こ  
ちらは軽鎧やら騎士甲冑などバリエーションが豊富である　やら  
村人AとかBとか名乗れそうで、村の入り口で「ここは　の街だ  
よ」なんていう定型文のみしか話さない人物が装備している様なシ  
ンプル・イズ・ザ・ベストを追求した様な服装が多いのだ。

もちろん、これで服装の全てを語りつくせた訳ではないが、概ね  
こんなもんである。

つまり、この世界の住人からすれば俺はどう考えても変な恰好し  
た変質者なのである。この年で不審者認定は少々応えるものがある。  
そんなこんなで空振りにも程が有るといふ具合にミステイクなも  
のばかりを渡してきた神に信頼感を抱く等到底無理な話なのである。  
そんな訳だから、神は俺に恩恵を与えたと聞かずとも伝わってく  
るような面を浮かべながら俺に何かやらかしたんだらうと思う。

うつむ。  
良く考えてみれば、三年ほど前には勇者が召喚されていたのに俺  
を送り込むというポカもしてのけている。

俺としては今以上に自堕落で無意味な生活を送る所であったら  
うからそれをあまりポカと表現する気にはなれないが、兎に角俺が  
知る限り神の独断で行った事に対して良い結果を招いたのは正直存  
在しない。

強いて言えば俺が世界移動をして喜んだ事と能力付加程度だらう  
か。

能力の内容は俺が考えたのでカウントするかは危うい所だけれど。  
どう考えても俺はイレギュラーで不必要な存在なのである。これ  
をきつと蛇足と言うのだ。

まあ、過ぎた事をぐだぐだと考えても仕方が無い。

少々思考のループが始まっている訳だし、閑話休題しておこう。

兎に角、ライトライン黄金色の断裂に勝利し、彼女は現状意識を失っていると  
はいえ目覚め次第戦闘再開、なんて自体に発展しない事も無い。

とりあえず、融解しなかった岩の回収と、そこいらで死屍累々を

体現している山賊らしき男達の死体の身ぐるみを剥いておこう。

ゲームとは違い、破損しない限りドロップ率100%であるのが現実だ。

手に取ってみてわかったが、男達の装備はどれも品質が良くない。よくこの装備である騎士の集団と相対する気になったものだ。

俺ならば間違いなく尻尾を巻いて逃げています。誇れることではないけれど。

何らかの戦闘技術があるなら話は別だろうが、残っている部分の筋肉やら骨格を見る限りはそういった技術を持ったやつは皆無であるとわかった。

うん、多分こんなワイルドな集団に入るには無謀さが必要なのだろう。

なら俺は入れないだろうなあ、等と思いつつ死体の装備品を回収する。

先程の戦闘で作成したやたらデカイ岩の剣を筆頭に幾つかは無事であったのでそれも回収する。

残念ながら最後に作成した一番まともそうなあの剣は<sup>ライトライ</sup>黄金色の断裂の攻撃を防いだ結果、耐久値が無くなり霧散してしまったので回収は叶わなかった。

とりあえず、後で死体から剥ぎ取った服で世界観をブチ壊さない服でも作っておきたい所だ。

武装に関しては剥ぎ取ったナイフやらが多数残存していたので当面は困らないだろう。

粗悪品なので耐久値が低く、俺の乱雑な扱いだとすぐにつぶれてしまっだろうが。

さて、<sup>ライトライ</sup>黄金色の断裂は力を使い切ったからなのか感じる気配が小さくなっているので、おそらく眼が覚めても当分はまともに戦えないのではないだろうか。

少なくとも、先ほどよりかは力を発揮できないはずである。

ならば、偉いさんである<sup>ライトライ</sup>黄金色の断裂を伸ばしてしまった俺が指名

手配になるといふ事態は避けたいために眼が覚めるまでここで待機しておくしかないだろう。

ライトライン  
黄金色の断裂には交渉の余地があると俺は踏んでいる。

戦闘中でも返答はしてくれたので、少なくとも端から俺の話の聞かないなんて早計な事をする人物ではないということである。

ああ、だけれど俺の剥ぎ取りというなの追い剥ぎを見て憤怒しそ  
うだなあ。

彼女は戦争で戦ってばかりで混戦での汚さや冷酷さをしらなさそ  
うだからだ。

まあ、偏見かもしれないけれども可能性は無くは無いやな。

あそこまで戦闘能力を得るまでも戦争に参加していたなら話は別  
だろうけれども、仲間を案じてかまあ、彼女の場合は巻き込んでし  
まいそうという理由で案じているのだろうが、自分一人を残して他  
を撤退させ戦うなんて事をやってしまっうんじゃあ、汚さなんて知ら  
ないんじゃないかと思える。

少なくとも俺が追い剥ぎしたと確定的になりそうな自体は避けて  
おいた方が良いかもしくない。

俺は意識の無い黄金色の断裂を背負って街へと向かって歩を進め  
た。

「ふうむ。あまり重くなくて楽でいいな」

彼女の背丈は150後半から160cm程である。そこそこの重  
量があるかと思っただが、見た目以上に軽い。

鎧を着込んでその下に服を着ているので厳密にはわからないが、  
背負った感触的にあまり筋肉は無いようで、体系はやせ気味である。  
それを鑑みればこの軽さも頷けるといふものである。

どうやら、彼女は主にあの極悪なビームサーベル的な魔法で戦う  
からなのか筋肉は予想以上に少ない。

おそらく、撤退していったどの騎士よりも非力だろう。

もしかしたら、騎士になった事どころか、剣を握ったのでさえあ  
の魔法を覚えてからかもしれない。

そうなるなら、尚更追い剥ぎがばれないようにしなければならな  
いかもしれないな。

ああ、それなら目覚めて直ぐに襲いかかってくるって事も可能性  
としては低いかもしれないなあ。

や、安心も油断もしないし出来ないけれど。

見た感じすぐには目覚めなさそうだから振動が彼女に伝わらない  
ように静かに、そして撤退した騎士達に見つからないように隠密に  
向かうとしよう。

安い宿を知っていればいいのだけれど、残念ながら街中で知って  
いる店は殆どない。

墮落洞窟の準備として 修行の準備として買い出しに行った時  
にお世話になった店ぐらいである。

ああ、そういえば候補が無くは無い、か。

「……で、ここしか心当たりがなかったと」

「サーセン」

俺のレパトリーの中にはあの酒場しか無かったのである。

扉を開けた時はにこやかな顔を作っているだろうが、腐ついで殴  
り合いをした後かと思えるような顔になっていたが、それを向けて  
きた。

正直、膀胱がプールされた液体を放出しようとして仕方がなかつ  
たが、マスターと顔を合わせるの二度目であるので心構えの御蔭  
で耐えきれた。

初回にあの笑みを見ていると俺の膀胱は機能維持を放棄しただろ  
う。

背中で意識不明からチェンジして寝息を立てる穏やかな状態へと  
移行した<sup>ライトライン</sup>黄金色の断裂には見せられないのは確かである。

彼女なら悲鳴を上げてしまうのではないだろうか。

そんなイメージである。

「……悪かったな。顔は生まれつきだ」

どうやら俺の膀胱のステータスは顔を媒体として表していたらしい。

うつむ、それなら悪かった。

「お前なあ……」

と、ため息を吐くマスター。一体どうしたというのだろうか。

俺はどうやら膀胱のステータスが顔に出ていたと勘違いされたか  
と思い、その誤解を正す為に行動に移しただけだ。

解決方法とは、至極簡単である。

マスターにはお世話になるかもしれないのでマスターを立てただけだ。

つまり、膀胱のステータスを顔で表してみた。

先程の思わず漏れたステータスの一端を全開にしたので、どう考えても先程よりも酷い顔になっているに違いないのである。

鏡を見ていないので何とも言えないけれど、体感的に当社比30%アップと言った所だろう。

厳密にはこれの4倍は表現したかったのだが、残念ながらそれを表現するには人間を辞めざるをえないようである。

つまり、人間の表情筋には限界があるという事だ。

あまりにも普段動かさない形状に表情筋を蠢かせて酷使したので  
もしかすると明日、表情筋が筋肉痛になっているかもしれないな。

そうなたら顔を動かすたびに痛みが巻き起こって食事もままならないだろうなあ。

閑話休題。

「まあ、奥の部屋を使うが良いさ……」

繁盛する昼時を超えているからか、客は少ないので問題は無いが、  
マスターは肩を落として、文字通りパージして落としたのかと勘違いするぐらいに肩のV座標を下へと下げ酒場がどれ程盛り上がるかと、  
唐突におやしギヤグをブチかますぐらいの勢いで空気を塗り替

えていた。

暗い空気に。

何か問題でも起きたのだろうか。あの様子を見るからに非常に大問題でありそうだ。

何か頼まれたら協力してやることも吝かではないとしか考えられない様な様子であった。

カウンター奥の扉を開けると、酒場の概観に合わない程度に廊下が続いていた。

奥行きはかなりあり、高さは特筆して語る程おかしい部分は無く、横幅は、俺二人分ぐらいだろうか。

左右にはそこそこの数の扉が見られ、最奥にも扉が見られた。

あの部屋が目的地だろう。

妙にボロくて開けると軋んだ音が聞こえる扉を蹴り飛ばす要領で開け放ち入室した。

部屋の内部には学習机二つ分程の大きさの机が一つと、エドルでもねっ転がれそうな大きなベッドが二つあり、窓が一つあった。

ふむふむ。

つまり、ライトライン黄金色の断裂に追い剥ぎがばれて激怒したり、目覚めて襲いかかってきたらあの窓が生命線という訳か。

一階であるのであの窓という名の非常口は俺でも使用可能なのである。

最悪、木造なので壁を度外視して直進するけれど。

木ぐらいなら貫通して進める気がする。

ライトライン黄金色の断裂相手では距離などあまり関係ない問題なので何れにせよ攻撃を受けそうであるけれど。

と、余計な事を考えるのを止め、彼女をベッドの上に下ろした。寝違えそうであったので鎧は外しておく。

この寝姿を見る限りはあの極悪な魔法を繰り出して襲いかかってくるなんて思いもしないなあ。

筋肉もそれ程ついていないし、まさしく乙女の様相である。

……目覚める気配がないので相当暇である。

別段やらなくても良いが又は、今すぐやらなくても良いだろう事を済ませておく事にしよう。

魔道書を展開する。

俺がつけた傷が残っていては彼女の御機嫌は斜めになってしまうかもしれないと考えたのである。

目立つ傷は無いのだが、戦闘の際に鎧の隙間に放った蹴りや岩の棒による襲撃やらがつもりにつもって結構痛むようになっていいる。今は眠っているので騒ぎはしないが、常人なら目や鼻から液体を漏らす程度には痛いのである。

戦闘の際に泣き叫ばなかった所か、それを思わせるような事を全くなかったのは称賛に値する。寧ろ値し過ぎて感心するよりも驚愕する程である。

魔力を練り、魔法を構築する。

その作業は魔道書の御蔭でももの数秒で終わり、それと同時に治療が終わる。

やはり、魔法とは凄まじいものだ。

俺がこの傷をいつも通り自己治療で完治させようと思えばおそらく3日ぐらいはかかる。

まあ、俺の防御力は一般人のそれと変わらないか、それ以下であるので成るべく攻撃を受けないように努めているので気にする所ではないのだけれど。

そもそも、あんな死闘で攻撃を食らおうものなら、イコール即死で結びつけられるレベルである。

なので、回復などする余裕は一切ないのである。

刃物や鈍器なら筋肉である程度防御できるだろうけれど、魔法っていつものはどうしようもないようにしか感じないのだ。

喰らう気にもなれない。

金をもらっても嫌である。

そもそも、相手が使用しているのを目撃した魔法が結構極悪なも

のしかなかったのが問題か、それとも俺は楽観視し過ぎていて、あの程度の魔法は普通って感じだったりするのだろうか。

前者なら回復の事考えるぐらいならさっさと反復横飛びでもして回避率上げると言いたくなり、後者なら諦めて死ね、もしくは反復横飛びでもしている、と言いたくなる。

どちらにしても回避に努めるべきは確定である。

防御は最後の手段で最悪の手段なのだ。

俺が防御行動を取ってもそれ程防御力も防御率も向上しないように感じるからなあ。

俺の防御なんてビームサーベルやらエドルの剛腕ぶるんぶるんソードを食らえば紙よりも柔らかくあっさりと爽快に、濡れに濡れた障子以上に破れ砕け死ぬのである。

うつむ。

考えれば考える程<sup>ライトライン</sup>黄金色の断裂は兎も角、エドルは人外の動きをするよなあ。

エドルって人間だったよなあ。

聞き間違いで、実は人間以外の種族でした、的な事は無いのだろうか。

これは予想なんだけど、多分マスターも結構人外の動きをすることを<sup>ライトライン</sup>思っただよぬ。

足運びや重心移動を見る限り常人のそれではない事はすぐにわかる。

どういう訳か人弾丸にはクリーンヒットして壁から身体を生やしていたが、何らかの達人クラスなんだと思うんだよな。

まあ、気にしても仕方ないか。

気にすべきは、エドルの知り合いはおっかない人しか居ないのかって疑問に思わざるを得ない人々の出演って所か。

マスターと<sup>ライトライン</sup>黄金色の断裂だけが、それだけで十分以上である。<sup>ライトライン</sup>黄金色の断裂の鎧も直しておこうかと思っただが、この鎧の品質に見合った素材が無かった為に断念した。

碌な品質の素材が手元にはないのである。

もつと良い装備をドロップしてほしいものだ。

それはもうゲームバランスなんて気にしない、と公言できるレベルの良い物を。

多分彼女の鎧は相当良い物だ。

魔法武器の様な感じで幾つかの魔法が施されている。

まず、錆びたり壊れたりしないように硬化・保持の魔法が施されている。

これにより、錆びたり等の物理干渉による状態異常とさえ良いのだろうか。品質が下がるといような事が発生しない。

これが保持である。

硬化は、文字通り頑丈にする為に固くしている。

それにより防御力は相当高い。

某RPGであるファイナルといいつつ幾つも出てシリーズ化しているあれで言うと、多分アダマンダイトとかオリハルコンで作成された防具以上の硬度である。

硬化自体にそれ程の効力は無いのだけれど施した人物が相当優秀だったらしい。

普通の鉄の鎧はほぼ最強防具に変貌したのである。

そこから鉄の鎧を購入して魔法を施して増殖し、転売すれば即行で億万長者になれそうだ。

他の防具売りから殺されそうだけど。

次は、魔法遮断効果である。

これは文字通り魔法を遮断する。

多分、補助魔法も弾いちやうから長所ばかりという訳ではないけれど。

その代わり、相手の攻撃魔法も大体は弾くから、短所よりも長所が目立つだろう。

かなり出来た代物である。

おお。

他人の鎧の考察というか説明をしている場合では無かった。取り敢えず、追い剥ぎした材料を使用して、この際総動員しても良い。

兎に角、この世界観をブチ壊す服装から脱却したいのである。

俺は切り裂かれた服を幾つか取りだす。

別段品質にこだわる訳ではないのでこれだけあれば事足りるだろう。

「<sup>リイド</sup>形状実装」

服の形状は今までの買い物やらここに来る際に見かけたものを覚えたりと準備は万端である。

俺の準備万端ぶりに見合った出来の服が完成した。

その形状を評してこの服に名前をつけよう。

村人A、これがこの服の名前である。

なんだか、茶色やら緑っぽいような色を主軸とした飾り気のない上着とズボンである。

おそらく、この国に来る途中で立ち寄った村の住人の服装以上に地味である。

下手したら迷彩服よりも迷彩効果を発揮しそうだと思っ。

早速着替えてポーズを取ってみる。

が、鏡が無いので確認は出来なかった。

まあ、問題ないだろ。

覗く足が異常にあるのでかなり恰好悪い丈の半ズボンになりかねない状況だが、この丈だとギリギリセーフだろう。

覗く足を見て思ったのだが、この世界は春夏秋冬なるモノはないのだろうか。

この世界に来てから暑くも無く寒くも無くである。

俺の体感温度がおかしくなった訳ではなく、証拠として少々あつ

た日焼けが 投獄されていたのに何故日焼けしているかは俺の脱

走頻度を慮ればすぐにわかるだろう 無くなって異常なまでに白

い肌になっている。

俺の肌ってこんなに白かったのか。

以前の世界では肌の色なんて気にも留めなかったからなあ。

というか、ファッション関連に全く興味を裂かなかったり。

だからこそ、この際どくヤバそうな半ズボンもどきを装着してもそのままでいられるのかもしれない。

ファッションデザイナーとかが俺を視界に入れると殴り飛ばしてしまうのかなあ、と無駄な事を考えてみる。

ファッションに無頓着な俺でもギリギリ許容する程度にヤバいのである。

迷彩服程世界観をブチ壊しはしないが、俺の心的状況と社会的立ち位置をブチ壊しかねないという諸刃の剣ならぬ諸刃の服である。

決して刃は装着されていないが、精神を一刀両断できる威力は秘めている。

以前の世界であれば間違いなく装着しなかっただろうな。

完全に無事だった山賊っぽい奴らの服が無かったのが悔やまれる。

いや、無時でも多分赤一色に染められていただろうから微妙だけれど。

あ、それって無時って言わないか。

赤く染色されていないつても含めて無事なら装着するけれどあれはそんなもんを生産できる程生産的な場面じゃあなかったなあ。

胴体部分と生き別れ者続出という事態だったので服の形状の保持は奇跡が起これば何とかなるだろうけれど、赤の染色は回避できないだろう。

特に下半身の装備品であるズボン。

そんな服を装着すれば色合的に異常に白い俺の肌が更に露見してしまう。

この色白具合と俺の顔を合わせれば漏れなく不審者に慣れる。

つまり、今は不審者に片足を突っ込んだ状態である。

突っ込んだ場所は不審者という名の底なし沼なのだ。

入れば戻れる保証は無く、戻れない保証は投げ売りのバーゲンセ

ール状態なのだ。

兎に角、無事俺は村人Aというか、肌の白い村人Aか不審者っぽい村人Aと呼称されても然るべきという格好になる事が出来た。

元々着ていた迷彩服は保管しておく。

捨てるなんてMOTTAI NA I。

小腹がすいたので何やら調達しに行こうと考えたがもうすぐ目覚めそうな雰囲気であったので断念する。

マスターに何やら恵んでもらおうと考えなくは無かったのだが、例の緑のトーストという形状だけでも恐怖であるのに、その見た目に相反し過ぎたトースト味でも緑色の何かの味でもないミートスパゲティ味と言う味としては申し分ないが、現れる場所を間違えたが故に恐怖しか与えないという不器用の体現と言えるあの料理に追隨した何か、又は同じものが出てきそうであったのでそんな提案を出した自分を殴り飛ばしたくなった。

もちろん、マスターの元へと行く事は断固拒否である。

まあ、もうすぐすやすやとお気楽に眠っているビームサーベルの悪魔はお目覚めである。

身だしなみを出来るだけ整え、彼女を不機嫌にさせないように悪あがきを試してみる。

どう考えてもファッションに興味など無い俺がどうにかこうにかしようと付け焼刃とさえ呼べない程拙いモノであるが致し方ないというものだ。

ビームサーベルの切れ味を試したくは無いので俺は非常に下で出従順なのである。

あと俺に出来る事と言えばおはようと笑顔を浮かべるばかりである。

決してマスターの様な殺さんばかりの笑顔は浮かべない様に注意しなければならぬ。

あれは生まれつきの問題かもしれないけれど。

### 第十三話 - 火の無い所に煙は立たないらしい -

「う……ん……」

ぐだぐだ無駄に何やら考える事5分程で黄金色の断裂は目覚める兆候を見せた。

俺はベッドの上に寝転がってだらけていたのだが、そんな調子を見せていると不快感を感じる人間もいるのですぐさま部屋に配置されていた机とセットじゃないかなと思うデザインの椅子を引き腰掛けた。

当然、だらけ具合は全く漏らさず背筋こそ伸ばしてはいないが学校の授業中に先生に何故か注目されている様な感じに姿勢を正した。とは言っても、俺は小学やら中学といった義務教育さえ放棄していたので想像で語るしかない例なのだけけれど。

彼女が瞼を重そうに持ち上げると空のように透き通った眼を確認することが出来た。

金髪の三つ編みに碧眼。

俺の元いた世界での環境というか、少々国際的であるようで鎖国的であった交友関係を考えてとどれ程輪廻転生を繰り返しても紛れ込みそうも無い組み合わせの特徴的な色素配分であった。

そんな、世間的にはどうかは知らないが、少なくとも個人的には珍しく思うその組み合わせを呆けた様に見つめていたおかげで声をかけるタイミングを逃してしまった。

先が思いやられるというものである。

すっかりしろよ、と自分に言いたくなる感じである。

「……」

てつきり俺が黙り込んでいることなど関係なく場面が変わり殺し合いをしていた相手が同室していたら何か突込みがあるのかと思っていたがどうもそうではないらしく、ライトライン黄金色の断裂は口を動かさなかつた。

ひよつとしたら沈黙が言葉代わりになるとか、俺が他者の心を読めるとかそんなことを考えているんじゃないだろうな。

前者は事実であったとしても俺は生憎と沈黙を読むことも聞く事も出来ないのである。

後者だというのであれば、いらぬ期待は焼却炉に放り込んでお払いのごとく消し去ってしまえと俺は言うだろう。

「……」

緊張しているから故の沈黙かと思ったが別段それらしい動作をしているわけではない。

いや、呼吸などの生命活動を除いて何も行っていないのでそれらしい動作所か、それらしくない動作さえ見て取れないのでそれに信憑性があるとは思えないのが問題である。

そんな精神的に圧迫されそうな攻撃的な沈黙に押し潰されそうになりはしないが余裕がなくなっていることに気がついた。

あのまま放置していたら思考が堂々巡りを起こして何の進展も見せずに時だけを浪費するという愚考をしでかしてしまう所であった。こういう時は深呼吸をすればいいと何処かで聞いたことがある。

正直、あまり効果は期待できないだろうと前々から思っていたが、人間とは藁をも縋る時がある。

例えば今のようにそれとなくピンチの時であったりなどである。

俺も例に漏れず深呼吸を行ってみる。

ただし、現実にいきなり深呼吸をしてみせると不審者扱いを受ける自信があったので心の中で深呼吸を行う。

エア深呼吸をも凌駕したエアつぶりである。

この世界ではいきなり深呼吸を始めるのは不審者扱いにはならず、寧ろ優遇されるなんて設定があるかもしれないが、少なくとも元いた世界では間違いなく不審者入りであり、下手をするとそのまま御用になりかねなかったと思うので謝礼を出すといわれても拒絶していただろう。

少なくとも心の中だけの動作であれば外観的には判る筈もないの

でこれ幸いと思う存分に深呼吸してみることにした。

大凡、0.5回程で飽きてしまったのですぐさま俺のエアっぷりはお蔵入りである。

そんなエアっぷりを本領発揮とばかりに誰知れずにやってのけていた俺である。

それまでは本当に余裕がなかったらしく、エア深呼吸を超えた存在の深呼吸をやってのけた後には周りを見る余裕を取り戻していた。  
黄金色ライトラインの断裂の目は俺の服 いや、丈のせいで非常にやばいズボンに目が言っている。

その注視具合を見ると、ギリギリセーフな丈かと思ったけれどギリギリアウトであったのかもしれない。

「ああ、このズボンね。ちょうど良い丈に作ったつもりだったんだけど上手くいかなかったんすよ」

上下共に良い具合のサイズに作成したつもりであったが、能力に不慣れなせいかよくわからない丈になったらしいのである。

正直、上下共に小さい。

いや、短いのか。

サイズ自体はちょうど良い具合のだが 少し大きめになってしまっているが許容範囲だろう 袖や裾の長さが許容範囲を超えた短さなのである。

服単体をぱつと見た時はそうでもなかったのだけれど。

「作る？ あまり時間は経過していないようですが、その時間に？  
貴方は創具者ライテストなのですか？」

創具者なるものがどういうものかはさっぱり分からないので曖昧に微笑んで誤魔化すことにした。

「短時間で出来ても精度がこれですからね」

はは、と苦笑を洩らさずを得ない俺である。

流石にこんな良く分からない袖と裾の服を作って何が嬉しいのか。俺は嬉しくは無い。かなり微妙であるからだ。

「そんな事ないですよ。実際は見えていないのでどれ程の速度かはわ

かりませんけれど、速度次第では精度を度外視して国の保護を受けられる様になります。現に、この国にも三人ほどいますし」  
ふむふむ。そうなのか。

それはそれで良いのだけれど、あまりにも話題に出無さ過ぎて失念していたのだが、彼女とは先程まで死闘を繰り広げていたのである。

俺はそれとなく打たれ弱いけれど図太さは相当であるので何も感じていなかったが、彼女はそうには見えない。

記憶が飛んで俺関連の全てを忘れていたとか、記憶の改竄が発生しているのではあるまいな。

「いえ、貴方からは殺気を感じませんのでそれで警戒を解いているのですよ」

と、彼女は俺の思考を先読みではなくリアルタイムで閲覧しているのかと疑わざるを得ない事をしでかして返答を發した。

「そつすかー」  
死闘になった事によって何らかのしこりが出来るかと思ったがそんな気配など皆無である。

いや、彼女はかなり無表情であるので断定はできないが、かすかに読みとれるそれによるとしこりはなさそうである。

ひとまずは安心しておこうと思う。

「申し訳ありません」

「……何？」

何故か前触れ無く彼女が頭を下げていた。

彼女の旋毛が見えて彼女の様な美人でも旋毛は旋毛だなあ、と訳の分からない事を考えていた所に襲いかかってきたので、俺の頭の中を循環していた訳のわからない事以上に異常に訳のわからない事が発生したので、更に俺の頭の中は思考さえ読みとれない具合に訳がわからなくなった。

辛うじて絞り出した台詞は気も何も利いたものではなく文字で表記すると一文字、厳密には二文字程度の発音であった。

俺はそれに対して自己嫌悪していたのだが、彼女はそんな事等気にしたそぶりも見せず話を続けた。

「貴方は何かに対して怒り、私はその理由も聞きもせずに攻撃を行いました。それとも理由は無かったのでしょうか？」

律義な女性である。

怒りと言えばあれか。家が潰れたやつか。

「ああ、あれね。 ライトライン 黄金色の断裂さんが切り崩した崖に俺の拠点がありましたね。それが忽然と消える怪奇現象がおきまして、その原因が貴女である疑いが有りました」

彼女の律義さなどを知った今となつては、断定できる状況で無かつたのに攻撃を行ったという行動は恥ずかしく思える。黒歴史というやつに登録しても良いのではないだろうか。不覚である。

「……それは、申し訳ありません」

絞り出すように言う彼女は泣く寸前という様な顔である。

辛うじて堪えているのだが瓦解するのは時間の問題である事は明白であると言えそうな顔である。

「いや、墮落しそうな所を助けていただいたのでこちらがお礼を言う所ですよ」

と、説明不足につき相手からすれば意味のわからない、気が狂ったのかと思われる様な言葉を取り合えず思いつくままに口に出してみるが焼け石に水にもならないと後にて気付く。

「そうですか。 えっと、敬語を使って貰わなくて結構ですよ？」

私のこれは癖の様なもので気にしないで頂けるとありがたいです」

「あ、そうです。 そうか？ ならそうさせてもらうよ ライトライ 黄金色の断裂さん」

何気にフレンドリーであるなあ。

非常に好感が持てる。心の中は五月蠅くて心の口を？ぎってしまえと叫びたい所であったが口が？がれるとその叫びも発せなくなる事に気が付き前言撤回する俺がいるが、他者から見た俺は無口の部

類に入る。

そんな俺と同等程度に無口である<sup>ライトライン</sup>黄金色の断裂とは何か共鳴でき  
そうな感じがしそうだ。

エドルとはまた違う雰囲気である。

いや、エドルは五月蠅いのだけれど。

「私の事は<sup>ライトライン</sup>黄金色の断裂なんて称号で呼んでいただけなくて結構で  
すよ？ <sup>ライトライン</sup>黄金色の断裂なんて大層な名前です。呼ばれていますけれどそ  
れに見合った内面とは思えませんし。それに<sup>ライトライン</sup>黄金色の断裂という称  
号は、私が戦闘の際に使用していた魔法が扱えれば得られる称号の  
様ですし、私専用と言う訳ではなさそうですから」

まあ、<sup>ライトライン</sup>黄金色の断裂って大層な名前には不釣り合いの様な雰囲気  
は感じる。

彼女は至って普通の女性であると感ずるのである。

いや、平均よりも好感を持てる女性である。無口で無表情である  
が、気を遣っているのはヒシヒシと伝わる。

「んじゃー、<sup>ライトライン</sup>黄金色の断裂って呼ばないわ。何て呼べばいい？」

「好きに呼んでもらって構いませんよ。ああ、私の名前は、アリ  
アリナ・ベヒスと言います」

なら何だろうなあ。アリアとかだと馴れ馴れしいだろうし、馴れ  
馴れしいのは好ましくない。

取り合えず普通に名字かなあ。

「んじゃ、ベヒスって呼ぶわ」

「はい。……私は貴方を何と呼べばいいですか？」

そういえば、お互いに名乗っていなかった。現状だと俺だけ名乗  
っていない。

不敬に当たるぞ！

「ああ、俺はナーク。宜しくな」

偽名であるのは謝罪したい所であったが、事情により憚られた。  
死ぬまでには自首したいものである。

「それでは、ナークさんと呼ばせてもらっても？」

「ん？ ああ、ナークって呼び捨てでも良いぐらいだ」

嘘つきの屑野郎って呼ばれても反論できない気持である。

「そうですか？ では、ナークと呼ばせてもらいますね」と一笑着みせる。

ベヒス嬢の笑みと言うか表情は初めて見たかもしれない。あ、いや、悲しそうな顔は俺の記憶から消してしまいたいのでカウントしないのである。兎に角、相当レアであるかもしれないので記憶に焼き付けておきましょう。

「それで、ナーク。壊してしまった拠点はどうしたらいいでしょうか。私一人だと崖の修復までかなりの時間がかかってしまいます…」

先の実みなど無かったと言えるぐらいに申し訳ないという雰囲気になる。

「先も言ったが、墮落から脱出する要因であったので寧ろ感謝しているのだけれど。」

「気にしないで良い。 どうせ不要どころか俺に害を与える快適を与えていたからなあ。それにベヒスの鎧を壊しちゃったからなあ」

「とは言ってみるが気が済まない、という気配がびんびんと伝わる。無言でありながら感情を伝える技術は驚嘆に値するというモノである。」

「鎧は国の支給品なので壊れようと私には関係ないのです」

「そうであったか。鎧は回を許してもらおう代わりに拠点を許そうかと思っただが彼女からしたら納得いかないのか。」

「ああ、そうだ。この際だ。正式に和解してしまおう。」

「ならば、友達になってくれよ。俺、あんまり友達いないからさ」この世界ならエドルぐらいで、前の世界だと皆無じゃないだろうか。

葬式をしても、雇わない限り仕切る人間さえいない。

そんな俺の台詞を聞いて目を見開いているベヒス嬢。

友達になりたくないって雰囲気は出してないけれど心配は心配

である。

俺の思いあがりという可能性は捨てきれないのである。

「それで、良いのですか？ 私の事怖くないのですか？」

怖い、とは。

もしかして、テンプレよろしく、ベヒス嬢の戦闘力に畏怖を抱いて化け物とか言った阿呆が居たんじゃないだろうな。

何はともあれ、何はともあれである。

「怖いつて感想が出てくる理由さえ掴めないなあ。つまり、怖いつて思う要因が皆無だな」

「私と戦つて怖いと感じなかつたのですか？ 殆どの方は私のあれを見て化け物と」

やはり、か。

俺はそんな事気にするタマじゃあないし、その程度で喚いていたら俺は以前の世界で生き抜けていなかつただろうな。

「それじゃあ、ベヒスに何の間違いか拮抗した俺も化け物つて訳だな。化け物は化け物を化け物と呼ばないさ。犯罪者が犯罪者を犯罪者と呼ばない様にな。だから俺がベヒスを化け物と怖がるつてのはあり得ないつて事だ」

例外として頭の悪い奴が頭の悪い奴に頭が悪いな、という事はある。

まあ、関係の無い話だ。

「つつー訳だ。ベヒスが嫌だつて思つてないなら強制的に友達になつてもらつかな。同類は凶らずして引き合つものだからな。どうせ同じなら早い方が良いだろう」

正直、知り合いが皆無と言える状態であれば寂しくて死んでしまふ様な気がする。

そんな理由と銘打つた下心が満載であるが。

寧ろ俺が俺と友達に 知り合いになつても良いのかい？と聞いてしまいたくなる。

「はい、私でよければお願いします」

うん。

やっぱりベヒス嬢は笑った方が良い。

笑ってるといふか表情が変わっているか微妙な感じであるがそう思う。

仲良くなれたのなら幸いである。

とりあえず、この機会に聞きたいことを聞いてしまっておこう。

「あの、さ。気分悪くしたら申し訳ないが、聞きたいことがある」

「気兼ねなく聞いてください」

即答である。俺は若干の躊躇をしつつ聞いたのだが、そんな俺が阿呆みたいである。

「じゃあ遠慮なく。 単刀直入に聞くけれど、噂は本当か？」

正直、心配である。

事実であつたなら肩と接触事故を起こさないように細心の注意を払わなければならないのである。

「噂とは？」

本人はご存知でないらしい。

いや、確かにそんな噂がもし事実であるなら、それを当人の前で言つと爆砕させられる物理的に。

「肩が当たつただけで相手が吹き飛んだとか酔つた勢いで皆を消したとか、さ」

若干躊躇しつつ又聞きの噂。

マスターが言う事なので事実だと思つただけけれど、裏づけは取っていない。

そんな程度のことを聞くのは失礼かと懸念したわけだが、残念ながら、肩と接触して吹き飛ぶといった洒落にならない話で、事実なら洒落にならない結果しか招かないその真偽を確かめる気になるのも仕方のないものなのである。

「そ、そんな事はないです！ 肩と接触してもせいぜい相手が尻餅をついたり、酔つてもどれだけ酷く見積もっても小屋ぐらいしか吹き飛ばしません！」

事実ではなかったようだが、どっこいどっこいであつたらしい。接触の方は実害はそれほどない。

接触した場所が地雷原とかいう意味のわからないエリアでなければ問題ない。

後者は、酒を飲ますのは止めようと心に決めることで問題ないだろう。

いや、精神的に問題がある、か。

まあ、気にしても仕方ないな。

「……そっか」

質問は以上である。

しょうもない事を聞いて、なんて呆れるかもしれないが、俺からすれば重大問題で、死活問題なのである。

「あ、すみません。ここは宿ですよね？」

ああ、もしかしてその辺気にしてるのか？

「ここは町の酒場のマスターに借りた一室だから厳密には宿じゃないな。当然、無料だから気にしなくて良い」

そういえば、宿屋じゃないのにこの酒場は何故かなりの部屋数があつたのだろう。

ここまで何気に急いでいたのでスルーであつたが、よくよく考えてみると異様である。

見る限りは、マスターは独身であるし、金持ちという様相でもない。

だが、この酒場には約13の部屋がある。

ぱっと見なのでもしかするともっとあるかもしれない。が、少なくともこれ位はあるという事だ。

「私は、軍上層部への報告と部隊へ帰還したと報を入れなければならないのですけれど、行ってきてもいいですか？」

ああ、騎士団か何かかと思つてはいたけれど軍の人でしたか。

ベヒス嬢なのならばかなり上の階級なんじゃあないだろうかね。

部隊長やっていたしな。それも、小隊ではなく、中隊クラスの人

数で構成され、更に何人かはそこそこの使い手であった。

「なら、俺もついていくよ。可能ならちよいと調べたいこと、と  
いうか聞きたい事があるヤツがいるから聞きたいしな」

「えっと、誰ですか？ 仲介しますよ？」

それは渡りに船である。

遠慮なく仲介してもらおうでしょうか。

「国王か、この国の勇者のどちらかだよ」

「……頑張ってみます」

と、一瞬悲しそうな顔をして、それを無かった事にするかのよう  
に控えめなガッツポーズに似た格好をしてみせてからそう意気込ん  
だ。

心強いが、無理なことは無理であると理解する頭ぐらひは持ち合  
わせているので期待しないことにした。

一応言ってみただけというやつだ。

ベヒス嬢が扉の方へ近づきこちらを見たので俺は後を追った。

「ん？ もう良いのか？」

と、部屋を出て廊下を通り、酒場へと出た所でマスターに声をか  
けられた。

「良いです」

マスターの顔に委縮する事によってそっけないというか言葉足ら  
ずというかそういう返答になってしまった。

いい加減にその程度で怒る人物ではないと理解はしているのだが、  
びくびくせざるを得ない威圧感を持ち、絶望感を与える顔である。

「そうか。まあ、また何かあったら良いに來い。出来ることならや  
ってやる」

エドルの人徳様々である。

俺単体であれば今頃路頭に迷うどころか、途中で魔族によって俺  
はタンパク質の塊に変貌させられていただろう。

地獄への片道切符の押し売りとは傍迷惑どころの話ではないとい  
うものだ。

「ありがとう、マスター」

マスターもそうだが、俺の会う人会う人良い人ばかりである。流石にこの世界の住人皆がそうであるとは思えないわけだが。

ああ、そういえばヌーダイセイ王国の大通りから外れたところで追剥みたいなのに遭遇したな。

あの例外を除いて良い人ばかりだ。

おっと、余計なことを考えていたらベヒス嬢が酒場から出ようとしているじゃないか。

置いていかれたら確実に迷子である。

そんな事態には陥りたくはない。

そういえば報告しに行くという話だが、どこに行くのか聞いていなかった。

「ベヒス」

声をかけ質問しようとしたが、なにやら歩きながら作業をしているようだ。

ベヒス嬢の服に隠れるように装着されていたらしき腕輪から近未来的なホログラム的に空中に別段液晶など用いずに映像というか、データを展開していた。

おおおおお。

すげえ！

俺も欲しいなあ。

見てみると報告書類を作成しているようである。

何らかの書類作成のためのアプリケーションの様なものを使用しているようである。

ExcelとかWordみたいなものなのだろうか。

ベヒス嬢は手馴れているのかあつという間に作業を終えた。

常人なら目で追うことさえ困難じゃないかと思える速度で文字が入力されていく様は圧巻であった。

一瞬、近未来的なものを再現できるほどに科学が発展しているのかと思っただが、そうではなかった。

そうではなかったといつても、俺のテンションは別段低下することはない。

科学ではなく魔法によるものであるが、近未来的なものを再現できるのは事実であったからである。

何故わかったか。

能力の恩恵もあるのだが、それがなくとも、腕輪から感じられる魔力でそれが魔法であったと理解できたのだ。

理解したというより、感づいたといった方が適切かもしれない。

詳しくはあまり見ていないので判らないが、どうも何らかの光属性の魔法を応用して出来たものみたいである。

この腕輪って、魔法武器みたいなもんじゃないだろうか。

見る限り、使用されている素材は特別せいのようなし。

どう考えてもそこかしこで歩いている住民が見につけている装飾品のように自然から採取できるモノで作成されていない。

俺のリミッターみたいなものかもしれない。

俺のこれは魔法で作成している。

つまり、一見変な形状の腕輪なのだが、実際は魔力のみで構成されている。

この腕輪は一応、何らかの物質も含まれているようだが、4割程は魔力で構成されている。

ただ、4割とはいっても相当な魔力で作成されている。

これほどの錬度で作成するとエース級数人は欲しい感じだな。

間違つても平均的な魔力の持ち主や知識の持ち主では作成できない。

俺の能力や神に貰った神器のおかげで物質干渉やら魔法に関しては使用できなくてもある程度理解できる。

「それほど珍しいですか？ 確かに、民間には出回りにくいですけど一度も見ない、なんてことはないと思いますけれど」

「ん？ ああ、そうか」

このまま辻褃が合いそうな言い訳となると記憶喪失とか軟禁されていたとか山にこもっていたとかそんなことしか思いつかない。

記憶喪失以外体験したことがあるのが何気に問題である。

「あー……っと、そうだ。ベヒス、目的地にはいつ頃着くんだけ？」

「えっと、もう着きました」

と、前を見てみると城かと疑いそうになる巨大な建造物があった。その建造物は四角とか長方形といった形状でのみ構成されており、相当カクカクしている。

色はまっさらの画用紙のように白い。雨とかで汚れるものだと思うのだが、どうも結界が張られていて、その機能の一部の恩恵で綺麗なのだろう。

もしくは、つい最近塗装したところとか。

まあ、空気中の埃が一定範囲以上入り込んでいない為、結界によるものだろう。

「でけえな……」

その漏れた声に返答が返ってくるのが一人ではないという事のメリットだと俺は思う。

「ええ、ここは全国で3番目に大きい建造物なのです。ここでは主に新魔法開発や兵士の訓練場といった国に関わる探究できるものがまとめられたような場所です。関係者以外立ち入り禁止なのでここだけの話ですよ？」

話した後で軍事機密であると教えないでいただきたい。

余計なことに巻き込まれてしまったらどうしてくれる。

「と、言う事は俺はこの辺で待機か？」

「いえいえ、私は入れますからその友人であるナークも入れますよ。軍事機密の塊のような場所にそんな理由で入れる筈もないと思うのだが。」

まあ、あまり知らずに言っているのだろうから一応、無理だという考えで進めようか。

期待のしすぎは精神の毒である。

「でも、その服装だと少し詰問されるかもしれないね」

ああ、袖と裾が半端な服なものな。

俺なら詰問するでなく通報しているわ。それぐらいの服である。

ああ、そう考えたらこの服完全にアウトだな。

誰だよ、ギリギリ大丈夫って言ったの。

「んー、あの門番らしき兵士と同じような服装だと問題ないか？」

ベヒス嬢は少し考えたそぶりをしてみせ、頷いた。

「んじやーなんとかしてみますかな」

とりあえず、あの軍服っぽいデザインに変更となると布が不足し  
そうであるので幾つか乱雑に取り出す。

「<sup>リフト</sup>形状実装」

俺がそう呟くと実はギリギリ大丈夫ではなかった服はギリギリ大  
丈夫でない軍服へと変化した。

「……袖と裾がまた短けえ」

袖と裾は絶賛反抗期なのだろうか。

それとも成長期が来ていないだけだろうか。

何にしても、これじゃあ変化させた意味がない。

俺が袖と裾の端を掴んで引っ張ると丁度いい長さになったのでそ  
れで誤魔化したと言う事にして事実を抹消することにしようとする  
してみた。

だが、ベヒス嬢が驚いたようにこちらを見つめていた。

あ、もしかして実はあの袖と裾の長さが俺の趣味とか勘違いして

驚いているのか？

それなら考えを改めて欲しい。

ファクションと縁がなかった俺でも流石にあればヤバイと気がつ  
く。

「いつもそんな感じで錬金を？」

錬金とはこの形状変化の事だろうか。

いつもこうなのかと聞かれると断言しかねるのだが、この世界に

来てからはそうなので頷いておく事にする。

これが出るようになって間もないからいつもって呼べるか不安なんだがなあ。

俺が風呂に滅多に入らなかったのは、これの応用で汚れを分解できるからである。

「……そうですか」

ベヒスはまたまた驚いた様な素振りです歩を進めた。

袖と裾が完璧であるので俺に出来ることはもう残されていない。

門番に俺は停止させられると思ったが　　というか、事実止められかけたのだが、どういう訳かベヒス嬢の知り合いと知れるとすぐに道を開けてくれた。

ああ、まあ噂ほどではないが常人からすれば両方即死につながるので大差のない事実を巻き起こす人物に頼み毎をされたら断れるはずがないだろうな。

門番の驚いた顔はそう見えただけで恐らく恐怖に慄いた顔であるのだろう。

その後に俺をやたら見続けてきたのは、俺がベヒス嬢に絡まれた原因だからであろう。

正直反省している。

俺が彼らの立ち位置ならまず、弱そうな俺をフルボッコにしている。

いや、流石にその場でフルボッコにしようとするればベヒス嬢に自身を文字通り昇華され期待へと変貌させられるかもしれないので裏でこっそりフルボッコしただろう。

ううむ。

あ。ベヒス嬢と分かれたら背後に注意したほうがいいかもしれないなあ。

第十三話 - 火の無い所に煙は立たないらしい - (後書き)

今後、主人公をチートのにしていくか、今まで通りちよいと微妙に  
していくか悩んでいます。

気が向いた方はご意見宜しくお願いします。

## 第十四話 - 探究とは危機であり狂気である -

「それでは私は報告を済ませてきます。ナークはうるついでくわいて問題ないですよ」

と、言われたので俺はうるちよろする事にした。

軍事機密らしき建造物の中であるのでうるつくべきでないと思うかもしれないが、ここに入った時点で手遅れである。

内装は外観と同じ様にカクカクしている。曲で象られている部分が無いのかと思える程というか事実ないのだが。

四角い物質を作成して四角い何かでくり抜いたかのような作りなのである。

なので遮蔽物と言える遮蔽物は無く、強ちこの作りは良いのかもしれないと最初見た時は微妙な心象であったが訂正しようと一人心中で結論づいた。

そういえば、遮蔽物がないにもかかわらず人とすれ違っていかない所か、人を見ていない。

過疎地かと思いきやそうであるが、戦争はもう少し後であるしここは国の重要機関の様な印象を受ける場所である。

人がいないはずもないのだが。

「おい、君」

不意に背後から声が聞こえた。

ベヒス嬢かと思ったが別段声色が似ている訳では無し、口調も確実に別人であったので周囲を見回してみた。

俺に声がかけてられているのではなく、別の人に声がかけてられているという漫画でよくありそうなパターンであるのではないかという有るようで実際全くない希望に縋りついてみた。

「まったく、何きよろきよろしているんだ？」

全くない希望はやはり全くなく、奇跡が起きて捻出される事は無かった。

振り向くとそこには白衣を装着した男がいた。

俺よりもファッションに興味がないのか、髪はボサボサで髭も随分剃っていないのかいい加減に映えている。

その髪はボサボサ過ぎてアフロもどきを再現している。

鉛筆やらを収納できるであろう形状である。

髪の色はそれに似合わぬ金。

折角の金髪なら綺麗にしろとまでは言わないがアフロは脱出すべきじゃないかなと思わなくもない。

「なんでもないです」

と、取り合えず返事をしておく。

返事をせずに他人を蔑にするのはあまり好きではないのだ。

「そうか。取り敢えずこれを運んでくれ」

と、脈絡なく何やら頼みごとをしてきた。

「何をですか？」

と言われても何も見えない。

見えないというか、このボサボサ白衣と俺以外にこの通路に誰もいないのだ。

「君」

何やら眉間にしわを寄せている。

もしかしてもしかしなくても、何やら不手際をしでかして俺がこの職員ではないとばれたのだろうか。

俺はベヒス嬢の権力の御蔭でここにいるのである。

「新入りか？ ったく、認識許可コンタクトもかけていないとはお前の担当はなっていない」

と、言い終えるとボサボサ白衣は何やら呪文を唱え始めた。

凡そ2秒。

それだけの時間を消費して詠唱を続け、最後に認識許可コンタクトと呟くと閃光手榴弾をモ口に喰らった時を思い出す程の光量が発生し目が潰れるかと思った。

光だけで目が痛くなるのである。相当苦痛だ。

「ん？ 驚かないのか？」

と、ボサボサ白衣が寧ろ驚いている。

残念ながら外見はそう見えなくてもかもしれないが相当驚いているよ。もし目の前にいる人物が知り合いやらここが別段不審行動しても捕縛されそうにない場所であるなら慌てふためいているさ。

閃光手榴弾を目の前に投げ込まれた経験が無ければそれさえ気にする余裕も無く慌てふためいていただろう。

過去の経験に感謝する数少ない機会である。

「いえ、結構驚いてますよ」

視界の変化に、である。

今まで何もない白い死角が続く通路であったが、今は部屋の出入り口が所せましとあるのが見える。

そして、俺の横にある部屋には大量の箱に詰められた名称の知らない何かが有った。

これが運べと言われた代物なのだろうか。

「……これを運べばいいのですか？」

と、聞いてみたが、ボサボサ白衣は俺の声等聞こえていない様だ。あらぬ方向を向いて何か話をして言う。

手に持つ何かを鑑みる所によるとあれは携帯電話の様なものらしい。

何か急用でも思いついたのかかかってきたのか知った所ではないが、ここで逃げれば後で何やら問題が起きそうであったので仕方なく佇む事にした。

どうやら通話が終わったらしい。

携帯電話らしき四角の何かは霧の様になり、移動し、腕輪の形状に変化し、そのまま腕輪になった。

腕輪はベヒス嬢が装着していたあれと同じ形状である。

だが、素材が違う。ベヒス嬢よりも階級が低いのだろうか。

いや、それは無いか。

ボサボサ白衣の魔法の御蔭で見えるようになった部屋の中にいる

他の白衣やら兵士がこぞつて装着している腕輪はベヒス嬢のものと  
同じ素材であった。

違う素材で作成されているのは彼の腕輪のみである。

少なくとも見えている範囲では、であるが。

「どうした？ 腕輪なんてここでは珍しくないだろう？ ああ、新  
入りだから見慣れないのか？」

平然としている所からこれは普通の事なのかなあ。

周囲に緊張が走っている訳ではないので凄まじく位の高い人物で  
あるという訳ではないのかもしれない。

ただ単に気軽に過ごせる良い上司というパターンも無くはないの  
だけれど。

「どうした？ 急に身体が強張ったぞ？」

少なくとも特別な人物であるのは変わりないだろう。

彼の腕輪の素材が他よりも質の悪いものであれば位の低い者であ  
ると思えたのだが、耐久値などあらゆる性能が他よりも凄まじいの  
である。

確実に凄い意味での特別である。

ならば、先程挙げた後者の方の結論なのだろう。

周囲の職員が強張っていないのは彼がフレンドリーだとかそんな  
理由で気兼ねなく触れ合えるのだろう。

だが、俺はその補正が無いのである。

ベヒス嬢よりも位が高いたとなると、そのベヒス嬢の権力で入って  
きた俺を捕縛する事も、軍事機密の建造物に侵入した罪で処刑とか  
あり得そうだ。

そう考えると強張らないはずが無いのである。

俺一人なら逃げ切れるだろうが、ベヒス嬢が変わりに責任を取ら  
されかねない。

そうなるのは良い結果ではない。

という訳なのでヘマ出来ない。そう考えると緊張の1つでもする  
方が丁度いい。

「気のせいですよ」

「で、こいつが怪しい奴か？」

今日は俺の背後から声をかけるのがラッキカラーの如くラッキー行動なのだろうか、

それとも俺の背後に回って声をかけるのがブームとかいう意味のわからない局所的に扱える困った出来事が発生でもしているのだろうか。

そうであるなら即刻中止を求めろ。

背後を向くまでも無い。

怪しい奴とは俺の事で、これを招く通報は今しがたの電話である。

「そうそう。彼が怪しいんだよね。君に敬礼もしないし」

「それはそうだな」

なんだなんだ。

訳も分からない内に展開していく状況に俺はついていけない。混乱の極みである。

取り敢えず、背後の人物に敬礼しておく事にする。手遅れだろうけれど。

何故ばれたんだ。

今回の敬礼は通報があったから露見した事で、その通報に至る事件は無かったはずなのだ。

「うむ、こいつ、階級章付けてないな」

あ、なんだ。初歩的ミスか。

そりゃそうだよな。軍なんだし階級はある訳で、それを示すモノは当然あるよな。

だけれど、この通報によって現れた黒髪の青年も階級章らしきものは身につけていない。

いや、まてよ？

門番も日本の自衛隊みたいな階級章は装着していなかった。

もしかすると、別の何かか？

だが、それ以外に共通して装着しているものは

あ、腕輪か？

俺はそれを装着していない。

周囲を見てみると、全員腕輪を装着している。

そうなると、俺が腕輪に注目したこと自体不自然なのではないだろうか。

ああ、それなら最初から俺は怪しい人物であった、と。

いや、しかし、黒髪の青年は位が高い様な話であるが腕輪の形状は同じだし素材はそこいらの人と同じ素材である。

付加されている効果も見ると限りは同じ様だ。

ううむ、よくわからない。

「おい、見せてみる」

と、黒髪の青年は俺の腕を乱暴に掴み袖をまくりあげた。

「やはり、腕輪が無いな」

ああ、やっぱり腕輪が階級的なものを表すものだったか。

「今更敬礼しても遅い」

ですよー。やっぱりその程度じゃ見逃してもらえないよな。

腕輪無いのバレているし。

あ、腕輪は新入りだからまだ貰ってないとかで逃げられるか。

と、なるとボサボサ白衣に敬礼でもしてその勢いで逃げ切るか。

取り敢えず、ボサボサ白衣に敬礼をする。直後に開こうとするが、

それより先にボサボサ白衣が口を開いた。

「どうして彼でなく僕に敬礼しているんだい？」

ん！？

腕輪の差的にこっちのボサボサ白衣の方が階級が高いと踏んだのだが。

それに、通報で来る程度の警備の人間がそれ程階級が高いように思えない。

しかし、敬礼しないのが不自然と取られている。

頭の中はごっちゃごちゃである。わっはっは！。

それになんでもう意味が無いのに俺は敬礼しているんだ。

「ああ、もしかして僕が凄まじい上官だから混乱していたのかい？  
ならこれも仕方ないね！腕輪が無いのは新入りか何かなんだろう？  
なら余計に混乱するだろうね！」

「そういう事か。おい、よく確認してから通報しろよ」  
とボサボサ白衣の台詞にそう黒髪の青年は続けた。

どうやら、話を聞く限りボサボサ白衣は凄まじいくらいの人物で、  
それにたまたま遭遇した新入りである俺が混乱したという風に解釈  
されたらしい。

幸いである。

とりあえず俺は頷いておいた。

上手くいくとこのまま事なきを得られる

「 どうして僕の位が高いと気がついたんだい？」

「 いえ、それは当然腕輪の素材、が 」

「 ああ、そうなのかい。カタブキ、すまないね。本当に勘違いだっ  
たようだ」

と俺の言葉をさえぎるようにボサボサ白衣がそういうとカタブキ  
と呼ばれた黒髪の青年は舌打ちした後にはブツブツ言いながら去って  
行った。

ああ、幸いだ。

相手の勝手な解釈の祖語で事なきを得られた。

「君、何者だ？」

そんなに世の中甘くないらしい。

何者と聞かれても何の変哲もない犯罪者であるとしか言えないな。  
「何者と言う程大層な人間じゃないですよ。ただの人です」

「そうかい。まあ言いたくないなら言わなくて良い。悪い人間じゃ  
なさそうだからね。追求するつもりはないよ」

犯罪者を取り上げて悪い人間でないと申すか。

どういう意味で悪くはないと言っているのかは敢えて分からない  
と言っておくけれども、犯罪者であるので悪人に違いないのが俺で  
ある。

どちらにしても悪い人間じゃないから追求しないという台詞は無防備の極みという台詞である。

そもそも、自身の勘を信じきっている。

それとも、自身の勘を信じられるほど生きることを諦めているのだろうか。

もしかすると、その台詞を吐けるほど他者を信じているというのだろうか。

どす黒く濁っていきそうなその目を見る限り、自身を信じているのではないかと思う。

まあ、俺としては追及されないなら都合が良い。

只でさえ俺の身の上は話せないというのに、ベヒス嬢の手引きでここにいるなんて知られてしまったらベヒス嬢に迷惑をかけることになる。

私的にそれは望ましい状況ではないのだ。俺はベヒス嬢を必要以上に入ってしまったっている。

それはおくびにも出さないつもりであるが。

追求されないのはそういう訳で大歓迎であるのだ。だが、歓迎できないこともあるだろう。

それは

「何が目的ですか？」

そう俺が問うと、どす黒く濁っていきそうな目はどす黒くなる訳ではなく、透き通った印象を受ける目になった。

悪ではなく、純粹なあくか何かあるうか。

尤も、この評価が俺の個人評価であるので信憑性は無いのでこの推論は無意味であるのだけれども。

「難しいことだけど君にとっては簡単なことだろうね」

「俺に何をさせるつもりですか？」

ボサボサ白衣が手でこちらへ来いと示し、近くの部屋の奥へと進んでいったので、俺はその後を追った。

部屋の中には幾人もの白衣を着た人々　それ以上に目を引く巨

大な訳の判らない機械を見る限り研究者だろう　　はこちらに興味があるというか、珍しいものを見たという顔でちらちらとこちらを覗き見ていた。

「ああ、気になるかい？　気にしないでもらえるとありがたい」  
気になるが気にしないように出来ないレベルではないので問題は無いが。

いや、この目線の理由が気になるな。

興味による視線であるなら何ら疑問に思わないし、言われるまでも無く気にしないのだが、感じる視線は珍しいものを見る視線であるのである。

普通とは違った目線であるので気になるのは当然だと思う。

そんな風に妙な目線に晒されていると、部屋の奥にある扉らしきものがあつた。

扉、らしきである。

ここで見た扉は大体開け放たれていたのであまり確認は出来ないが、目の前にある扉とは形状が違う事は理解出来た。

それまでは鉄らしきもので作られた片開きの何の変哲もない扉であつた。

目の前にある扉らしきものは、壁に枠があり、そこに城門の門の様に棒が幾つも配置されていた。

それらの横に番号を打つようなモノが埋め込まれているのでこれら全ての棒は鍵の役割を果たしているのだろう。

それまでは開け放ちであつたのだが、打って変わって扉は施錠され、そもそも形状が一般的なモノから近未来的なモノに変化している。

それだけでここが何か特別な場所である事は理解出来た。

「ふうん。これがどういったものかわかったのかい？」

と、ニヤニヤと嫌らしい顔をこれでもかと表現しこちらを見てきた。

先まで悪あがきの正体を隠そうとしていたがどう考えてもバレ

ているだろう。

いや、ベヒス嬢の手引きでここに居るとかはバレていないだろうが、俺が少なくともここに居る研究員とはまた違った知識が有ると考えているのだろう。

それは、間違いではないし、恐らく俺が腕輪の素材が違う事を指摘したので能力についても幾らかバレているかもしれない。

ボサボサ白衣の腕輪の素材が違うのは階級とはまた別に何か理由があったのだろう。

漫画とかで良くあるパターンだと、彼は他の研究員とは一線を書いてマッドサイエンティストよろしく一人技能が特化しているから、その技能を使用して自分の腕輪のみを勝手に改造したとかだろう。

まあ、そのまま当てはまるとは思ってはいない。だが、どうも幾つかは当てはまっている様な気がしていないなら、怪しい雰囲気はボサボサ白衣からビンビン感じるのである。

その技能があるからこそ俺は失態をしでかした訳で、その技能があるからこそ俺の異質さに幾らか気がついたのだろうな。

侮れない男である。

「雇じゃないですかね？ まあ、断言はできませんが」

俺がそう答えると俺の心境の変化に気がついたのか更に笑みを深く示した。

警戒してはいたが、あの黒髪の青年に俺をつきださなかった理由を鑑みるとその警戒は現状無意味であると分かったのだ。

理由は恐らく、俺の異質さに気がついたから。いや、あの腕輪の素材が違う事に気がついたからか。

自身の興味を自身の安全より優先する研究者 いや、探究者と表現した方が当てはまるかもしれないな。

そんな訳なので役に立つと判断されている場合か、興味がある場合はそう酷い扱いは受けられないだろう。

最悪、もう何もできない様にしてから逃走すれば良い。

生憎と俺は彼とは真逆で、他の要素を全てよりも自身の安全を優

先ずる場合があるのである。

まあ、例外はある訳だけれども。

寧ろその例外が無ければ今の俺は無いのだが。

### 閑話休題。

ボサボサ白衣に対しては警戒するよりも友好的にしておいた方がメリットがありそうな雰囲気なのだ。

彼のようなタイプは何かと気前が良い。

その恩恵を賜れるかもしれない。そんな事を考えないとこの場に居続ける事は難しい。

正直、今すぐこいつの意識を奪って逃走した方が安全であるのは明白なのだ。

先は見つかつたという事実には圧倒されて混乱気味になり判断が甘かつたが、実際、こいつに声をかけられた瞬間に意識を奪う事は出来たし、あの黒髪の青年も一般人より遥かに強い様だったが倒せない事も無さそうだった。

それを選ばなかつたのは混乱していたからなのだと思う。

俺がそんな意味の無い後悔の様な 困惑に近いそれを思考し、噛み締めている間に扉が解放されていた。

部屋に入っていない所から見える部屋の一部でさえ他の部屋よりも明らかに重要なモノがある事は見て取れる。

簡単に言うなら、外でエアガンを作っているのにそこでは本物の拳銃を作っているような感じだ。

重要というよりも本物。

他の場所 例えば俺が今居る部屋だ。

そこで作られているものは偽物なんじゃないかと勘違いするモノが作られている事が何となくわかつた。

「ほう。一目でここの凄さが、重要さがわかつたのか」

と、演技でも何でもなく本当に驚いている素振りをしている。

理解したのは能力の恩恵である。

外では市場に一回ついでいそうな鉱物や材料の研究がされており、ここでは出身世界でも見た事の無いモノが幾つかあった。

「ここにあるモノは研究中に偶然出来たモノや、発掘された新種の鉱物であったり、隕石であったりするんだ」

言ってしまうえばオーパーツに近いものか。

ここにあるモノの大半は信じられない耐久値を秘めていた。

鉄で大凡数百から数千である耐久値が、例えば近くにある一見鉄に見える鉄で無い何かは数万もある。

耐久値が高ければ良い素材という訳ではないが、頑丈なモノが出来るのは間違いない。

これを建造物の材料に使用すれば、家ならば地震でも倒壊しにくくなるだろうし、砦ならば強固なモノが作れるだろう。

それだけではない。

大半はそれそのものに魔力が秘められている。

それも並大抵の魔力ではない。それが何十種とあるのだ。

この扉が開け放たれてから感じたのだが、そうなるこの扉

いや、部屋丸ごとか　は魔力を遮断するモノで出来ているのだろう。

ボサボサ白衣の腕輪からは魔力を幾らか感じたのでこの部屋にある様な物で作られたのかもしれない。

「……俺に何をさせようって言ってますかね」

「何、好きにしてくれば良いんだ」

また訳のわからない事を。

何を企んでいるというのだ。

好きにしているなら帰っても良いだろうか。

「ああ、帰るのなら少しだけでもこの素材を加工して何かを作ってくれないか？」

もしかすると。

ここにあるモノは一部を除いて耐久値が高い。

つまり、頑丈である。

溶かそうとも頑丈なので普通以上の温度が必要になるし、他の物の加工は難しい。

だからここにあるモノを加工する事が出来ないのではないだろうか。

それで、俺に何かやらせて何か出来たならその際の技術を盗もうと考えているのではあるまいな。

使用してタネを黙っていれば盗まれる事はないが、拷問を受ける可能性がありそうであった。

それ程までに目的に手段を選ばなさそうな相手である。

「研究員でもない俺に頼まず研究員の誰かに頼んでみてはどうですか？」

正直、余計なことを見せて執着されるのは望む所ではない。

これが麗しの乙女であるなら話が変わる可能性も無くは無いのだが、残念ながら彼はボサボサ白衣で男でそれ以上でも以下でもない。「研究員程度じゃ いや、私を含め例外的なヤツも魔族もひっくるめて探したが今の所、これらを加工できる者は見つかっていない。私の腕輪はこの中の一番質の悪いものを二度と取れない方法で加工できたに過ぎない。もう一度やれといわれても不可能だ。もう一度出来る条件が整ったとしても良くて中質程のモノまでの加工が限界だろう」

そんなモンを俺に加工させようとしたのか。

会った事も無い相手に、実力さえ知らないはずなのに頼むとはどれ程自身を信じているのか想像もつかない。

自分を信じてやまないそれはどこか師匠に似ていた。

俺が犯罪者でなく只の子供であったあの時を思い浮かべる。

正直、こんなドロドロしていそうなヤツで思い出したくは無いく去であったが いや、俺の過去は血まみれでドロドロしているから文句は言えないか。

「そう言われても 例え俺にしか出来ないことでもやる意味は無

いですよ。メリットが存在しないですしね」

当然のことである。そして、これが全てである。

デメリット以上のメリットがそれに存在するのであれば幾らか考  
えただろうが、これだと論外である。

デメリットがメリットを上回っている所かメリットが存在しない  
ように思える。

それだけではない。

気になる点があるのだ。

「一切触れていないけれど、もし、加工する術を知ったとして、そ  
れをどう扱うつもりですか？」

恐らく、コレほどの耐久値と魔力を秘めているのであれば武器と  
して必要以上の力を発揮するだろう。

この国に来る途中で見かけた魔法武器は初心者でも魔族と戦える  
程の力を秘めていた。

あれで普通の素材から作られたものなのだ。

どれ程の力を発揮するか想像も出来ないことはわかるだろう。

この国には大勢の強者が集まるのだ。

今はそうではないとしても武器に転用されるのは時間の問題であ  
る。

そうになると、作成者である俺は何らかに関わる羽目になるだろう。  
そう考えるとデメリットが大きすぎた。

例え、過去を思い出すような人物の頼みであっても、だ。

「聡明な君なら理解していると思うが、現状で私がどう言おうと武  
具に使用されるだろう」

やはり、である。

争いの根源に近い物にはあまり関わりたくないのが本音だ。

良い事など何一つなかった。

「なら、協力できないですね。戦闘に使われるものを作成するとい  
うことはそれだけで恨まれますから」

「そうだ。だから私は他にその技術どころか、君の能力の存在も漏

らすつもりは無い」

俺の顔は眉間に皺がよって酷く疑っているという顔であるだろう。そんな口から適当に言ったようなことを言われても信じるはずが無いし信じられるはずが無い。

「ああ、だから代価として私の能力　まあ、技術や資料と考えてもらってかまわない。それらを君に提供しようと思う」

それに何のメリットがあるというのか。

確かに、それを売るなり自分のものにするなりすれば金は手に入るだろう。

俺にはそれをメリットと捕らえられなかった。

それに、俺にとつてはたいした事はないが、常識的に考えると一つの情報に自身の全てと言って良いものを提供するなどと言ってくれば逆に信じられなくなる。

だが、今のボサボサ白衣からはドロドロとした何かは感じない。

ただ純粹に知的好奇心になすがままになっているという印象を受ける。

事実、そうなのだろう。

短いながらも彼と応対しているのだ。

少しは解るといふものだ。

「勿論、加工したものも持って行っていいし、ここにあるものも持って行っていい。欲しいなら魔法で私の知識も与えよう」

それは、破格過ぎるのではないだろうか。

何故そこまで知識を欲するのか理解できない。

何か危ういものを彼から感じる。

「いや、気にしなくて良い。どうせここにあるものは性能が段違いであるが一番魔力が無いものでも少し形状を変化させる事も出来ないんだ。私からすれば宝だが、国からすれば只のゴミ。保存や場所の確保にかかる費用を出したくないらしくてね。そろそろ破棄しないといけないんだよ」

だが、ボサボサ白衣は偶然といっているが一度加工に成功している。

それも、他の腕輪と形状が全く同じという精度度である。

その際の技術を研究すれば解決しそうに思える。

「いや、成功した方法はもう使えない。一応、数千年経過すれば使えるようには理論上なるけれどね」

どうやら俺は気持ち顔に出ていたらしい。

「この腕輪を作成した時はあの魔力炉を使ったんだよ」

と、部屋のある柱かと勘違いしそうな大よそ直径30m程の魔力炉を指差した。

魔力炉であるが魔力の残滓程度しか残っていない。

「鉱石などに魔力が秘められていて、その魔力に比例して物理的にも魔法的にも強固になる。それを打ち破るにはそれ以上の魔力が必要になるんだ。この腕輪の際に必要なだった魔力は地脈一つ分。厳密にはその土地が死なないギリギリの魔力と言った所か」

人や魔族といった生物の枠では考えられない魔力量が必要になってくるということか。

そりゃあもう一度の使用は出来ないな。

例え、土地が死ぬのを厭わずに魔力を汲み上げても、確実に魔力が足りないだろう。

そして、その魔力が回復するまで数千年必要ということか。

そんなお手上げのようになってしまったのならある程度俺に頼んだ気持ち判らないこともないな。

「私はどうしてもこれらを使用した武器が見たいんだ。どれ程の力が秘められているか。とても気になる」

向けられるのは純粹な眼。

俺はどうも麗しの乙女に弱いという訳ではないらしい。

「……成功するかはわかりませんがね？」

いや、決してボサボサ白衣の様な男に弱いという訳ではないからな？

俺が過去を捨てられないから懐かしいモノに弱いのだろうな。

## 第十五話 - 例外は規格外を呼ぶ -

俺はボサボサ白衣に手渡された鉛の様なものを見た。

一見鉛だが秘められた魔力は鉛のその比ではなく、耐久値も大凡10倍。

鉛の様で決して鉛では無いそれは加工できないと嘆く気持ちも分かる様な物であった。

「失敗しても文句は言わないでくださいね？」

ボサボサ白衣はニヤリとする。

先程まではドロドロとしている様で良いイメージは抱けなかったのだが今は中々どうして不快では無く好感を持ってそうであった。

「気にするな。どうせ国王に金の無駄から破棄しろと言われてるんだ。感謝こそしても文句など絶対に言わないし思わないさ」

俺が前向きに検討し始めた瞬間からどうも友好的になっっている。どうも現金な気がしてならないが不思議とそれに不快感は抱けなかった。

カリスマ性と言うやつなのだろうか。

ぱつと見はそんなもの全く感じないのだが。

「そうですね。まあそれなら良いですよ」

彼から受ける印象が変わったのはそのまま彼の意識が変わったからなのか、俺の意識が変わったからなのかは知らないが、仲良くなれそうな気がした。

良く考えてみると、友人と呼べそうな存在は生まれてからエドルしかないんじゃないだろうか。

以前の世界の事は一定の事を除いてあまり覚えていないのでもしかしたら居たのかもしれないが、覚えていないのならそれは居ないと同じであると思う。

「ところで、錬金に必要なものは何かあるかい？ 魔法陣ぐらいなら記述を手伝えると思うが、大規模な魔法陣になるとすぐには記述

できないし設備があるならそこでやっても良いぞ」

と、言われても俺はずっとこの身一つでやっているのである。

後で魔法陣について教えてもらうのも良いかもしれない。

魔道書だと魔法の知識は入るが魔法陣と言った魔法を補助したりするモノの知識は得られないのである。

いや、忘れているだけで実際は得られているのかもしれないが、魔法陣を記述する度に魔道書を展開なんてやってられないので学ぶ事にこしたことはない。

「いや、良いです。なにも必要ないです」

「じゃあ、何処かに移動するのか？ それならついていく事になるが」

良いから黙ってそこで立っていると目で訴えるところやら伝わったらしく口を噤んだ。

手にある鉛の様なそれは今までに使った素材とは格がそもそも違うものである。

上手くいくかどうかは神のみぞ知る、でだろう。

あの神のみが知る様な言葉であるので若干気に食わないが、この場では無理やり気にしないでおう。

体内に魔力の循環を感じ、手にある鉛からも魔力の循環を感じた。この素材が得られたら俺の戦力は大幅に上昇する事請け合いである。

まじまじと見て思ったが、この取引は断らなくてよかった。

この素材は多少のリスクを負ってでも得るべきものであった。

そう思えるこの鉛の様な物でこの部屋にあるモノで言うと下位に属するのである。

「<sup>リード</sup>形状実装」

今までどおりに言葉を呟いた。

が、何も起こらない。

いや、魔力自体は消費している。

現状と結果を鑑みると結論はすぐに出た。

つまり、失敗。

「どうした？」

ボサボサ白衣がそう聞いてくるが言い辛い。

「失敗ですね」

その一言を発するまでに心の準備が必要であつた。

心の準備をした甲斐があると言わさんばかりに凄まじい落胆の表情を浮かべうなだれている姿を見せつけてきた。

その姿に心が痛んだ、というような理由ではない。

この素材を加工する術をこの隠蔽できる部屋で編みだした方が良いと理解出来ていたからである。

だからこそ、もう一度、行おうと思つたのだ。

「もう一度やります」

おそらく、能力発言の際に要求される魔力より使用できる魔力が少なかったのだろう。

俺は袖をまくる。

気合を入れる為という理由での行動ではない。

そこにあるのは手以外に、螺旋状の針金の様な腕輪が5つ装着されている。

これは俺が最初に作成した魔法道具である。

魔法道具とは言っても魔法武器の様なものとは決定的に違う部分がある。

素材 媒体を用いず魔法のみで構築されているのである。

それ故に実態はあつてない様な物で、だからこそ今まで邪魔にならなかつたのだ。

これらの秘める効果は封印。

神に与えられた神に許され世界には許されない程度に膨大な魔力を封じ込めている。

段階は5つで別けているが、1つ外せば倍に、2つ外せば2倍にと言う様な単純な封印方法では無い。

現在、先の錬金の失敗の反動で魔力がほぼ底をついた状態である

が、おそらく1つ封印を解くだけでそれ以上、数倍の魔力を得られるだろう。

全て外せば、外す以前とどれ程の差があるか分からない程全体の魔力は膨大である。

魔力総量はこの世界の容量異常に存在する。

それ故に全てを開放する事はあまり出来ないのだが、この1つで十分戦っていけるのである。

「それは、魔法道具。それも完全構築方式か。それだけじゃないな。完全構築だけで信じがたいがそれを5つ重ねがけしているのか」

ボサボサ白衣がこの腕輪を見てそう適切な解析を行った。

ああ、そうだ。

ボサボサ白衣などという呼び名で済ます程彼の好感度は俺の中で低くはない。

「なあ、お前の名前は？」

元の口調に戻し、俺を俺として振舞わせると出た言葉がそれであった。

それに反応して腕輪を見ていたボサボサ白衣は顔を上げて好奇心で輝く目を向け答えた。

「私の名前はオツドル・クヌサル。オツドと呼んでくれたら良い」

唐突な振りにと口調の変化に警戒されるかと少々思っていたがそんな事はなく、寧ろ愛称まで考案してくれた。

どうやら相手を気に入ったのは俺だけではないらしい。

「俺の名前は、な ナークと呼んでくれ」

思わず以前の世界での名前を言いそうになったが辛うじて阻止に成功した。

頭文字の発音が同じで助かったと思わざるを得ない。

元の名前が日本形式の名前で無くアメリカと言った外国の形式であったとしても”な”から始まるので対策は万全である。

「わかったよナーク。君は私の友人として覚えよう」  
俺の意向が伝わったのか、工程をすつ飛ばしてオッドはそう言った。

中々に妙な気分だ。

犯罪者になつた時から、いや、犯罪者になる以前の準備期間に入した時点で友人が出来る事など無いと思つていたし諦めていたのだ。

それが予想もしない所で成されるとは思ひもしなかった。

折角の正式な友人である。

エドルとは友人であるとは思つてゐるが、今の様に確認した訳ではない。

そう考えると、初めての正式な友人と言えよう。

そんなオッドの期待を裏切る訳にはいかない。

「なら、ついでに、オッドの頼みを聞いた人物としても覚えておいてくれ」

「どういうことだ？」

「まあ 見ていればわかるさ」

そう言いつつ、腕輪の維持を1つ止めた。

すると、当然腕輪が1つ消失する事になる。

同時に、魔力が今まで以上に放出する事が可能となった。

「 ナーク、君は一体何者なんだ？ 人間なんだろう？」

少々魔力に当てられ汗を見せるオッドはそれ以外に表面上にはそれらしいモノを一切漏らさずにそう聞いてきた。

中々の根性であると感じせざるを得ない。

「俺は只の若輩者に過ぎない。人間かどうか はどうだろう。俺

は そうだな、鬼と呼称して貰った方が正しいかもしれないな。

いや、勿論、生物学的には人間だけれどね」

そう喋っている間にダムの倒壊の如く勢い良く噴出していた魔力は落ち着きを取り戻した。

どうやら、長期間 と言う程日時は経過していないが 封印

した後には開放すると一定量吹き出てしまいうらい。

魔力とそれを保存する場所は神のそれであるが、肉体は人間の俺なのだからそうなって当然で、寧ろ、封印している間、良く俺が持ったものだと思議に思う程である。

例えば、強度は鉄よりもある風船があったとしてよう。

そこに大量の水を入れる。

普通の風船ならば途中で割れてしまっただろうが、強度のある風船なので割れる事はなく膨らむ一方だ。

それを解き放せばどうなるか。

当然ある程度吹き出る。

それが現状である。

魔力が落ち着いた頃には、部屋中魔力で満たされていて、この部屋が魔力遮断の効果が無ければこの部屋の外にも漏れ、この建造物に居る生物全員に影響を及ぼしていた。

抵抗の無い者だと意識を失い、抵抗のある者なら身体が重くなる程度である。

「ナーク、私は君を鬼とは呼ばないよ。君は私の善き友人であるのだからな」

そんなオッドの台詞に耳を傾けつつ俺は体内だけでなく部屋中に蔓延する魔力をも循環させた。

要求魔力的に部屋に充満する極一部の魔力だけで事足りそうであった。

どうやら、オッドの作成した魔力炉を用いる方法よりも俺の能力の方が魔力効率が良いのか必要魔力が少ない。

手にある鉛の様なそれは、外部から魔力を込められ、錬金を使用した事が相成って光り輝いた。

その発光はほんの数秒程度で収まり、それから視覚で来たモノから得られる事実は唯一つである。

「ほら、な。成功した」

オッドに鉛の様な物で作成した剣を渡すと、オッドは待ってまし

たと言わんばかりに舐めるように剣を四方八方から眺め始めた。  
目に込められた魔力の循環を見る限りは解析の魔法でも使用して  
いるのではないだろうか。

今なら俺の込めた魔力と能力の残滓があるはずなのでその方法は  
有効で適切である。

オッドが眺めている間、再び魔法道具を構築し、魔力を封印した。  
1つでこれ程なのに2つ以上になるとどうなるか想像もできない。  
それ故に怖くておいそれと封印を解除出来ないだろう。  
俺は臆病なのである。

「凄い！ やっぱり見込んだ通りだ！」

と、オッドは飛び跳ねんばかりに暴れているとしか表現できない  
様な挙動をして見せ、剣を振り回していた。

「そうか。まあ、期待に応えられたようだなによりだな」  
失敗した時は地味に焦った。

友人の頼みも聞けないのかと自身を罵る所であった。  
どれぐらいオッドは飛び跳ね続けたかは知らないが、息が切れる  
と落ち着きを取り戻した。

とはいっても、当分息が切れたままなので正確にはそれが回復す  
るまでは落ち着いていなかった。

「……済まなかったね。落ち着いたよ」

とまだ引かぬ笑みを浮かべながらそう言った。

俺はと言うと、部屋の中を物色して回っていたので別段待ち続け  
ていたという印象は抱かなかったので謝るのはお門違いであると思  
える程度であった。

「いや、気にしてないから」

「そうか？ いや、済まないと思ってるよ。さあ、価値の分かって  
いない国に取られる前にさっさと君に渡してしまおう」

と、部屋を指さす。

見てみると河原に落ちていそうな石ころサイズの素材から、どう  
やってここに入れたのだろうと疑問に思う程度のサイズの素材まで

様々にあった。

「そういえば考えていなかったが、この素材は何処に運ばいい？  
やはりナークの家か？ それにどうやって運ばいいだろうか」  
家など無いし、運ぶ必要も無いので気にしなくても良い。

それよりも、国はオッド一人にこれを処分しろと命じたのか。  
どれだけ過酷な命令だ。

狭いとはいえない 寧ろ広いこの部屋に所狭しとある素材があるのだ。

その収納方法は乱雑で積み上げられているが、それ故に天井まで詰んでいたりするので予想以上に量が多いのではないだろうか。

「いや、気にしなくて良い。俺で出来る」

「そうか？ 気を遣わなくて良いぞ？」

少々多いので集中力を高める。

居合い切りを思い出す懐かしい感じである。

集中力がある程度高まった所で素材を近くにあるモノから保存していた。

「ナーク、それはなんだ？ 詠唱も無い様だが、魔法陣でも書けるのか？」

「ん？ いや魔法陣は書けないぞ。寧ろ、後で魔法陣の書き方辺りを教えてくれよ」

「ああ、それは良いが……。それよりそれは いや、聞かないでおこう」

まあ、そうして貰う事に越したことはないな。

俺としてもオッドとしても、だ。

俺は言わずもがなであるが、もしかすると知る事によって何やら面倒な事に巻き込まれる可能性がなくなはないのだ。

巻き込まれる可能性があると考えていて態々教えたいとは思わない。

「 悪いな。まあ、話せそうになったら話す事にするよ」

「ああ、それで良い」

そう言いながら頷く。

俺は数分の時間をかけ素材を保存し終えた。

当分素材には困りそうもない。

うれしい事である。

良く考えてみると、素材が無いからこそそこそこ苦労していた覚えがあるのだ。

まあ、元々無かった能力と言うモノに頼り切った発言を吐かなければならないのは自身の力不足であるだろうから反省すべき部分である。

「さて、保存し終わったし、魔法陣について教えてくれよ。あ、でも時間かかるならいいわ」

そこで、ふっふっふと怪しい笑い声を上げながら腰に手を当てて恰好を付けていた。

「任せる！ 一瞬でやってやる！」

オッドは怪しい雰囲気を消さずにそのまま俺の近くまで歩いてきた。

その間、その怪しさに負けて逃げそうに何度もなったが、かろうじて踏みとどまる事に成功した。

ガチムチに迫られるような勢いで精神的に負けそうであったが耐えきった俺に称賛を与えたい所である。

オッドは右手を俺の額に当て、そのまま何やらぶつぶつと呪文らしきものを唱え始めた。

「よし、これでいけただろう」

と、体感的に3分程と言うカップラーメンよろしくの時間でそれは終わった。

俺的には何の変わりも無い。

失敗したのではないかと思わざるを得ない様な勢いで変哲が無い。哲学的に変わりが無いと書いて変哲と書くのだろうかと少し考えてしまう程錯乱していた。

いや、その時と言うか一瞬前まで錯乱している事にさえ気がつか

なかったのだが。

「ふむ。その顔は変わり映えが無くして信じていないという顔だな」  
厳密には、信じていると言えるだろうが少々疑問に思うという、  
信じている側よりの疑いという所だろうか。

対比的には8：2ぐらいで信じている。

「何か変わり映えがあったと思わせるのは実力の無い者がやる事だ。  
証拠に、”火の構築式の魔法陣”を書いてみる」

と、言われてもどうしたものか。

俺が呆けていると、オツドはニヤニヤとし始めた。

いったい何だというのだ。

そんなに失敗したのがうれしいのか？

これが腹立つ学校の教師とかであれば殴り飛ばしていそうである。  
いや、学校には言った事が無いけれどね。

想像で言っただけである。

「ほら、疑問は吹き飛んだだろう？」

何の事である。

俺は呆けていただけであるので、何も進展はなく寧ろ疑問は尽きる事なく増える一方である。

今、文句あるか？ と聞かれれば文句？ あるに決まってるだろうが！ と叫んでその後3時間ぐらい問い詰めてしまいそうである。

「ほら、手元を見てから文句を言え 考える」

こいつ、心が読めるのか！

心を読むな！

「まったく、手元を見て絶賛文句を」

そこには何やら紋様が刻まれていた。

これが魔法陣であり、火の構築式の魔法陣である事も何故だか理解出来た。

「記憶同期の魔法をお前に使ったんだよ」

ニヤニヤと不快さをもれなく発生させてくれる表情を浮かべつつ

そう言ってきた。

少しは自重しろよと言いたかったがそのニヤニヤ具合は相当であり俺が口をはさむ隙を見いだせなかったので泣く泣く諦める事になった。

「記憶同期　名前と現状を鑑みる限り任意の記憶を相手にコピーするって所か」

「ああ、それも、自然と馴染ませられる」

だから無意識下で魔法陣を書けるレベルまで至ったのか。

オッドの記憶であるという事は熟練者であるオッドと同等の熟練者になったという事なのである。

「私の知識を得たと言ってもまさか空中魔法陣をいきなり使つてくるとは思わなかったがな。あれは知識云々の話じゃあないからな」

そういえば、魔法陣は空中に浮かんでいた。

魔法陣の線に値する部分は光の線で出来ていた。

それは、触れても熱を持っている訳ではなく、逆に冷たい訳でもない。

空気と同じで、感触も無くあるようで無いものであった。

「空中魔法陣が使えるなら魔法と魔法陣の素質があるという事だな。もしかするともっと高度なモノも扱えるようになるかもしれないな」

その言葉に幾つもの単語やらが脳裏へと表出してきた。

どうやら知識は本物の様である。

何せ、空中魔法陣という名称さえ知らなかったにもかかわらず、それよりも高度な立体魔法陣やら多重魔法陣やら天体魔法陣といった言葉も思いつくのである。

どうやらオッドは本当に記憶同期の魔法とやらを使ってくれたらしい。

その感覚は、うる覚えであるが魔道書を展開した時はこの様な感じになるのだろうか。

「まあ、記憶同期の魔法は万能じゃないけれどね。魔力を多量に消費するし、力量によっては記憶の拒絶反応で対象が廃人になる場合

もあるからね」

そうかそうか おめえ！

なんてもんを俺に使ったんだよ！

と、殴り飛ばそうとするがかわされてしまった。

速度はそれ程ではなかったので回避されるのは仕方が無かったが、命拾いしたな。

「……ナーク、本気で殴ったな？」

俺の拳は壁にめり込んでいた。

壁にまったく罅が入らずに拳が突き刺さっているのでどれ程衝撃の分散が無い大変なパターンの拳であったか理解できる。

「本気を出すわけ無いだろう」

「だよな、冗談だよな」

ははは、と乾いた笑みをこぼすが、勘違いであったと思い記憶から抹消するなどということは俺がさせん。

トラウマよろしく、心に刻まれる思い出になるがいい。

「本気だったら今、お前のヘッドパーツは虚空と同意になっていただろうな」

もしくは、オッド入り空気である。

粉々という言葉も生易しいと判断できる粉々具合を証明してみせよう。

問題は、その頃にはオッドのヘッドパーツが粉々になっているため、証明を見届けるために必要な眼球と脳髄も共に粉々になり霧散してしまうところである。

オッドは俺の目が多少本気であったことに気がついたのか顔を引きつらせていた。

いい気味である。

「で、他に何か教えて欲しいことはあるかい？」

あるわけが無い。あったとしても無いという。

再び記憶同期の魔法を行うという愚行は起こさないだろうが、別形式の似たようなものをやりかねないのでこの判断である。

もし、危険性がないと疑い所の無い挙動であつても信用できないだろう。

当分の間、この件に関してのオッドの信頼度は零以下のマイナス値である。

魔法陣に関しては、作成方法だけでなく、思い浮かべた魔法陣に関する質問であれば今のところ全て返答が返ってきている。

どうやら、魔法陣は作成に時間がかかるらしいのだが、その分魔力消費が少ないし詠唱も必要としないために、事前に何処かに刻んでおけば設置型の魔法のようになるらしい。

ベヒス嬢は詠唱を唱えていなかったようなので鎧や剣辺りにでもあのビームサーベルを発生させる魔法陣を刻んでいたのだろうか。

ああ、だとしたら幾つか納得がいく。

恐らく、魔法陣の補助がないとあの黄金はあまり多用できるものではないのだろう。

魔法陣は補助的役割でもあつたのではないだろうか。

根本の部分が任意でない限りあのように自在に形状変化出来なかったはずなのだ。

だからこそ、鎧が崩壊してから剣のみで挑み、ギリギリまで黄金を使わなかったのではないだろうか。

まあ、憶測でしかないが。

もし、そうならば俺が壊してしまったあの鎧はすごく重要だったのではないだろうか。

酷く、罪悪感がこみ上げる。

今のベヒス嬢は黄金が使用できないのではないか。

それ故に起きてすぐの攻撃が無かつたとも言えるので安心するところもあるが、今の俺のベヒス嬢に抱く好感を考えるとそう蔑ろに出来る項目でもなかった。

「教えてほしい事は無いが、ちょっとこの設備を使わせてくれ」

「ん？ ああ、研究が打ち切られたからここも必要ないし問題ないよ」

そう聞くや否や、確保していたベヒス嬢の鎧を近くの机に取り出した。

魔法陣の知識がある今ならばわかる。

今は壊れて見るも無残な姿となり役割を果たせないどころかそもそも役割が何であつたかが素人目にはわからない惨状になっているのである。

よく見てみると、確かに魔方陣らしきものが刻まれていた。

俺の予想は正しかったのかもしれない 良くないことにも。

「オツド、これから見ることは他言無用で良いか？」

と、部屋の主に尋ねてみる。

流石に、部屋を借りている身分であるので追い出すわけには行かないし、オツドは既に友人認定をした後だ。

そう邪険には出来ないし、多少の信用をするのが礼儀であると考えている。

俺は再び封印を一つ外した。

鎧の穴を補強する程度で貰った素材を使用するのであれば封印を外す必要は無かったが、ベヒス嬢の鎧の元々の素材と、俺が持っている最弱の素材を比較したとしても相当に差がある。

それ故におそらく反発してしまう。

なので、俺の持つ素材で身に着けていても悪影響が無い程度の魔力を内包した素材で全てを作成することにしたのだ。

「<sup>リイド</sup>形状実装」

そう呟くと見る見るうちにベヒス嬢の鎧と同形の鎧が作成された。魔法陣の知識はあるが、それに必要な魔法の知識が欠如していたので本質的な能力は再現できていないが、耐久値は格段に上である。俺は、魔道書を展開した。

足りなければ補えば良いという精神である。

「<sup>リイド</sup>形状実装」

表面に肉眼で確認できないレベルで魔法陣を刻み、魔道書の知識と照らし合わせた。

魔法陣は、これで再現は出来たが、まだ改良の余地があると訴えていた。

それには鎧の表面積が足りなかったが、幸い、ベヒス嬢が身につけていた剣の形状は覚えていた。

第十五話 - 例外は規格外を呼ぶ - (後書き)

PVが50000、ユニークが7000をついに突破しました。

これも皆さんの御蔭です。

感謝の極み、ありがとうございます。

以前から何だろうと思っていたランキングなるものの実装方法を知ったので各頁表示は鬱陶しいと思ったので目次のみに表示する様  
にやってみました。

これからもヌルヌルと執筆していきますので宜しくお願いします。

第十六話 ・ 集団には近づくと非常に巻き添えを食らう ・

「何とか上手くいったなあ」

個人的には傑作である。

能力に慣れていているわけではないので絶対とは断言は出来ないが、今の俺に出来る最善を尽くせたように感じる。

オッドは友達になってくれたが、ベヒス嬢とも友達になれる気がしていた。

コレをあげるからどうこう、というのではなく、確執的なものは軽減できるよう配慮したといったところか。

どちらにせよ、弁償的なことはしたいとは思っていたけれど。

取り合えず、封印をしなおす。

「ナーク！ 君、魔法陣を一瞬で書いてなかったか！？」

そういえばそうである。

ああ、もしかすると魔道書の副産物だと睨んでいる現象の恩恵かもしれない。

「ああ、俺って魔力に敏感らしくてな。だから微妙な調整ができるんだろ」

と、理由は定かではないが適当に言っておく。

追求されても答えられるはずが無いのである。

今はそれよりもこの傑作をベヒス嬢に渡したい。

何やら不思議な気持ちである。

これがワクワクドキドキと表記される気持ちであるのだろうか。

何にしても善は急げである。

武具を手渡すのが善であるかはさておきであるけれども。

オッドは何やら自分の世界に入ってブツブツ言いながら近くにあった紙に何やら数式らしきものやらを書いていた。

その速度は手に残像が見えるのではないかと思える程であった。

オッドは天才なのだろうかと少々驚くことになった。

元の場所に戻るのか。

だけれど、予想以上に時間がかかってしまった。

ベヒス嬢は俺を探して何処かへ行ってしまったかもしれない。

そうであったなら非常に悪いことをしたと罪悪感に際悩まされることになるだろう。

とにかく急いだ方が良いかもしれない。

「オッド。俺は、急いで行かなきゃならん場所があるからもう行くから！」

と、若干足を動かし、座標移動こそしていないが走っている動作をして忙しない事を体現して見せた。

「ああ、じゃあな」

オッドは愛想無く手をひらひらさせて行くが良いよという意味を伝えようとしてきた。

良い事が悪いことかはわからないが、それが伝わったので俺は何か思うところがあるがその場を立ち去ることにしようとした。

ああ、そう言えばベヒス嬢にコレを渡す事でいっぱいになって失念していた。

元々俺がここに訪れた思惑はベヒス嬢にコレを渡す事でも素材を入手する事でもない。

「オッド。訓練場ってどこにあるんだ？」

俺がそう聞くと判っていましたというのを通り越して最早待つていましたよ、と言わんばかりの顔をしながら振り向いた。

「訓練場は　そうだな、丁度、君の関係者である<sup>ライトライン</sup>黄金色の断裂が居る場所だよ」

ベヒス嬢との関係がいつの間にかバレている。

俺は即行で警戒体制へと移行したが、相対するオッドはニヤニヤといやらしく不快感しか生成する事が出来ないであろう無駄の権化である表情を浮かべて自己主張していた。

「ナークは抜けている所があるね。その鎧と剣の形状を見ればここにいる全員は気がつく事だよ。<sup>ライトライン</sup>黄金色の断裂の鎧の形状は少し他と

は違うし、それにそこまで背丈が低い騎士はここにはいない」

ああ、そういえばそうだな。

そもそも女性用の鎧だと体形が違うから、女性騎士がベヒス嬢だけであるならバレルし。

迂闊であった。

バレルたのがオッドであったから良かったものの、他の奴なら今すぐ問題が発生していただろう。

「そっか、ありがとう」

「ああ、気にするな。おっと、そうだそうだ。さっき運んでくれて言っていた荷物だが、あれも素材だから持つていつてくれていい」

俺は頷いてすぐさま素材を保管し、今度こそその場を後にする。

来た道を辿りベヒス嬢と別れた場所らしき場所に出ると、そこは先程までとは異なっていた。

決して、よくあるゲームや漫画の様に、建造物の形状が変わったなどではない。

いや、一応、出入り口とかが見えるようになっていたのでその辺りの変化はあるがあくまで視覚的な話である

人が異常に増えていた。

満員電車どころか、電車にさえ乗った事はなく、写真で見たぐらいでしか接点が無かったのだが、満員電車並みの混みようだと表現しておこう。

もしかすると、行った事が無いがコミマという同人誌等の即売会の如くであるのかもしれない。

どちらにしても、異様で異常な混みようである。

訳がわからない変貌を遂げた場所であるが、ここを通らなければ話にならないので致し方が無い。

とはいっても、人ごみは溢れる男達である。

それも兵士らしき剣や槍といった重そうな刃物を携えた男達が大半であるのでガタイが良く、正直この人口密度ならば決して歓迎は出来ない体型である。

ベヒス嬢がこの先におらず、コレ以前の部屋に居たならば眼も当てられない。

幸いにも、ここは廊下の突き当りである。

人込みと入ってもせいぜい廊下の一部に収まる程度であるので大した人数ではない。

これら全員を確認　ベヒス嬢が居るか居ないかを確認できれば問題ないので強ち全員とは言い切れないが　し、ベヒス嬢が確認されなければこの人込みを通る必要が無いどころか接触する必要も無い。

そうと分かれば即行で確認して立ち去りたい。

俺はすぐさま人込みへと眼を向けた。

この人数ならそう時間はかからないのではないだろうか。

唐突だが世の中そう上手くはいかないものである。

良い意味など思いつくはずも無く、掛け値なしで悪い意味で俺は背が低い。

平均的にどの程度であるかはこの場合は関係が無い。

問題は、この人込みを構成する人間の大半は俺より格段に背が高いのである。

その状態でこれだけの人々を確認できるだろうか。

それに良く考えてみると、ベヒス嬢と俺は同じぐらいの背丈であるのでそれも相まって更に見つけにくくなっているのではないだろうか。

そうであるならば絶望的である。

どれ程絶望的かというと、個人的に東京ドームいっぱい人が居る状態で逸れたぐらいである。

とはいっても、探さないわけにはいかなないので俺は眼を皿にすることにした。

結論から言うと、数分でベヒス嬢は見つかった。

遠目からであるが、周囲の男達が女性に気遣っているのか何かと女性が目立ったのでその中からベヒス嬢を見かけることが出来たの

だ。

ベヒス嬢に声をかけようとするも、人込みという名の肉壁により近づくことが出来ない。

叫んで知らせるにしても男達の雑談という名の騒音により俺から発せられた音は、音を掻き消す音により空気の振動が円滑に行われずエア電話は伝達出来なかった。

それによりもどかしさが発生し、それにより派生して苛立ちが微かに募る。

一体全体何故こんなに人が集まらねばならぬというのだ。

そう考えている間にベヒス嬢は人口密度が特に酷い場所にある部屋へと入って行った。

俺も行こうと奮闘して見るがどうも上手くいかない。

この男どもはベヒス嬢と言った女性にしか道を開けないのか。

こう込み合っているには俺が抱える鎧と剣が非常に邪魔と言うか、剣が危ない。

特に俺は刀身が上を向く様に抱えていたので、背丈の関係から下に接触すると相手の頭部を切つてしまいかねない配置である。

鞘を作ればよかったと少々後悔したが、肉壁なんて切り刻んでしまえという悪の誘いが聞こえてきてしまった。

囁きが危険なので一旦ここを離れて様子を見る事にしよう。

周囲の会話から何やら試験と言うかそういうモノが開催されるらしいのである。

ベヒス嬢もそれを受けに行ったのなら今これらを手渡しても荷物になるだけだろう。

ベヒス嬢の試験が終わるのを待つのは吝かでは無い。

肉壁を半ばまで突破したにも関わらず引き返すのは多少惜しいものはあるが惜しんでも仕方が無いので諦める事にした。

ベヒス嬢に迷惑をかけるのは今の所好ましくないのである。

いざ、離れようにも周囲の肉壁が邪魔をして思う様に動けない。

悪戦苦闘するも両手がふさがっていてそれ程悪戦苦闘ぶりはみせ

られない。

囁きが大きくなってきたので少々急ぎ気味に蠢いているが、あまり意味はないようである。

唐突に移動が円滑になった。

が、目的の方向とは魔逆である。

つまり、ベヒス嬢が向かった試験会場臭い部屋の方向へと、である。

何とか回避できないものかと肉の奔流に逆らおうとするも、様々な方向から押し押されるのでどうしようもなかった。

「……くっそ」

結局奔流に翻弄され、試験会場臭い部屋へと押しこまれてしまった。

幸い、部屋は広い。

肉壁は分散し、肉壁の機能を果たさなくなった。

人口密度の緩和である。

これ幸と出口へと向かう。

全員部屋の奥の方へと向かっているので出入り口付近は特に混んでいないのである。

今回の移動は奔流と表現せざるを得ない様な先の流れ程ではなく、そこいらの街と変わらない程度につき進める。

俺は思わず唾然としてしまった。

呆然と言っても良いかもしれない。

もしかすると両方を説明に用いなければ表しきれないかもしれない。

簡単に言うと、出入り口に到着する寸前でどういう訳か扉が閉ざされたのである。

「ご丁寧に魔法式の鍵を掛けてあるようだし、扉や壁は他の部屋と比較すると異常と言える程頑丈なのですぐさま破壊して脱出するという戦法は取れない。」

おそらく、受験者全員が入場したので閉められたのだろう。

どこかに係員は居ないのだろうか。

すぐさま誤ってここにいるのだと告げなければならぬ。

もしくは、脱出方法の考案である。

窓らしきものは見当たらない部屋であったので窓を脱出口代わりにして外へと移動するという方法もとる事は出来ないのである。

こういう逃げられないパターン多い気がするなあ、と思いつつ思考を再開する。

「今から選抜試験を開始する！」

声の方を見ると、なにやら劇などで使用されそうな舞台があった。いや、舞台というのは俺の個人的な感想であるので実際に舞台なのかと聞かれると断言はしかねる程度である。

もしかすると、ただの段差かもしれない。

問題はそこでは無かった。

閑話休題だな。

問題は、そこに乗っている二人の人物であった。

一人は、開始宣言を行ったであろう黒髪の青年。

カタブキ　そうオッドに呼ばれていた彼であった。

彼とは知り合いと言える程知り合ってはおらず、寧ろすれ違った程度の認識で問題ない程度の付き合いであるので、彼がどうしようと俺には関係が無い。

問題はもう一人である。

そこにはどういう訳かベヒス嬢が立っていた。

惚けるのはやめておこや。

立ち位置から考えると、試験管的な役割でありそうなカタブキと同じ位置に居る為、ベヒス嬢も試験管的な何かなのだろう。

そして、選抜試験と言っていた。

何の選抜かは現状わからないが、少なくとも四方に居る兵士らしき男達はこれの受験者で間違いないだろう。

机などが無い為、筆記試験では無いので面接か何かなのだろうか。正直、過去のパターンから考えると実技な気がしてならないが、

一縷の望みに賭けてみるのも悪くはない。  
ただ単に諦めきれずにウジウジしているだけの選択なのだけれども。

現状で言える事は、ここからの脱出方法が思いつかないので、それまではこの選抜試験とやらに巻き込まれるという事である。

不法侵入に近いと思われる俺が目立つとベヒス嬢に迷惑がかかりそうであるので、早々に脱落確定になってここから脱出するとか、思いつくまで目立たないようこそそ隠れ続けるかをすべきだろう。いつの間にかカタブキと呼ばれる青年は巨大な斧を肩に担いでいた。

刹那ほど前までは斧が見当たらない所か、それらしいものも、それを隠す場所も存在しなかった。

俺の保存と似たような性質の魔法でも使えるのかと思ったが、カタブキからは全く魔力を感じる事が出来ない。

全くなのである。

一般市民でも多少の魔力があるにも関わらず、だ。  
何やら引つかかる。

ずっと前に似たような気配を感じた覚えがあるのだ。

その時はそいつの気配なのだと気にも留めていなかったが　あ  
あ、そうだ。

これは魔力の無い者の気配　勇者の気配なのだ。  
カタブキは、斧の勇者なのだろう。

「試験内容は簡単だ。ただ、俺　カタブキ　ジュンヤの攻撃に耐えれば良い。それだけだ。数がある程度減るまでは続けるから、まあがんばれや」

ユウトとはまた偉く違う印象を受ける。  
つと、ちよつと待てよ。

カタブキ　ジュンヤ？

カタブキという性は別段どうでもいい。

ジュンヤ？

ユウトとフィニアの会話でジュンヤという名を聞いた様な気がする。

会話に参加していた訳ではないので確実ではないし、そもそもうる覚えなのでどうとも言えないのが実際なのだろうが、嫌な予感拭えない。

俺の記憶によると、ジュンヤという人物は俺と戦いたがるという話である。

聞いた情報を統合すると、所謂戦闘ジャンキーなのではないだろうか。

別の理由で戦うのかもしれないが、俺からすれば戦闘ジャンキーであってもそうでなくても、戦闘を挑んでくるのならそう差はなく危険である。

舞台の上で斧を携えているあいつがそのジュンヤであるのか断定する材料はないが、俺の勘がアイツであると告げている。

そして、面倒くさい、と。

そんな事を回想宜しく思考しているとカタブキが斧を一度大きく振るい、その後二度振るった。

最初の一振りで前方にいた集団が一斉に飛翔し自由落下をする事になった。

一部の運の悪い奴らは自由落下する事なく天井に突き刺さる。かなりの腕力があるのだろうか。

自身の背丈並みの大斧を軽々と振るう事でもわかるが、それ以上に数十人が一度で舞うその光景は圧巻である。

俺は幸いにも後方にいたのでその餌食になる事はなく、傍観を徹することを可能としていた。

斧ならば遠距離攻撃が出来ないと踏んだのである。

離れていたのは出入り口付近で脱出方法を考えていたからだ。

そんな考えは甘かったとすぐに思い知る事になった。

次の二振りによってなのかはわからないが、俺の居る集団を挟むように居た両隣の集団が最初の集団の様に飛翔した。

その飛翔は、集団の中心で爆発があったかのような飛翔ぶりである。

いや、彼らが爆風を体現しているかという様な四方八方へと無差別的に行われる飛翔であるので、爆発が中心で起こったというよりも、爆発が彼ら、そんな表現が脳裏を走った。

実際は、爆発と言うか、原因が集団の中心で巻き起こっているみたいである。

と、よそ見をしていると前方にいた人々が飛翔した。

慌ててカタブキを見ると、既に斧を構え、振るう寸前であった。振るうと大気が乱れた。

やはり、である。

これは、風圧とやらなのではないか。

剣圧とでもいうのか、斧だけだ。

よくよく見てみると、大気に浮遊している細かなゴミがその形をあらわしていた。

その形状は、振り子ギロチンの先端のギロチン部分のみを取り出したかのような形状である。

が、実際の刃物より丸みを帯びているので実際に切断されたりは無いだろが例に倣って飛翔する事になるだろう。

御免である。

カタブキはそれ程早く斧を振るっていないのだが、これが発生している。

魔力も無いので当たり前だが使用していない。

俺にも出来るかもしれない。

どうせ、今から回避しようと思ってても周囲の兵士が邪魔で叶わないだろう。

賭けてみるのも悪くはない。

飛翔は俺にすれば絶対的な致命傷なのである。

下手に飛翔して俺が廃人になってしまったらどうする、と心の中で叫びながらカタブキの動きの一部を真似て生拳突きを行ってみた。

「結構誰でもできることなのかもしれない」

俺は飛翔する事は無かった。

運よくなのか、当然なのかは知らないが、兎に角風の何かの相殺に成功した。

カタブキの様に風圧と表現すれば良いのかわからないが ややこしいので、風圧と表現しておこう を放つことが出来たのである。

その形状は、カタブキのそれとは違い、球体であった。

尤も、速度が凄まじく、楕円に見えるほどであったが。

今まで出来ずに何故急に出来たか。

それも荷物 ベヒス嬢への贈り物 を抱えたままである。

理由として、おそらく、手が長いというイメージで身体を動かしたからだ。

錬金の際に、今の所100%の確率で裾と袖が短かったのでイメージに齟齬があると判断し、その分長くイメージしたのである。

すると、予想以上に効果があったようで、拳は早くなった というより、効率が良くなったと言えば良いだろうか。

何にせよ、以前出来なかった事が少なくとも一つは出来るようになったという事である。

何故イメージに齟齬が発生したかは理解しかねたのだが、おそらく、俺が把握しきれていなかっただけなのだろう。

目立つことは避けたいので、当然、受験者を翻弄していたというか喰らっていた風圧を相殺したとバレたくはない。

すぐさま移動し別の集団へと移った。

幸いにも俺が移動した事はここにいる全員にバレていないらしい。バレていたならば多少なりとこちらへと視線があるはずなのである。

カタブキは俺が先ほどまでいた集団へと睨みを利かせていた。

睨まれている集団は何が起こったのかわからずに、というか何故睨まれているか分かっていないらしく、困惑の表情で震えるばかり

であった。

申し訳ないことをしたと思うが、俺は自分を優先するのである。適当に人気のない場所で寝転がって死んだフリでもしておけば案外バレないかもしれない。

運がよければそのまま不合格者扱いとして処理されるだろう。

そう樂觀視しつつ若干余裕を出していた。

無闇な余裕である。

カタブキはまたもや斧を振るい先ほどまで俺がいた集団を吹き飛ばした。

その後動きを止め眉間に皺を寄せ、何やら考えている素振りを見せていた。

その素振りが無くなったかと思うと、不意にぞくり、とする笑みを浮かべ、腰が捻じ切れるんじゃないかと絞った雑巾ばりに捻り斧を構えた。

いやな予感がする。

それはエドルと相対したときのようにであり、その笑みはエドルのそれを思い出す。

「があああああああああああああ！」

と、叫びながら常人では近く出来ない程の速度で斧を振るった。

ベヒス嬢以外を吹き飛ばすほどの　　ほぼ360°と表現して差し支えない範囲で風圧を放った。

範囲が広がることで威力が緩和されるのではないかと考えたいところであったが、速度が上がっていたり、触れた部分の抉れ具合から先以上の威力であることが見て取れた。

当然、俺の方にも風圧はやってきた。

あれをモロに喰らえば、他の兵士のように鎧など着込まず、寧ろ学生服で言う学ランの様な形状の、只の布を纏っただけの俺の胴体所か全身が粉微塵になること請け合ひであった。

生憎と、俺は露出癖がないため内臓を露出して快感を得られるとも得たいとも思わないし考えていないのでモロ喰らいという提案は

脳内会議にて即刻却下された。

回避してみたかったが、この位置からだとベヒス嬢の辺りまでの移動は間に合いそうにない。

飛び上がるという選択肢は諸所の事情により却下というか、そもそも選択肢に入れるつもりさえない。

コレほどの風圧になると相殺できる自信は無かった。

仕方がないと最後の手段というほどではないが、切りたくない手札を一枚切ることにする。

風圧に背を向ける。

ベヒス嬢への贈り物に傷がついたら眼も当てられない。

背後から着々と風圧が迫っているのが空気の流れて理解できた。

「南無三！」

異常ではない程度で出来るだけ多く、身体に 特に背面を重点的に 魔力を込めた。

魔力は、魔法や能力等を使用する際に用いる生命エネルギーの様なものであるが、それを身体に循環させる形で解き放せば身体強化が出来る。

この身体強化、身体能力等の向上は勿論であるが、それだけではなく、本質的な耐久値までもをある程度引き上げてしまうのである。魔力を込めた俺の身体は襲い掛かってくる衝撃に耐え形を保っていた。

一瞬遅れたり、込める魔力が少なくても粉微塵になっていた所であつたので非常に危険であつた。

一命を取り留めた。

いろんな意味で、である。

下手に上空へと打ち上げられていたら意識を手放すことになつていたので、ほぼ地面と平行に飛んだ俺の軌道は奇跡の賜物だろう。

俺は背を上に向け、抱える鎧と剣を先ほどの配置で抱え、それを覆う格好になつていた。

眼前に刀身の腹があつた。

もしコレが横向きであつたなら俺の顔は真つ二つになつていただろう。

刀身は良く磨かれていて、その腹は鏡のように物を反射していた。

「ん？」

そこに写るものに違和感を感じた。

俺がどこにも写っていないのである。

いや、待てよ

もしかして、もしかしなくても

異世界移動物でよくあるネタなんじゃあないか？

刀身の腹に写る人物は見たことも無い顔の人物であつた。

第十七話 - 戦闘狂は狂気と狂喜に塗れて迷惑 -

「おいおい」

刀身に写る見慣れない顔は俺の真似をして顔を顰めた。

俺とは打って変わって目立つ髪色である。

顔は 待て待ておいおい。

何の冗談だこのやろう。

俺は髪を染めた覚えはないぞ。

顔は多少違うのだが、概ね俺と同じである。

これほど俺の顔のパーツを真似た顔はそうそう現れないだろうし、刀身にのみ写る存在など俺以外にいないと思う。

そんな存在がいるのなら限定条件によってのみ視認出来る俺似の透明人間が存在することになるのである。

そんな存在俺は認めたくないので俺自身であると結論付ける。

もしかしてもしかすると、手足の長さも変化しているという事はないだろうな。

「<sup>ロード</sup>本質探索」

各所計測開始

完了

各部計量開始

完了

総合計量開始

完了

記録出力開始

完了

「ああ、やっぱりか」

だからこそ、俺の思う通りに身体が動かなかったのか。

背丈が変わらなかつたので、厳密には眼の高さが変わらなかつたので気がつかなかつたのか。

俺は目の位置座標の特にy軸に対する座標に敏感であるが、それ以外には結構無頓着なのである。

知った今から考えると俺は何故今まで気がつかなかったのか不思議である。

手足の長さが変わっていても気が付きそうもない。

あれは眼の高さに全く関係がないからである。

そうであるのなら納得がいく事が多少ある。

走査したので、その誤差を鑑みて身体を動かせば問題ないだろう。そう考えると何だか頗る調子がいいと錯覚してしまう。

「おっと」

危ねえ危ねえ。

風圧が俺の真横を通って行っていった。

上手く死んだフリが出来ているのかこちらへと攻撃は来ない。

掠りそうにはなるが。

このまま死んだフリ続行で問題ないな。

周囲の悲鳴が消える頃には俺の安全も確定されるだろう。

気配からして大半は既に意識がないだろう。

風圧は接触しても衝撃しかない程度であるので死んではいけないはずである。

「はあああああ！」

薄目を開けて声の方を見ると、兵士の一人が襲い掛かる風圧を剣で弾く事で防いでいた。

中々やるなあ。

見てみると、同じような方法かどうかは知らないが他にも数人合計8人が が生き延び未だ立ち続けていた。

人数的にもう終わっていても良いんじゃないかと思うのだが、一向に終わる気配がない。

しかも、カタブキの攻撃を避けるという単純なものであったはずなのだが何時の間にか受験者VSカタブキという構成が出来上がっていた。

カタブキの顔を見る限り当初の目的を忘れて対峙しているのではないだろうか。

終わる気配等微塵も見せていないし見えそうもない。

このままだとカタブキの勝利に終わり、全員地に伏し、再度試験をやるなどというふざけた現象が発生してしまわないかが非常に心配である。

このままでは負けるということを受験者も感じ取ったのか互いに協力し迎撃しようと努めていた。

激戦地にそれとなく近い位置にいた俺は、激化したこの状況ではこの場所は危険であると判断した。

幸い、戦闘の傷跡として地面が抉れたりしたお陰で瓦礫という名の障害物が所々から頭角を現していた。

文字通り頭角であったが。

俺はばれない様死んだかのように気配を消し障害物を辿って距離をとることに成功した。

壇上のベヒス嬢を見るとおろおろしているだけであった。

いや、何やら口をパクパクとしているので発言しようとしているのだろうがそれは彼らの耳に届くことはなさそうである。

カタブキと相対している受験者。

総勢8人であり、その中の3人は規則正しく兵士の格好をしているが残りは独特な改造を施したりそもそも兵士の格好でなかったりしている。

ローブを着た魔法使いらしき男は、どういう仕組みか理解できないが、パーツの一部が宙に浮いている杖を振るっている。

魔法の威力はとも高くない。

しかし、内包魔力がそこそ高そうなのでもしかすると本気でないとか攻撃系が苦手であるとかなんじゃあないだろうか。

忍者の格好のような男もいた。

忍者の格好とは言っても、一見して忍者と分かる程度である、本物の忍者のような着物的な服装ではない。

口元を布で多い隠し、全体的に黒や紺といった色の布で構成された兵士の服を改造したような服装であった。

手に持つクナイの様な武器が彼の忍者というイメージを固めている。

他にも空手家の胴衣の様な形状の服を身に纏っている男もいた。

彼の筋肉を見れば格闘家である事は見て取れる。

体つきから武術自体はそれ程学んでいないようである。

その筋肉を見れば分かるとおり、ただ殴るだけでそれなりの破壊活動を行えるので、それにモノを言わせているのではないだろうか。

次に目に入ったのは奇抜格好は剣士であった。

身の丈に合わない巨大な両手剣を構えていた。

が、それに見合った重量に振り回されているように見受けられた。

彼の年齢に比例しない年季が漂う両手剣は誰かから譲り受けたなごいわくでもあるのだろうか。

自身にあわない武器を扱うことは戦場では死に直結するのでお勧めできないが、稀にああいう奴がいる。

俺ならいわくがあっても使いはしないか、使いこなしてから実践で使っだらうなあ。

最後は、オッドのおかげで見慣れた白衣である。

オッドのようにボサボサ白衣という名称が似合う髪形ではなく、ちゃんと切り揃えられ整えられていた。

名称をつけるならイケメン白衣である。

イケメンなのだ。

何の掛け値もなくイケメンで、殴り飛ばして顔の皮を剥いでもしまおうかと耄碌したのかと思ってしまいそうな思考へと至りそうな程イケメンである。

イケメンとはイケイケな面って意味なのだろうか。

閑話休題。

ローブが何やらブツブツと呟くと周囲にあった瓦礫に魔力の糸のような物が無数に飛び、ガムのように引っ付いた。

すると、それらは宙に浮きカタブキへと襲い掛かった。

それを分かっていたかのような勢いで両手剣持ちと忍者もどきは疾走し、残りの格闘家と兵士の格好のやつらは一瞬きよんとした後に動き出した。

格闘家は俊敏力やら洞察力といったものが重要だと思っただが、あれで良いのだろうか。

まあ、何にしても死んだフリの後に瓦礫に身を隠し安全地帯へと避難した俺が不平不満にも似た観客的な台詞を言う資格等ないのだからうけれど。

兵士の格好をした男達は元々同じ部隊だったのかそれとも偶々仲が良かったのか、はたまた同じく軍に所属しているので戦い方が酷似していただけなのかは知らないが、動きに統率があった。

少しの時間差を含め、カタブキからすれば連撃になるよう剣で切りかかっている。

ローブはまだブツブツと呟き瓦礫をカタブキへと襲い掛からせている。

格闘家は力にモノを言わせて追い詰めようと殴りかかる。

両手剣も同様に力に自信があるのか真正面から切りかかる。

いや、あれはどちらかというところ、切るという動作ではなく叩くという動作である。

忍者は両手剣と格闘家の攻撃の隙間を縫ってクナイを投げ牽制している。

が、それらを持ってしてもカタブキは傷一つつかなかった。

兵士の連撃を全て斧で上手く受け流したり、剣そのものを弾いてしまったりする事で凌ぎ、襲い掛かる瓦礫の大半を回避し、残りは斧を振るうことで粉碎している。

格闘家と両手剣の攻撃はカタブキにとって最もいなし易いものであっただろう。

彼ら二人は腕力にモノを言わせたいらしかったのだが、生憎、カタブキの腕力の方が数倍あったため、単純に受け止めはじかれる。

忍者のクナイも同じであったかもしれない。

クナイに向けて斧を振るうと風圧が発生し、それに流されてクナイはあらぬ方向へと飛んで行ってしまった。

それが終わるとカタブキは怪しくにやり、と口の端を吊り上げた。背筋がゾクゾクと悪い意味でする笑みであった。

相対する受験者は皆様々な方法で自分に勝ち目がないと理解したと顔で表した。

このままでは全滅するしかないだろう。

受験者の中に何かを極めた達人のような存在はいそつにもない。

多少何かを齧った武芸者、という程度だろう。

ベヒス嬢は未だにおろおろしたままである。

現状だと装備がないので黄金色のアレは出せないのではないだろうか。

うつむ。

ここはやはり止めた方がいいのではないだろうか。

最初に吹っ飛ばされた野郎どもは端まで飛ばされているのである程度安全ではあるが、絶対ではない。

流れ弾的に殺傷効果のある攻撃が飛んでいけば間違ひなく回避できないだろう。

意識がないのに回避できるのであれば今、意識を失っているという状況は訪れていないだろうし。

だけれど、下手に出て行って目立ってベヒス嬢に迷惑をかける事態にはなりたくないからなあ。

うつむ。

今ならベヒス嬢に聞きに行くことができるかなあ。

カタブキは受験者にニヤニヤ。

受験者はカタブキに集中しないと大変なことになりそうだし集中している。

一応、そういう状況であるが、バレない様に気を使って歩を進めた。

瓦礫の間を縫い、受験者とカタブキの視線を縫い何とかベヒス嬢の元まで移動することが出来た。

幸いにも、ベヒス嬢の付近にも瓦礫は存在し、それに身を隠して話しかけることが出来そうであった。

壇上付近からベヒス嬢まではすぐに移動することが出来た。

ベヒス嬢の横の瓦礫まで移動したがベヒス嬢はおれに気がついていないのかおろおろしたままであった。

今更なのだが、これって何の選定試験なのだろうか。

「ベヒス、これって止めた方がいいのか？」

声をかけるとびくり、としこちらを見た。

俺に気がついていなかったのか目を見開いて驚きを表していた。

「……どうやってここに来たのですか？ いえ、どうやってここまで来たのですか？」

どうやら、俺がここまで来た事どころか、この部屋にいたことさえ気がついていなかったらしい。

まあ、最初はその他大勢に紛れていたし仕方がないかなあ。

「ここに、ってのは、まあ最初からいたよ。ここまで、ってのは普通に向こうのあー、あの三角形になってるやつな。あの瓦礫から歩いてきた。まあ、バレない様に気配は消してきたけど」

と、俺は先ほどまで隠れていた瓦礫を指差し言った。

取り合えず、どうしたらいいだろうか。

「で、これって何の選抜試験　そんな事聞いている場合じゃないか。で、これって止めた方がいいのか？　一応、俺がベヒスのおかげでここにいてるってバレて不味いかとかわからんから傍観してるけれど」

「止めた方がいいでしょうね。斧の勇者　あの黒髪の斧を携えた人物ですが　は、少々戦闘を好む傾向にあるようなのです。簡単に言えばバトルジャンキーというものでしょう」

やっぱりなあ。

取り合えず、瓦礫やら流れ弾やらが飛んでくると危ないのでベヒ

ス嬢に装備を渡しておくでしょう。

「ベヒス、危ないから取り合えずこれ装着しといてくれ」

「これは!？」

ベヒス嬢の先の鎧はお手製だったのだろうか。

魔法陣が理解できるらしい。

ならばこれの効果も理解できるだろう。

「それで、黄金色のあれを出せるようになるよ」

さて、と。

俺はこれを止めるとしようか。

だけれど、迂闊に入れないなあ。

二つの勢力は今まさに戦闘中というか殺し合いの真っ最中訳だし下手に入れば両方の攻撃を喰らうことになる。

カタブキは戦闘相手がいるから暴走しているのだから戦闘相手を倒してしまえば良いんじゃないだろうか。

幸い、受験者側は大した強さではない。

「ナーク、後は私がやりますので逃げてください」

と、言いつつあわあわと鎧を装着し始めた。

言動と動作が一致しないとはこの事なのだろうか。

そして、あわあわしている割に装着は中々終わりそうにない。

ベヒス嬢の鎧は通常の鎧とは形状が違い、動きやすいのだが、装着するのは非常に面倒な形状なのである。

後、数分はかかるんじゃないだろうか。

その間、姿を隠すという選択肢もあるが、受験者側は兵士の格好のヤツが既に一人吹っ飛ばされて動かなくなったので全滅までそう長くはないだろう。

だけれど、これって下手すれば死人が出るからなあ。

個人的に、死人を目の前で出たくはないので片付けてしまおう。  
「それじゃあ、間に合わないだろうから、まあ、時間稼ぎぐらいはやるさ」

俺は瓦礫に身を隠すことを放棄し、身を踊りださせた。

すると、カタブキの注意が俺に移り、それに追隨して受験者の視線もこちらに集まった。

「おめえら、ベヒスが困ってんじゃん。もう人数大分に絞れたんだから止めといたらどうだ？」

等と俺が言うはずも無いしするはずもない。

どこからが俺の妄想か。

それは当然、瓦礫に身を隠すことを放棄する辺りからである。

実際は、当然のようにベヒスを瓦礫の影に引き込み、そのままである。

瓦礫の影から出るなんてとんでもない！

奴等と戦うことはさして問題ではないのだが、バトルジャンキーがあの中にいるのが問題なのである。

受験者側を倒すことが楽そうに聞こえるが、実際、倒してしまうとバトルジャンキーがその名に倣って戦闘を申し込んでくるというか、強制的に開始してしまうのではないだろうかと思う。

そうになると、非常に面倒であるので回避したのである。

前言撤回してベヒス嬢に任せるといふ選択肢もあるのだが、ベヒス嬢の黄金色のアレを使用すると死人が出る気がしてならないのである。

そうになると、カタブキという名のバトルジャンキーを姿を見られる前に倒してしまうのが最も後腐れがなさそうである。

もしくは、戦闘で倒した後一部の記憶を消去するか、であるな。個人的には後者が楽そうではある。

魔法で記憶など消せそうだと俺は思う。

無ければ涙目になること必至であるけれども。

まあ、時間稼ぎだけなので何とかなるだろうよ。

取り合えず、受験者に襲い掛かる斧を全て風圧にてはじき返す。

風圧は何だか、デコピンの要領で親指を弾くだけで発生したので案外気軽に行える動作である。

カタブキの斧を弾くほどとなると相当力を込めて親指を弾かなけ

ればならないので段々痛みを伴ってくる。

それ故にこの方法を一貫するという素晴らしい提案は涙を呑んで却下することになった。

俺はレパートリーがあまりないのでさっさとベヒス嬢の準備が万端になることを願うばかりである。

次は気配を消して地味に攻撃の妨害でもしてみようか。

気配を消し、付近の瓦礫の影まで移動する。

カタブキが移動するのを待ち、個人的に絶妙なタイミングで魔力の糸を軸足に引っ付け引っ張る。

当然、自然の摂理に従って転倒する。

なんて、思っていた時期がありました。

カタブキはそのまま転倒せず、斧を片手で持ち、無手側で身体を支え、その勢いに乗って体操選手も真つ青のアクロバット動作を決めてみせ、おまけに着地も素晴らしく綺麗に決めて見せた。

勿論、俺のほうに向かつて斧を振るうのを忘れずに、である。

厳密には俺を狙ってではなく、糸が飛んできた方向を狙ったので、回避はたやすかった。

もしこれが俺を狙っていたならば防御運動に入らざるを得なかっただろう。

斧は何か魔法でも使用しているのか、面白いように瓦礫を粉碎していった。

なんだろう、あの斧は物の抵抗でもなくしているのか？

いや、実際に瓦礫に当たるたびにカタブキの筋肉が膨張しているため、腕力で押し切っているのだろう。

信じられないことである。

その力は人間で出せるのかと疑問に思うほどだ。

そして、そのまま受験者を襲う。

それを風圧にて弾く。

このループが発生していた。

数分すればベヒス嬢も戦線に出るためそれまで耐え切れれば問題な

いのである。

ベヒス嬢に任せれば先も言ったが 思ったが、死人がもれなく現れそうだが致し方ないかなあ。

個人的にはベヒス嬢が攪乱している間にカタブキを誰かが仕留めるのが最も好ましいと思う。

「それでは後は私に任せてください」

声の方を見ると、準備万端のフルアーマーベヒス嬢が佇んでいた。

「

死人が出るのがやっぱり嫌なので先に思いついた作戦とも呼べないし戦略とも呼べないそれを一応提案しようと言口を開いたが、その時点で既にベヒス嬢は戦場へと向かっていった。

とはいっても、俺も先の妨害の為に戦線近くまで進出していたのでそれほどの距離は無い。

ベヒス嬢が何時の間にかフルアーマーとなつて現れたことに全員が驚いた表情をしていた。

「ライトライオン黄金色の断裂、鎧は大破したんじゃないか？ それに、剣は一振りしかなかったと思つていたがなあ」

と、フレンドリーの話しかけるカタブキであるが、こちらからすれば是非ともフレンドリーにはならず、数百メートルは距離を起きたい危険しか感じない笑みを浮かべていた。

うつむ。

あの顔を浮かべる様になつちゃう状態がバトルジャンキーと呼ばれる要因のひとつなんだろうなあ。

「色々あったのです。」「夢幻の解砕」、選別はこの人数までで

十分のはずです。剣を 貴方の場合は斧でしたね 斧を収めてはどうですか？」

その言葉にカタブキはニヤリニヤリとするだけである。

元々ニヤリニヤリとしていたので何も変化が無い為、もしかすると何も反応を示していなかったかもしれないが俺の知るところではなかった。

受験者側は、何となくほっとした雰囲気伝わった。

だが、それは早計というものだ。

バトルジャンキーはこの程度で収まるヤツではないのだ。

もつと鬱陶しくて暑苦しくてしつこいのである。

「これは、ライトライン黄金色の断裂がライトライン黄金色の断裂を止めるから次期ライト黄金色の断裂をイン選定する為のものだろう。だが、普通の野郎にライトライン黄金色の断裂をやらせても面白くないからなあ。だから俺が選定してやろうと良い提案をしてるんじゃないかあ」

非常に迷惑なので今すぐ止めてください。

そう声を荒げて叫んだ後に説教を開始したくなるがそれ程の勇氣、俺には無い。

というか、これってライトライン黄金色の断裂を決めるためのものだったのか。いやいや、それ以前に、ベヒス嬢はライトライン黄金色の断裂を辞めるのか。

俺との騒動の後なので、それが原因であると思わざるを得ない。

なにやら責任問題になって辞める羽目になったのだろうか。

それならば非常に心苦しい。

「選定するのは貴方ではありません。一定以上の適正がある方を選定し、それ以降は王がお決めになることです。貴方には決める権限はありませんし、ライトライン元黄金色の断裂である私にもそれは言えることでしょう」

そんなベヒス嬢の言い分というか説得というかなにやらよくわからないが、それはカタブキの耳には届いていそうも無かった。

表情は相変わらずニヤニヤである。

俺ならば殴り飛ばしているところだが、ベヒス嬢は辛抱強いらしく眉一つ動かさず相対している。

いや、あの顔は辛抱強いとかじゃあなく何も感じていない、といった様な表情であった。

というか、現状、戦闘して出る問題点としての筆頭であったベヒス嬢に迷惑がかかるという項目は削除でいいみたいである。

まあ、次点のバトルジャンキーのターゲットになるという問題点

があるのでそうそう大っぴらに戦闘に介入したいとは思わないけれども。

「ライトライン 黄金色の断裂よお。そんなに俺を止めたいなら俺と戦って止めれば良い！ 力が全てだ！ それ以上に強力で楽しい事は無い！」

バトルジャンキーご苦労様です。

そんな台詞を吐いている間、隙が出るかと思っただがそういう訳も無く、その間に攻め込んだ受験者側の攻撃をいなしていた。

俺は一応、それに反応して受験者に襲い掛かる攻撃を風圧によって相殺しておく。

「さつきから飛ばしているこの風圧はお前か？」

「さあ、どうでしょうね」

危ねえ。

やっぱり風圧の存在にはばれていたか。

気配隠してなかったら今頃俺の存在が露見しているところだったんじゃないだろうか。

中々どうして、口先だけではなくそこそこの使い手らしい。

正直、望ましくなく、弱い方が話が早くて助かったんだけどなあ。

ベヒス嬢とカタブキから感じる互いへの殺気を考えると絶対に平和的解決は行われないうし。

俺は隙あらばカタブキの意識を刈り取って、隙無ければベヒス嬢の援護を影ながら行えばいいかなあ。

そう考えていると、カタブキとベヒス嬢は動いた。

第十八話 - 技術は力よりも面倒くさい - (前書き)

PV60000、ユニーク10000突破しました。

これも皆さんがめげずに読んでくださったお陰です。

感謝です。

## 第十八話 - 技術は力よりも面倒くさい -

ベヒス嬢は動くや否や躊躇無く黄金色のアレを出現させ切りかかった。

その長さは上手く受験者に当たらないよう配慮され伸縮していた。かなり器用だなあと俺は感心するばかりである。

今ベヒス嬢が使用している鎧と剣は俺が作成したものだ。

多少、汎用性を高めたほうがいいだろうか幾つか改造した状態で作成したのだが、役に立つといいなあ、程度に眺めつつ、ベヒス嬢に降り注ぐ攻撃の幾つかを風圧によって弾いた

崖をも切り崩した黄金色のアレであるが、カタブキの斧は切り裂けないらしい。

全て受け止められている。

熱を受け流して切断を防いだりしている素振りは無いので純粹に切断できないのだろう。

そういえば、勇者の扱う武器って総じて神器とか呼ばれているあのカスみたいな神が授けたものだったか。

ならば切断されないのも頷ける。

カスはカスでもすごいカスなのである。

他者がどう言おうと社会の神の評価が文字通り神であったとしても俺の中のこの評価はそうそう揺るがないだろう。

絶対と断言しない所がポイントである。

二人の攻防はかなり激しいものであった。

一般人が二人に触れるまでも無く、10mぐらいまで近づきただけで問答無用で消し飛ぶだろうという具合である。

もしかすると、それ以前に消し飛ぶかもしれないが。

俺は職業が文字通り空気にはなりたくはないので不用意には近づかず少し距離がある瓦礫に身を隠している。

臨機応変に移動して適切な位置を陣取るのが俺の役目であると言

つてのけてしまいそうである。

当然、俺の役目はそれではないので泣く泣く危険を冒さざるを得ない。

俺の役目はカタブキの隙について奇襲をかける事だと勝手に考えている。

ベヒス嬢に宣言していないというか、そもそも宣言していないので、俺以外の全員は、俺の役目は自重してこつそりと瓦礫の隅を住処にする小動物宜しく隠れる事が役目であると言っただけではないかと言っ程に行動が伴っていない。

多少へっぴり腰であるので余計なのではないだろうか。

そのへっぴり腰により発生する背筋の具合が小動物のそれに似ているんじゃないかなあと、無駄な思考に耽りつつ隙を待つばかりである。

徐々にこの戦闘中で一度も奇襲をかける隙など発生しないのではないかと不安になってくるが、ここで早まると奇襲は成功しないだろう。

下手をすれば奇襲どころか攻撃を仕掛ける前に流れ弾に当たって死亡なんて自体もまあ無くはないのである。

俺は未だに魔力を展開する事に慣れていない。

それ故に戦闘中の殆どというか、現状は数回を除いて魔力を使用していない。

というか、使用し忘れる。

最初に魔力を展開してから戦闘を開始したとしても何れ忘れて魔力の展開が無くなるだろう。

そんな俺の防御力は神ではなく紙なのである。

負の意味では神な防御力だけれども。

おそらく、この世界での一般人よりも防御力は低いだろう。

一般人でも多少の魔力を内包していて、常に少量は展開しているのである。

名称的に飛び跳ねないといけないのかと思える週刊雑誌にどうい

う訳か毎週ではなく適当に載せられている某ハンターの漫画で表現するのであれば、俺は常時”絶”の状態なのである。

その脆さが良く分かるといふものだ。

それはもう涙が出そうなほどで、戦闘ならば血が出る程なのである。

度が過ぎれば肉体から魂が放出されて肉体の主導権を放棄する事態になりかねないものである。

そう考えると、エドルや魔族といった強者であると思われる

少なくとも魔族は一般人より強いし、エドルは人間で最強に位置する一人じゃないだろうか　と戦闘を行って良く生きていたものだと自身に賛美を送りたくなる思いであった。

そんな状態で、当然、瓦礫に身を隠し息を潜める今もそれである。所謂、絶の状態である。

流れ弾で死に瀕する可能性を十分と秘めたその状態を回避しよう　と魔力を高めても良いだろうが、慣れない事をして隙を見逃すなんて事になってしまつては目も当てられないし、そもそも魔力を垂れ流しにすれば俺の肉体強度やら身体能力やらが上昇して生存率が上昇すると思いがちであるが、魔力を垂れ流しにすると魔力使用である者に存在を感知され易くなるのである。

つまり、感知されて発見されてフルボッコされてもう一度物理的に精神的には分らないが、あのバカ神に直面する可能性が出るうえに、あの世と呼ばれる世界　俺の場合は地獄と呼ばれる場所だろう　に引越し、恐らく長期間滞在する事になるだろう。

それを鑑みると、物理的な面での生存率は上昇していそうであるが、総合的な生存力は低下するのは目に見えていた。

それ故に魔力を全く展開せずにいるのだが、恐慌状態に何故ならないのかと疑問に思う程度に恐怖に圧迫されて物理的には兎も角、精神的に死んでしまいそうであった。

ストレスで白髪とか増えてないよな？

現在、髪の色が黒から別の色　刀身に写つたものを丸々信用す

るならば恐らく金　　になつたのだが、それでも尚白髪になるのだろうか。

記憶によると、金髪の人々も何の問題も無く白髪になつた覚えがあつたが、何分幼少時代の記憶であつたので定かでは無かつた。

そう考えている間にもベヒス嬢とカタブキの殺し合いは続いており、打ち合う数は50合を超えている。

両者ともにその動作が準備運動の役割を果たしたのか一つ一つの動きが速くなっている。

ベヒス嬢は俺の出身世界で言う達人の一步手前の人間の平均の速度と同等である。

カタブキは最早それを超越して残像を見せている。

速度は明らかにカタブキが上であるが、戦況は均衡している。

速度面で負けているベヒス嬢が均衡に持ちこめているのはカタブキの武器の扱いの技術が無いに尽きる。

いや、厳密には年間に伴つた技術は存在している。

召喚されて数年は経過しているらしいのでそれ相応の技術はあるのである。

場数も勇者と呼ばれているだけありそこそこなしているのだから。

それ故にそこいらの兵士よりは扱いが上であるし、少なくとも受験者よりも格段に扱いは上手い。

だが、それをもつてしてもベヒス嬢の技術と比較してしまうと些細なものとなつてしまうのである。

ベヒス嬢のそれはかなりの腕前である。

達人と呼べる程であるかは首を傾げざるを得ないが、もしかすると首を傾げて考えた末に達人であると判断するかもしれない。

それ程なのである。

技術に差があり、それを武器に均衡に持つていつているベヒス嬢に驚嘆して以外にそれを表現する方法を思いつかなかつた。

だが、均衡に持ち込んでいるだけでは勝敗は決さない。

おそらく、最終的に体力が先に無くなった者が敗者になると言  
た安直と言うか単純というかそういつた結果になるだろう。

そうになると、女性であるベヒス嬢が不利であるのは明白である。  
両者の自身の精錬がどれ程なのかにも左右されるだろうがいか  
なものだろう。

どうもその辺りは魔力などがあるからか前の世界の様に肉体を見  
て察すると言うことが一概には行えないのである。

現に、ベヒス嬢はかなりの剣の使い手であるが、それらしい体つ  
きはしていないように思える。

カタブキは斧の扱いについてはこの世界に来てからと読みとれ、  
何らかの武術を長期にわたって行っていた事が分かる程度である。

両者未知数な部分が拭いきれないので勝敗の予測を立てられない。  
取り返しがつかなくなる前にベヒス嬢の援護を行った方が良好だ  
ろう。

「ハツハハハ！ やるな！ ライトライン 黄金色の断裂！」

とそんな五分かどうかも負けけるかも勝つかも何も予測が立てられ  
ない不安定な戦闘にも関わらず笑みを浮かべカタブキは叫ぶ様に言  
う。

この激戦でもなお俺の耳に届く声である。

「それは光栄ですね」

とベヒス嬢はベヒス嬢でこの激戦に対して苦渋の表情も何も浮か  
べずに相対している。

一見笑みを浮かべるより余裕が感じられないので普通に思いがち  
であるが、それは錯覚で気のせいである。

寧ろ、笑みを浮かべる方がマシである。

自身がその場に身を置けばその異常性が理解できるだろう。

前の世界にも何人かの達人はそんなヤツだった。

「そろそろ出し惜しみしていたら負けちまうなあ！」

カタブキの移動方法に変化が生じた。

ベヒス嬢も気がついたらしく警戒を露わにしている。

「分歩法」

俺や受験者からすれば何をゆっくり歩いているのだろうと、フルボッコしまくれるじゃないかと思えるだろうが、対象であるベヒス嬢にとってはそうではない。

ベヒス嬢にはよくある漫画の様に自身を中心に円形に移動し始めたかと思うと分身体が見えるようになってきている事だろう。

あれは、特殊な歩法を用いて目の錯覚を利用した錯乱歩法の1つである。

箕田月。

確か、そう名乗っていた流派であった。

その流派は古武術でありながら、攻撃的な技どころか、手技、足技、寝技、投げ技全て存在しない。

あるのは唯一つ、歩法だけである。

歩法だけで戦況を覆し相手を屈する歩法を追求した奇抜な流派なのである。

その不可思議な強さ故に、偏った技術の身でありながら古武術と称しても許されていたある意味の実践的な流派である。

その中でも分歩法は基礎の基礎と言われる技であるが相手を十分に攪乱できる。

特にカタブキはかなりの使い手であった。

全身の筋肉の付き方が素人のそれとあまり変わりが無いと思ったが、これが原因だったか。

分歩法というか箕田月流は特殊故にかなり疲れるハズなのだが、カタブキは慣れているのか余裕の表情である。

ベヒス嬢は冷静を努めようとしているが、驚きを多少隠しきれないようであった。

短い期間とはいえ幾らか武芸者を見てきた俺だが、全員魔力などを使用した戦闘方法になっているので力や魔法にものを言わせがちで、カタブキの箕田月流の様に特殊な技術は確立されていないのだろう。

初見で達人程ではないが片足を突っ込んだような奴の分歩法を見せられたら相当焦るだろう。

しかも、今回はそれが対戦相手なのである。

魔力を使用しない為、魔法の様に解析してどうこうなるというものではないので、魔力や魔法に慣れたこの世界の住人は一際混乱するだろう。

何せ比較するものも参考にするものも存在しない完全な未知の存在で、しかも、知っている者からしてもかなり特殊なものなのである。

混乱しないはずが無く、カタブキの錯乱歩法は十分役割を果たしていると言えるだろう。

これはベヒス嬢が不利か。

俺もそろそろ姿を見られないとか言ってる場合じゃないかもしれない。

何せ、分歩法は対象以外にはただゆっくりぐるぐる回っているだけに見えるのだが、そこを攻撃したとしても他の歩法と合わせて反撃を十分に行えるのである。

受験者がこの機に突っ込んでやられてしまっていないかと一瞬心配になったが、どうもベヒス嬢が何やら察知したのか受験者に来るなど言ったので受験者はやられていなかった。

ところで、これって次代の黄金色のライトライオン断裂を選定するものだったはずなんだけど、なんだろうこれは。

完全にカタブキの暴走により当初の目的など全く関係ない事態になっちゃった。

この施設にいるであろう受験者で無い兵士が止めないし見にも来ない。

カタブキは位が高いようだったので職権乱用というものを行ってこの場を作り上げたんじゃないだろうな。

寧ろそんな気がする。

ベヒス嬢的には黄金色のあれをカタブキを巻き込む程度に伸ばし、

地面と平行に構え、一回転するといった所謂回転切りの様な方法を取れば攻撃が届くと思うだろうが、カタブキは当然回避するだろうし、回転している隙に攻撃を貰いそうなので躊躇しているのだろう。俺がベヒス嬢ならやりたくないなあ。

「しゃーねー」

俺は瓦礫から飛び出す。

敵密には走り出した。

端からラストスパートの最高速に近い全速力での疾走である。受験者は俺の動きに気が付いていないのかこちらを見てもない。一人忍者らしいやつがこっちに気がついたな。

俺に気がついたというよりも何やらが高速で移動した程度の認識だろうけれど。

カタブキは現在俺に背を向けた位置関係であった。

俺が走り出したのは、この位置関係なら奇襲が成功するのではないかという淡い願いに賭けたのである。

よくある漫画の様に攻撃の瞬間に「うおおおおお！」とか「はあああああ！」なんて掛け声らしい掛け声はおるか、声さえ出さずに息を潜め、ただし全速力と言って過言でない程度に首へと向かって拳を放った。

この状況なら勢いに任せて飛び蹴りをしたかったが、飛翔すると俺の意識が消滅してしまいそうであったので断念した。

本当にこの俺の特徴とも言える無駄な特性は邪魔である。

役に立った事があるのか疑問である負の特徴である。

こいつのせいで相当戦術が狭められている。

と、ぐだぐだ思っても仕方が無いので思考を開始しよう。

結果を言うと、俺の奇襲は失敗した。

普通にしゃがんで回避されてしまった。

ったく、ありきたりな言葉で悪いが、後ろに目がついているのかこいつは。

反撃の斧の一閃が俺へと襲いかかったが身をよじる事で回避でき

たので行幸だろう。

奇襲の成功への期待はそれ程ではなかったからそれ程落胆はしない。

ベヒス嬢も俺の奇襲の回避を行った際に攻撃を仕掛けたが、それも反撃に使用する前の斧で弾かれて終わっていた。

「なんだお前はよ。俺は愉快に殺し合いをやってるってのに」と、カタブキは物騒な発言をしつつ俺を睨みつける。

完全にカタギの目ではなくその筋の人の目つきであった。

言ってしまうば怖くて膀胱から液体をバーゲンセールかと思えるぐらいにぼんぼん放出しかねない目つきである。

俺の怖い顔耐性がマスターの御蔭で強化されていなければもれなくそれを実現していたかもしれない。

顔を見られたら絡まれる可能性があるのでカタブキが睨む寸前に布を取り出し顔にまきつける事によって対策を講じた。

俺の顔見られ耐性は絶賛低下中なのである。

受験者はようやく俺を視認出来たらしい。

今頃ざわめいている。

「だんまりか？ まあ、良い。どっちにしてもぶち殺すだけだ」

非常に物騒で出来れば関わり合いたくないと思わざるを得ない台詞を吐いて斧を肩に担いだ。

個人的にはこいつをぶち殺してしまうか、全力でここからの脱出を講じて闘争するのが最も簡単そうではあるのだけれども。

前者は、勇者を殺してしまつたら敵側と戦うことになつたら頭数が足りない事がどう影響するかわからないので却下。

後者はベヒス嬢を連れて行こうと思えばおそらく逃げ切れないだろうし、ベヒス嬢に迷惑がかかるだろう。

そもそも、ここは扉が閉ざされた閉鎖空間である。

おそらく鋼鉄で作られたであろう何やら他よりも妙に頑丈で、魔法陣でも刻まれているのかなにやら不穏な魔力を感じるそれを破壊するのは手間取りそうなのである。

普通に窓から出るといふ選択肢もあるが、意識を放棄して逃げ切れるとは思えないので断念せざるを得ない。

ベヒス嬢は別段息を切らせて疲れを見せるなんて事は行っていないのでまだ余力があるのだろう。

ならば、多少自衛してもらつとして早々にカタブキにはご退場願うのが賢明なんじゃないだろうか。

問題は、すでに手遅れ気味だが俺がこの戦闘に介入し、目をつけられてエドルの行き先を聞けないだろうという事である。

顔は隠しているとはいえ、急に近づいてくるものを警戒する程度には介入してしまつてゐるだろう。

生憎と、それらを緩和するように存在する記憶消去の技などは俺は知らないので外部刺激による解決は諦めなければならぬだろう。となると、残された手段は当然意識を刈り取る形での生捕りという事になる。

相手を生かして勝つという結果を出す事は最も難しいものなんだが、やむを得ないか。

こいつ自体は別に殺しても いや、ダメか。

ここでも殺してしまつたら何らかの形で同じようになってしまつたろう。

決して俺は以前の世界での事に良い思いを抱いてはいないのだ。寧ろ嫌悪するぐらいである。

自身のやらかした事なので嫌悪する資格等ないのかもしれないけれど。

そついう訳であるのでベヒス嬢の攻撃はカタブキが死にかなないようなものばかりであるので俺がやらざるを得ない。

受験者にやらすという方法もあることにはあるが、実力差的に現実的ではない。

そこまで負担を背負つて勝てると断言できるほど俺は強いとは思わないし自惚れるつもりも無い。

「分歩法」

カタブキがそう呟き俺とベヒス嬢の周囲を円状に回ろうとし始めた。

「……ベヒス、下がってけ」

ベヒス嬢に迂闊に攻撃して貰うと目的が達成できない可能性があるのではやむを得ない。

個人的には心細いことこの上ないのだが。

何せ、箕田月流を見た事などはあっても実際に戦った経験が無いのである。

未知数に等しい。

実際に見たりやったりするのは違って相対するとなると印象は相当変わる。

特に、この箕田月流の様に、主に対象にのみ影響を与える対一の武術は。

「貴方だけに戦わせるわけには行きません」

とは言われても今ここで戦闘が始まるとおそらく周囲を守る余裕がなくなるんじゃないだろうか。

ベヒス嬢が怪我をしたり死亡したりするのは望むところではないのである。

「ベヒスの攻撃は致命的なモノだから今回の戦闘には向かない」

というと、理解していたのか唇を強くかんでいた。

どことなくベヒスが握る剣が軋みをあげたように思えた。

「わかりました。負けても良いですから決して死なないでください。」

どこまで出来るかはわからないけれどね。

「ああ、何せ俺はベヒスに一度勝ってるんだからな」

そういうとベヒスは頷いて後方に下がる。

受験者に何か言ったらしく、受験者の下がる範囲まで下がって行った。

これで、周囲に気を使わなくていい。

強いて言えばこのマスクの役割を果たす布は死守しなければなら

ないけれど。

そうこうしている間にカタブキは俺の周囲をぐるぐる回り分歩法を発動してきた。

足音は単一でありながら複数のカタブキが目映る。

只の幻影であるので何とかなる。

俺には神から授かった素晴らしい能力があるのだ。

何、単純な話である。

耐久値を視ればいい。

本体以外は目の錯覚によるものだ。

つまりは、幻影やら蜃気楼やらそういったものなのである。

虚空の存在。

で、あるなら耐久値があるはずがないのだ。

あつたとしても本体とは歴然とした差があるだろう。

それ故に、耐久値が視える存在、又は耐久値が他よりも高い存在が本体なのである。

それにさえ注意すれば、分歩法は普通に走るよりも遅い歩法であるので避けるのはいとも簡単にこなせてしまう。

それだけでなく、反撃という名のカウンターを凶ることも可能なのだ。

「お前、見えてるのか」

とカタブキが話しかけてくる。

俺の反則故の成功が見破られたらしい。

一瞬カタブキは視界同調の様な反則的技が使用できるのかと思っただがそうではないようである。

目線から俺の目を見ている。

ああ 視線を読まれたか。

確かに、本体を注視していたので目線は本体に注がれることになる。

それからバレたらしい。

良い作戦だと思ったのだがどうも俺は考えが足りないらしい。

本体がバレていることを知ったカタブキは歩き方を変化させた。分歩法での戦闘は諦めてくれたらしい。

「まったく、何モンだお前はよお。分歩法以降の発展やら派生技は疲れんだがな。まあ、その分きっちり殺してやるよ」

どうやら、分歩法よりも難度の高い技をやらかしてくれらしい。俺としてはこのまま諦めてもらうのが一番良かったのだけれどその提案は飲まれそうに無い雰囲気であったので口に出す労力を負担する事を破棄して次の攻撃に備えることにした。

いや、攻撃というより歩法に備えたのだけれども。

カタブキが歩法を変化させると分身は消失した。

どうやら分身が出るというややこしい技ではなくなったらしい。

俺は内心喜び叫びテンションがこの上なく上昇したのだが、それは滝壺に落ちるが如く急激に下がることになる。

分身がいなくなるのは問題ない。

本体であるカタブキ本人も見えないのはどういう冗談だろう。

瓦礫にでも身を隠しているのかと思い、耐久値を視る事で調べたがどうも見当たらない。

耐久値が視えなくなる例外は幾つかあるが、一つ、この場で該当しそうなモノがあった。

敵密には二つだが、片方は個人的な考察により却下。

おそらく、カタブキは先ほどよりも高速で移動しているだろう。

だが、高速すぎる速度で移動しているから見えないなんてしようもないタネではない。

おそらく、箕田月流古武術。

先の分歩法と、足音を消したりする効果のある隠密歩法である遮軌痕の混合発展技、識歩湾でも扱ってるんじゃないだろうか。

カタブキの見た感じの技量だと、奥義の一、百歩先を会得しているとは思えないので、姿が見えないとなると削除法である。

他の武術を齧っていてその技であるならまた考えを改めなければならぬが、箕田月流は特殊故に会得が難しい為、他も齧るなんて

阿呆な事は出来ないだろう。

一応は、百歩先やら別の武術の可能性も考えておくけれど。

「楽しく無残に殺してやるよ！」

なんて、愉快そうに叫んでくれているが、それでも居場所は掴めない。

先ほどの様にゆったりとした速度の歩法ではないのである。

台詞を放っている間に別の場所へと移動しているだろう。

それに、コレは先の分歩法のように一定のルートを取らなければならないわけではないのだ。

その分、会得が凄まじく困難なのであるが。

それを気軽に使用するカタブキには驚嘆を隠せない。

どうやら今までのエドルや魔族といった今までの戦闘より目的達成は遥かに困難であるらしい。

今までの様に楽観視した思考では敗北の一途である。

そろそろ手札の出し惜しみをして勝てる相手ではなくなってきたということだ。

とはいっても、手札はベヒス嬢戦辺りから切り始めるといっけなさがあるのだけれども。

## 第十九話 - 逃げるが勝ちとは心理の1つ -

視認する事が出来ないカタブキの攻撃を寸前で回避する事に成功した。

どうやら、気配や足音は最小限まで落とせるようだが、大気の動きはそうでもないらしい。

達人クラスであるならそれすらもどうにかしてしまうのだが、カタブキが達人クラスではなく師範代クラスであったのが幸いした。

寸前で察知して回避したは良いがそう何度も繰り返し返せる様な攻撃でもない。

それは、体育の記録測定で何度も最高記録と同数値を示して見せる程に難しいのである。

物理的には可能だが、精神的に、自分的に不可能である。それがこの奇跡的な回避なのである。

周囲から殺気の増大を感知した為、次の攻撃まで間もない事を悟る事になった。

俺の精神を丁重に扱うのであるならば、間違いなくこの環境へと放り込むべきではないだろう。

もし、俺の精神が兎等の小動物の形状にて出現したならばすぐさま心臓の機能を停止させてあの世と言う悪い方行きであったとしても今よりは精神的抑圧が無いのではないだろうかと予想されるそこへと旅立っただろう。

高速移動しているからなのかは分からないが、四方八方から殺気を感じるので、殺気の場所を読んで迎撃を行うと言う手法を取る事は叶わない。

y軸の数値をこれ以上上昇させる事も回避したい。

悠長な事を言っではいられない状況だと理解はしているが少々確かめたい事を確かめるとしよう。

その隙を突かれるとしても腕一本が骨折する程度で済むだろうし

それで済むよう心構えをしておくでしょう。

ベヒス嬢との戦闘の際に、終盤ではベヒス嬢は剣技のみでの戦闘となっていた。

それを見た限り、無手での武術は発達していないが、魔法を含めた戦術、武器を用いた技術というものは前いた世界に比肩する程度には発達していた。

つまりは、こういうことである。

「お前、何だそれは？ 俺を楽しませるのも良いがさっさと殺されてくれよ！」

ベヒス嬢が使用した技術で前の世界でも存在した技術。

尚且つ、幾つかの武術を齧れば必然的に知る事になるであろう有名所の技術が運よく見とれたのである。

厳密にはベヒス嬢は使用していないが、身体の動かし方を見ればそれが組み込まれた剣術であるかぐらいは理解できる。

よく漫画で聞く単語で技で技術である。

縮地。

地面を短縮したかのように錯覚する高速移動歩法である。

箕田月の百歩先も似たようなものであるがその本質は少々違う。

カタブキはその差ぐらいは把握する目は持っている。

縮地でカタブキの攻撃を回避し続けられるかと言われると間違いなく否である。

初回の2、3回は回避できるだろうが、カタブキが慣れる数回後には命中必至である。

俺がこれによってやりたかった事は、カタブキが箕田月以外の武術を知っているかどうかである。

箕田月は歩法の武術であるので、他も齧るのであればまず縮地から知ると思ったのだ。

それを知らないようなので早計であるかもしれないが他の武術を知らないと想定する。

ならば、多少何とかできそうである。

俺はとりあえず、縮地を用いて一度カタブキの攻撃を回避した後  
に立ち止まる。

ただ突っ立つのではなく、胸に位置する場所で腕を交差させる格  
好である。

腕でXを形作る様な恰好だ。

明らかに何やら意味ありげな恰好を取ったので警戒して多少時間  
稼げるかなーという若干期待の出来ない期待をしてみろ。

カタブキの技には若干慣れつつあるのである程度の居場所を把握  
できるようになった。

どうも、感知できる動きから鑑みるに振動するように前後しなが  
ら高速移動しているようである。

厳密にはそれだけではないのだが。

まあ何はともあれ、この正体が判明した事は喜ぶべきだろう。

まだ断定はできないが、カタブキは箕田月以外会得していないの  
ではないかという事もわかったことだし。

カタブキが使用しているのは、候補に挙がっていた一つである識  
歩湾であった。

達人クラスの際は完全に感知できなかったので実際は慣れたから  
どうこうなるという技ではないのだけれど、カタブキの性格ゆえな  
のかまではわからないが、あまり得意ではないようである。

分歩法の方が比較的錬度があったのである。

位置を臆げながらとはいえある程度把握できるのは大きい。

この場合だと、出来ない場合は翻弄されられるがままになる可能  
性があり、出来た場合は回避や防御が可能になるだろうし、あわよ  
くばの反撃も十分に行えるだろう。

「はっはあ！」

と、悪役 否、雑魚よろしくの奇声を上げて俺へと襲い掛かる。  
声の出所は聞く限りは判別できないのだが、今はカタブキ自身の  
気配を感知できているためそれ程焦る事は無い。

速度は最高速で乗用車程である。

常に最高速であるならある程度心構えが必要であるが要所要所のみである。

おそらく、カタブキの体力が持たないのだろう。

識歩湾は、基本歩法とはいえ箕田月流の歩法を二種混合し発展させた技である。

基本歩法単体でさえ常人なら数秒で疲れ果てるのだがこれはそれを更に超越した消費体力がある。

と、考えている間にカタブキが背後から攻撃を仕掛けてきたので防御をする。

ただ、防御するのでは面白みも進展も無いので少々小細工をさせてもらったわけだが。

傍から見るとカタブキの攻撃を腕で受けて吹き飛んだかと思った瞬間、どういう訳かカタブキが吹き飛ばされているという風に見えるだろう。

あ、いや、カタブキは視認できない、か。

カタブキからすれば俺の腕が唐突に強固になったかのように錯覚できたのではないだろうか。

少なくとも師匠にこれをやられた時俺はそう思った訳だ。

カタブキが姿を現した。

顔を見る限り困惑しているようである。

「お、お前、何をやった!？」

そしてどうやら正体が分かっているらしい。

まあ、他の武術を知らないのだから当然といえば当然だろうか。

できればこのまま呆けていてくれるとありがたい。

その間に出入り口を封鎖している巨大で強固な扉をどうにか抉じ開けて逃走している。

今の身体は調子がいいのである。

なんだか、本質的にスペックが以前以上に上昇しているというかなんと言うか。

これがアニメや漫画でよくある、力が湧き出てくる、というヤツ

なのだろうか。

手足の長さやらの細かい部分は変化前と仕様変更されているのはわかるが、それを差し引いても性能差が凄まじい。

もはや人間など超越してしまっただわ、なんて叫んでも仕方が無いなど思わざるを得ない性能差である。

閑話休題。

そんな訳であるので、他の武術を知らないであろうカタブキが俺がいました事を理解できるはずが無いのだ。

カタブキの扱う箕田月流は今の様に動きについてこられるとどうしようもないのである。

歩法のみで攻撃技も防御技も何もかもが存在しないのであるから当然といえば当然である。

通常ならこんな短期的に見破れるはずも無く俺もその例から漏れるはずが無いのだが、幸いにもいや、不幸にも、かもしれないが師匠のおかげで目が慣れてしまっている。

それだけでなく、その武術しか使わないと分かればある程度の動きは予想できる。

それ故に更に動きについて行き易くなっているのだ。

動きについていくだけで解決できるはずが無い、そう思うだろう。いや、実際そうなのである。

偶々俺は箕田月流と愛称の良い動きを知っていたのだ。

ならば対応する動きをすればいい。

ただ、カタブキの斧による攻撃はどこかの流派という訳ではなくカタブキの独学であるので避けにくい。

遭えて言うならカタブキ流剣術なのだろうか。

斧術が適切かもしれないけれども。

「さあな」

問われて答えるような内容の質問ではない。

俺からすればよく漫画やらアニメで、何をしたのかと聞かれて技の説明をしだす心境が理解できない。

俺は空気を讀まないやつなのだろうか。

寧ろそれで結構だけれども。

命と引き換えなら安いものである。

「そうか、そうかよ！ まあいい！ ブチ殺したら同じだ！」

と、暴言とかいうレベル等超越してしまいかねない台詞を吐いて斧を構えた後に再び識歩湾にて移動を開始した。

この状況で一度防がれた歩法を再度行うという事はなにやら隠し玉があるのかそれともこれ以上の歩法を知らないのか。

恐らく、後者なのではないだろうか。

思い込みは己の足を引つ張ることになるが、どうもカタブキは戦略というものを練る様に思えないのである。

それこそが作戦であるというのであれば素直に評価するところだけれども。

現に今もただ単調に先と同じような動きをするばかりである。

「防いでばかりじゃ勝てねえぞおおおお！」  
と、ほざく次第である。

少なくとも未知の技術　とまで認識できていないかもしれないが、少なくとも自身の攻撃を防御され方法がわからない、という

まあ、言ってしまうえば未知の技術になるだろうが、カタブキはそこに気がつけていない気がする　理解不能の状況にも関わらず、

ただ猪突猛進するだけというのはいただけない。

俺としては楽なだけども。

何も対策をしているそぶりもないのでおそらく俺の考察は強ち外れていないのではないだろうか。

勇者と言うからには外れていてほしいものだけれども。

魔王を撃退する主要メンバーがもしそれであるなら先が思いやられるというものだ。

今の所、相対している斧の勇者カタブキと剣の勇者ユウトのみを確認・接触している訳だが、二人とも達人と言う程ではない。

ユウトは会話をした程度の接触であるので断言はできないのだが。

見た限りユウトは召喚される以前は何か齧っていた訳ではなさそうだった。

少なくとも、何やら流派を収めているといった感じではなかった。それを考えるとカタブキよりも弱い 順当的にそうなる訳だが、どうもそうではない。

召喚された恩恵によるものか、才能によるものかは知らないが、どうも感じた気配が少なくともカタブキよりも強大であった。

俺の様に肉体に何らかの変化が生じたのかもしれない。

ただの人間が魔族に勝てるとは思えないので何らかの付加効果的な恩恵は存在するのは間違いなさそうである。

おそらく、カタブキは腕力が上昇しているとかその辺りではないだろうか。

常人がああ巨大な斧を振り回せるとは思えない。

今の肉体だと判らないが、以前の肉体であるならあの斧を何の技術も用いずに振り回すのは不可能だろう。

おそらく、持ち上げる事さえ苦に思うのではないだろうか。それ程重そうなのである。

以前の世界でも斧使いは当然居た訳で、それらはそれぞれに斧を扱う技術を学び収めきた上で戦場へと歩み出て戦闘力で言つと今のカタブキ以下であっただろう。

つまり、そこいらの師範代クラスだと総合的にカタブキには確実に勝つ事が出来ないという程度に実力に差がある。

そう考えると、以前の世界での達人又はそれに片足を突っ込んだ存在といえるのだろうか。

まあ、それもこれも対策が無ければという話であるけれども。カタブキが斧を振るう。

一見なんという動作では無い。

だが、実際に相対してみるとわかるが、存外振るう速度が速い。あれは喰らうと下半身と上半身が別かれる事になる。

それも、切断されて、といえる決別方法ではないだろう。

おそらく、上半身と下半身の中間部分　厳密には斧が触れた部分を起点とした場所だけれども　が消し飛び、自然の摂理に従って上半身と下半身が決別すると言う方式になるだろう。

現在俺の上半身と下半身は決別する程にお互いを嫌ってはいないし、召喚の恩恵が知らないが肉体変化が生じていて、その影響で更に仲が良くなったかのように思える。

案外良い状態であるので横槍と言つか横斧は勘弁願いたい。

一触即発、という状況ではないにせよ、カタブキの斧を食らうと問答無用で即発されてしまうだろうから困ったものである。

とはいっても、当てる為の技術がある訳でもないので寒気を感じる状況やら状態には未だ陥っていないのだけれども。

今のところは勘弁願って成功しているという事だ。

あの斧に触れる気が起きないのは仕方ない事だと思う。

下手に触れて触れた部分が消し飛ぶなんて異常事態になってしまえばしゃれじゃあ済まないし。

回避し続ける俺に苛立ちを感じるのか、それとも攻撃が当たらないという事実が苛立ちを感じているのかは知らないが、カタブキから苛立ちが感じられた。

それはもう顔を見るだけでわかってしまう程に。

気持ちに引つ張られてかは知らないが良くない影響が発生したらしく攻撃速度が更に早まっている。

常人ならカタブキの手が瞬間的に消えている様に見えるのではないだろうか。

本当に勘弁してほしい。

速くなればなるほど回避が難しくなるし面倒になる。

現に幾つか回避しきれずに防御に転じなければならなかった。

初回の防御は腕が消し飛ぶのではないのかと肝を冷やした訳だが存在簡単であった。

防御後も腕に痛みさえあまりない。

そうなると俺は、肝が冷えた？　温めてしまえ、と言わんばかり

に悠々と回避と防御に専念した。

時間稼ぎをして隙あらば逃走しようと言う魂胆である。

カタブキの苛立ちは増すばかりであるようだ。

カタブキから放たれる殺気は苛立ちにより増大している事が証拠になるのではないだろうか。

だがそればかりで俺の防御　　今更だが軟岩という防御技法である　　を崩せずにいる。

これがカタブキの限界なのだろう。

俺としてはこのまま時間をつぶせばカタブキが先に体力切れやらで自滅しそうなので越したことはないのだけれど。

「オラアアアアアア！」

と叫び今まで以上に大ぶりに斧を振るう。

ただ、俺に向かって、ではない。

地面を狙って、である。

どうも考えたらしく、当たらないなら当たる状況を作り出せばいいという考えに至ったらしい。

非常に効果的である。

足場が悪くなった事により回避は更に困難になるし、大きく突き出した場所は俺の特性上飛び越えたりは出来ない為経路も限られてくる。

それにより俺は体勢を崩し何気に危機的状況に陥ったが、高速移動で退避する事で事なきを得るに至った。

更に追撃は欠かさない。

その勢いに乗ってカタブキの首元へと手刀を放った。

上手く命中したらしくカタブキはその後数瞬で地に伏すこととなった。

周囲を見ると会場はかなり崩壊していたが、柱や壁は無傷とは言わないが比較して状態はましであった。

受験者が未だ状況についてこれないのか呆けている。

「お疲れ様です。ナー」

と、俺を労ってくれようとするベヒス嬢は大いに受け入れたいが名前を洩らしそうになつていたのでそれを言いきる前に意識のあつた受験者全てに手等を放ち、意識を刈り取った。

「ク。それで、この後どうしますか？」

ベヒス嬢はそれを気にとめたそぶりも見せずに台詞を続けた。

「いや、まあ、そりゃ逃げるよ。ベヒスはこの惨状を誰かに報告するなり好きにするが良いよ。まあ、俺の事は黙つといてくれると都合が良いんだけどね」

ベヒス嬢は、そうですか、と頷くと出口の方へと歩んでいった。

俺もそれに倣う。

「しかし、あの扉が逃走を許しは為しないでしょう」

まあ、そうだよな。

この戦闘の後にもかかわらずほぼ無傷の扉が俺の前に立ちふさがっているからな。

だがしかし！　だがしかしだ。

今は技術が使用可能なのである。

大奮発この上ないが出し惜しみは命を無駄に消費する事につながりかねない。

下手に時間をかける羽目になつて御用、なんて自体は何としても回避しなければならぬのだ。

気配を察するに外には誰もいない。

おそらく、この騒動に気がついてないのだらう。

どうせ、カタブキが頻繁に暴れるから慣れて、またカタブキが、的な納得方法を用いて放置しているのだらう。

これ幸であるし、出来るだけ急いだ方が面倒から逃走出来るだらう。

時間がたてば何故終わらないか不振がられるのは明白である。

俺は、扉の前に立ち、胸の上にXを表すかの様に腕を交差させる。その後に一見掌底にしか見えない突きを放つと扉が開いた。

やはり見立て通り扉の仕組みは以前の世界とそう大差ない様だ。

これで、魔法が嚴重にプロテクトを施された魔法によるものであればお手上げで豚箱行き片道切符を押しつけられる所であったが幸いであった。

鍵を破壊してしまえば扉はおのずと開く。

当然と言えば当然の方法での脱出である。

扉自身は魔法により凄まじく頑丈であったのだが内部に存在する鍵はそういう訳にはいかなかったらしい。

さて、脱出可能になった訳だ。

個人的にはエドルの行き先を聞ける状況では無くなったのが心残りである。

というか、ここに訪れた目的であったのだけれど。

「じゃあ俺行くわ」

と、振り返りもせず手を振ってから全力疾走した。

鍵を破壊した際に小さくない破砕音が響いただろうからそう遠くない内に誰かがやってくるだろう。

俺が慌てて逃げるのは自然の摂理並みに当然であるのだ。

豚箱の中は非常に暇なので回避したいのだ。

次、どこにいけばいいだろう。

それにどっちの方向にどの国があるかさえ俺は知らなかった。

それに今頃気がつく俺に対しても、その事自体に対してもあきらむしかなかった。

とはいってもちゃっかり街からは脱出済みである。

今は付近の森の中に潜んでいるという状況である。

街を見る限り兵士らしき人物が街から出てくるような事はないが未だにバレていないか創作されていないかのいずれかだろう。

そろそろカタブキが目を覚ますだろうからここも出た方が良くないだろう。

また戦闘を挑まれるなんて自体は回避したいし、下手すれば正体がバレかねないので成るべく会いたくもない。

他の国の位置がわからないので適当に進めばいいだろうか、と思

わなくもなかったが、。エドルと行き違いやら反対方向に進んでい  
るなんて愚かな事態は回避したい所である。

「エドルならどっちに行くだろうか」

そう呟きつつ考えつつ思考に耽る。

あまり考えが出そうにも無い。

何せ情報が皆無なのだ。

別れる際にどう回るのか聞いておけばよかった。

後悔先に立たずである。

「エドルならこの先にあるスニント国に向かったそうですよ？」

と、思考が結論を打ち出して。

いや俺の思考は堂々巡りをしている。

結論が打ち出されるはずが無い。

何が起きているのか分からず若干の混乱を見せる俺の頭であるが、  
思考に耽る事を中止して周囲を見回すとその混乱は収まった。

どういう訳かベヒス嬢がついてきていた。

ああ、もしかして流れる的についてきてしまったのか？

偶にあるなそういうのは。

いや、ないか？

まあそんな事はどうでもいい。

問題はベヒス嬢がここにいる事である。

まあ、ベヒス嬢は優しいので見送りにでも来てくれたのだろう。

現状、間違いなく犯罪者である俺に礼を欠かさないのは非常に礼  
儀正しく好ましいな。

俺がとやかく言えた事ではないけれど。

「ん？ こっちか？ そうか、ありがとうな。じゃ、俺は行くわ」

「そうですか」

俺はその場を後にする事にした。

ベヒス嬢に迷惑がかかる可能性が無きにもあらずであるので早々  
に姿を消すのが正解だろう。

個人的にカタブキに見つかりたくないし。

「<sup>リフト</sup>形状実装」

とりあえず、服装は変更しておく。

そうしないとバレるなんて面白くも無い出来事に遭遇しそうな予感がしたからだ。

顔はばれてないし、ヒントは服装だけであつたのだ。

まあ、それも兵士の服装に似せてあつたので発見には至らなかつただろうけれど。

森は存外広くなくすぐに抜ける事が出来た。

森を抜けるともう先の街は見えない。

若干の安堵感を感じつつ歩を進める事にした。

……どういつ訳だろうか。

なんだかおかしい。

足音が一つ、多いよ！

俺、鬼隠しに遭うんじゃないかと不安に思いながら振り返つてみるが背後に化け物が居る訳でも無かつた。

特に何の変哲も無くベヒス嬢がいるだけで。

あれ？

ベヒス嬢つてエドルみたいに一緒に旅していたメンバーだっけか？

そんなはずが無いという事は幾ら俺でも気がつく。

「ベヒス、そろそろ戻った方がよくないか？ 姿を消したら怪しまれるだろうし」

「問題ありません。戻るつもりはありませんので」

「ん？ 戻らないって……。もしかして」

ベヒスは頷く。

「ええ、おそらくナークが考えている通りでしょう」と、間を置きベヒスはこちらを見つめてきた。

視線恐怖症かと疑われて問題が無い程度に拳動不審になりつつ次の言葉を待つ。

「 どういう理由か知らないけど、ついてくるつもり？」

ベヒス嬢は笑みを浮かべる。

ベヒス嬢の笑みは好ましいのだが、この場では純粹にそう思えはしなかった。

「ええ、そのつもりです」

一人よりかは良いけれど、ベヒス嬢に迷惑をかけるつもりは無かった俺は頭を抱える事になった。

第十九話 - 逃げるが勝ちとは心理の1つ - (後書き)

未だに殆どの勇者の名前と武術を決めていないことに気が付いたの  
で危機感を感じています。

更新頻度は落とさないようにしたいものです。

第二十話 ・ 目的は目的だけど結果ではないし経過でもない ・

「なんで俺に付いてきたか　　も気にはなるけれど、なんでエドルの行き先を知ってたんだ？」

王や勇者に会わせてくれと言っていた際は不可能の様な素振りであつただけれども。

「簡単な話です。エドルとは知り合いましたし、それに、エドルが報告に来た際の護衛役が私でしたから」

ああ、詰まりはあれか。

ベヒス嬢は王と謁見する際に横とかに控えている騎士ポジションであつたと。

と、考えていると、エドルでしたから私が出ただけで、普段は護衛なんて必要ありませんから偶々ですよ、という台詞で会うのは難しい言う反応に納得した。

「つつー事は、エドルが警戒されていたか、それとも王が強いかどうかか」

「ええ、後者の方ですね。強いて言えば前者も該当しますけれど」  
おそらく、王はそこいらの獵兵よりも強いんじゃないだろうか。

そこいらの獵兵程度に負けるレベルであるなら暗殺も考慮して謁見の際には確実に護衛をつける。

それが嫌いな性格かどうかは知らないが、少なくともエドルクラスが現れるまでその行為を他に止められる事の無い絶対的な戦闘力があるのかもしれない。

とは言っても、もしかすると頑固の極みで言っても仕方が無いとみ限られている可能性も無くはないのだけれど。

「と言う事は、ベヒスはエドルと知り合いか何かだったのか？」

「ええ、友人と言う関係でしょうか。最初に会ったのが戦場でしたので断定はできませんけれど、少なくとも私はそう思っていますよ」

初対面が戦場でエドルと、か。

ベヒス嬢じゃなかったら死んでたんじゃねえか？

いや、仲間として、だったら問題なく生きられるんだろうけれど口ぶりからして仲間としてではなく、戦場で殺し合いをする立ち位置だったんだろうな。

多分、王は未知数だから分からないけれど、エドル辺りが攻め込んだらあの国は壊滅する気がしなくもない。

ベヒス嬢クラスがそう何人もごろごろしているなんて考えたくも無いし、あの場所にいた限りで感じた気配からするとベヒス嬢の次がカタブキだったのでそうたいしたやつはいないんじゃないだろうか。

一般的に見れば絶対的で、俺から見ても絶望的だけれど、ベヒス嬢クラスからしたらないようなものじゃないだろうか。

先の戦闘でも、受験者という守るべき存在　足枷の様なモノがなければ十分カタブキに勝利できただろう。

ベヒス嬢の本領は広域殲滅系統な気がするんだよな。動きを見ていたらそんな風な動きをしているし。

対一のカタブキに対多のベヒス嬢の二柱であるあの国の戦力が成り立っていたんじゃないか。

二人の総合戦力を考えるとそんな馬鹿なと安易に一蹴する事が出来ない考えが思い浮かぶ。

対峙した場合を想像すると強ち的を射てるんじゃないかと思えなくもない所が非常に怖い。

現在、その片割れが真横にいる訳だし。

感じた気配だけで言うなら、ベヒス嬢が10とすればカタブキは8程でその次は2ぐらいである。

それ程に気配の差が凄まじい。

ちなみに、俺は常時魔力放出が無い状態に慣れているのでこの世界的に言うところとかいう最底辺の極みである。

スカウターとかがあるなら、戦闘力だったの5か、ゴミだな、以上にゴミである。

ゴミに失礼だろと言われんばかりに失礼である。

そんな自分の考えに滅多打ちにされて一人で涙目になりそうになりつつ純粹な心配を投げかける。

「ベヒスが軍事力の結構なウエイトを占めていたのは明白だったろ？ そんなのが急に辞職して逃走と言って差し支えない形でこんな所でゴミ以下の野郎の横にいても良いのか？」

下手したら国というか軍がぐちゃぐちゃになるんじゃないだろうか。

どうせ、軍とかそういう国家機関的なモンに悪人は付きものだから権力やら財を得ようと出しゃばったりして掻き回すんだろ？なあ、と思う。

よくある漫画とかだとそのせいで戦争になったりとか国が退廃するとかのイベントが発生するとかだけれど、本当にそうなってしまわないだろうか。

個人的に国が潰れてもこの世界の社会に未だに入り込めていない俺としてはどうでもいい。

どっちにしるほぼ無一文だし。

心配なのは、魔王　は、俺だから前魔王か　を倒すのに必要なメンバーである勇者達が戦闘前に死んでしまわないかである。

多数が足りなくても倒せるとか、勇者がいれば楽というだけではないくても倒せるとかそんな事なら特に気にも留めないのだけれど判断材料が皆無であるので心配はしてしまふ。

あの未来を示す絵の通りならば前魔王以外に何らかの黒幕がいるっばいからそれを探すのに苦労しそうだ。

もしかすると、前魔王と利害一致で一時的に共闘しているだけという可能性もあるけれども。

兎に角、あの黒いオーラっばいのを纏った謎の存在を突き止めてどうにかして潰さないといけないんじゃないだろうか。

個人的には正体と居場所を何とか勇者が知る形になってほしい。

俺がどうこうするかどうかは又別である。

結果的に世界が滅びなければ個人的に問題はないのだ。

対するベヒス嬢は別段俺と同じ思想ではないようである。

それは熟考している事と浮かべる表情の変化で読み取れるというものだ。

「確かに問題にはなるでしょうね。ただ、ライトライン黄金色の断裂がいなくならなければ問題ないのです。だから私はライトライン黄金色の断裂になる為の材料は全ておいてきました」

口ぶりからして黄金色のあれが使用できればライトライン黄金色の断裂になるのだろうか。

「ナークが黄金色のあれと呼ぶそれは、烈火断層という風と火の複合魔法なのです。それが使用できるものはライトライン黄金色の断裂の称号を半ば強制で得る事になります。私もそうでしたし、私に烈火断層を教えた師も同様でした」

と、ベヒス嬢は俺の心を気軽に見透かして返答をする。

どうも俺は顔に出やすい性質なのだろうか。

つまり、ライトライン黄金色の断裂は個人の別名ではなく、どちらかといえば流派のそれに近いのか。

だが、常人にあの烈火断層だったか？　を短期間で会得する術は無い様に思えるがその辺りはどうなのだろうか。

「烈火断層はすぐには会得できません。しかし、それは独学であるならばという話です。軍にはまだ師が所属していますし、師が教導してくれるでしょう」

早ければ数ヶ月で扱う程度には至れるでしょう、とベヒス嬢は付け加える。

浮かべる表情を見る限り多少の罪悪感を抱いてはいるだろうが、技量があるからなのかそれとも人柄が良いからなのか知らないが師を信頼している事だけは感じ取れる。

台詞を聞いて若干その師について興味を抱いた事を再び読心術紛いに悟られてしまったらしくベヒス嬢は言葉が続けた。

「師は文字通り一騎当千だったらしいです。全盛期の際は単騎にて

昔起きた戦争を終戦へと導いたと風の噂で聞いたことがあります。それが事実である証拠はありませんし、人間に出来るものなのかと疑問に思わざるを得ませんが、確かに師は強い。私なんて足元にも及びませんよ」

それは化け物クラスじゃあるまいな。

ベヒス嬢でもおそらく人間という枠組みの限界に近い存在のはずなのである。

それをも軽く凌駕するとなるともはやそれは人と呼べるのか疑問に思う。

魔か鬼か。

師匠の一人である宇美音子さんが都合が悪くなったり理解できない事に直面していた際に呟いていた口癖とも取れるそれがふとよぎった。

宇美音子さんはどうも物事を考えるということが得意ではなかったらしく、頻繁にその言葉を聞く機会があつたのだが、その際は、何を言ってるんだと理解しかねる点が大半を占めていたけれど今ならば多少同調できる自信はある。

人の域を越えた人はもはや人と呼称して差し支えの無い存在であるのか危つくその境界は臆であるのだ。

しかも、聞く限りでベヒス嬢の師は狂人になっているわけではなく、何かが壊れているわけでもないようである。

羨ましいものだ。

俺の師 いや、以前の世界で関わりのあつた達人は三人を除いて漏れなく狂人であつた。

その質や方向性は様々であるが狂人であることに変わりはなく、個人的には酷く迷惑だつた。

彼らが狂人であつたから今の俺があるわけだけれど、職業が犯罪者である今の俺を鑑みるとそれは良くないことであつたのは明白である。

経過的にも結果的にも事実的にも客観的にも。

俺はそれに対して喚く事も 当時は疑問に思う事さえしなかったがそれ以外の事実を知ってしまった今となつては彼らを師事した自分を殴り飛ばしたい気分である。  
などと無駄な回想は切断しよう。

閑話休題というヤツである。

話は逸れてしまつていたが烈火断裂自体は基礎の魔法の複合であるのでベヒス嬢の師がいるのであれば教導は出来るだろう。

問題は、常人に扱えるか甚だ疑問である魔力制御の精密さを要求されるわけだけでも。

通常、魔力の流れを視ると、木の根のように端まで魔力の筋が行渡っている。

が、烈火断裂は筋ではなく塊と思える程度に枝分かれしている。それだけでも何やら別の次元であることが見て取れる。

一般レベルなら仕組みの理解は出来るかもしれないが把握はできないだろうな。

どちらにしても迷走しそうな予感がしなくも無い。

そこはベヒス嬢の師次第だろうな。

まあそれこそ、魔か鬼か疑わしい実力であろうからいい方向に進むのではないだろうか。

そう考えると、案外ベヒス嬢が席を空けても何とかかなりそんな気がしてくる。

うつむ、あまり気にすることじゃあなかつたのだろうか。

何だか錯覚である気もしなくもないのだけれども。

俺がそう言うのとベヒス嬢は、そうですそうです、と何やら急いだ様に頷く。

若干それに引っかかりを覚えるもその引っ掛かりが何やらあまり認識できないので後ろ髪を引かれつつも突っ込まないことにした。

まあ、懸念は消えなくは無いが意識しないことが出来る程度に緩和されたというか誤魔化されたというかそういう扱いになっている為やっところさ事実確認を終了することが出来る。

あれから全く本来の機能を發揮していなかった両足が稼動し、移動することが出来るようになった。

「とりあえず、エドルの後を追おうと思う」

「わかりました」

とりあえず、エドルが向かったというスニントという国へと向かうとしてしよう。

今回は位置的にこのウヌク国から出るのにさえ時間がかかるだろう。

エドル曰くこのウヌク国は先のヌーダイセ王国の1・6倍程の土地であるらしい。

そして、このウヌク国の首都になっている街、ウヌクはヌーダイセ王国に近い位置に存在する。

国境までのそれぞれの距離はかなり違ってきている。

今回はそれがよろしくない方向に作用している。

現在地は、ウヌク国の中でも目的地であるスニント国から最も遠い部類に位置するのである。

国境に行くまでも今まで以上にかかってしまいかもれない。

ここに来るまでも事件に遭遇したというのに、それだけの距離を移動すれば単純計算それ以上の回数問題に遭遇することになるのである。

エドルには恩があるため会いに行かなければならない。

面倒だが仕方が無い。

仕方が無いのでその辺りの不平不満は切り捨てて無かったかのようには振舞う積もりであるがどうしても拭いきれない懸念点がある。

俺と共にいた際のペースでエドルは進んでいるのだろうか。

結論から言うと、もしエドルが尋常ではないペースで進んでいれば追いつけないだろう。

それに、今回はベヒス嬢が行き先を偶々知っていたから良かったものの、次の国でも同じように解るとは限らない。

寧ろ、今回を鑑みると解らない可能性のほうが高いと考えざるを

得ない。

不安でしかなく不安しかない。

ただ、エドルも浅はかではない。

俺は追いかけると言っておいた。

エドルのお人よし具合から考えてペースを落とす　　というのは、  
任務が任務であるのではないかもしれない。

少なくとも俺でも知ることが出来理解できる道標のようなものは  
設置してくれているのではないだろうか。

ここぞとばかりにポカ的に失念してその辺りの配慮が無い場合も  
無くは無いだろうし、面倒だからと敢えて配慮していない場合も無  
くは無いのである。

急ぐことに越した事はなく急がない事は寧ろデメリットであると  
感じる。

と、言ってもベヒス嬢が共に来るのでそこまで早くは進めないけ  
れども。

ベヒス嬢は平均的な兵士以上の体力はあるがあくまでそれまでな  
のである。

戦闘ではなるべく体力を消耗しないような動きをしている節があ  
る。

それは達人クラスと比較して体力が低いことを補うためのもので  
はないだろうか。

それに対してエドルは並々ならぬ体力がある。

それはもう叩き売りしても尚在庫が残りそうなほどである。

追いかけるのが無謀であるという意見が脳内会議で存在感を肥大  
化させてくる。

俺の信念というか性質というかよくはわからないが、その辺りが  
諦めることを妨害するので出来るところまではやっておこう。

と、ぐだぐだ思考したが、少なくともスニント国までは行ってみ  
ることにする。

そこで足跡が途絶えたら途絶えただで別の方法を探すでしょうか。

どちらにしてもこの国からは早めに脱出した方が良さだろう。  
下手すると指名手配になりかねない。

指名手配されると本当に笑い事じゃあ済まない。

どこに行っても誰かが俺を捕縛しようと血眼で追いかけてくるし、  
相対すると話し合いではなく武力を持ってして相手側にとってのみ  
の平和的解決を率先して選択する。

この世界ではその様な事が無いように願いたいところだがこの願  
いはそう上手く叶うものなのかと心配せざるを得ない。

「んで、こつちだったな？ んじゃあ行くか」

「はい、行きましょう」

俺の考えをまたまた理解したのか多少歩調を速めてベヒス嬢は歩  
み始めた。

本当によく心を読む。

決して魔法を使用しての読心術ではないので勘に近い何かだろう。  
その精度を見る限り勘という言葉一つで片付けていいものかと疑  
問に思うし、片付けられるほど気に留めていないわけではないのだ  
けれど。

それはもはや特技の域を超え一つの技術に感じられるほどのもの  
である。

現在のところ的中率100%であるのだ。

そう考えて不自然な所はあるまい。

幸い追っ手の気配は無い。

未だにあの惨状の目撃者が現れていないだけかもしれないので安  
心するには至らないが、当面捕獲される恐怖を感じる必要は無いだ  
ろう。

一応、付近の木々の間を縫うように、木々に姿を隠すようにとい  
うか隠しているのだけれど 先へと急いだ。

日数がかかりそうであるので全速力とは行かないけれど、一般人  
ならば走っていると言っても差し支えない程度の速度で歩いている。  
気に塗れて闇に塗れて。

俺は一応神によってここにやってきたのだから立ち位置的には勇者のはずなのだけれど、と何やら言葉で表せない不満感が溢れてきたが言葉で表せないので一蹴することにする。

ふむ。

もしかすると、神の性能が最悪であったのかもしれない。

よく考えてみると、ユウトやカタブキと言った三年前に召喚された勇者は俺に干渉した神とはまた別の神の干渉によってこの世界に現れたのではないかという考えに至った。

幾らなんでも自分が召喚した勇者の人数を数え間違えるなどやらかしはしないだろう　しないと、していないと信じたい所だ。

兎に角、順当に考えて彼らと俺の担当神は違う。

もしかすると、担当神が同じヤツなんていないかもしれない。

八百万とは事実であったのかもしれない。

本当に八百万人の神がいるかと問われると首を傾げる程度の認識であるけれど、複数人いるだろうという質問に頷いて返すのは問題が無い程度には認識している。

それなら既に席が埋まった状態で召喚されるのも頷ける。

頷けるが、納得は出来ない所が辛いだけだ。

それに、どちらにせよ俺ははずれの神を引いたのかもしれない。

連絡は頻繁に取り合えと殴り飛ばした後に豪語したい気分である。思い浮かべるだけで苛立ちが現れるので、この件に関して自身の認識以上に腹に据えかねているのだろう。

この変化に俺は我ながら驚かざるを得ないだろう。

尤も、この世界に来た事事態は後悔していない。

あの神に関わった事は後悔しているけれど。

それに勇者でないことも個人的には嬉しいことではある。

頂けないのは、下手すると犯罪者であるということだ。

犯罪者であること自身は慣れのせいとか何も感じないが、いかにせんと動きにくくなる。

大よそそんな事を考えながら足を動かし続け一時間ほどでベヒス

嬢に疲れが見えたので休憩することにした。

未だに森は抜けない。

相当広大であるようだ。

木々は生い茂り、相当の背丈がある。

樹齢数百年らしき大樹などごろごろ、といった具合だ。

生い茂りすぎて葉等の緑は、通常よりも濃く感じる。

黄緑と深緑ほどに差がある。

いや、それ以上かもしれない。

閑話休題。

兎に角、ベヒス嬢共々良い具合に穴の開いた樹木があつたためその中で腰掛けていた。

腰掛けると入っても場所は所詮樹木の横穴であるので形としては地面に直接座っているような形なのだけれど。

地面と遜色ない程度に風雨にさらされ土が敷き詰められているそれであるが、座れるだけで随分疲労蓄積が緩和される。

疲労の蓄積もある。

そろそろ寢床を探し始めてもいいかもしれない。

ベヒス嬢は女性であるので野宿はさせたくないのだが生憎付近に村はないし、人も街を出てから一度も見かけていないという過疎っぷりである。

寧ろ人がいないので安全ではないだろうかという考えが過ぎつたが一応宿を探すために視線を走らせ続けた。

そういえば、洞窟の件で食料が全て破棄せざるを得ない状態まで品質劣化というか低下が発生したのであった。

せめて今日の分程度の食料は確保しておきたい。

食事が出来ず力が出ずペースが落ち、最終的には餓死する等というB級映画にも無いような展開にはなりたくは無い。

ベヒス嬢はまだ体力が完全に回復しないらしいので少し散歩に出るとしよう。

ベヒス嬢にその散歩に出る旨を伝えそこいらを散策することにし

た。

木々のように草も同じように生い茂っている。

その生い茂り具合からどこに崖があるなどという判断が出来ない為慎重に進むことにした。

そのへっぴり腰はぎっくり腰かと問われそうなまでに曲がり、歩を進める速度は先ほどまでとは打って変わって牛歩戦術の方が幾分かマシではないかと疑問に思う程度にゆっくりである。

俺の場合は崖だけでなく、ちょっとした段差でも取り返しの付かない程度に意識を失う可能性がある。

そう考えると仕方が無く、寧ろ当然の装備である。

周囲を散策してみると、存外木の実が生っていたりウサギ程度の動物からちよつとした犬程度まで様々な動物が生息していた。

すかさず数匹の動物を捕らえ木の実を両手に収まる程度に収穫してきた。

動物は腸処理とかを施した後に食すとしよう。

反応を見る限りベヒス嬢も慣れたものなのだろう。

寧ろ捌くのを率先して手伝ってくれ、焼くのは火属性魔法を器用に扱って行ってくれる次第である。

軍に所属していればこのような出来事はザラで、寧ろ順応できていなかったらこの場にいなかったであろう。

まあ、国の意向により変わるだろうが、兵士はそこそここういう事態に遭遇するのである。

尤も、俺のこの蒞蓄もどきはまた聞きであるので正確ではないかもしれないのだけれど。

いやしかし、強ち間違っているという訳ではないだろう。

以前の世界にいた際に師匠の一人であった兵士から聞いたことであるので事実である可能性が高い。

懸念点はその師匠は相当に嘔吐きであるという事だろうか。

ただの嘘であるなら嘘だと切り捨ててしまえばいいのだろうけれど、時たま事実を言うためそうやすやすと切り捨てられない。

調味料が無いため味気ないが、そこいらで採取した食べられそうな木の实やらきのことコラボレーションして口へと入場させることで多少改善されたように感じた。

尤も、それらのアクセント無しの状態で肉を頬張ったのはただの一度であるので本当に改善されたかは判らない。

詰まる所、ちゃんと味わっていないならば気のせいと片付ける場合も無くは無程度に効果が無かった。

捕獲した動物も採取した木の实やきのこはあまり良い味ではないのだ。

判りやすく言うなら吐いても咎められない程度に不味い。

食うけれどね。

ベヒス嬢は表情を変えずに黙々と腹へと流し込んでいた。

明日こそ

明日こそまともな食事が食べられますように

そう、あまりの不味さに当初の目的を失念し信じてもいない寧ろ喧嘩を売りたい程度の信仰度で神へと祈った。

食事を終えてすぐに俺は何をしていたのだろうとその事に関して後悔することになった。

第二十一話 - 狂人は狂人を呼ぶ - (前書き)

お気に入り人数が100になりました。

皆さんありがとうございます。

これからもヌルヌルと書いていけるように努めたいと思います。

## 第二十一話 - 狂人は狂人を呼ぶ -

そういえば俺はエドルにベヒス嬢に会えという旨が書かれて  
いるらしい紙を貰っていた。

結果的に言つとその状態は満たしたのだが、おそらく俺が修行す  
るような事を言つての別れの際に渡されたのでベヒス嬢から何かを  
教われという事だったのだろうか。

確かにベヒス嬢と戦闘 殺し合いだが を行うことで幾らか  
学ぶものはあつたと思う。

だが、よく考えてみると、エドルがあのような状態になると先読みでき  
るはずが無いのである。

できるのならそれは人間の所業ではない。

詰まり、別の何か学べると思えるものがエドル的にはあつたのだ  
ろう。

思い当たるものは無くはない。

ベヒス嬢の剣術辺りではないだろうか。

あれは、中々に実践的な剣術であると思う。

俺の師匠たちは専ら豪快であつたのでベヒス嬢のような小型の剣  
はあまり使用しなかつた。

だからその辺りの専門性は欠けていたのである。

そんな彼らに教わつた俺も当然その辺りの専門性に欠ける。

ある程度学べはしたがその程度止まりである。

万能なものではなくどこか欠如・欠点がある特化せいものばかり  
であつたからある程度学べたのかもしいない。

ベヒス嬢のそれは欠如した、というか苦手というか。

そういう欠けた部分を補うのに最適であるように思えるだろう。

だが、ベヒス嬢のそれは実践的であるが故に今すぐ身につけるの  
は難しいのではないだろうか。

あくまで、先の仮説の通りであるならばであるけれども。

ベヒス嬢のそれはそれだけで実践的たる汎用性や効果があるのである。

言ってしまうえば万能の部類。

俺が身につけたそれらとは全く違うものである。

エドルには悪いが会得するかは見送ることにする。

もしかすると、それ以外の何かに目をつけての紹介であるかもしれないので目は光らせておくべきだろうけれども。

「スニント国でエドルに逢えず、行き先も掴めなければどうしますか？」

食事を終えたベヒス嬢は一息ついたところでそう切り出した。

ベヒス嬢のその質問は非常に痛いところを付いていた。

俺もその事態は想定していない訳ではない。

寧ろ、その可能性が高いだろう。

ベヒス嬢の件で、というか、俺の件もだけれど、騒動が起きていなければある程度動ける為調べればその辺りはなんとかなるだろう。だが、現状騒動が起きているか、騒動が起きていたとしても他国に伝わるほど大きくなっていないか。

それらが一切合財わからないのである。

今から考えると、ほぼ人と関わらないような生活を俺はここで続けてきたわけだが、もう少し関わってある程度情報を得られるパイプを作っておくべきだったと後悔した。

まあ、指名手配されていたら大概のパイプは使用できなくなっているだろうけれども。

それにしても指名手配されているとわかる分今よりマシであるのだけれど。

もし、指名手配されていたら理由は恐らく勇者の一人を倒したつー事だろうな。

運が悪ければベヒス嬢誘拐とか言うあらぬ嫌疑をかけられている可能性も無くはない。

一応、ベヒス嬢は自主的に出てきて、仕事引継ぎ的な処置もして

きたとの事だが基本的に無断である。

そうとられてもおかしくは無い。

寧ろ無難だろう。

いや、わかっているとしてもベヒス嬢を取り戻したいが為に敢えてそう言い張ってくるかもしれない。

事実の改変にちょうど良い材料が転がっているのである。

利用してくる可能性は大いにあると考えていいだろう。

俺なら間違いなく利用するだろうし。

さて、そう考えると俺も気楽に構えていられないだろう。

生憎と、指名手配になった事は何度もあるが、そのまま逃げ切った経験は一度も無い。

別段逃げる理由が無かったから逃げなかったというのものもあるのだが、無いものは無いのである。

経験が無いだけでなく知識もないといっているだろう。

あつたとしてもこの世界は以前の世界で言う警察のような体系が無い様と思う。

一心、軍がそれらしいものであるけれど、同じように機能するかと問われれば恐らくそれは無いだろう。

俺は寧ろ獵兵に依頼が出て動くのではないだろうかと睨んでいる。ベヒス嬢が従えていた騎士達を見る限り獵兵のほう実力があるものがあるだろう。

数を視野に入れば明らかに騎士が総合的に勝るだろうが、今はたった二人の搜索、そして片方の捕獲である。

それだけの作業であるならば人数は要らないため獵兵のほうが優れた機能を示すだろう。

エドルは同じように国の任務に既に着いているためエドルに白羽の矢が断つことは無いだろう事が幸いである。

ベヒス嬢が絡んでいる内容であるので恐らく強者が来る事は間違いない。

少なくとも、ベヒス嬢の搜索、又は勇者の一人を何らかの方法で

結果的に倒し、ベヒス嬢を拉致した疑いがある存在の捕縛となるとそれは当然だろう。

そんなヤツを相手にする可能性があるわけだが、俺はこのままで対処できるだろうか。

答えは否と答えておいた方がいいだろう。

身体の変化に気が付いたとはいえ、所詮気が付いた程度である。

ある程度修練を行わなければそれに馴染む事は無い。

そもそも、それだけではない。

この世界には魔法が存在するのである。

幾ら俺がその方面に対して神の恩恵があるとは言っても無敵ではない。

当然弱点はある。

まず、あの魔道書を展開している際にしか膨大な知識を使用することが出来ない。

幸い、経験は蓄積されたままなのだけけど。

それを克服するには、常時ばれない様に魔道書を展開するか、そもそもそんなものが必要ないぐらいに魔法に精通するかであろう。

前者はどう考えても無理があるし、後者も俺が暗記科目が苦手であることを語れば悟ることが出来るだろう。

一度成功すればある程度恩恵によって感覚的に使用できるようになる。

今までの様に初期の初期のような魔法であるならばごり押しで瞬間的に魔法を会得できるだろうが、強者に通用するほどの魔法となると一朝一夕での会得は難しいというか、事実上不可能である。

最優先はこの身体に慣れる事だが、次にいろいろな方向で魔法について考慮しておいた方がいいだろう。

そうしないと実際に相対することになった際に対応できないだろう。

「多分、すぐに人里を離れて様子見だろうな」

最悪そうやって距離をとって時間を稼いで対応できる状態まで持

っていく。

そうなるだろう。

「何故、と聞いてもいいですか？」

「ん？ ああ、多分だけど先の件で俺は国家指名手配的な感じになつてるかもしれないからな。それが当たっているか否かが判るまでか、もしくは実際に命令によつて来るやつ等に対応できる状態になるまでかどちらかになるまでは隠れるつもりだよ」

ベヒス嬢はその考えに至っていないかつたのか驚いた表情を見せていた。

すぐにその表情は消え、考える素振りを見せ始めたので俺も思考へと意識を向けた。

実際にそうであるなら今も危険と紙一重であるといえる。

下手をすれば今奇襲を受けてやられる。

戦闘次第では死に至るかもしれない。

この世界に来てすぐの俺なら、んな訳ねーよと一笑するだろうが、エドルたちを見た後だとそう笑うことなど出来ない。

代わりに顔色を悪くする事はできるようになった。

全く嬉しくない。

今から多少対策を講じておいた方がよさそうだ。

と、言ってもそう大それた事はできないししようとも思わない。

「ちよつと食後の運動してくるわ」

そう難しい顔をしたベヒス嬢に伝えその場を離れた。

少し進むと多少拓けた場所に出た。

「<sup>リフト</sup>形状実装」

俺に出来る事はただ一つ。

幼い頃から ある時期を境にサボり続けていたけれど ぐうたらを覗いて人生の中で最も行ったであろう修行だけである。

とはいってもこれは鈍っていないかという様な修行の域に到達しないものであるのだけだ。

手にはしりと存在感を伝えるそれは刀である。

個人的に使用した武器の中で最も扱いが難しかったのが刀であった。

安直であるが、この身体で以前同様に刀を扱えるようになれば他も再現できる程度には慣れているだろうと想定したのである。

あくまで想定であるので実際に刀を扱えたとしてもそれ以外も上手くいくとは限らないのだけれど。

武術・剣術はそこまで浅くは無い。

が、それでも全てを一から復習している時間は無いだろう。

一つや二つ程度であるなら先が見えてくるのだろうが、生憎とそうはいかないし、通常より面倒そうなものもある。

時間ゆえに賭けに近い行為を選択せざるを得ないこの状況に歯噛みせざるを得ないわけだが致し方ないのである。

刀が扱えたからといって他が扱えるわけではないと聞いて、最悪刀で戦えばいいと思うかもしれない。

世の中甘くないのである。

扱いが、会得が難しいからといって効果があるとは限らないのである。

単刀直入に言うと、俺の知る刀術は戦闘で率先して扱いたいものではない。

刀は、切れ味がよく、達人クラスであるなら、素材的に明らかに切断不可能なものを切断することが可能になったりするのだが、それは一定の条件の上である。

例えば俺が刀で鉄を切るような達人であったとしても、それを戦闘に生かせるかとなれば話は別なのである。

戦闘でもその本領を発揮しようと思えば、相手の動きを完全に予測しなければならぬだろう。

いや、魔法があるからその辺りは補えるとしよう。

それでも問題は付きまとう。

その筆頭が刀の脆弱性である。

罅迫り合いをしただけで折れてしまいかもしれない。

刀は切れ味を追求した故にあの形状であるのだが、両手剣の様に頑丈ではない。

剣の腹で攻撃を受け止めると、曲がるし、下手に切ると刃こぼれしたり、最悪刀身が折れる。

俺ならばそんなヒヤヒヤしなければならぬ扱い慣れた武器より、扱いなれていないけど頑丈な武器を選択するだろう。

通常なら武器が壊れたら無手で行けばいいと考えるだろうが、今回は、相対するなら間違いなく強者という状況なのである。

無手で対応できるほど甘い相手では無いことぐらいわかる。

魔法があるので無手ならば文字通り手が出せない可能性がある。

尤も、その状況に陥る敵がいるなら武器があるうと変わらない気がしなくもないけれど。

「さて、と」

刀を握り構え、目を瞑る。

日の光が抑え気味になってきていた風景は瞼の御蔭で完全にシャットアウトされる。

目に映るのは漆黒のみである。

が、俺には過去が幻視されている。

刀術。

刀を扱う達人は幾人が知っているし師匠の一人も刀を愛用していた。

その師匠 綿名というイカれた野郎は、大概の武器に精通してたらしいのだが、刀しか扱わっていなかった。

本人曰く、刀が最強らしかった。

ただ、綿名は人を殺すという事を実感する事が趣味の様な野郎であつたので、その最強という意味が戦闘力的なのか、殺害を実感できる面での事なのかは判断できかねるので鵜呑みにはできない現状である。

綿名は師匠の中でも特筆して頭のねじが緩んでいるというか、頭のねじが劣化して破損して紛失しちゃったかの様な奴なのである。

だが、それでも人が寄ってくる程の実力を兼ね備えていた。

今、綿名は俺の幻視によって目の前で刀を構えるに至っていた。

その構えは幾度と見かけた構えであり、俺からすると死の象徴ともいえるものである。

「狂おしい」

幻想の綿名はそう呟く。

浮かべる顔には狂喜しか浮かんでいない。

俺の脳内にはあのバカ野郎のイカレ具合が染みついているらしく、忠実に再現してくれる。

口癖だけでなく、あの嫌な嫌な背筋をゾクリとさせるだけしか効力の無い表情も再現しているのである。

選定を失敗したか　そう思わざるを得ない。

別段師匠という枠組みに捕われる必要はなかったと後悔するばかりである。

以前の世界では決して相入れる事はなかったしこれからも相入れる事はないだろう存在である国一も刀使いであったので彼を幻視すればよかった。

過去の遺恨的に意識的に避けていたのだろうけれど、今となっては過去に戻って分殴りたい思いでいっぱいである。

「ああ、良いな良いぞ。随分良くなった。あの時は無いようなものだったが今はあの時よりも愛おしい。そんなお前を是非とも切らして殺させてくれ」

そうだったなあ。

後悔は正しかった。

確か、確かにだ。

この気が違ったようなこいつはこういうノリだった。

懐かしく思うが、全く嬉しくない。

出来れば今後関わりたくなかったし、今関わっているという事実を無かった事にしてしまいたいノリである。

つつむ。

どうも真剣に過去の自分をどうにかしてブン殴る算段を考えなければならぬらしい。

幸い、ここは俺の想像で成り立つ仮想空間である。

今は、現実的な世界設定なのでありえない軌道で空中を闊歩したりなどはできないけれども。

「我ながらここまで忠実に想像しなくても良いと思うけどなあ」  
もはや妄想癖やら空想癖といった言葉で片付けられるほどの再現率ではないと思う。

対峙する狂人は刀を構えた。

様々な武器を扱うにも関わらずその腕前は達人に半分踏み込んだ腕前で、事、刃物や打撃系といった攻撃した際に手応えを十分に実感できる武器はその例に漏れ、達人の域に全身を突っ込んで沈み込んでしまっているのである。

今、その迷惑な狂人は刀を構えている。

当然、それは刃物であるので達人の域の腕前なのは明白だが、刀はそれを超越している。

使い方次第で素晴らしく切れるそれを狂人は気に入ってしまったらしいのである。

だからこそなのかは知らないが、兎に角、危険であると言っておこう。

「無駄口を叩くな。そんな暇があるのならさっさと掛かって来い！ 殺し合おう。死を実感し合おう！ いやいや、嫌なら拙者様だけ堪能させてもらおうさ！」

ゆらゆらと、構える血の匂いがしそうな刀や、身に纏う群青色の所々破れた着物を揺らし、キラキラと嫌らしい笑みと目を向ける。

慣れていなかったら今直ぐ俺のズボンはびしょぬれになっていただろう。

何度か見ているので慣れざるを得ない状況であるのでそれはなかったが、手足は痙攣しているのか思えるほど震えている。

これが、武者震いであるなら格好がつく いやいや、死を実感

するのを喜んでいたらあいつと同じく狂人で変態じゃないか。

そういう訳で、武者震いだと変人である。

なので、俺のこれはただ単に震えているだけである。

怯えていると言ってもいい。

あー、ううーむ。

この想像という闘技場は昔の感覚を今の身体に馴染ませる為だけのものではあったのだが、選定失敗につきそれを超越した場になってしまったようである。

ヤバイと感じたらこの瞑想に近い妄想を中断するでしょう。

あれ以来全くこんな狂気じみた奴にも状況にも遭遇していなかったのだが、ブランク明けというか調整には良い事象かもしれない。

あの頃を容易に思い出せる。

俺の口が歪んだように感じたが生憎ここには鏡はないし、想像の中なので作り出せるのだろうけれどそのつもりはない。

だから、俺のこの口の歪みが本当に歪んでいるからこそその感覚なのか、それとも勘違いなのか。

事実、歪んでいたとしてもそれが喜びか恐れか　それとも狂気

なのかは目の前で構える狂人しか知らないし知るつもりもない。

俺は狂っていないことを切に願って殺し合いに挑むでしょう。

あれから一時間ほど。

俺の想像の中の時間であるので、実際はほぼ一瞬の時間だったのではないだろうか。

兎に角、その間、俺はあの狂人と戦っていた。

勝敗が決したので想像を止めたのではなく、あの狂人に耐えられなくなつて止めた。

言ってしまうえば敗北なのだろうけれども。

「もう二度とあの変態変人を選ぶのは止めよう」

あいつとは何度も会っていたのに何でアイツを選んだろう本当に後悔しても仕切れない……。

そんな俺はやつれてしまっている。

見なくてもわかる程である。

「大丈夫ですか？」

と、ベヒス嬢が心配する程に。

「ああ、大丈夫だ。 多分」

正直、自信なんてものはない。

ベヒス嬢も同じ心境なのか、心配そうな顔は耐えない。  
うむ。

やっぱりアイツをチヨイスすべきじゃないな。

何があってもやらないようにしよう。

というか、師匠全員が宜しくないような気がするけれど気のせいだろうか。

いや、綿名みたいにイカれた奴はそうそういないけれど。

綿名とはまた別の方向でオカシな奴らの集まりが俺の師匠なのである。

師匠は最初一人だったのだが、その師匠が失敗であった。

知らぬ間に師匠が増えていた。

何時の間にか弟子扱いになっていたのである。

初めて会って挨拶する以前に弟子登録されていた事もある。

「どうした？」

ベヒス嬢が何やら気がついた様子である。

おいおい、一体全体本当にどうしたというのだろうか。

ベヒス嬢はどういう訳か携えていた剣に手をかけている。

「ナーク、今思い出したのですがここは『神隠しの深緑』と呼ばれている森です」

そんなに有名な森なのか。

確かに、コレほど大きければ有名になるのも頷ける。

「いえ、この森はそれ程大きくはありません。地図上は、ですけれど」

引っかかる口ぶりである。

「この森の中心部付近が魔力の溜まり場になっていて、空間が乱れているのです。それ故に通常以上に空間が広く感じるので。それに、外界からこの湾曲空間を視認することは出来ませんし、魔力による感知も、この場所に蓄積された魔力とその乱れで行えません」ここにいれば安全だと言いたいのだろうか。

だが、それでも剣にかけた手の説明がつかない。

いや、待てよ。

もはや、ここに巻き起こる魔力力場の乱れで魔力探知だけでなく、気配察知も出来ないのだろうか。

そして、ベヒス嬢は何らかの索敵方法を持っていて、察知した、と。

追手が来たということが。

それならば納得が行く。

ならば察知は出来ないようだけど周囲の警戒をすることにしよう。

「ナーク私と戦いましょう」

と、言いつつベヒス嬢は俺へと剣を突いてきた。

危うく突き刺さるところであった。

残念ながら俺はまだ串焼きにはなりたくないものでそれを辛うじて回避する。

そんな俺の頭は混乱の極みであった。

「どうしたどうした」

まさか、魔法で操られているのだろうか。

魔法の知識は皆無と言えるので俺が気がつかないのも仕方がない。ベヒス嬢が魔法の餌食になったのは理解しかねるが、もしかするとあの黄金色のあれに関して詳しいだけかもしれない。

そう考えると有り得なくはないことである。

「いえ、そういう訳ではありません。ここは、外界と遮断された領

域と言って差し支えありません。それに魔力感知も出来ない。一種の結界に近い場所なのです」

ああ、そういう事が  
出来れば断りたい。

「いえいえ、今後の事を考えるとその方が効率的でしょう。大丈夫です。前回のように戦略性のない戦いはしませんから」

だったら尚更危険である。

確かに、俺が身体に慣れるには良いかもしれないが、下手をすればどちらかが怪我をする いや、死にかねない。特に俺。

上から黄金色の円柱のようなものが降ってきた。

客観的に見ると、唐突に上空から黄金色の光線が放たれたように見えただろう。

円柱の長さにそう見えてもおかしくないのだけれども。

……どうやらベヒス嬢は本気のようにである。

確かに、俺達が戦い合えばベヒス嬢も訓練になるだろうし、俺も身体を動かすことになるので慣れていくだろう。

だけれど、俺は一撃でも喰らえば蒸発死なのである。

ベヒス嬢は俺が致死性の低い動きのみに徹すれば何とかなるだろうけれども。

「致死性の高い技もどんどん使ってください。 師が言っていました。死と隣り合わせである程強くなると」

と、言われても俺は全然乗り気になれないのだけれど。

仕方ない。

回避に専念してベヒス嬢が諦めるまでそれを続けるか、致死性のない動きで戦闘不能へと持ち込むか、諦めるほどの実力差を見せつけるかだ。

三つめの選択肢はまず無理だから諦めるとして、残り二つの選択肢である。

回避に専念しよう。

最悪、受け流しに移行するぐらいの気持ちでいこう。

俺は手にあつた刀を構える。

「どつちやらやる気になつたようですね」

無表情で感情のある声をかけられるとゾクリとする。

恐怖的な意味で。

ベヒス嬢つてたまに変なスイッチでも入るのだろうか。

「私も心置きなくいけますね」

ベヒス嬢が増えた！

なんて在り来りなものではなかった。

人形の黄金色の何かつて触れたら蒸発しちゃうのだろうか。

第二十一話 - 狂人は狂人を呼ぶ - (後書き)

徐々に主人公を強くしているのですが、やりすぎでしょうか。それとももっと露骨に強くすべきでしょうか。

その辺りなど、それ以外でもどしどしご意見下さい。参考にさせていただきますたく存じます。

## 第二十二話 ・ 根源を見ると同族嫌悪を催す ・

「というか、何で急に戦いたがっているんだ」  
やる気があると思われてしまったが、俺は絶賛やる気が出ていない。

なので、出来る限りこの戦闘を避けてしまいたいと考えているのである。

ベヒス嬢は返答する代わりに手を付き出してきた。  
その手には何やら摘まれている。

「あ」

それはエドルが俺に渡した紙であった。

ベヒス嬢に会えという文句が書かれていた筈である。

ただ、何故会えということが戦うに至るのだろうか。

俺は理解できないでいた。

頭も混乱を極めている。

「ここに、貴方を鍛えろと書いているのです」

そういう訳か。

エドルは気を使ってくれたようだが、今はそれが裏目に出たという状況であるらしい。

しかし、ベヒス嬢に修行の協力要請自体はした方が効率がいいのは明白である。

「もしかして、ベヒスの師匠は実践派だった？」

過去の経験である。

俺の師匠の半数は実践派であった。

それならば、修行⇨試合（死合）という図式が形成されることも頷ける。

俺の意図を読み取ったのか黄金色の人形は消失した。

蒸発死の恐怖から解放された俺の気の抜け方は凄まじいものであっただろう。

そう思わざるをえないほどに安心感が訪れたのである。

「 迷惑だったみたいですね。申し訳ありません」

と、言うベヒス嬢はしょんぼりとして小さく見えた。

当然、すかさず俺はそれを否定する素振りを見せる。

ベヒス嬢を悲しませるような事は極力したくないし、ベヒス嬢に手伝ってもらえること自体は大いに良い事なのである。

こちらの世界の剣術というものも知っておきたくはあるのだ。

数が少ないようなのでその応用が出来る機会があるかは別であるが、あらゆる面での対策は練れるだけ練っておいたほうがいい。

万が一、という事もあるのである。

魔族も使わないとも限らない。

あの知能の無さから言うとそのは無さそうであるけれども。

ゲームとかでよくあるボスクラスだけ人語を解する程に知力があるなんて展開の可能性も捨てきれないのでここで学んでおいた方が良いかもしれないという考えも浮かんでくる。

「ベヒスが手伝ってくれるのならそれは有難いよ。ただ、今のはお互いの今までの修行の傾向が違ったただけだ」

ベヒス嬢の表情の変わり様と言ったらそれはもう。

雨雲のバーゲンセールのような空が快晴へと向かった様な感じと違って差し支えない程度の変わり様である。

「では、どうすれば良いのですか？」

と、ベヒス嬢は首を傾げる。

どうも、俺とは違い、完全に実践のみでの修行ばかり行っていたらしい。

所謂、一般的な修行というものはベヒス嬢の辞書には存在しないらしい。

あの修行とは名ばかりの拷問を思い出すと、そんなベヒス嬢には涙せざるを得ない。

「あの、どうしました？」

と、顔に出ていたか。

まあ、仕方ないだろうよ。

トラウマに近いし。

寧ろ、泣き喚いたりシヨックのあまり失禁したりしなかっただけでも褒めてもらいたいものだ。

「いやいや、何でもない」

百面相宜しく、表情を問題ないパターンへと変化させる。

それは顔を取り替えたかのような変わりぶりであっただろう。

自分で自分の顔を見られないのが悔やまれるほどに手応えがあった。

「 そうだな、ベヒスは剣術を学んでるだろ？」

と、俺はベヒス嬢の携えるレイピアに近い形状の剣に目を向ける。先の戦闘では疲労があつたお陰かそれ程驚異になりえなかったが、あれは十分剣術よ呼べる域のモノであり、腕前もかなりのものであると感じたのである。

単純な技量だけで言うのなら、カタブキよりも腕前は確かなのではないだろうか。

「はい、学んでいます。私の師匠が開発したものらしく、名前は存在しません。師匠はともその辺りに無頓着なようなのです」

無頓着 だったのかもしれないが、他にも理由は浮かぶ。

そもそも、自身の為に創ったもので誰かに伝授するつもりは無かつたか、それとも強力すぎるので自身の中でのみのモノにするつもりだったか。

結果から見ると、俺の挙げた二例は同一のものと感じるかもしれないが、その二つには絶対的な差がある。

まあ、これは今は関係の無い話なので捨ておくとしよう。

「それに型、みたいなのはあるか？」

という俺の問にベヒス嬢は首をかしげ、型とは何かと問うてきた。もしかすると、この世界の剣術は、剣術であるけれど、俺の元居た世界とはまた別のものなのかもしれない。

構成自身が違うのか、それとも名称が違うだけなのかはわからない。

いけれども。

「うーん、なんて言えばいいんだろうか。  
なものなんだけど」

一連の動きのよう

そう言つとベヒス嬢は頷いた。

それなら心あたりがあるらしい。

「んじゃあ、それを見せて欲しいんだけど　　言つておくが試合形式じゃないからな」

剣を俺に向けたところでそれを阻止しておく。

危つく突き殺されるところであった。

……ちよつとした戦争よりも死亡確率高いんじゃないかと考えてしまつ。

ベヒス嬢は少し残念そうに頷いて俺と距離を取る。

腰を少し低くし、剣を突き出すような構え。

一般的なレイピアのそれに近い構えである。

違う所は、空いた方の手を後ろに回すのではなく、柄の延長線上に構えている。

手の構えは槍のそれに近い。

見たこともない構えである。

これは予想以上に収穫があるかもしれない。

「っふ！」

ベヒス嬢が息を吐き瞬間ブレた。

ブレた域は腰から首下辺りまでである。

恐らく、一般人だと視認さえ出来ないのではないだろうか。

それを切り口に流れるように様々な動きを試みせる。

その殆が人間に成し得無い軌道をしていた。

どうも、お得意の風魔法を補助としてそれをなしているらしい。

身体にも強化の魔法でも施されているのか魔力が高まっているように見える。

ベヒス嬢が扱う剣術は槍術に近いものを感じる。

どうも、貫く事を主軸に置いたような動きが目立つ。

おそらく、身体強化の主な目的は身体の負荷の軽減なのではないだろうか。

かなり無茶な動きが多いのである。

関節系にダメージがかなり蓄積される動きじゃないかと感じた。

「これで、一通りですね」

数分後、構えを最初の状態に戻し息を付いた。

結果的に言うに似た様な動きを俺は知っていた。

あくまで似ているだけであって全く別物なのだけれど。

構えから攻撃に転じる部分までが俺の知る剣術の一つに近く、そこから攻撃の終了動作までが俺の知る槍術の一つに近かった。

剣術の攻撃初速に槍術の貫通力。

かなりの威力を期待できるのは明白で、隙も単体で使用するよりも若干なくなっているように感じられた。

俺はレイピア状の武器の扱いに関して全く知らないのだが、こういうものだったのだろうか。

そうであるならば、以前の世界で使い手と相対する羽目にならなくてよかったと思う。

すべての攻撃が必殺に近い。

先のベヒス嬢との戦闘を思い返すと肝が冷える。

適当にやっていたが、一歩間違えれば身体にトンネルが開通していたのではないだろうか。

出来るだけベヒス嬢と戦わずに済むように選択を心がけるようにしよう。

「ありがとう。勉強になったよ」

この言葉に嘘はない。

今すぐ実践できるかわからないが、一つの可能性を 何故今まで気がつかなかったのかと問い詰めたくなるような事には気がついた。

「そうですね？ では、次は本番ですね」

と、剣を構える。

どう考えても今から戦闘をやらかそうというアピールである。  
無論俺は拒否をする。

「……どうしてですか？」

先ほど説明しただろうに。

そこまで俺と戦いたいというのだろうか。

ベヒス嬢に問うと頷かれそうなのでその質問は破棄して心の奥底へと幽閉することにした。

「ちょっと考えたいことがあるからな。それがまとまったらね」

取り敢えず、回避方法がわからないので先延ばしにする。

よく見れば分かるだろう。

俺の身体は冷や汗で塗れている。

無駄な足掻きと言える延命処置な気がしてならない。

「……そうですか」

何だか納得行かないという顔である。

次迫られた時の対処法を考えて置かなければ。

「よしよし！ 今日はまだ遅いから寝るぞ！」

別段眠くないけど状況的に致し方なし！

ベヒス嬢が頷くのを見て俺は歩を進めた。

灯台もと暗しという言葉があるが、敵もまた案外近くにいるようである。

「案外食えるな」

朝食にそこいらに生えていた怪しそうなキノコやら草を貪ってみ  
たが毒の匂いも雰囲気もしないので朝食としたのだ。

ベヒス嬢も口にあったらしく黙々と頬張っている。

「今日も修行するのですか？」

Y A B E E E E E E !

昨日の続きが始まりそうな予感がしなくもない。

終わりの始まりとは正にこの事か……。

「そういえば、この森は魔力が溜まっていてそれで空間がおかしくなっているんだよね？」

「ええ、そうですが……どうかしましたか？」

此処に来たばかりの昨日は断定にまで至らなかったのだが

「明らかに人の気配がする。　　厳密には知的生命体としか思えない動きをしている気配があるといえいいのか」

「！」

ベヒス嬢も気がついたか。

俺の感覚が間違っていないければこの森はどうも捨て置けるものじゃない。

「それが事実なら、見えるものがありますね。この森は、ウヌク国の所属になっていますが、あくまで形式的なモノです。実質は無法地帯　　どこの国にも所属していません。それに、この森は大凡半世紀ほど前、前触れ無くこの状態になったのです。それ以前は普通の森でした」

キナ臭いな。

と、いう風に真面目そうな事を考えている顔と格好をしてみせるが、その実俺の心は酷く安堵に包まれていた。危なかった。

この話がなければ昨日の続きが始まっているところであった。

もれなく蒸発死していたことだろう。

黄金色のあの人形は、ただの人形じゃない。

少しだけしか見ていないが、あの動き　　というか形の変化だが

はベヒス嬢と完全に同一であった。

重量が存在するのなら最早トップエルゲンガーという表現も生やさしい存在になっていただろう。

つまり、あの恐怖の剣術を繰り出してくるし、もしかすると黄金色のあれ　　烈火断層も繰り出してくるかもしれない。

となると、当然今の俺だと蒸発死しか選択肢は残されていない。

「つつー事は、もし人が居たとしたらそれは国の預かり知らぬ所でこそそそやつてる後ろめたさがありそうな奴らつて事だな」

ベヒス嬢が頷くのを認めて俺は食事も程々にして歩を進めた。

向かう先は魔力の溜まり場　　気配のする方向である。

こういう隠密行動でも技術を使える部分は使っておいた方がいいだろう。

それによってもブランクを多少でも改善できるのではないだろうか。

と、俺は我武者羅と呼べる程度に乱用していた。

現状は反復練習あるのみである。

昨夜思いついたことはまだ実践に無理して導入しなくていいだろう。

そもそも、この世界の武芸者のレベルを見る限り、使用する機会があるのかと思わなくもないが、念には念を、である。

全員に会ったわけでないしここで判断するのは早計というものである。

以前いた世界でも達人という存在は極少数であったし、その全員が表の世界に出ていたわけでもなかったのである。

この世界でもそれは言えることかもしれない。

「明らかに何かあるなこりゃ」

魔力が溜まつている地点

そこには、何らかの建造物が存在した。

見たところ、オッドがいた研究所に何処か似通っている。

形状が、では無く雰囲気だ。

魔力遮断でも付加されているのだろうかと考えたが、この森自身がその効果を　　もしま、この森をこの状態にしているのはあれが何か噛んでいるのではないだろうか。

まあ、全ては憶測だ。

判断するのは後でも遅くはあるまい。

その地点から大凡200m程離れた場所に俺達は潜んでいた。

「ここからちよいと隠密で行こうと思うけど、無理ならここで待機しといてくれ」

と一応聞いてみるが大丈夫だという顔が目にはいった。

やっぱ愚問だったかな。

ベヒス嬢のそれは歩法も少し組み込まれている。

それを応用すれば常人に気がつかれない程度の歩法なら可能だろう。

特に、ここは森の中である。

平地なら隠密行動も何もあったものじゃないので幸いであった。

周囲の木々も伐採されている訳ではない。

森の中に建造物があるというよりも、建造物の周囲に森があるというイメージである。

これ以上近づけばバレる可能性もあるが、違法の空気であるので俺は敢えて突き進もう。

感じる気配やら配置されているものやら多少漏れる魔力やらでそこが研究所とか観測所といったそういう施設ではないかと感じた。

もしそうであるなら、中にいるのは学者的役割の人であるはずだ。それなら結構一方通行な平和的解決を円滑に行えるかもしれない。

この世界には魔法があるので断定するに至れないのが悲しいところだけだ。

ベヒス嬢も足音をほぼ立てずについてきている。

今の所視線を感じないし、気配も気がついた素振りも見せていない。

このままいけばバレずに建造物まで辿りつけるだろう。

建造物まで数十という所。

現状、何の問題もなく近づけている。

この距離で気がつかないとなると一定以上の実力を持つ武芸者は

いないのだろうか。

敢えてこちらを無視している可能性もある訳だけれども。

それならば、寧ろその武芸者は気にせず、建造物内で実行可能な何らかの対策に意識を裂けば良い。

幸いこちらの世界には地雷とかそういうモノは存在しない。

少なくとも、現状見かけていない。

まあその程度なので安心し切るわけにはいかないが、急に足元が爆発して脚を持って行かれるなんて面白くない出来事に多少恐怖しなくて良い。

これはかなり大きい。

地雷原を突破する等まともな精神で出来るはずがない。

と、何やらトラウマ的なものの影響で喚き叫びそうであったが自重することにした。

もう下手に声を出せば見つかる距離にある。

「!?!」

唐突に甲高い音が響いた。

それは牢獄島で慣れ親しんだ警報を思わせる甲高い音である。

それと同時に気配が近づいてきた。

どうやら何やらへマをしてバレたらしい。

「これですね」

と聞こえたので振り返ると、ベヒス嬢の手には手榴弾の信管に似た形状のモノが握られていた。

「これは気配察知の魔法道具です。これで伝達して警報を鳴らしたのでしょうか」

監視カメラみたいなものも配置されていたのだろう。

異様に統率が取れた動きで近づいてきている。

迷いが無いといえはいいのだろうか。

まるでこちらの居場所が、動きが判っているかのようだ。

「あー、俺達に敵意は」

人影が見えたところでそう言いかけたが、火炎球が飛来してきた。

慌てて回避したが、直撃していたら丸焦げになっている所である。どうやら、平和的解決を相手は望んでいないらしい。

出てきた彼らが浮かべるそれはこちらにひしひしと殺気を伝えてくる。

つてあれは

「人、か？」

異様な形状といえいいのだろうか。

主に人を基準にすれば、だけれど。

耳が尖っていたり角があったり羽があったりである。

先のガーゴイルの様な魔族を思い浮かべることになったが、あの時の彼らとはその異質の傾向は似ているが、根本は違ったものであるように感じた。

「お前たち人と同類に扱うとは屈辱だな。俺達はお前ら人とは違い、崇高な魔族だ！」

怒鳴るように返答してきた男は正しく鬼の様な姿であった。

いや、トラ柄パンツを履いているわけじゃなく、それっぽい角が生えているということだ。

やはり、か。

だが、先のガーゴイルの様な魔族と違い理性やら知性を感じられる。

とは言っても俺からすればどちらにせよ問答無用で攻撃してきているので変わりはないのだけれど。

「おい、ガーク。そいつの魔力の波長 報告にあつたものと一致する」

と、鬼っぽいヤツ ガークの背後で書類らしきものを睨んでいた耳が蝶の羽のような形をした男がそう言った。

報告 とは。

心当たりがない。

この世界では別段特筆されるほどの犯罪は犯していないし問題も以前の世界ほどは無いはずである。

つまりは心当たりが無い。

いや、待て待てよ。

「弱そうだがそうでもないのか？　だが、感じる魔力は少ないぞ」と、ガークは返す。

「まあ、そうだな。だから、今は捨ておいていいだろう。問題は後ろに控えている女だ」

俺だけが木陰に出てベヒス嬢はひっそりとしていたのだが、バレていたらしい。

「ふむ？　ああ、見たことがある。あのハーフ、あいつは末梢しておいた方がいいな。確実に後で響くことになる」

と言うや否や、気配が増大した。増大という言葉で片付けられない。

それに、絶大である。

ガークの様な魔物など一撃で葬れそうな魔力が辺りに響く。それは水に意思を落とした時に生じる波紋の如く。

「はあああああああああ！」

背後からベヒス嬢が飛び出し、烈火断層を放つ。

おいおい、いきなり必殺か。

戦隊物で言うと、いきなり、全員の武器を合体させて放つ必殺技とかいきなり巨大ロボに乗り、全員で掛け声を合わせて出さなきゃならない未知のルールに囚われた必殺技をぶつ放すようなものである。

どう考えてもオーバーキルで相手の活躍なんて無いし、立場なんて頭に入っていない行動である。

「いきなりご挨拶だな」

それが人間であればである。

魔族は、名前通り魔法に長けているのだろうか。

魔族側は誰一人欠けていないどころか、先と違うのはガークが右手を突き出しているだけである。

つまり、どうやったか知らないが、彼は片手でベヒス嬢の蒸発死

の死者を防ぎきったのである。

それも、表情から察するに余裕で、でだ。

「だが、温いし甘い。魔族である俺達にたかが人間が編み出した魔法が通用するとも思っているのか？」

魔法メインのベヒス嬢には分が悪いかもしれない。

あれをどうやって防いだのかわかればまた話は別かもしれないが、今はどうしようも無い。

「隙があつたら攻撃を繰り返してくれ」

「……わかりました」

ニヤニヤとガークは笑っている。

ガークしか動いていない所を見ると、人間をなめているらしい。

となると、今のうちに全員を仕留められると万々歳である。

と、思い俺が脚を動かそうとした

「雑魚すぎだな。その女でその程度 更に魔力の低いこいつはもつと駄目だな。おい！ フェン！ あれを試用しよう！」

フェンと呼ばれた、先程書類とにらめっこしていた男はああ、と今気がついたというような素振りですぐポケットから何やら取り出し操作し始めた。

「ガアアアアアア！」

操作と同時に建造物の壁部分が幾らか解き放たれ、そこから叫び声を上げてガーゴイルの様な魔物と酷似した現れた。

「ちよいとさつき殺りすぎちまったかな。数が少ないな」

と、ガーク。

確かに数は3体だけである。

とはいっても一般人相手なら1体でも間違いなくオーバーキルである。

「補充するか」

と言い、突如空間に穴を作成した。

あれは空間魔法か？

穴の奥にうつすらどこかの一室が見えるのでどこかの空間と空間

を一時的につないでいるのだろうか。

「よつと。おし、いたいた」

ずるり、とやけに生々しい音が聞こえた。

ガークの手には何やら握られている。

「嫌な予感がする。ベヒス、さつさと行く、ぞ」

あの握られている物体

何か音を発している。

いや、あれは音じゃない。

言葉、だ。

待て待て待て待て。

まさかあれは

「タ ケ」

何か聞こえる。

いや、それぞれどころじゃない。

耳を傾けずあれなんて無かったと思いきげにせずあいつらを消してしまえば良い。

そうだそれがいい。

「タス ケ、テ」

握られたもの。

どこか人の形をしていないか。

いや、人の形とは言えないか？

手や足がなければそれは人ではないのだろうか。

皮がなければそれは人じゃないのだろうか。

赤い液体が滴るそれは人じゃないのだろうか。

それを握るあいつらは人の形をしているが

「やれやれ、この作業も面倒だな。自動でなんとかならんかね」

と、言いナニカはソレに棒状のものを突き刺した。

「ガ ア ア アーーーーー!？」

悲鳴とも呼べない。

甲高すぎてガラスが割れているかのような、ガラスを割り続けて

いるかのような叫びが、音が聞こえる。

「つく！　なんて酷い事を！」

まだ、子供では？というベヒス嬢の呟き。

子供？

もしかして、あの段々とガーゴイルの様になっている赤い液体が滴るアレの事か？

あれは子供なのか。

子供なら人間か。

なら、やはりそれを握るあれは人の形をしているが

ヒトジャナインダナ

どこか、懐かしい感覚を感じる。

それは　そうだ。

俺が俺であつたが毒であつた時の感覚だ。

あの時の自分は嫌いだった。

あのタンパク質製造機であつた俺を思い出したくなかつたのに。変貌してしまった子供の肉親が思うであろう事を変わりにしてやらなければ。

あの時の俺もそれと同じことを抱いてそれに突き動かされていた。だからこそ今があり、俺は犯罪者なのである。

あれは人間じゃない、だから

シテモ良インダ

第二十三話 ・変態の親は変態かもしれない・(前書き)

100000PV突破しました。

有難うございます。

完結まで頑張りたいとは思っていますのでこれからも宜しく御願します。

## 第二十三話 - 変態の親は変態かもしれない -

- light line side -

魔族も人と同じく良い者と悪い者がいるのでしょう。

目の前にいる彼らがどちらであるかは、私には判断できはしない。

「ガ ア」

子供 人のその形状を留めていないですが は、最近目撃証言が増えてきている魔族と同形状へと変化していきました。

一概に魔族、と表していますが、魔族は魔物とは違い、同じ形状の者は一卵性双生児でも無い限り酷似しているということは滅多にありません。

人と同じ、ということですよ。

それに、知性もあるのです。

にも関わらず、最近目撃のあった魔族は、寧ろ魔物に近い存在でした。

中には会話が成立する者もいたそうですが、その本質は本能に従うばかりで友好的には進められないとの事でした。

それを聞いて私だけでなく、様々な人間が不審に思っていたのですが、要約判りました。

あれは、魔族でも魔物でもないのです。

分類的には元々人間でしたので、人間なのでしょうか。

尤も、社会的に彼らが人間と認められる事は無いのでしょうか。

魔族の魔力の質にもかかわらず、実際の魔族よりも魔力容量が少なかったのは、元々の素体が人間であったからなのでしょう。

「グ ウウ」

ギリリ、と怪しく光を反射する爪を構えこちらへと臨戦態勢を強いて来ました。

やはり、穏便に済ますわけにはいかないようです。

漏れ出る魔力も増大されています。

後ろに控える魔族は、ニヤニヤと笑みを浮かべていました。

「ッ！」

突如、寒気 いえ、そんな生やさしいものじゃないです。

死、そのもの 自身の死が確定してしまった後というような感覚に襲われ飲まれそうになりました。

ガーゴイルの様になってしまった彼らに目を向けましたが、彼らも何かに怯えているようです。

恐らく、これは殺気。

それも尋常ではないのです。

人や魔族 いえ、生物に発する事ができるのかと疑問に思わざるをえない程の殺気です。

殺気が濃密すぎて、広範囲すぎてどこから発せられているのか理解出来ないほどです。

殺気中毒

そう表現して差し支えない程度に気分がかき乱されてしまいました。

冷や汗が身体から噴き出るのがわかるようです。

全身の震えを抑えることが出来ません。

魔族の方にも目を向けますが、彼らも同じみたいです。

彼らはどこかに目を向けています。

それは

- unknown side -

ひっそりぶりにアタシ的に弟とも言えるなー君に会おうと思ったのよ。

いざ、行ってみようとするれば、入島拒否されちゃったので何の迷いもなくカレンダーを確認した。

「ああー、そういう訳ねえ」

今日は月末。

例外なく、漫画やゲームが発売される時期でもあるのだ。

なー君はめぼしい物をゲットする為にいざゆかん！

牢獄島の監視なんてなんのその、その後の追跡もしたこっちゃんないと買物に出かけたんだろっな。

この時期は確実に居ないことは知っていたはずなのにここに来ちゃうなんて不覚だわ。

周囲の看守やら捜索隊の反応や同行、漏れ聞こえる会話からまだまだ発見される事はないみたい。

流石、アタシ達が鍛えただけはあるけど、面倒には違いないわ。

サザミー　小波と言わなきゃ怒るけど気にしない。サザビーみたいで格好イイのに　　が居ればすぐに居場所がわかるだろうけど、今彼の居場所知らないからなあ。

携帯電話はこの前海ではしゃいだ時にアタシが浸水させて壊しちゃったから連絡取れないし。

そもそも、まだ携帯を壊した上で弁償しなかったから怒ってるかもしれない。

まあ、また今度謝ればいいかな。

今なそれよりなー君！

早くしないとアタシのなー君成分のストックが枯渇しちゃうのよ。すぐさま見つけてワキワキしないといけない。

ふと、手に目を向けると、無意識で両手をワキワキさせてしまっていた。

そして、周囲に視線をあげると、目をそらされた。

近くにいた親子になんて、「ママー」「見ちゃいけません」的な視線を向けられていて痛いというか恥ずかしい。

他の人の視線から察するに顔をどうやら緩んでいるらしい。

「えっへへー」

と言いながらキリッと引き締める。

えっへへー、というセリフをチョイスした事を悔やみそうになっ

た。

そもそもそのセリフ自体が恥ずかしかった。

何とか、その羞恥心は抑えてそそくさと、足早にそこを後にすることにした。

「うーん。なー君は高い所ダメだから本州に入るルートは限られるはずよね」

と、一人漏らす。

上陸するならなー君的に海岸が良いだろうけど、海があまり透き通っている場所は海の深さに圧倒されて意識を失うだろうし、大半の海岸は捜索隊に抑えられているので海岸は使えないはず。

なら、普通にトンネルでも掘って徐々に登ってくるのかなあ。

実際に泳いで通りそうな場所を探してみたら良いんだろうけど、今日はなー君に会いに行くつもりだったから一張羅なのだ。

なー君が喜んでくれるかなと思って気合を入れて作ったのでーす。

まだなー君に見せてないので出来るだけ汚したくない、という訳で普通に気配を探る事にした。

気配感知はやっぱりサザミー程じゃないんだけど人並み程度には最低でも出来るしなんとかなるかな。

最悪、牢獄島で待っていれば2〜3日すれば帰ってくるだろうし待っていればいいかな。

なー君は気配を抑えてるみたいで漠然としかわからないなあ。取り敢えず、その辺りを徘徊してみることにはしますか。

捜索隊の捜索網を潜り抜けるとなると、通れる場所は限られてるし大体の場所もわかつてる。

その内会えるような気がする。

案外普通にばったりあっちゃったり。

それまでアタシも新刊とか欲しいし色々見てまわろうかな。

ソツチの方がきつと会える。  
近くに来れば流石に感知できるしね。  
会ったら問答無用でワキワキしちゃう。  
むっふっふー、楽しみですなあ。

「おおー！」

思わず街中にもかかわらず声を上げてしまった。  
またまた変な人認定されちゃいそうな視線が刺さる。  
変な趣味に目覚めてしまったらどうしてくれる。

なー君ならここで、もう手遅れです、なんて言っちゃいそうだね。  
なー君は手厳しいのです。

アタシには比較的キツク当たるのよね。

アタシにも優しくしてくれればいいのに。

勿論、それに応えてハグしちゃうわよ。  
っと、いけないいけない。

思考が暴走してたわ。

思考が最早妄想に突入しそうだった。

そんな事より、なー君が近くにいます。

ピンピン感覚にキてる。

間違はなく近くになー君がいる。

立ち止まってる所を見ると捜索隊に先越されちゃったかな。  
最低でも2日ぐらいは逃げきると思っていたんだけど。

いざ気配の方へと進んでいたのだけど突如その気配が消失した。  
気絶等ではなく消失。

つまり、死亡。

タンパク質へと変貌を遂げたかもしれない瞬間であった。

「うっ……うっー、ショック死？」

なー君の死因を考えると、高所へ移動したことによるショック死か何かぐらいしか思いつかない。

搜索隊程度に遅れを取るなんて考えられないし。

兎に角、その場に行ってみないことには何も判らない。

アタシは涙目になりながら速度を早め、その場を目標できる位置まで移動した。

辛うじて捉えられてのは光。

街頭なんてある筈もない森林の中なので搜索隊のライトを疑ったけど、あれはライトの光量じゃない。

「何？ あれ……」

光の色も人工的なソレとは若干違うように感じられた。

そして、消失。

急いでその場に駆けつけてみたけど、それらしいものは何も無い。

なー君の痕跡もここで途絶えていた。

摩訶不思議とかまさにこの事かも。

あんまりにもなー君が可愛いから神隠しに遭っちゃったんじゃないかしら。

ひじょーに心配である。

それに、なー君成分も残り少ない。

神隠しなんて知ったこっちゃない。

アタシは早くなー君に会いたいです。

でも、アタシにはこれ以上何も判らないし専門家に聞くべきよね。

「それで、此処に来たのか。いやいや、問題ないよ」

そう唐突の訪問で仕事が滞ってしまってもにこやかに応対してくれたのが専門家の衣玉ちゃんです。

衣玉ちゃんは何時モ巫女服を装着してるのでアタシとしては張りあってしまいそうになるのを抑えるのにかんりの気力が必要だけど数少ない親友と呼べる存在だと思っちゃってる。

アタシ的にその巫女服を着崩すのは非常にえっちいくていい感じなのです。

「最近、同じような事例を幾つか聞いてるのよ。まあ、搜索願や依頼としては来てないけど、気になったから調べてたわけ。片吹の異端児やらの武術関係が多数同じく消えたらしいし」

衣玉ちゃんは眉間にシワを寄せて、集中して消失して、あれから音沙汰ないからもう無いかなどと思ってたんだけど、と付け加えた。

「ふんふん。それでそれで？ 衣玉ちゃんの事だからもう大体わかってるんでしょー？ このっこのっイイよーカッコいいよー」

衣玉ちゃんの眉間のシワは解消されない。

「判っている、というよりも、目星がついた、程度だけだね。そして、その相手が厄介なのよ」  
と、意味ありげに濁す。

アタシとしてはすぐさまなー君に会いたいし続きを促すというか急かす。

「……はいはい、わかったよ話すよ。というか、本当にアンタはアイツに溺愛だね」

「なー君への愛は海より深くて空より澄み渡ってるのよ！ 衣玉ちゃんの巫女服にもビビッとクルでしょ」

と、胸を張る。

ふんぞりが得る勢いだ。

「お前のそのアタシの触覚が巫女服だと思ってるような言動には何時も突っ込んでるがもうそろそろ疲れたから諦めるよ」

ふっふん。

愛が負けるものはないのでーす。

「そして、アンタのその服装にもね」  
あれれ？

この服を衣玉ちゃんに見せるのは初めてのはずなんだけどなあ。

「いや、良い。気にするな。本気でそのセリフを言ってることを見ると改善の余地が糊代より無い事がわかった」

まあ、衣玉ちゃんが良いなら良いけど、気になるなあ。  
ワキワキしちゃうぞ。

いやいや、そんな身体を手で守らなくても大丈夫。  
そんな二本の手の防御ぐらいなんのその。

アタシは縮地を使って衣玉ちゃんの背後に回り込み思いつく限り  
高速でワキワキを開始した。

「うっへへー、良い感触ですなー」

「うるせえっ！」

……殴られた。

そこまで恥ずかしがらなくても良いのに。

「お前が何で牢獄の中に居ないでそこらを闊歩してるのか疑問にな  
ってきたよ」

酷いなあ。

アタシはいい人で健全者なのに。

「お前が健全者なら他の人間は全員、悟りを開いた聖人か何かだよ  
！」

全く、照れちゃって。

そんな反応してくれたらアタシも照れちゃうじゃない。

「駄目だこいつ早く何とかしないと　いや、その余地無いんだっ  
たか」

何故か衣玉ちゃんは頂垂れた。

そんな衣玉ちゃんも可愛い。

お持ち帰り？

「ったく、んな事は良いからさっさと本題に戻るぞ。で、その相手  
つてのは」

衣玉ちゃんが無理やり話を軌道修正し、それを補強するように真  
面目な顔をした。

アタシも釣られて真面目な顔になる。

なってる保証はないけど。

目線は間違いなく真面目じゃないのは保証できる。

着崩された巫女服から覗く太ももやら胸部に目がいつちゃつてるし。

衣玉ちゃんは、その視線に気がついていないのか。そんな事はお構いなしに真面目な雰囲気が続けた。

これ程真面目になつてるのだからアタシもそろそろ真面目になつた方がいいらしい。

と言つてもコレ以上の改善は無理だけどね。

「神だ」

そのセリフは、衣玉ちゃんを信頼しているアタシ以外が聞けば厨二病だと間違いなく突っ込むセリフだった。

「ねーねー、本当にこんな事でいけるの？」

アタシの頭には草葉の陰で覗いている幽霊が頭に装着している三角形の布と同じ形状のモノが装着されていた。

「うるさいね。それは丹分清家に伝わる霊装束の一つだよ。まあ、形はふざけると私も思うけどね」

あ、そこは認めるんだ。

それに、霊装束っていう割に服はそのままの良いみたいだし。

「あー、まあ結構いい加減でもいけるよ。ちゃんとした手順さえ知つてれば、な」

そういうものなのね。

じゃーさつさと行きますか。

レッツゴー！

「あいあい、んじゃ、後はこっちでやるから適当に坐禅でも組むなりして精神統一しといてくれ」

了解です、衣玉隊長。

御巫山戯はいらねえから、と手を払う。

その払い方はまるで、犬や鳥を追い払うかのようなものである。

少しの間お経のような意味の分からない呪文っぽいものが聞こえ、

後頭部に衝撃が走りアタシの視界は暗転した。

白

そうとしか言い表せない。

白以外存在しない。

天も地も何も無い。

空気の流れさえ感じる事が出来ない。

そんな場所だった。

よく見ると地平線の様なものが遠くに見え、それが段々と上に上がってきている。

風を感知できないのかそもそも存在しないからなのか、アタシが落ちていることを理解するまで時間がかかってしまった。

地面らしき場所へと着地する。

地面はあつたらしい。

全て真っ白で、地平線が辛うじて見える程度の境目があるぐらいだけ。

辺りを見回してなー君を探してみたけど、なー君の気配はしなかった。

以前に消えたという他の人達も見当たらない。

「なんじゃ？　今回はもう間違いなくここに人は来ないはずじゃが」  
振り向くと、白いローブを来て白い髭を靡かせたお爺ちゃんが立っていた。

感じられる気配は人間のソレではない。

アタシは間違いなく神に会えたって事かしらね。

衣玉ちゃんに感謝しなきゃ。

「少し前になー君来なかった？　こういう身体のラインの」

と、両手を駆使してなー君のラインをなぞるように動かしてみる。  
ワキワキの熟練者であるアタシにとっては造作も無いことなのです。

「ん？ ああ、さつきまでここにおったぞ。で、概ね丹分清の家の知り合いって所かのう」

「そうそう。なー君を連れ戻しに来たのよ」  
ふむ、と神は唸る。

「残念じゃが、手違いとは言えワシ達神がここに呼んじやったからのう。丹分清とかそういう神との繋がりがあつたり世界に穴をあけたり繋がられたりする者の協力なしには無理じゃよ」

なら、衣玉ちゃんに手伝ってもらおうかしら。

「ソレも無理じゃ。もう別の世界に送つてしまつたからの。送つた先の世界で協力者を見つけないければ無理じゃ。まあ、諦めることじや」

だったらアタシもその世界に行つて協力者を見つけ出せば

「お前さんは丹分清に協力してもらつてここにいる。神が手違いとは言え呼んだ彼とは訳が違うのじゃ。諦めて帰るが良い」

「そこをなんとかっ」

間髪入れず神は首を横に振る。

その佇まいから決して縦に振らないであろうことが理解できた。

「っふ」

瞬間で最高速まで達し、神へと接近し人体の急所を幾つか突く。

「おぎっ！」

と、変な悲鳴を上げたが見た感じそれ程ダメージは与えられていないみたい。

流石神つて所ね。

なー君とアタシを離れ離れにしたから天罰ならぬ人罰を落としてあげるけどね。

スカート裾に手を突っ込みナイフを取り出す。

そして、同じように人体の急所を突く。

「ひ、ひぎゃあああ」

神とは思えない悲鳴をあげる。

痛みに悶えている間に両手足を上手く使つて身体の幾つかを同時

に極めてみた。

「ひ、ひぎゃああ、ギ、ギブギブ！」

「なー君を元に戻すかアタシをそっちの世界に送ってくれる？」

「そ、それはできな」

手が滑ってもう少し手足が移動した。

神って結構身体柔らかいんだ。

ヨガでもやってるのかなあ。

「わ、わかった！ お前さんを送る！ だから」

このお爺ちゃん、話わかるわねえ。

お爺ちゃんの説明によると、時間の進み方が世界毎に違うらしい。だから、元居た世界や神の世界からすると、なー君が移動してからその時間は経過していないけど、向こうではそこそこ時間が経過してしまっているらしい。

故に、なー君が訪れて数日後のその世界にアタシは降り立った。

アタシ、大地に立つの巻って感じかしらね。

見渡すと緑が多かった。

圧倒的に違うのは、何らかの力をあらゆるモノから感じられるって事かしら。

さっそくなー君の気配を探してみたけど見つからない。

かなり距離があるのかもしれない。

こんな事ならサザミーを連れてくればよかった。

取り敢えず、手に握ったままだったナイフを元に戻し、歩を進めることにした。

歩き回っていたら何れなー君と会える気がしたのだ。

アタシの勘は妙に当たること定評があるからなんとかなるに違いないわ。

早くなー君をワキワキしないとねっ。

「ん？」

なー君の気配は感じられないけど、なー君に似た気配を感じられた。

似た気配を持つ人が居ないことは無いけど、この気配は似ているというか、どこか差し替えられたような気配なので気になった。

「ストーキングは趣味じゃないんだけど仕方ないかなあ」

なー君の気配が感じられるまでその気配を追跡してようかな。

幸い、その気配は森の方へと進んでいるから隠れる場所に困ることはないだろうし、動物もいるみたいだからそれらに気配を混ぜて誤魔化しちゃえば気配でもバレにくくなるしね。

「あれ、なー君に似てるなあ」

彼には同行者が一人いるようだったが、夜になって離れたので木陰から覗くと、それは非常になー君に似ていた。

だけれど、なー君という訳ではない。

あれがなー君なら金髪の不良ちゃんになっちゃってるって事だし。

あ、でも足が長くてキュートになってるね。

足の長さやらの身体改造は確かなー君は出来ないはずだし、似た誰かって所かしらね。

ワキワキしたいけどここは我慢しないとダメな所よねえ。

彼が何処からか刀を取り出し、瞑想を始めた。

その格好はなー君と重なるものだった。

「……どう考えても似すぎだよねえ。何か外的要因で姿が変化したとかじゃないよね？」

と、考えが出たが確認するすべはないので放置しか無い。

一番濃厚なのは神が何やらよけいなことをした可能性ね。

「あ、やばいやばい」

同行者の気配が近づいてきていた。

まだ姿は見えないけど、気配からしてそこそこの使い手である事は明白だから近づいたら見つかったら見つかっちゃうかも。

二人が会話を始めたので、その隙に乗じて徐々に距離を置き始めたのだけど、なー君似が刀を構えた。

「うーん、やっぱりなー君なのかなあ」

その構えは見た事があるものだった。

なー君の師匠の一人を務めていた綿名がよく使っていた構えの一つ。

初式とか綿名は言っていた。

命名は適当につけたらしい。

どうも、教えるにあたって名前があったほうがやりやすかったからつけたそうだ。

アタシはそんなものどうでもいいので、名前なんてつけなかったけど、やっぱり男の子ってそういう技名みたいなのあった方が良かったのかも。

そこは少しなー君に悪かったかなあって思う。

アタシがする一連の動きは名前があった筈なんだけど、聞いた時点で、右の耳から入って左の耳から出て行くという感じだったからなあ。

その時ハマってたアニメの事を思考するのに没頭していた覚えがある。

話がそれ過ぎちゃったな。

こつこつのをええと 閑話休題っていうんだっけ。

最初読み方判らなかつたっていうのは黒歴史だわ。

「ねーむーいー」

世界移動っていうのを神にやってもらったけどやってもらう方は結構疲れるものみたい。

体力の消耗が激しい。

取り敢えず、近くの街でこの辺の動物の毛皮とか売れないかなあ。前いた世界の主な収入源がそういう感じだったし、これが封じられちゃうとアタシは行き倒れ確定なのです。

「こつこつてやっぱり前の世界と違うのねえ」

ビビッと来た動物を狩って狩って狩りに狩ってその死骸を街に運びこむと、そこその額になるらしい貨幣と交換してもらった。

この世界の人ってあんまり戦う人居ないのかしらね。

なんだか、弱い動物ばかりだったのだけど、それを持っていくだけで驚かされていたし。

全体的に武芸者の質は低いのだろう。

「なら、尚更なー君は大丈夫かな」

気になるのはこの世界に馴染めているかって所かな。

気がついてなかったから神を脅迫して作らすことが出来なかったのだけど、身分証みたいなものが無いので出来ないことが幾つかあったの。

幸い、動物の死骸やらの買取はソレ無しで出来たけどね。

宿も先払いなら身分証はいらなかったし何とかなってる。

今は後がどうなるかよく判らないし、一番安いらしい宿で部屋を借りた。

ああ、そういえばなー君って服がそのままなら囚人服って事よね。

あの服は　　というか、前の世界の一般的な服はこの世界に馴染

めないと思う。

アタシは幸い、一張羅だったから馴染めたけど、なー君はコスプレイヤーを眺めることはあっても実際にコスプレしないからなあ。

なー君としては非常に不便な差異だろうけど、アタシにとってはインスピレーションが湧きそうな差異だわ。

「まあなー君にはサバイバルも出来るように仕込んでるしなんとかなるかな」

死ぬって事はないと思う。

また明日にでも期待をして寝ようかな。

おやすみなさい。しーゆー。

ふかふかのベッドに身を任せて、輝く星空を眺めてアタシは意識を心地良く手放した。

なー君ワキワキフェスティバル的な夢見れないかなあ。

第二十四話 - 優位なんてものは幻想で弱点 -

「んー？」

なー君ワキワキフェスティバルを引き当てたアタシは満足いくまでワキワキしようとしていたのだけど、なー君似の気配が移動することを察知して仕方なく切り上げた。

代金は昨夜支払っているので滞りなく宿を出ることが出来た。

昨日、森を出ようとしたら何やら衣玉ちゃんが語り出しそうな歪みがあったので、もしなー君なら出られないだろうからそう慌てることじゃない。

アタシは、幸いにも同じような歪みを以前に衣玉ちゃんと体験したので衣玉ちゃんのマネをすることで脱出する事ができたのだ。

今から思うと、元居た世界も案外オカルティックであったのね。真似事で成功するって事はかなりいい加減なものだったのだろうけどねえ。

気配から察するに歪みを突破出来ていないみたいなのでアタシは悠長に進むことにした。

アタシは低血圧だから朝が苦手なのよ。

なー君をワキワキ出来るかもしれないと思わなければ今頃ベッドの中でスリーピングタイムを堪能していた。

ドリームタイムでもいいわ。

なー君なら力づくで出てきそうだけど、多分時間がかかるだろうし森の外で待つておいてドッキリでも結構しようかな。

もしかしたら森の中心にいる人達に出方を教えてもらうかもだけどそれならそれで追いつけばいいかな。

一晩考えたけど、やっぱり、あの気配はなー君に違いないのよね。気配が他人の空似ってレベルを遙かに超越して似ちゃってるし、容姿も似てる。

多分あのお爺ちゃんが何かしたんじゃないかなあ。

もしこれでキューティーになってなかったらお爺ちゃんの命運はそこまでだったわね。

森の中心にいる人達と接触したみたいだし、もうすぐ出てくるかな、と伸びをして欠伸をして気楽にしていると

「あー、なー君怒っちゃったなあ。もしかして、あの実験動物かと感じていた気配、逆鱗に触れる幾つかの中の一つだったのかなあ」  
となると、アタシの推論は正しく、彼はなー君確定ということになる。

それなら、この感じる殺気は間違いなく問題だ。

「そうしない為にあの島にいたっていうのにこんな所でそれを無下にしちゃだめじゃない。まったく、更なるワキワキをしなきゃいけないわね」

アタシの感覚にもピンピン来てるし、可愛い弟子の止めどきも来てるし、何とかしちやいましようか。

なー君を一番溺愛してるのはアタシだって自覚もあることだし、それに準じようじゃない。

「ほいほいー、さっさっさー」

急いでいるのではしたないけど近道をば。

森の中の近道といえば木々の枝を飛び交って直進するのが早いだよ。

「うんうん、いたいた」

見ると、なー君が森の中心にいた人たちの方へと疾走する寸前だった。

間に挟まれるようにいるガーゴイルみたいなのが怒っちゃった原因かなあ。

「とりあえずっ」

同行していた女の子は自体について行けていないのか呆然としているし、止める人は居ないみたい。

なら、アタシは愛に任せて愛に従うのみね。

なー君が普段以上の速度で昨日持っていた刀で斬りかかろうとし

ていたので、ナイフを取り出し相殺した。

更に、相殺したことで隙が出来たので回し蹴りの要領で後頭部を蹴り飛ばした。

なー君には悪いけど、他に方法思いつかないし。

ごめんねっ、なー君。

もうすぐでこのよくわかんない人たちだけじゃなくて、ガーゴイルにしか見えないけど人の気配をしたなんて言えばいいのかわかんないのを切殺しちゃうところだったじゃない。

キレて周りが見えてないなあ。

悪い癖だからやめなつてちゃんと釘を刺しといたのに。

刺したりなかったかなあ。

「ん？ ああ、なー君は大丈夫だよ。ほっとけば治るだろうし。取り敢えず、おじやま虫はご退場かなあ」

と、女の子の説明も兼ねて漏らす。

アタシってすっごく親切。

なー君の好感度がこれで上がるといいけどね。

よくわかんない人たちはよくわかんない事を発してよくわかんない事をしていた。

うーん、何か光ってるし、もしかして魔法とか何かかなあ。

神様いたし、衣玉ちゃん経由で色々見てるからかそついう結論が出た。

火の雨って言い表せばいいのかな。

彼らが何やら光の塊を空に放つたと思つたら見上げて見える範囲全てが火の玉で覆われた。

あれって当たったら火傷で済まないよね。

なー君ならある程度大丈夫だろうし放置しとくとして、後ろの女の子はあぶないかもしれないなあ。

やっぱり守つた方がいいのかな。

と、やや心配になつて後ろを見ると

「!?!」

後ろ姿しか見てなかったけど、今ならわかる。

某有名シミュレーションRPGのアグリアスに瓜二つじゃない！  
と、なると間違いないと守らないといけないわね。

みなぎってきたわあ。

再び視線を戻すと、先程より迫っている火の雨がやっぱりあった。  
全部防いだほうがいいかなこれ。

幾つか方法が思いつくけど、一番成功率が高いヤツを選ばざるを  
えないわ。

兎に角、何とかしちやいましょう。

- light line side -

感じる殺気はナークからでした。

雰囲気も尋常ではないです。

「ナーク？」

名前を呼んでも反応はありませんでした。

まるで聞こえていないかのようまでの無反応さです。

ナークは何時の間にか昨夜の刀を構え魔族へと向かって行きました。  
た。

いえ、それは向かっていったと言っているいいものか。

私には視認できなかったのです。

突如消えた、そう表現した方がいいかもしれません。

魔族側には見えているらしく魔法の詠唱を始めました。

しかし、ナークの迎撃には間に合わないでしょう。

案の定、詠唱が終わりきる前にナークは魔族の前へと現れました。

「つくそ！ こいつ人なんじゃないのか！」

魔族は焦燥しか浮かべていません。

ナークの手がブレ、魔族が切り刻まれる光景を幻視したのですが、  
それは発生しませんでした。

突如、上空から見知らぬ女性が現れ、ナークの刀を全て弾く事で

防いで見せました。

それだけではなく、突如ナークが吹き飛ばされました。

一瞬何が起きたのかわかりませんでした。格好から見ると、どうも蹴り飛ばしたようです。

女性が浮かべる顔は非常に悲しそうというか、申し訳ないという様な表情でした。

格好からして猟兵の様ですが、ナークに匹敵するレベルの猟兵となると、国が抱え込み有名になるはずなのですが、私はこの女性を全く見た覚えがありませんでした。

女性は、私達に背を向けて魔族と対峙する格好になっていました。私も同じですが、魔族側も困惑の表情です。

「  
？」

女性が何やら話しているようですが、何を言っているのかよくわかりません。

イントネーションの関係で、疑問系か否か、程度が辛うじて分かる程度です。

山奥で別の発展でもした村の方なのでしょうが。

この理解出来ない言葉は訛りのようなものなのかと思いました。

訛りにしては、まるで同じ言葉のように思えないということが不思議でならないのですけれど。

女性は、こちらを振り向き、目を見開きました。

驚愕の表情というものです。

その驚きようは凄まじいものでした。

黄金色の断裂としての私を知っているのでしょうか。  
ライトライン

存在は知っていても黄金色の断裂が私であるということを知る人間は猟兵にはそう居ないはずなのですが。

女性が再び視線を魔族の方に戻すと、その頃には魔族の困惑も解消され、詠唱も完成していたようです。

火炎球を空へと放ったかと思うと、それから無数の火炎球が放た

れました。

対象は、角度から言って私達全員。

突如現れた女性もそこに含まれるようです。

「つく！」

回避しきれ無いと思い、烈火断層を放つも、女性の方まで手が回りません。

女性はそれを驚いた表情で見っていました。

私の力不足のせいで、女性を助けられそうもありません。

「ああ、大丈夫だよベヒス」

ナークは落ち着きを取り戻したのかいつもの調子で私の所まで歩んでき、そう言いました。

ナークはそう言いますが、ナークじゃあるまいしあれを耐えぬくなんて事は、知名度の無い猟兵では不可能でしょう。

何とかできるのなら、普通なら確実に知名度があがるのです。

それ程、出来る人間が少ないということです。

猟兵でも数人居る程度じゃないでしょうか。

殆の猟兵は、相手の方が人数が多い場合、魔族には手も足も出ないのです。

それほどまでに人間と魔族には根底的な性能差というものがあります。

「宇美音子さんなら俺よりもっと余裕を持ってあれをどうにかできるよ」

信じられません。

が、雨のように火の天井の吊り天井のように無数に降り注ぐ火炎球を女性は全て回避して見せました。

というよりも、火炎球に当たったかと思っただけですが、火炎球が地面に接触し、砂煙が巻き起こった後に無傷で女性は佇んでいた、という結果を見ただけです。

もしかすると、何らかの方法で防いだのかもしれない。

「！」

女性が叫び声のようなものを上げ、刹那後には消え、魔族の前に現れ手に持つ短刀を文字通り目にも留まらぬ速度で振りました。本当に女性が人であるのか。もしかすると、魔族なんじゃないのかと思わざるをえない光景です。

しかし、魔族はやはり魔族らしくそれを全て防いでいます。見ると、魔族と女性の間には障壁が張られていました。おそらく、それで全て防いでいるのでしょう。

障壁は、その効果を発する度にその度合いによって魔力を消費するのですが、魔族はその上限が人間の比ではないのです。

「燃える！」

更に、その障壁は発動するまでは詠唱が必要ですが、発動後は独立して存在しますので、他の魔法を発動することが可能なのです。

その性能で女性は一見攻勢に出ていますが、押されています。火炎魔法が放たれる瞬間に間合いを開け回避して見せました。信じられない速度です。

身体強化の魔法を使用しているのかと思い、探索してみました。それらしい痕跡はないことから、持ち前の身体能力のみで再現しているようです。

それは見たことがあります。

「 ナークと同じ……」

ナークと同じように、魔力が全く感じられないのです。

ナークは稀に魔力を放出しての戦闘を行うようですが、基本的に魔力は使用せず、信じられないことに持ち前の身体能力のみで戦闘を行っています。

カタブキと戦闘を行っていた際もそうでした。

カタブキは勇者の一人であるので、人間を凌駕した戦闘能力を何かしら秘めていたはずなのですが、ナークはそれを赤子のように扱っていました。

「 ! 」

「 ? 」

女性はこちらを　　ナークの方を向き何か叫びました。

「ベヒス、ここは俺らにまかすとけ。どういふ訳か知らないけど、宇美音子さんがいる。負けることはまずないさ」

という言葉は信じられませんでした。

いくらナークでも、生物的に上位種にあたるであろう魔族に対して敗北を得ないなど幻想としか思えません。

基本的に魔力を使用しないナークと魔力を発していない女性の二人は、実質上、猟兵でも何でも無い平民と変わらないのです。

越えられない壁というものは確実に存在します。

それこそ、人間を超越した存在の勇者でない限りは

- main side -

「なー君！　なんとかならないの？」

ナイフを全て防がれ、その上火炎の追撃を受けた宇美音子さんはそう叫んだ。

どうやらあの障壁は物理属性にかなりの耐性もつものらしく、物理攻撃をはじいていた。

俺はベヒス嬢の方を向く。

「ベヒス、ここは俺らにまかすとけ。どういふ訳か知らないけど、宇美音子さんがいる。負けることはまずないさ」

ベヒス嬢は信じられない、という顔をしていた。

まあ、普通の反応だろうな。

相手は魔族だけじゃなくて、あの人間だったモノもいるのだ。

さつきはキレちゃったけど、宇美音子さんの蹴りのお陰で冷静に対応できる。

「宇美音子さん！　その障壁は多分物理属性耐性があるんだよ！」

俺と同じくしてゲームをこのなく愛する宇美音子さんの事だから

理解してくれるだろう。

放たれる火炎魔法をナイフを高速で振り回すことによって生じる衝撃で打ち消し、一時の均衡状態を保っていた。

「げげっ！ それほんと！？ 不味いじゃーん。なんとかしてよー」  
魔法を扱えない宇美音子さんにしては天敵といわざるを得ないだろう。

かと言って、このまま俺ひとりで勝てるのかというと確証は持てない。

「ベヒス、ここから先のこととは他言無用で頼むわ」

ベヒス嬢が頷くのを見届けて俺は呟く。

「形状実装<sup>リイト</sup>」

オッドルから貰ったオーパーツ的な素材を取り出し、形状変化を図る。

が、その形状変化は芳しくない。

「はーやーくー。あんまり持たないよおー」

確かに、徐々に押されてきている。

幸いここは、魔力を放出しようと認識されない阻害の効果のある結界が張られている。

俺は魔力を抑制していた腕輪を一つ消失させる。

「！？ この魔力は！？ おい！ 雑魚ども！ 奥のやつを先に片付ける！」

フェンがガーゴイルに俺を狙うよう命令を下す。

が、それによって生じた隙は一瞬だが、宇美音子さんにとっては大きな隙だ。

「はいはいっ」とー」

蹴りを放ち、宙に浮かせ、更に跳躍することで更に蹴りを三連放ち吹き飛ばす。

ベヒス嬢は俺の魔力量が気になるのか、多少意識がこちらを向いているが、烈火断裂を放ち牽制する。

烈火断裂は必殺で防ぎ用のないものだと思っていたが、フェンた

ち魔族はあっさりと防いでいる。

魔法に関しては魔族の方が上なのだろう。

魔力量もそうだが、技術も相当である。

「<sup>リッド</sup>形状実装」

二本のナイフを作成する。

その耐久値は凄まじいもので、そこいらの物質よりも二桁ほど大きいものだった。

これなら、いけるかもしれない。

以前は一度の戦闘、いや、数撃だけで実質使い物にならなかった。俺は魔道書を展開する。

初めてこの魔道書に頼る心境になったかもしれない。

俺の力量だと、これが上手く行かなければ間違いなくここで死ぬ。それに、二人を守れない。

「いけるか」

必要な知識が引き出される。

その知識は、理論上可能であると告げている。

ならば俺はそれに託すだけである。

無理だったら無理だったと何か方法を考えればいいだろう。

尤も、その余裕があるかは定かではないが。

「<sup>ブースト</sup>特性実装」

魔法を 特殊効果を施す。

魔術式、構成完了

接続、完了

移植、完了

固定、完了

形状融解反応無し。

存在固定、完了。

「宇美音子さん！」

と、叫び作成したナイフを放り投げる。

あらぬ方向に投げてしまうというような失態はなく、問題なく届

いた。

「お、おお！？ なー君すごいじゃーん。イケメンになったのは伊達じゃないってことだね！」

宇美音子さんがナイフを掴むと、速度が上昇した。

もはやフェンたちにもその姿は見えていないのではないだろうか。ただ、これだけだと、物理遮断ともいえる物理障壁は突破できない。

あれはあくまで身体強化の付加効果なのである。

ベヒス嬢もそれを察したようで、未だ緊張しているようだ。

対する魔族側もそれに気がついていているらしく、余裕の表情である。魔法武器を作る原理と同じモノなので魔術効果付加、これ自体は全く珍しくないのだろう。

それ故に欠点も判っているのだろう。

魔法不可は基本的に一種のみ。

重ねがけも不可能なのだ。

理由として幾つか挙げられるが、一番はやはり付加したモノが魔法の威力に耐えきれずに崩壊してしまう事だろう。

次に、重ねがけを除いて複数付加は事実上同時に複数種の魔法を行使し接続し固定しなければならぬのである。

魔族であるならば複数種を同時に扱うことは可能なものも居るだろう。

それ以降の作業である接続と固定はそれ以上の難度がある。

並々ならぬ魔力コントロールを要求されるのである。

それだけではないが、理由としてはそれだけで十分だろう。

魔道書からの知識は無論、その欠点についても教えてくれる。

ただ、腐っていても神だ。

あいつが寄越したモノ 神器は常識をも覆すものらしい。

知識の中には、その欠点を改善したものも存在するのである。

「なに！？」

フェンの叫び声が聞こえ、俺は口の端が釣り上がるのを止められ

なかった。

「うーん、これ、すごいね。衣玉ちゃんが使っていた霊能みたいな感じの何か？ 人体発火の応用とかかなあ」

宇美音子さんの両手にはベヒス嬢が扱っていた烈火断層による剣と酷似したものが握られていた。

ただ、刀身はサバイバルナイフ並の長さに調整されている。

「感想は後にしてくれよ。まずはあいつらを何とかしないと」

「だよー、早く何とかしないと！」

このサイズの武器でなら宇美音子さんも全力を出せるだろう。

宇美音子さんはソレを察したのか微笑む。

「うんうん。なー君がせっかく作ってくれたしやれるだけはやるよー。それに」

宇美音子さんはそう言いながら烈火断層を放つベヒス嬢に視線を移した。

その視線からはどう考えても下心があることが見て取れた。

「あー、宇美音子さんの考えてることが何となくわかったよ」

ベヒス嬢、ご苦労様とだけ言っておこう。

なるべくそうならないように善処はしてみるが、人間には限界があるのである。

十中八九、どうしようもないだろうな。

「そーう？ んじゃーちゃっちゃと行ってくるよー。っていうか、なー君もサボってないで参加しなさい。それで何とかできるんですよ？」

と、魔道書に視線を移す。

所謂、オタクと呼べる域まで突入している宇美音子さんは当然、ゲームも嗜んでいるのである。

となると、RPGにも手を出している可能性もあるわけで、今はそれに漏れなかったのである。

RPG思考 厨二病的思考を放出すれば自ずと魔道書のこととは臆気にも把握できるということだろう。

そもそも俺がゲームやらをやることになったのは宇美音子さんのせいだし、それをやってのけても俺は何の疑問も抱かない。

今も、コスプレで戦闘してるわけだし、オタクの重度さが見て取れるだろう。

それこそ文字通り。

「宇美音子さん、魔族の魔法は俺が何とかするわ。余裕があったら攻撃もやる」

放たれ続ける火炎球を回避しつつ相談とは名ばかりの宣言を開始する。

「はいはい、オーキードーキーでっす！ そんじゃ、全力で行こうか。なー君との共闘って久しぶりだし力が入るわあ」

死が入り乱れる中で笑みを浮かべる宇美音子さん。

傍から見たら完全にイカれてると思われる所業である。

「人間風情の似非魔法でどうにかなると思うな！」

と、ガークが叫び魔力を高め、魔法を構築し始めた。

どうやら、今までは人間だと思って舐めて掛かっていたらしい。

魔力の向上具合からこれからは本気、というヤツでくるのだろう。

ソレに呼応するかのようにフェンも魔力を高める。

俺は先の能力行使で魔力を消費してしまったので現在の常駐魔力は彼らよりも低い。

単純な力比べだと負けること必至という事である。

宇美音子さんは彼らの魔法など無いと言わんばかりに先と変わらず突っ込んでいる。

俺のそんな心配とも呼べる心境を読み取ったのか、「なー君がなんとかするんでしょ？」と呟いた。

ふむ、そういつてもらっちゃったら俺も期待に沿わなければなるまい。

「死ねえええええ！」

ガークとフェンがそう雑魚よろしく、セリフを吐き雷の上位魔法を放つ。

魔法構成を見る限り、さすがは魔族。

人間が繰る魔法等は稚戯と呼べる程度にその内容の高度さが違う。例えば、人間が繰る魔法が東京ドームいっぱいの水だしよう。

魔族のそれは、同じ純度　東京ドームいっぱいの水　をサッカーボール程度まで凝縮できるのである。

そして、それを同じ規模　東京ドームいっぱい　を超えて扱える。

技量も素質も人間のそれに収まりきらないのである。

人間からすれば理解もできないのではないだろうか。

俺も魔力を視認する事ができなければ理解できなかったかもしれない。

それ程までに本能的に目を背けてしまいそうな力量差なのである。無論、工夫次第でそれを覆すことも可能だが、現実的ではない。

「そのセリフって死亡フラグじゃない？」

宇美音子さん、セリフに容赦を設けたほうがいい。

狙われるし。

今、宇美音子さんは無防備にも突貫しているって事を忘れてはいまいか。

「ほんと、頼むよマジで」

俺の仕事が増える。

「なっ!?!」

俺が魔道書の知識を行使し、反作用魔法を瞬時に展開し無効化すると、本当に雑魚よろしくのセリフというか叫び声を上げ慌てて次弾を構成し始めた。

残念ながらその隙だけで勝敗が決するという出鱈目な戦闘もあるということを種族的優位からか、認識していないらしい。

「っが……あ」

宇美音子さんが瞬間的に高速化し、消失したかと思うと、再び現れ、相対していた魔族は身体の要所要所を切り刻まれ地に伏した。

世の中は時として世知辛いのである。

## 第二十五話 - 魔と鬼では鬼の方が良くないらしい -

「魔か鬼か なー君はどう思う？」

地に伏す魔族を見つめ宇美音子さんはピクニックに来ているかのようなのんきな素振りでそう言った。

ガーゴイル的な存在は魔族を迎撃したこちらを警戒しているのか少し距離をおいて眺めるばかりで魔族を助けるに至ってはいない。

いや、彼らは既に本能と命令でのみ生きる存在だろう。

本能が戦闘を避け今の警戒態勢を生み、命令で俺達を討とうとしている。

それらが相反することでこの停滞が出来上がっているのではないだろうか。

「どう思っつて言われても俺にはわからんよ」

そもそも興味がないし。

どう思おうと俺に出来ることは限られているわけだし。

俺としてはそれよりも後ろのベヒス嬢が気になる。

魔道書を見たわけだし思うところがあるだろう。

それを聞くつもりはさらさら無い訳だが。

ベヒス嬢を見ると、既に立ち直しているらしい。

話したい事があつたり俺と行動を共にしたくないのであれば勝手に切り出すだろう。

俺から催促する形というのはなにかが違う気がするしなあ。

「なー君のその伸縮自在な本はなーに？」

そういえば、全く説明する間がなかったか。

「これは、か いや、糞爺に貰った不思議本だよ」

宇美音子さんが神器を知らないとは思うが、ゲーム廃人候補もしくはそのものであるからある程度想像出来るだろう。

ゲームでは不思議な爺さんに特別なアイテムを貰うというイベントはそこそこ王道に近いイベントなのである。

いざ体験してみると何も嬉しくなかったイベントだけれど。

この世界にこれたのは行幸だけど魔道書も魔力も殆使ってないしなあ。

なんか、使わなくても何とかなってる感が大きいし。

「ふーん。あの白い所にいたお爺ちゃん？ それだったらそのチー  
トも納得行くよー」

ああ、もしかして宇美音子さんもあの神と会ったのか。

それに、これだけの応酬で魔道書の大凡に気がついたか？

まあその方が楽だからソツチの方が良い。

楽である方だと願っておこう。

「んもー、ホントになー君無口ねえ。アタシが付き合い長いし表情  
でいたいわかるけど、読み取るのってそれでも大変なんだよー」

と、言われても口に出さずに考えるのが癖に近いものなのである。  
直せと言われて直せるものではない。

善処はしても構わないけれど諦めてもらわなければならないだろ  
う。

善処しても直せる自信はないからである。

「……はいはい、わかってるわよ。言ってみただけよもー」  
宇美音子さんは魔族へと振り返る。

「なー君、その本を使って彼らを元に戻せない？」

魔族に目を向けたままガーゴイル達に指を向ける。

確かに、あれは魔法によるものなのだろうから、魔法を司る

この魔道書ならなんとか出来るかもしれない。

「やってみる」

魔道書を展開すると必要だと思ふ知識が流れこむ。

ガーゴイルへと変化させた魔法の構造、効果、構成工程等作成者  
にしか知り得ないような知識まで感覚的に把握できる。

何度やってみても　という程回数は重ねていないが、不思議な  
感覚である。

他では体験できないのではないかという脳の充実感を得られるの

である。

麻痺つてこんな感じなのかなあ、等としようもない思考へと移行しそうになったので知識を吟味することでそれを矯正した。

「どう？ なー君」

という問に答えるように魔力をカタチへと構築する。

幸いにもガーゴイルを人へと戻すことが出来る方法は見つかった。後はそれを実行する工程を再現すればいい。

「バカが！ そいつらをガーゴイルにした魔法は実験段階のものだ。解除しようがねえんだよ！ もうやめて」

ガークの言葉が途中で途切れる。

「くひゅっ」

「うんうーん、そうそう。そうやって黙ってれば良いんだよねー」

あー懐かしいな。

宇美音子さんつてあんまりにも余計なことを喚き過ぎたら喉を潰す寸前まで握り締める癖があるからなあ。

本人に問うても知らぬというので無意識下の行動じゃないかと思う事で考えている。

まあ、無意識下だと断言しても良いレベルでそうじゃないかと思っっているのだけど。

だから今は本当に魔族が自主的に静かになつてくれたと思っっているのだろう。

「おし、これでいけるかな」

魔法を構築し展開すると、見る見る内に人へと いや、肉塊へと変化した。

そういえば、元々人の原型をとどめていなかったのだった。

下手しなくてもこのまま死んでしまうので俺は若干慌てつつ回復

いや、復元魔法を展開する。

すると、面白いように傷が治っていった。

ガーゴイルから完治するまでおおよそ、10秒程である。

魔法とは非常にというか異常に便利であるなど実感した瞬間であ

る。

「いけたいけた」

という俺の声に伴う結果が気に入らないのかどうかは知らないが魔族は嘘だ、とつぶやいていた。

俺としては完全に知ったこつちやない。

さて、残る問題はこの魔族たちだけど

「宇美音子さん」

「はいはい、わかってるよー。魔か鬼かって言えば鬼だもんねー」と言っていると魔族は細切れになった。

これがミンチ　は無理があるからサイコロステーキと言って販売しても変わった味の肉だなという程度で収まってしまおうような具合に素敵な変貌具合だ。

ベヒス嬢が何やらいうかと思ったが想定以上に取り乱していない。寧ろ、サイコロステーキになったこと等気にせず、いつの間に細切れになったかという疑問が頭を占めているのではないだろうか。

宇美音子さんのナイフさばきは目がなれないとついていけるものじゃないのである。

初見だとまず見切れない。

師匠の中でも群を抜いての速度を秘めているのである。

尤も、そのせいなのかは知らないが火力に乏しいという問題はあ  
るのだが。

もしかすると、ナイフという武器の特性が原因かもしれないな。

「よしっ！　問題解決だね。それじゃ、ここから出る？」

そういえば、ここから出る方法に迷走していたので何らかの気配があつた森の中心に向かつていたのであつた。

戦闘を終え、気配は実験として使用された子供しか残っていない。その現状でも尚、脱出方法は発見できていないのである。

俺はある程度魔法を見ているので現状の深刻さが何となくわかるし、今は魔道書を展開しているので尚更理解できるのだが、宇美音子さんはそうではないのかもしれない。

それ故に気軽にいられるのか。

魔道書を使えばこの結界なんてものともせず脱出する方法は幾つもありそうだけれど。

実験に使用されていた子供は意識を回復していない為、魔道書を使うことに何の問題も見いだせないのでそれも可能だろう。

「ふっふっふー」

が、宇美音子さんのにやけた顔を見る限り、存外魔法について知っているのかもしれない。

俺は宇美音子さんがいつごろここに来たのか知らないのである。

もしかすると、俺よりも早い、という可能性もなくはない。

宇美音子さんと会うのは数カ月ぶりなのである。

その空白期間を考えるとその可能性は否定しきれるものではない。と、そんな事を考えていると、俺が先ほど作成した宇美音子さんが持つナイフから砕けるような音が聞こえた。

鈍いが軽い、そんな不思議というか微妙な音である。

骨が折れた時と似た様な音かもしれない。

見ると、ナイフが塵のようになっていき、消滅した。

どうも、耐久値の限界が来たらしい。

宇美音子さんは少し驚いた表情をしてからスカートの中から別の何かを取り出した。

替えのナイフかと思ったが、戦闘は既に終了しているので必要性がないのでそれを注視することにした。

それは、長方形の木箱のようなものであった。

木箱、と言うわけではない。

形状がそれであるだけであって、木箱のように開閉できるシステムは採用されていないように見える。

魔道書を展開している今の俺になら理解が出来た。

「あ、それって」

「そう！ これどこから出られるみたいなんだよね」

木箱のようなものは結界破り。

その様な機能があるものであった。

構成を見る限り、今までの人間が扱っていた、魔族から言うとき非魔法であるそれとは違うもので、魔族の扱う魔法ともまた違う様に感じた。

「衣玉ちゃんから貰ったんだよね」

ああ、あのエロ巫女さんか。

彼女ならあれを作っても不思議ではないと納得出来る。

あの人という時は、何やら超自然的な現象によく遭ったし宇美音子さんが何も言わなくても何れは行き着いただろう。

「じゃ、それで出ようか。ウヌクとは反対方向から出たら良いんじゃないかな」

一応、追手のみである可能性があるので警戒はすべきだろう。

このままベヒス嬢が付いてくるかはわからないが。

「ベヒスはどうする？」

視線を移すとベヒス嬢は既に身支度を整えていた。

というより、元々持ち物はほぼないのだけど。

「ついていきます。が、その前にこれからどうするかを聞きたいです。魔族が既にこの大陸へと侵入してきているとなると事態は王達が想定しているよりも遥かに切迫してるはずです」

確かに、だな。

電話のようなものがない様なので原始的に連絡へと回っているのだがそう悠長にしていられないのかもしれない。

間に合わないことも想定して何らかの策を練る必要があるかもしれない。

いや寧ろ現状を考えると間に合わないと考えたほうがいいだろう。エドルがどの程度の速度で連絡に回っているかはわからないが、所詮人間の足なのである。

距離は現状の道筋と比較して考えると数日程度で回りきれぬものではないことは明らかなのである。

幸いなのは魔族は現状二人しか見ていないことを考えるとそう多

く無いのかもしれないということだ。

断言はできないのだが。

ガーゴイルで手数を増やしているぐらいだ。

その可能性は十分あると考えて良いのではないだろうか。

「混乱を覚悟で波紋の鐘を使うべきなのかもしれませんね」

波紋の鐘

魔道書から知識が流れ込みそれを知る。

どうも、この大陸全土にいる人々へと声を伝える装置であるらしい。

これまでは魔族の件というか、勇者達の絵の変化は公にしていなかったのだが、魔族含め公にしてしまおうということだろうか。

そうすれば一瞬で事態は伝わるはずである。

が、市民の混乱はさけられないだろう。

もしかすると、軍の士気にも関わるかもしれない。

そう考えるとやすやすと選んでいい選択肢ではないことが理解できる。

「アタシがそのエドルって人に伝えたらいいんじゃないかな」

沈黙が場を占めていた中で宇美音子さんはのんきにそう呟いた。

宇美音子さんなら俺みたいに滑空不可能という様な制限がないだけでなく、そもそもの速度が俺よりも早いため俺よりも早く移動できる筈である。

問題はエドルを知らないということか。

「エドルって人の気配はその本で教えてくれるってのは出来ないの？」

そんな万能なモノではない。

いや、待てよ。

記憶の移植なら可能である。

ならばあるいは

「やってみたくがあるんだけど」

「おーけー！ 早くやっちゃって！」

内容も聞かずに即答とはこれまた。  
俺を信用してくれているからなのかはわからないがありがたい事である。

「おしおし、これがエドルって人の気配ね。うん、場所はそれ程離れてないからすぐに追いつけると思うよ。なー君達はどつする？」  
と、喜びの余り抱きつく、という振りをして俺のほぼ全身をくすぐる様な手つきで触ってきた。

曰く、これはワキワキという名称らしい。

多分だけど宇美音子さんの勝手なネーミングであるだろう。

「俺達はこの辺りで身を隠してるよ。現状は動きまわっても意味は見いだせないわけだし」

急ぎではあるのだけれども。

取り敢えず、ベヒス嬢から何か聞いてくる機会は与えたほうがいいだろうという事を思ったからこの選択を選んだと行っても過言ではない。

「おっけー、そんじゃエドルって人にどうすれば良いか聞いてきたらいいんだよね？ 行ってくるねー！」

と、危ない。

「どうやって聞いてくるんだよ。取り敢えず翻訳魔法を施すからちよい待ってくれ」

ベヒス嬢と宇美音子さんの様子をみる限り言語が通じていない。

俺はこの神器の影響か、言葉を話せているらしいが宇美音子さんにはそれがないらしい。

聞いてみると、俺はベヒス嬢と話す時はこちら側の言語を話し、宇美音子さんと話す時は日本語を話しているらしい。

今まで気がつかなかったが最も役に立っていた恩恵はこれであつたらしい。

「これで良し。んじゃ、頑張つてね」

「はいはい、頑張ってくるよー」

宇美音子さんが消えるのを見届けると俺は魔道書をしまった。

魔法で速度上昇を促した宇美音子さんは既に目視できるレベルではない。

真面目に見ようと思っても辛うじて見える程度だろう。

あの調子なら数日もしないうちに戻ってくるだろう。

宇美音子さんに各国への連絡を任せられたら楽なんじゃないかと思わなくもなかった。

俺がそんな事を考えてつつたっているとベヒス嬢がついに話を切り出した。

「ナーク、その本は魔道書　神器ですか？」

いきなり根源を付く。

存外ベヒス嬢は容赦がないらしい。

まあ、話しても良いと判断したから使った訳なので問題はないのだけれど。

寧ろ話が早いと言って喜べば良い場面なのか。

「神器なのかはわからないな。言えるのは神から貰ったモノだから普通じゃないって事か」

「では、ナークは魔の勇者、と言うことになるのでしょうか」  
ポジション的にそれは十分にあり得る話ではある。

が、神的に言うとお飽きがないのでここに置いただけであって別段特別というわけではない。

そう考えると

「いや、多分そんなもんじゃないだろうな。たまたま便利グッズを  
持っている一般市民、そんな位置づけじゃないかな」

「一般市民が持つ魔力量ではないです。一瞬だけでしたが、魔族を  
上回ると言っている魔力をナークは有していました」

そう考えると普通の立ち位置じゃないと言いたいのか。

あれは神なりの謝罪というものなのではないだろうか。

俺からすればメリットではないのだけれど。

使わないし。

「まあ、それは色々と事情があるからな。説明はめんどうだから割愛するけど、俺の立ち位置に響くような要素じゃない」

ベヒス嬢はそれをどう受け取ったのか、頷いて質問は終わりであると伝えてきた。

なにやらベヒス嬢なりに納得できたらしい。

俺が魔の勇者というガラじゃないというのもあるかもしれないなあ、と若干ふざけ気味に思った。

魔の勇者であるなら、俺は魔法を使って戦うべきなのである。

能力や魔道書自信と魔法は別物であるので俺は事実上ほぼ魔法を使用していない。

恩恵である魔力は多少使用したが、それでも魔法には至らない。

あくまで魔力を運用したという位置づけである。

魔の勇者というものが魔法の勇者ではなく、魔力の勇者であるならまた話は変わってくるのだろうが、それでも該当するほど魔力を乱用していないように思える。

殆が肉弾戦で済んでしまっているのである。

俺が魔法使いなら、これほど武闘派な魔法使いはこの世界にはいないだろう。

エドル等は魔法を使いはするが、魔法使いではなく剣士だろうし。ベヒス嬢のような存在も居るわけだから、ベヒス嬢やエドルのように間違いなく人間の最上位に入る実力を持つ人間の中には武闘派の魔法使いがいるかもしれないけれども。

何にしてもそれらしくないというのはついてまわるだろう。

俺自身、魔道書の魔法に対しての反則性はある程度把握しているが、それでも魔の勇者であるかと言われると首をかしげざるをえないのである。

魔法は扱えるが、それは常時というわけではないのである。

現状、勇者はユウトとカタブキしか見ていないが、身体強化等の恩恵は常時施されていたように見えた。

運用されている力は魔力ではなく、別の何かであったのでそこまで詳しく見ることが出来なかったがおそらく間違いはないだろう。常時気配が大きかったのである。

魔の勇者の恩恵であるであろう魔法知識が一時的にしか与えられない事を鑑みると俺はそれとはまた違うということが理解できる。勇者とは似て非なる存在、それが俺の立ち位置なのではないだろうか。

「んじゃ、もう質問とかないのか？」

ベヒス嬢が頷くのを受けてから俺達は身を隠す場所を探すことにした。

周囲から確認しづらい場所であっても宇美音子さんは俺達の気配を察知してくるだろうし、俺も宇美音子さんの気配をある程度察知できるので落ち合えるだろう。

「あ」

よく考えたら宇美音子さんから結界破りを受け取らないままに行かせてしまったので俺はここから出られない。

魔道書を使うなら話は変わるだろうが。

「結界破りないしこの森で時間潰すか」

業々ここを出なければならぬ理由はほぼないし。

助かった子供辺りはウヌクへと届けたい気がするが。

先に見た結界破りの構成を応用すれば一時的に出ることが可能か。

「俺、こいつら届けるだけ届けてくるわ」

「わかりました」

今、ベヒス嬢がウヌクへ向かうのはあまり良くはないだろう。

俺単体なら逃げ切れてもベヒス嬢は移動が得意というタイプではないのでその場合足を引っ張る事になる。

結界破りの構成を真似て魔法を構築し、展開すると、結界に穴が開くのが目視できた。

目視とは言っても、魔力の流れを見たというものなので常人には目視出来るものではないのだが。

何はともあれここから出られそうである。

俺は子供を担いでウヌクへと戻ることにした。

一応、いつ追手とエンカウントするかわからないのですぐさま子供をおいて逃げ出せる準備を怠らない。

現状、俺の警戒網に引つかかる気配無い為それ程気張らなくて良いかもれないが。

子供に負担をかけない程度の移動であるので先程よりも時間がかかってしまったが、致し方ないか。

さて、いざウヌクへ到着してみるも、警察という組織がないためどこに子供を置いてくればいいのかわからないし、そもそもウヌクの子供なのかも怪しい。

近くの集落がここであるので安直に来てしまったが今更であるが少々心配である。

もう少し事情に詳しいベヒス嬢の判断を仰いでからでも遅くはなかったのではないかと後悔するばかりである。

俺はこの世界には伝がないため、助けを乞うわけにも行かない。

故に、押し付けられる人員がないのである

マスターにおしつけるか。

それなら酒場の前にでも置いてくれば万事解決ではないだろうか。すぐさま雲隠れすれば俺が犯人だとバレもしないだろうし。

問題は子供の親が既に見ない場合である。

誰が養うのかという話になる。

下手すればマスターが養わなければならなくなるが、あの強面だ。子供の躰は何もなくても勝手に律されるであろう。

健やかに育つかは保証しかねるが。

俺なら二日としないうちにショック死しているかもしれない。下手すれば目覚めた瞬間にあの顔が視界に入る可能性がある。

それならばその時点でショック死だろう。

即死とも言う。

ゴーゴンも真っ青なあのだ致死性と効果範囲を持ったあの強面は人

間が所有しているいいものかと疑問に思わざるをえない。

おまけに、あの緑色のトーストのコンボである。

味は保証されるのだろうか見た目が保証されない。

目覚めて強面に迎え入れられ緑トーストを口の中に放り込まれたら確実に死ぬ。

死ななくても廃人になる自信がある。

緑トーストがこの世界での一般的な料理であるなら後者の問題が排除される為、子供たちならあるいは助かるかもしれないが、俺はあの場所以外でも食事をした経験がある。

その際に緑トーストを見かけなかったし露店で見られる数々の惣菜を見てもそれは見受けられないため一般的な料理ではないように思えるので問題が片方排除されるという考えは甘いモノだと実感せざるを得ない。

「マスターの所は駄目だな」

俺の良心というか人間性が許さない。

あそこにおいてくるということはその子供を殺すと同義である。

ならば、猟兵所ぐらいしか思いつかない。

軍辺りまで運ぶのもありだが、手配されている可能性がある俺である。

もしかすると子どもが仲間だと思われ、何やら宜しくない待遇で迎えられるかもしれない。

それもやはり良心というか人間性が許さなかった。

「仕方ねえよなあ。身分証あるし何とかなるだろ」

と、俺は安直にも猟兵所の扉を開けたのだった。

第二十六話 ・強き者が勝者であるとは限らない・

「ちいっす、お届けものでーす」

なんて軽いノリで入れることを願ったが、中を見ると筋肉隆々の猛者が大半を占めていたので目立たないようにこっそり入ることにした。

子供は適当にその内目に付く場所においておけばいいだろう。

それ以降のことまで面倒をみる義理はない。

正直、理解しているのだ。

この世界に来てからの俺は明らかにトラブルメーカー体質になっているのだろうという事を。

よくある漫画の主人公のようにその事などに全く気がつかないなんて事があれば気が楽だっただろう。

が、生憎こう連続してと言っていい程度に短い間隔で何度イベントというか面倒が発生すれば自覚する程度に俺は過去を振り返る男なのである。

神が何やら余計なことでもしてかしたのではないだろうな。

そうであるならあの糞爺に一発拳をお見舞いしてやらねば気がすまん。

いや、してやろう。

俺にこんな余計なパッシブスキル『トラブルメーカー』が付加されたのにそれを無効化するなりの対処をしなかった糞爺は拳を往復移動させる目的地に推奨しても良いと想う程度にジヤイアンの思考回路で思考してやろう。

と、心の中で好き勝手考えていたのだがよく考えたらこういう面倒が発生する原因の一つでよく表記されるのは天罰とかなのだろうが、その天罰の発生源というか天罰を落とす人物は神であった。

そしてその神は例の糞爺である。

……もしか、この不敬具合が原因でパッシブスキルが付加された

のではないだろうな。

そうであるなら早急に改善が必要だ。

だが、到底改善できないように思えない。

俺の中では尊敬できない人物 Best 10 にランクインしてしまっているのである。

全力を持って票操作を試みるも上手く行くはずがなかった。

人間には限界があるのである。

この神と言う名のあの糞爺を尊敬するということは人間の限界を超えている事象の一つであるとここに宣言しよう。

賄賂を渡されようと命に手をかけられ脅迫されようと恐らくは不可能だろう。

表面上は可能であるだろうが、今のように内面でそれは行える自信はない。

寧ろ、反抗心によって更に内面は反抗的になるだろう。

そう考えるとこのパッシブスキルの付加は避けられないもので仕方のないものなのかもしれない。

それ故に更に反抗心が芽生える。

どうも俺は半永久的に神への不敬度合いが上昇する一途である運命下にある様である。

悪循環の極みなんじゃないかなこれ。

まあでも俺にはどうしようもないから諦めるか糞爺に直談判で改善を要求するしかないか。

宇美音子さんは神器を持っていなかったから自力出来たのだろうか。

あ、いや、丹分清の工口巫女がオカルティックだったし、あの結界破りを含め宇美音子さんに色々と助力していたからなあ。

工口巫女の手助けがあるなら神に会えた事も納得である。

後で方法を聞いてみるのも悪くないかもしれない。

もし俺でも実行できる方法なら試してみてもあわよくば改善を要求しに行ってもいいかもしれないな。

面倒そうだけど。

面倒そうだから誰かにやってもらうか。

「おい！ あの村の生き残りはいなかったんじゃ！？」

誰だ急に大声を出しやがって。

話的に盛り上がり欠けるだろうが流石にこの展開だと俺のパッシブスキルが発動した事ぐらい勘づける。

大凡、ここに運んだ子供がいた村はあの魔族に壊滅へと追いやられていて生き残りがいなかったはずなのになんで此処にいるんだと騒ぎ始めたのだろう。

案の定周囲の人間の声を聞いてみると俺はエスパーかとツツコミが入っても差し支えない程度に予言と言える予測であった。

そうと分かれば後は簡単である。

見つからないようにここから脱出と逃亡を行えば良いのである。

抜き足差し足忍び足とはよく言ったものだ。

こつそりと移動しようとするとその言葉が似合う歩き方になりがちなのである。

いや、俺だけかもしれんが。

流石にわかる。

このままだと俺が連れてきたという事までは判らずとも何やら関与している又は知っているとかわれてしまっただろうと言っ事を。

幸いにもタイミングよく子どもが目覚めそちらに周囲の注目が集中している。

逃げるのなら絶好の機会

うえ、子供よ、こつちをガン見するな。

バレたらどうする　もう遅いか。

「お前、何か知ってるのか？」

取り敢えず、指名手配犯になっている可能性があるんで顔は伏せ体勢を低くし見えないようにと悪あがきを行使する。

「おい、答えるや！」

というか、何故こんなに喧嘩腰なんだコイツは。

肩を掴まれそうになったので取り敢えず手を弾き出来るだけ最速で出口へと移動を試みた。

都合の悪いことにここにはそこそこの使い手がいたらしく何人かはそれに反応したのかしなかったのかは知らないが結果的に俺の進路を妨害する位置で待ち構えていた。

それに俺は思わず舌打ちをした。

背後では武器を手に取る気配が感じられる。

よく考えたら証拠など全く無かったので素知らぬふりをしていればよかった。

後悔先に立たずである。

このポ力は非常に大きく辛いもので自分をフルボッコにしてやりたいと本気で思ってしまったくらい問題のあるものであったがまだなんとかなる。

巻き返しというか対処法というかその辺りはまだ潰えてはいない。とは言っても俺に出来ることは結果的に逃走だけなのだが。

このまま捕まれば明らかに面倒事に巻き込まれることは目に見えている。

現状で手遅れ感が少からず漂ってはいるが諦めるよりはマシだろう。

いかな、若干弱腰になってしまっている。

エドルみたいな変態的な強さを秘めている奴はいなさそうなので数十人に囲まれてはいるが何とか脱出だけなら触れられること無くこなせるだろう。

「答えろって言うてるだろうがああ」

だから何故そこまで喧嘩腰なんだ全く。

まだ体面ほど敵対意識は無いらしく、振り下ろされようとしている剣は軌道的に俺を切り裂く形ではなかった。

外すのではなく、峰打ちという形になるだろう。

当然、それも痛いので御免被るわけだが。

折角の気遣いも方向性を良い方に向けてくれなければいい迷惑な



それが引き金だと子供のせいにするつもりは毛頭ないが、ガン見は止めて欲しいものだ。

まあ、もう今となっては関係ないのだが。

全員がよってたかつて安直に出口をマークしたところで俺は脇にあった窓から出るというフェイントをカマしてから普通に壁をぶち破って脱出した。

無論、その勢いに乗せてそのまま突っ切る。

脇道を見かけたら即行曲がるという戦法を行使することですぐさま撒くことに成功した。

前の世界のスリに聞いた逃走法である。

中々に有効活用させてもらっている。

前の世界でも脱獄した時の追手から逃げるときに大いに役立つてくれたし。

次あのスリに会うことがあればお礼をしてやらねばならんなあ。

何はともあれ一旦逃げ切れたのは大きいな。

このまま捕まったら面倒事起きるってのあるけど、多分ベヒス嬢とかに迷惑かけちゃうだろうしな。

全力で逃げさせてもらいますよ、と。

この世界の科学力というか生活力というか、取り敢えず前いた世界のようにかなりしつこい追手が科学力で再現されていなくてよかったと思う。

前の世界での状況だと下手すれば捕まっていただろうし。

逆にこの世界で注意すべきは、道が舗装されていないからヘタこいて気がつかずに崖から自由落下とかしないようにということか。

個人的に精神の生死に繋がるので細心の注意が必要なのである。

もし自由落下しようものなら明らかなオーバーキルのダメージがスリップダメージよろしく常時蓄積されていくのである。

最早生き延びることなど不可能と言えるだろう。

次に気をつけるべきはがけ崩れだろうか。

この辺りの地層は乾燥気味らしくそこそこ崩れやすくなっている。

崖の上にいる時に崩れて諸共落下するという危険性を孕んでいるが、ソレ以上に気がつかない可能性がある危機は下を歩いている際  
に上から岩が落ちてきて生き埋めになるパターンだ。

生き埋め自体は問題ないのだが閉所へと押し込められる。

それは自由落下同様オーバーキルのスリップダメージが施される  
事になる。

この辺りもその例に漏れない。

故に迂闊に全力で走れないのだ。

いや、走れるが怖くて走れないのである。

情けないかと思うかもしれないが俺にとっては銃を頭に突きつけ  
られトリガーを引かれることよりも生死に関わるのである。

それに遭遇するなら銃を頭で撃たれたほうがまだ生存率が高いと  
いうものだ。

現状は一時的な意識の喪失だけで済んでいるが、そのまま目覚め  
ず実質的なお通夜状態になっても不思議ではないと自負しているの  
である。

目覚めなかつたら楽になれるかなってたまに思ってしまうぐらい  
参っている俺がいなくはない。

剣や銃といった武器に対しては全くと言っていいほど恐怖感がな  
いのだが、高所や閉所もそれに見習った反応ができるようになれば  
良いのだが夢のまた夢というか、理想というか幻想に近い。

例えるなら、おとぎ話に近い程度に儂気で現実味がない。

簡単に言えば、俺自身実現不可能だと諦めている。

一時期は改善の余地があるだろうとトチ狂ったことを考えて敢え  
て高所や閉所に身を委ねたこともあったが、先に精神が瓦解しそ  
うだったのである。

ちなみに、先の猟兵所はもう少しで閉所認定されるという際どい  
ラインであった。

もう少し規模が小さければ俺は発狂していただろう。  
危ういところであった。

と、そんな事を考えている内に獵兵所にいた奴らの気配が戻っていったので諦めてくれたらしいことがわかった。

そろそろここを後にして待っているベヒス嬢の元へと戻ろうとしようか。

というか、あまり時間を掛けていると宇美音子さんも待たせることになりかねないのである。

宇美音子さんの行動力のありあまり具合と爆発力と持続力と無駄さは半端ではないのだ。

並々ならぬモノを感じざるを得ない行動力なのである。

そして、ソレに比例して物理的な行動力も上昇するのである。

先程見た感じ、そこそこ機嫌がよくテンションが高そうであったので想像を絶する行動力を伴っているだろう。

もしかするともう帰ってきているかもしれない。

そんな有り得ないことでも現実的だと錯覚してしまいそうだ。

エドルは俺が感知できないほどの遠方にいるが、宇美音子さんと感知出来る程度の範囲にいたのである。

それならば常人なら馬に乗って数日ぐらいで追いつく程度の距離だろう。

宇美音子さんならテンションが低くてもその半分ほどで追いつける。

テンションが高い今は未知数である。

まあ流石にもう帰っているなんてことは物理的に有り得ないのだが。

なら、必然的にあの森又はあの森付近にて数日待機することになる。

となると、ここから森へ行く所は誰にも見られないように注意をする必要がある。

面倒は避けてもまた別の面倒がやってくる。

それこそ面倒である。

よくいる逃走者は路地裏に逃げこんでそのまま人気のない場所を

通って逃げおおせたりするだろうが、実際問題、ソツチの方が捕まりやすいというか見つけやすい。

と、俺は考えたので当然それを補う方法で逃走を試みる。

人が大勢いる大通りを敢えて通るのである。

服装も民間人と違和感が無いように能力により形状を変化させ馴染む。

歩調も武者以外のそれと同じようにするのは勿論、重心移動などもそれに合わせて変化させる。

こういう偽装は師匠の一人である秋田山小波に相当仕込まれた。

俺が尤も会得に苦労したものの一つだろうものがこの偽装である。

秋田山さんは隠密機動等による搜索や潜伏、偽装という技術に特化した人だった。

最初、それを聞いたときは忍者かと思った。

ちなみに、偽装とは言っても、変装したりではなく今のように重心を偽装したりというものである。

正直、俺はその系統の技術を使用することは滅多に無い為、日に日にその知識は霞となって消滅していつている。

今もその知識のかすれ具合から何かポカをしていないかと不安で仕方がない。

が、このまま走って逃げようにもよく見るとこの街は塀で囲まれていたのでコレしか方法がなかったのである。

不安にかられて答え合わせ的に周囲の一般人と自分の重心移動を比較してみる。

「……大丈夫だな」

「何が大丈夫なんだ？」

不安の余り周囲と答え合わせしたが大丈夫そうであった。

これならバレないだろう。

不安が多少拭いされて気分が改善された。

良いことである。

ん、いやちよつと待てよ

俺は慌てて横を見る。

そこには俺と並んで歩いている少年がいた。

当然、先の子供というわけでも俺の知り合いでも前の世界の住人でもない。

知らない人である。

魔族っぽくなくてよかった。

魔族だったら死に物狂いで全力で逃げている所である。

「急に黙りこんでどうした？」

俺は元々口になんかを出して意思疎通をしようと凶る人間ではないのでこれが通常である。

俺を知らない人間にはそれは知るよしもないだろうが。

気になるのはこの少年が何故俺に話しかけてきたかである。

俺は話しかけたつもりはないし、そうと誤解されるセリフを吐いたつもりもない。

嫌な予感がしなくもなかったので一般人的に怪訝な表情をして見せてから多少歩調を早めた。

「ちよつとー逃げないでくれよ。まだ返答してもらってないし用事あるんだよねー」

そういえばこのウヌク国はヌーダイセ王国で聞いた限り熟練者が集まっている場所であったか。

冷や汗と呼べる液体が見えないところで吹き出ているのではないかという錯覚に陥る。

「僕ねー、さつき獵兵所から逃げた不審者を追ってるんだけど」

是非ともそこいらの一般市民に不審者を見なかったかというような刑事ドラマでよくありそうな聞き込みというヤツにして欲しい。

ソレならば懇切丁寧にホラを吹きこんであげようじゃないか。

「いやー、不審者なんて俺は見なかったなー」

取り敢えずそう返す。

「そりゃそうだろうね。なにせ君が不審者だ」

バレているのか？

だが、不審者という言い方であるのでそうであるとは言い難い。バレているならソレは既に捕縛されていてしかるべきだろう。獵兵所の奴らを見る限りはソレぐらいの血の上りようだったし。適当にごまかしてこの場を去ることにしよう。

応援が来ら穩便に逃げることは叶わないだろうし。

「それは悪かった。だけど俺はその路地から来たから獵兵所からは出てきてないんだわ」

「苦労さん、と呟いて少年から離れようと試みるが袖を掴まれて転けそうになった。

なんだこいつは、という様な目を向けてみたが少年は悪怯れる節など一つも見せず飄々としている。

親の顔が見てみたいというものだ。

「あんたがさつき獵兵所から出たヤツだろ？」

少年の目は少年らしからぬ目であった。

今人を殺してきたとかいう目ではなく、今からテロを起こして大量虐殺するぞとか獵奇殺人者を思わせる目である。

背筋が冷たくなる目線というヤツだ。

「いや、だから俺はその路地から」

言い逃れ出来るとは思えないが一般人を必至に装う。

やはり何かポ力をしたのだろうか。

こつも簡単にバレルほど秋田山さんのシゴキはぬるくなかったはずである。

確かにここは熟練者が集う場所であるのだが、少年は少年である。

この少年と呼ばれる程度の年齢で偽装を見破れるほどの実力が得られるかというと首を傾げるのではなく横に振らざるをえない。

少年は8歳程度の外見なのである。

前いた世界なら天才と呼ばれる極一握りの存在ならあるいは可能だったのかもしれないが、この世界はそれ程武術に長けていないし、少年から魔力をあまり感じ無いので熟練の魔法使いという訳でもなさそうなのである。

いや、魔法使いに詳しい訳ではないので早計かもしれないが、どちらにしても、俺の偽装を見破り、しかも気づかれない内に人ごみに気配を紛らせて接近するとなると相当の実力者である。

エドル程の実力者であると順当に言えばそうなるが、魔法があるこの世界ではそうとも言い切れないのが少しの救いである。

それが幻想なのか真実の救済であるかは未だ不明であるが。

出来れば救済であつて欲しいと願うばかりである。

俺の精神上では既に土下座の勢いである。

「それは無いね。だって、あんたは獵兵所から逃げ出したヤツと同じ波長を感じる」

波長、とは何のことだろうか。

もしか気配のようなものを指しているのだろうか。

ああ、そういえば、重心偽装はしたが気配の偽装をし忘れていた。ブランクとは酷いものだ。

俺はこのタイミングでそれを噛み締めることになった。

とても望んだ状態ではないな。

「気のせいだろ、気のせい。じゃ、俺用事あるから！」

あばよ、と叫ばん勢いで少年の手を振り払い早足でその場を後にした。

が、少年の足音は未だ背後から聞こえてくる。

逃げきるに至れてはいないらしい。

今すぐ全力疾走して逃走を試みたいが、人ごみがソレを許さない。俺が高所恐怖症でなければ側面の建造物の壁を走つたり、建造物を崩もろとも飛び越え一気に脱出を図れるのだが、今それをチャレンジする気にはなれない。

もし失敗して捕獲されてしまえば逃げ切れるかは断言できかねるからである。

魔法とか言う道と違っていいもので捕縛されようものなら手も足も出ない可能性があるし。

魔道書を使えばなんとかなるだろうが、両手足を捕縛でもされて

しまえばそれを使用することも出来ないだろう。  
泣き出したい思いである。

俺は子供を届けに来ただけなのに何故こんな目に合わなければならぬのだ。

少し怒りがこみ上げてきたが、やり場に困るのでなかった事にしようとな努めた。

相も変わらず少年の足音は途絶えない。

距離も離れてはいはないようである。

このまま少年を撒くことが出来ないまま街を出ることになってしまいそうだった。

騒ぎを起こさずに撒くのは至難の業だろう。

騒ぎを起こしてもいいなら幾らか方法はあるだろうが。

仕方ないので多少騒ぎが怒ることを覚悟で賭けに出てみるとしようか。

最悪、この街に来れなくなるだけなので大したことはないだろう。俺の搜索が嚴重になっても多少は逃げ切れるだろうし。

ここで顔が割れて更に捕まりやすくなるよりはマシである。

俺は少し走っているという程度まで速度を上げる。

前触れ無くやったため背後から聞こえる足音からは焦りが感じられた。

多少の焦りが漏れたがそれでも未だに背後を付いてきている。

幸い、多少距離を離れたようではあるが。

俺は目についた路地へと跳び込むように曲がった。

足音は聞こえるが、急に曲がった俺を今は視界に入れていない。ならば後は早い。

少年は気配が読めるようであったので、偽装ではなく遮断した。気配を消すのは師匠全員にしごかれたものである。

かなり重要なのである。

「<sup>リフト</sup>形状実装」

横の壁を変化させ壁へと偽装し、素材として壁を使ったので壁に

穴が開いた。

当然俺はその穴に潜り込む。

運良く壁の先には誰もいなかった。

何やら雑貨店のようであるが今は店員の姿が見えない。

昔あった駄菓子屋のようなシステムなのだろうか。

取り敢えず俺はそのまま普通に出口から出て人ごみに紛れた。

どうやら無事に逃げおおせそうである。

路地の方を見ると少年はどうやったのか作った壁を破壊していたところみたいであった。

こちらに気がついていない素振りがないのでそのまま街の出口へと脚を向けた。

第二十六話 ・強き者が勝者であるとは限らない・（後書き）

最近は又ル又ル話が進んでいった気分だったのですが、今回はまた話の展開がありませんでした。反省しています。

第二十七話 - 多勢に無勢の多勢は勝ちフラグとは限らない -

- yuuto side -

『巨大な恐怖』エドルに各国への伝達を頼んで幾らほど経過したのか分からない程忙しかった。

いや、それは現在進行形であるので、正確には、忙しい、なのだろっ。

いやいや、文句を言っていてはいけないな。

忙しいのは僕だけじゃないんだ。

フィニアにも軍の統括の一部を担ってもらっている。

そして、それは相当に辛いのか、今は横でへばっている。

何とかしてあげたいとは思っただけで僕も手一杯でどうにかできそうにはない。

自分の情け無さが憎いと思うよ。

「各国は間に合いますかねー。日程をズラすつもりはないんでしょっ？」

伝達はあの獵兵 いや、人間の中でも最強に属する一人であるエドルなのだ。

失敗するはずがないだろう。

過度な期待は禁物だが、彼は最強と言われる人物達の中でも取り分け有名なのである。

有名だからこそ良いというわけではないが、実際に彼の戦いぶりを見ると信頼せざるを得ない。

最初は人伝で聞いたただけであったので信頼を置くことは出来ないと思っていたのだけれど、それを一瞬で反転させてしまうほどの力強さだった。

それに、彼はナークを引き連れていった。

過去に戦闘を行う立場にあったのかナークとエドルの戦闘は凄まじいものだった。

ナークは記憶喪失ということだったが、その戦闘技術は身体に染み付いていたのだろうか。

何にしても異常と言わざるをえない。

最強の中でも最強に近いエドルに名乗らせて尚実質負けてはいない。

気絶で敗北と判定された。

フィニアを除き、全員が、エドルの攻撃を受けて気絶で済んでいるとは凄いと行っていたが実際は全く違う。

ナークはエドルの攻撃を食らってはいなかった。

何か別の要因で気絶したのだ。

動きが多少ギコチなかったので記憶喪失が影響しているのだろうが、それがなければエドルにも勝っていたのではないかと思っつまうほどだった。

エドルを筆頭に最強に属する人物達ならまだわかるが、そうではなく、それどころか無名であるナークがそれに匹敵すること自体があり得ないのだ。

あのぎこちなさを感じるナークでも最強の人物達の何人かには勝てるのではないだろうか。

エドルにあれ程拮抗する實力を見せた者はそういない。

最強の人物達でもエドルのあの連撃は避けられないはずなのである。

その中の一人であるアリアリナを筆頭に、魔法使いに属するクラスを持つ最強の人物達はそれに該当するだろう。

剣士に属するクラスの人物であれば最強の人物達でなくとも、それに近い猟兵所の最上位の者達でも回避なら可能だろう。

あくまで回避だけだ。

ナークがやってのけたように防御するなんてことはまず出来ないだろう。

威力を殺す前に防御に使用した武器が破壊し尽くされるのが目に見えるのである。

この世界にやってきて、よくは分からないが、武術のようなモノはなかった。

しかし、ナークが防御する際に見せた一瞬の動き。

あれは芸術と呼べるほどに不思議なほど綺麗に威力を受け流していた。

ナイフが破損しかけたのはそんな中で少しぎこちなさを感じたのだが、それが原因だろう。

全体的に何かずれている。

そんなイメージをうけた。

「きつと伝達は上手くいく。だから間に合うさ。日程をズラす必要なんて無いよ。寧ろ、早く各国から軍が来るかもしれないし頑張っただけ準備をしないとね」

さて、このまま訓練を続けて軍全体の練度を上げないとね。

もう十分だと思っただけで達しているのだけど油断はいけないと思っただけ続けるつもりなのだ。

少なくとも、最近頻繁に出現するようになった魔族に遅れをとるような事はなくなっている。

場合によっては一対一であつても勝利を収めるといふ例が出てきてさえいる程なのだ。

「さ、それじゃ休憩はこれぐらいにしてそろそろ訓練に戻ろうか」

と、言うのと、フィニアはうえーっとうめき声を上げてだるそうに身体を持ち上げた。

面倒だらうけどどういう日頃の訓練が最終的にモノを言うのだと思っているので止めるつもりはない。

それでも無理して魔王を倒す前に潰れてしまつては意味が無いのでそろそろ休暇を考えたほうがいいかもしれないな。

僕は勇者の恩恵があるから辛さが少ないのだろうし。

「本当に良くなつたなあ」

「そうですね、これもユウト様のお陰です」

フィニアはそう言ってくれているがこれも全部皆が頑張ったからだと思うよ。

そう言ったら否定するだろうし敢えて口には出さず心の中だけにした。

これまで頑張ってくれていたし今日はこの組み手が終わったら後は休憩としようか。

たまには良いだろう。

最初はこの組み手だけでも数時間かかっていたのだが、今はもう一時間ほどで終われる程だ。

練習慣れなんてものではなく、ただ単に力量が向上しての時間短縮なので素晴らしいことだ。

僕も皆を率いる立場なのだからもっと頑張らないとな。

「ユウト様」

「どうしたんだい？」

呼ばれたので見てみると、フィニアが何やら眉を寄せて立っていた。

「兵士から報告があったのですが、ユウト様との面会を希望している猟兵らしき服装をした女性が来ているとのことです」

エドル は女性ではないので違うね。

猟兵の女性なんて知り合いは僕には心当たりがないのだけれど。もしかして忘れてしまっているのだろうか。

それだったら一大事じゃないか。

完全に僕の失態だ。

まずは思い出すことに努めなければ。

「……心当たりありませんか？ なら帰ってもらいますが」

フィニアが視線を移したのを見届け僕もソレにならうと修練場の入り口付近に兵士数人に立ちふさがれている女性が目に入った。

女性は無理やり入ろうとしたのか妙に多人数に囲まれていた。

顔を見てみるとピンと来るものは一切無い。

ここまでとなると僕が忘れていた可能性は低いんじゃないかと思う。

もしかすると、この世界にきて間もない頃の知り合いなのかもしれないけれど。

本当に知り合いかもしれないし、知り合いでも何でもない赤の他人だけど面会を要求している人物なのかもしれない。

後者ならお帰り願っても仕方ないかもしれないけれど前者はそうはいかないだろう。

以前の僕の立場なら面会をしたのだろうけど、今は軍を率いるという立場なのだ。

もしかしたら女性は魔族側のスパイかもしれない。

そうだとしたら暗殺されるということも無くはない。

現に、今までに数回それらしいものが見られているのだ。

警戒してしまうのは許して欲しい。

見た目は普通の女性でも魔族なら魔法で変幻して襲ってきたという事例が無ければここまで警戒しなかったのだけだ。

その辺りは魔力までは中々隠蔽できない。

高位の魔法使いならそれを感知できるという実績がある。

フィニアはソレを察してか目に魔力を集中させていた。

フィニアの様に高位の魔法使いならば目に魔力を集中することで魔力を可視する事ができるのだ。

魔族は、人間よりも遥かに高密度な魔力を保有しているかららしい。

これによってその魔族の魔力量も大まかに測ることが出来るらしい。

ただ、封印という制御方法で魔力を抑制していた場合はそれが難しい。

可視ならば大凡数百人の魔法使いが行えるらしいけど、フィニアを筆頭に5人。

その5人だけが封印による抑制時でも可視することが出来る。

ただ、それなりの集中力が必要で、常時行えるものでもない。  
なので、索敵のようには使用できない。

「あの女性は人間です。魔法使いでもないですね。魔力を一切感じられないので人間の方だと想います」

民間の？

心当たりがないな。

民間人とはあまり関わりももっていない筈なのだけど。

女性の容姿を見てもピンと来るものは一切ない。

普通の

「あの女性は勇者かもしれない」

普通の黒髪の女性であった。

この世界で、黒髪は勇者のみ、

日本人のみなのだ。

「でも、勇者はもう全員揃っているはずですよ！ それに神器を持っているように見えません！」

確かにそれはそうだ。

過去に例を見ない例外的な勇者の出現 例外的な魔王の頻出を見ればありえるかもしれないと思えるが、現実問題、彼女がフィニアでも認識出来ないレベルでの隠蔽を行っている魔族である可能性の方が高いだろう。

他に考えられるのはそのどちらでもない日本人の女性であるということだろうが、それはないだろう。

神隠し、というものは僕のように別の世界に飛ばされたものが大半であるのだけど、それは綿密に神が選定した人物が選定された世界へと飛ばされるといふもので、一般的な認識とは違い、ゲリラ的なものではないのだ。

そして、神はあの白い世界で人間は五人以外に送るつもりはないと言っていた。

僕を含め五人は既に確認されているのだ。

となると、彼女は必然的に人間ではないということになる。

勇者の証拠である神器があるなら話は変わってくるだろうけど、そうではないようだ。

「 そうだね。そう考える方が当然だよな。」

悲しいけど、彼女が日本人であるということは現実的じゃない。訓練をしていた兵が命令され女性を捕縛しようと動き始めた。

「 もー！ やる気満々ってことー！？ アタシは味方ー、悪い人間じゃないよー」

女性はとても武装した兵士に囲まれているとは思えない場違いな雰囲気で叫んでいた。

異様に響く声だ。

女性とは数百メートルあるが、女性はそれ程叫んでいるという素振りもなく声を響かせている。

あの女性は何か違う。

例えば日本人であつても間違はなく一般人ではない。

あの声もそうだが、何か雰囲気が違うように感じる。空気が違うといえいいのだろうか。

場違いな空気ではない。

女性から感じられる本質的なものは寧ろこの中の誰よりも場に適合しているように感じられた。

華奢な女性が、だ。

僕の勘違いと思わざるをえないところなのだろうけど、何故かそうは思えなかった。

「 油断しないでくれ！ その女性は普通じゃないかもしれない！」

僕の余裕が無い声を聞いて兵士たちが身を固くした。

普段の行いが良かったのか、その身振りから皆が僕の言葉を信じてくれたのだ。

これだけの人数・戦力差がある状態で、警戒態勢を保つ事ができそうなので最悪の事態にはならないだろう。

勇者の一人である僕が殺されてしまつては士気に関わる。

魔王へと攻め込む事を控えた今、それは厳しいのだ。

「もしかして魔族の何らかをあの女性から感じたのですか？」

女性が目を向け魔力を高めながらフィニアアがそう訪ねてきたが僕は首を横に振るだけで口を動かしての返答をするまで余裕はなかった。

女性がこちらを見ていた。

街で見かけるような笑みを浮かべている。

僕はソレを見て嫌な汗が流れるのがわかった。

女性の口が動いた。

先程のように響いて僕にまで聞こえることなく、普通の音量だった。

口は、あなたがゆうしゃ、という形に動いたように見えた。

ごくり、と喉がなり、どういう訳か危機感を感じた。

そんな僕を見て女性はにやり、と笑みを浮かべた。

先程から笑みを浮かべてはいたけど、また別質の笑みだった。

「貴方が勇者で間違いなさそうね。それじゃ、ちよつと用事があるし通してもらいたいんだけどねー」

再び軽い口調で女性は口を開いた。

ピクニツクに出かけているかのような軽さだ。

寧ろ楽しさを感じているようにさえ見える。

「悪いが帰ってもらう。ユウト様はお前などには会わないのだ」

と、兵士の一人が前へと出て女性へそう言い、肩をつかもうと動いた。

「アタシは平和的に進めたいんだってー。アタシ敵じゃないしー」

と、軽い口調で返答した。

女性が口を開いた瞬間のみ注視してしまったのだが、その一瞬の間に前へ出ていた兵士は腕をねじられ拘束されていた。

あり得ない早業だ。

勇者でもあの速度は適わない。

人間を超越した存在と言っているいい勇者を超えとなると人ではなくやはり魔族だったのだろうか。

兵士もその考えに行き着いたのか、捕縛されている兵士が怪我をすることを覚悟で全員で攻撃へと転じた。

いや、転じ様とした。

相手が女性だと思って油断が出ていたらしく、全員、多少武器を下げていたのだ。

通常であるならここから覆ることはないのだが、どういふ訳か、それを戻す間に兵士全員に何かが起きていた。

女性を囲んでいた大凡100人弱。

これだけの兵士がどういふ訳か一言も発さず地に付した。

魔法かと思つたが、フィニアの困惑具合を見る限り魔力を未だ感知できないようだし物理攻撃にしても遠いものは女性から20mは離れていたのである。

明らかに射程外だ。

その異常さは言葉で言い表せるものではなく、女性への恐怖が芽生えた。

取り囲んでいなかった兵士、大凡100人。

彼らもこれを目撃したらしく同じように恐怖を抱いているようだった。

「う、うあああああああああああ！」

兵士の誰かが悲鳴と呼べる声を上げ女性へと走っていった。

それを皮切りにか全員が恐怖の叫び声を上げて女性へと攻撃しよと走った。

剣を持つものは斬りかかり、槍を持つものは突きかかり、弓を持つものは居抜きかかった。

恐怖を感じつつも、逃げずに寧ろ前へと進んだのはこれまでの訓練の成果だろう。

これだけでも賞賛に値する、そう僕は感じた。

凡そ100人による攻撃は、笑みを浮かべたままそれら全てを回避し、時には攻撃の軌道をそらし別の迫り来る攻撃に当てることで防いだりしてのけた。

近距離、中距離、遠距離全てからの攻撃にもかかわらずだ。

女性はそのまま3mにも及ぶ高さのジャンプをしつつ兵士の包囲網から脱出した。

女性が辿り着いた場所は木材置き場だった。

反対方向には演習用の武器置き場があったのでそちらに行った場合のことを考えると内心宜しくない。

兵士達はそれを追い追撃をかけようと追いかけた。

女性が木材を掴んだ。

それは演習用の木人形を作る様に置いてあったものだった。

演習用であるので丈夫なものを選んだのだけど、その分非常に重かった。

重かったはずなのだが女性はそれを軽々と持ち上げた。

それだけでなく宙へと放り投げ、いつ取り出したのか両手に持ったナイフで切り刻んだ。

いや、あれは木刀ならぬ木ナイフを作ったのか。

形はそうであると見て取れた。

女性の手からナイフが消え、変わりに木で出来たナイフのようなものを掲げた。

この人数相手にあれだけの装備で戦うつもりなのだろうか。

自殺行為だ、と言うところなのであるうけど微塵もそんな気持ちを出てこない。

寧ろこちらが負けると思ってしまうほどだ。

「フィニア、君も頼むよ」

「わかりました」

フィニアが詠唱を唱え始める。

僕はその間危険が及ばないように守るだけだ。

兵士達が頑張ってくれるはずだし僕の出番はないかもしれないけれど神器・剣『エル・メキ』を構えた。

僕は女性を睨むように見ていたが、いつの間にかその姿が蒸発して消えた。

同様に兵士達全員も消えている。

「勇者つてこんなもんなのー。がっかりじゃーん」

女性は僕の横まで来ていた。

「!？」

僕は思わず剣で斬りかかる。

女性は掻き消え少し距離をおいた場所に現れた。

信じられないことだが、現状の僕でも女性の動きについていけないらしい。

「『隼の剣豪』 ヤマギシ・ユウト！」

名乗ると同時に勇者として、ヤマギシユウトとして世界からの恩恵を受ける。

二つ名と名前を名乗るということは特別な意味がある。

決闘の名乗りあいと思われがちなのだが、これは己の全力、場合によってはソレ以上の力を振るう事の許可及び補助を世界へと申請するということなのである。

誰でも行えるというわけではないが、猟兵ならば中ぐらいの力量の者辺りから名乗る事が可能になる。

勇者が名乗る場合、勇者以外の人物が名乗るよりも遥かに大きな効果が期待される。

今、それは期待に応えるように僕の力を増大した。

「これ、アタシも名乗ったほうがいい流れかな。貴方みたいに二つ名とか考えてないけど」

二つ名がない

それは自信が二つ名さえ持てない弱者であると言っているようなものである。

二つ名は魔族でも存在するモノであるらしい。

魔族は魔法に偏りがちなので名乗る事が出来るものはほぼいないらしいのだが。

女性のあの異様な速さ　もしかすると気がつかない程綿密に隠蔽された魔法かもしれないが　を持ちながらにして二つ名を持た

ないということはありません。

二つ名自体は誰でも得ることが出来る。

二つ名をこの世界で持つていない人物となるとそれは二つしか無い。  
い。

神か、それとも

「アタシの名前は後生島 宇美音子。二つ名とかいう素晴らしいモノは知らないなあ。無いもんは仕方ないしー、てきとーに呼んじやつてくれていいよ。あれ、そういえばアタシは貴方のこと二つ名で呼んだ方がいいのかなあ」

異世界から運ばれた人間だけである。

ゴシヨウジマ ウミネコといったか？

その名前の体系は日本人のソレ。

漢字表記であるのだから漢字を特定には至らない。

至らないが日本人であるとわかれば良い。

二つ名を名乗っていないことから偽名である可能性が否定出来ない  
ので刃を収めることは叶わないのだけだ。

「はあああああああああああああ！」

僕が名乗ることにより得られる恩恵は二つ。

二つ名の通り高速の剣戟を繰り出すことが出来る。

これは神器の恩恵なのだが。

簡単に言えば神器の機能を引き出せる。

これは勇者の大半に言えることだ。

次に、魔法とは別の技法、神法を幾らか扱えるようになるということだ。

魔法が魔族の術であるなら神法は神と勇者が扱う術である。

僕は神法を使用し、肉体強度、身体能力、を上昇させ高速の剣戟を放った。

「おつとつとー、これはマズイなー」

それ程危機感を感じ無い声色でそう漏らしている。

何がマズイのか、それはすぐに分かった。

ゴシヨウジマが持つ武器は言ってしまうばただの木だ。  
通常なら一瞬も持たずに粉々になる所を数撃持たただけで神業  
と言える。

木ナイフが使い物にならなくなったと思った瞬間ゴシヨウジマの  
手にはナイフが握られていた。

「アタシ、ユウト君と話たいだけなんだけどな！。ワキワキしない  
から大人しくしようよー」

なんだか、先程より従ってはいけないように感じた。

「大人しくできないかあ。それじゃあ仕方ないから大人しくしても  
らう事になるわよ」

剣戟を放ち続けるも全てをナイフで防がれていた。

何の変哲もない只のナイフ。

魔力を感知できないことから何らかの魔法武器である事はない。

信じられないことだ。

只の人間がこの高速剣戟に追いついてきているだけでも驚きであ  
るけれど、それらを全て受け流していることだ。

それが尤も驚嘆に値する。

そもそも僕は神器『エル・メキ』で剣戟を放っているのだ。

この剣戟速度なら、通常の武器ならば数秒で瓦解するはずの衝撃  
が加えられているはずなのだ。

なのに、このゴシヨウジマという女性は同じナイフを何秒使用し  
続けている？

数秒などとつくに経過している。

「ユウト様！」

背後からフィニアの声が聴こえる。

詠唱が終わったようだ。

なら、僕は彼女と距離を取らなければならない。

「はあああああああああああああああああああああああ！」

全力で剣戟を放つ 同箇所。

一振りの時間で数振りを行うこの剣戟を同箇所に喰らえばその衝

撃は想像を絶するものとなる。

それでもナイフは壊れることはなかった。

ゴシヨウジマは数m後方へ飛ぶ程度の動作をしただけで耐え忍んだ。

「ファイア・ランス・レイン！」

槍の形状に半物質化状態で構築された炎が無数に出現し、ゴシヨウジマへと殺到した。

「何なにこれ。危ないモノ向けちゃだめじゃん」

と、この状況でも気の抜けるような声を発する。

「しかも何？ ものすごく強そうだし！」

ファイア・ランス・レインは確かに強力な魔法だ。

だけど、一人に対して使う魔法じゃない。

あれは、大軍魔法といえる破壊力を持つ炎属性上級魔法だったはずだ。

その消火魔力から現在使用できる人間はフィニアアぐらいだ。

フィニアアも彼女に畏怖の念を抱いていたのだろうか。

そうでなければ一度放つだけで一定時間バテてしまうような強大な魔法をここで使うようには思えない。

フィニアアから見ても彼女はそれ程の存在ということなのだろう。

「何か当たり判定が無いのかと思うぐらい見切る先見！」

技名なのだろうか？

どう考えても文章にしか思えない台詞を叫んでゴシヨウジマ ウミネコは炎に飲まれた。

第二十八話 - 扉は開き収束を見せる -

- y u u t o s i d e -

「あちちつ。んもー、火の用心って言葉知らないの？」  
と、炎の中から声が聴こえた。

兵士は全員意識を失っている。

声を出せる人物は僕とフィニアだけのはずだ。

だが、炎の中にいるのは僕でもフィニアでもない。

ゴシヨウジマ ウミネコだけだ。

「アタシ熱いの苦手だしこれ消すよー？」

上級魔法の炎に飲まれているというこの状況でも彼女の軽さは一向になくならない。

彼女の軽さは単なる軽さではなく余裕という奴なのだろうか。

フィニアの最大魔法の一つを防ぐ・回避するという様な生存する  
という結果を出せるのは勇者でも不可能だ。

魔族も例外じゃない。

それ程の魔力と知識と技量をフィニアは持っているのだ。

突如突風が不自然に巻き起こる。

突風というのは甘い表現かもしれない。

言うならば嵐に近い。

突風と呼べる程の風が幾度となく肌を刺激する。

威力としては大したことはない。

下級魔法以下の威力でしか無い。

通常は何ら危惧する事じゃない。

通常は、だ。

見るとフィニアの炎は例外なく消滅していた。

おそらくこの風によって打ち消されたのだろう。

この弱い風に打ち消されたのは良い。

何か仕組みがあるんだろう。

問題は、その発生源が魔法ではないという事だった。

勇者としての恩恵を受け取る僕でさえ辛うじてそれらしいものが見えるという程の速度でゴシヨウジマ ウミネコは両手を振るっていた。

それでこの風を発生させているらしい。

言ってしまうえば彼女は素手でフィニアアの魔法を打ち消したということになる。

それも勇者でも何でも無く、日本人であるだろう彼女が、だ。規格外にもほどがあるし信じられない。

日本人の形をした別の何かなのではないかという考えが出る。

「こーれじゃ、大した事ないなあ。山火事に巻き込まれた時の方が焦ったよー」

腕を振るい終えた彼女はそう言った。

フィニアアのある魔法が大したことがないと言ったのけた。

「つく！ 我、力を求め」

フィニアアが再度呪文の詠唱を始める。

先程のような強力な魔法は望めない。

魔法は上位になればなるほど詠唱が長くなる傾向にあるのだ。

「フィニアア！ 上位魔法を使ってくれ！ その間は僕が持たせる！」

何か言おうと口を開いたフィニアアだが、ソレを飲み込み、口は詠唱のために働かせ始めた。

後は僕が守るだけだ。

一度出来た。

次も出来ないという道理はない。

「デジャブ・リプレイ単一の上算！」

だが、甘い相手ではない。

それは痛いほど理解しているつもりだ。

先程の防衛は実の所奇跡の産物。

だが、僕は全力をつくすまでだ。

「！」

彼女は何かを感じたのか、悠々と立っていたが瞬間移動の如く後方へと移動し距離を開けた。

「それはマジモンだねー。危ない危ない。てきとーにやってちゃ負けちゃうなあ。なにそれ魔法？ いいよねソレ便利じゃん便利ー」  
軽い口調とは裏腹に彼女の顔は引き締まっていた。

相変わらずこの状況では不気味としか取れない笑みは浮かべたままだったが。

「一回戻ってなきゃ不味かったよー」

と訳のわからない事をつぶやきながら彼女は袖を捲った。

そこに見えるのは腕輪？

魔法はてんで使えない僕だ。

見落としている可能性が大いにある。

フィニアアの意見を仰ごうとしたがよく考えると今は詠唱中なので会話は成立しない。

……相当焦ってしまっているらしい。

さっきの彼女の戦いぶりに圧されてしまっている。

完全に飲まれているというヤツだ。

フィニアアを見るも何も反応を示していない。

どうやらハツタリのようにだ。

「これって曲芸者に渡すべきだと思ってたけど案外使いやすいから気に入っちゃったかもなあ。戻ったら曲芸者でもやって稼ごうかなあ」

手には二本のナイフ。

宙には無数のナイフ。

浮いているのではない。

幾つかはジャグリングの様に器用に投げている。

が、大半のナイフに彼女は触れていない。

投げたナイフがナイフへと当たり地面への落下を防いでいるのだ。一般人から見ればナイフが宙に浮いているようにしか見えないだ

ろう。

彼女の上半身をナイフの円柱が覆っている形だ。

背後のナイフも落下阻止している所を見ると背中に目と手が生えているのではないかと思える程だ。

決して人間が出来ていい所業ではない。

突如、凄まじい熱量が横を通り過ぎた。

見る限りフィニアが魔法のランクを下げて急遽放った魔法らしい。

「どうした？」

と、声をかけようとしたが出来なかった。

「なに、あれ……？」

ありえない、という顔をフィニアは浮かべていた。

「格納魔法じゃないのかい？ それならフィニアだって使えるじゃないか」

そう、あの程度ならなんら問題なく格納できるはずだ。

武器庫丸々だって格納してしまうんじゃないかと思っているくらいだ。

「私には無理よ」

一瞬、冗談かと思ったが、フィニアの口調に余裕がなかった。

僕には勇者だからか何時も敬語を使っていたのだけど今はそれもない。

「只のナイフなら何千本でも格納できるわよ！ でもあれは只のナイフじゃない！ 全部が魔法武器よ！ それも魔族でも作れない程の魔法

叫ぶようにいうその台詞が途切れた。

フィニアの口は震え身体も同じように震えている。

ゴシヨウジマ ウミネコの攻撃を受けたのかと思ったがフィニアは倒れない。

ソレを見る限り攻撃を受けたわけではないようだ。

だが、尋常ではない状態に僕は呆気にとられるばかりだった。

「……それは貴女が作ったの？」

フィニアは搾り出すかのようにか細く震えた声でそう呟いた。漏れでたかのように弱々しい。

目は見開き額には汗がにじんでいる。

僕もその様子に釣られて嫌な汗をかいているのを感じた。

「うーん、アタシじゃないよ。アタシ、魔法なんて使えないしー」

このフィニアの様子を見ても何ら反応を変えない。相変わらず軽いノリだ。

聞いているだけで軽々しくなりそうな台詞だった。

「言いなさいよ！ 誰が作ったって言うのよ！」

「フィニア！ 落ち着くんだ！」

たまらず僕はフィニアを止めてしまった。

止めてしまった、というからには僕もフィニアの台詞の続きを聞きたかった いや、彼女との会話を続けて欲しかったという気持ちがあつたのだろう。

「それは言えないな！。余計なこと言うのを許されるのは愚か者と阿呆だけだよな！」

軽い口調で未だにナイフを滞空させ続けるとう人外の動きを続けている。

間違はなく彼女は規格外だ。

規格外なのだが

「フィニア、そう慌てないで。彼女をここで倒せば何とかなるだろ？」

そう、規格外は彼女ぐらいなはずだ。

そうであって欲しいと願っているのはわかる。

だが、現実的にあんな例外で規格外な人物がそうそういていいものじゃない。

「ユウト様……、それは多分無いです。彼女さえ倒せないんじゃないの先やっていけない。魔王は倒せても彼女と恐らくいるであろう仲間が敵であるなら勝ち目は間違はなく無いです。彼女は敵ではない

と言っています。それがいつ覆るかという保証はないです。」

口調が敬語に戻り落ち着きを取り戻したかと思っただが、今度は僕が穏やかではなくなってしまった。

フィニアの言葉は一体どういう意味なのだろうか。

比喩にしては理解しかねる内容だ。

幾ら彼女が規格外だと言っても、勇者全員を含める全勢力を向ければ間違いなく倒せる相手ではあるはずだ。

被害は大きいものかもしれないけど決して絶対的に負けるという相手ではないはずだ。

「結論から言います。彼女が持つ武器は魔法ではあり得ないです。その全てが言葉をかりるなら、規格外ですね。あれは魔法ではありません。規格外という言葉では適切ではなかったかもしれないね。元は私達が扱う魔法だったかもしれないませんが既にその域を数段超えているようです。今、私達や魔族が新たな魔法を研究していますが、その程度なら兎戯にも劣るという程です」

魔法は、魔力を編み数式のように綿密に形成されたものだ。

初期に編み出された魔法はソレほどまで綿密ではなく感覚的なものだったが、研究が進むに連れ此の様に定着してきていた。

そう、フィニアに僕は聞いた。

ゴシヨウジマ ウミネコ。

彼女自体規格外だけど、その仲間も並ではないらしい。

「先程格納できないと言いましたが、それはあのナイフ一本一本が信じられない程濃密で繊細な別の体系の、今までの魔法理論等覆すのは容易なほどのモノだからです。そもそもその存在の比重が並ではないのです。格納魔法ですが、現存するあらゆる魔法はその存在の比重に及ぶものには影響を与られません。つまり、彼女が持つナイフの一本は今国にある武器庫を十積んでも及ばない」

僕たち人間だけでなく魔族の武力の大半を魔法が占めている。

それは超常的で絶対的なものだからだ。

その根底的なものを壊してしまうほどのもの 壊滅的に手も

足も出ない。

そんなものが目の前に気軽に存在しているということらしい。

魔族も到達できないその領域に到達している存在。

いや、幾ら何でも今思っているほど進展しているなんてことはないだろう。

現実的ではない。

そもそも、この大陸で長期間見つからずに無断で研究することは難しいはずなのだ。

「ユウト様も気がついていないはずです。私達が魔法武器を作る際と同じように、彼女の持つ魔法武器もそれなりの準備が必要になるはずです。媒体はすぐに用意できるとしても、それを作成する魔力は貯蔵しなければならぬでしょうし、その運用も並々ならぬものでしょう。おそらく、一つ作るだけで、魔族数十人、数百人分という膨大な単位の魔力が必要になるはずですよ。内包されている魔力から察するにこれは間違いないでしょう」

つまり、今あれを破壊してしまえば当分はどうしようもない可能性があるということだろうか。

しかし、それだと気がかりになるものがある。

どこで、いつ作成したのかだ。

気がつかれずにそれ程のことをやるとなると相当な技量と時間が必要になるはずだ。

彼女に聞いてもその真偽は教えてはくれないだろうからここは憶測で進めるしか無い。

難しいだろうから絶対とは言わないが、可能であれば彼女を捕縛して聞き出したいところだ。

この魔法を超えた魔法については絶対的に聞くべきだろう。

それを扱うことが出来るようになれば魔族との戦闘も一段と楽になる。

少なくとも魔法武器を凌駕する魔法武器を作成することが出来れば魔力を殆持たない者や魔法を扱えない者でも十分に魔族と渡り合

えるようになるのではないだろうか。

魔法武器は、個々に込められた魔法により特有の効力を秘めているが、それを使用すること自体は誰でも可能なのだ。

つまり、魔法武器が加われればその数だけ戦力が確実に強化されるということになる。

ある意味魔法武器というものは魔法以上に重要性がある。

特に、箱の勇者である組鳥が魔法武器を相当数手に入れることができるならばその戦闘能力は凶悪になるだろう。

そう考えると、正直現実的ではないゴシヨウジマ ウミネコの捕縛又は打倒よりも、彼女が持つ武器を幾らか奪うという事に主軸をおいたほうがいいかもしれない。

最初は破壊と考えていたのだがそう考えが変わった。

いや、気がついたことにより変えざるを得なかったと言った方が正直だね。

おそらくだけれど、あの魔法武器は破壊できない。

フィニアのいう事を鵜呑みにするなら、間違いなく存在の密度が異常なほど高いはずだ。

そうなれば破壊することが出来るかさえわからない。

こちらの方が格段に存在の密度が低いかもしれないからだ。

もし、そうでなくても、それ程のものを破壊すればその際に漏れ出る周囲への影響はどれ程のものになるのか想像さえ出来ない。

破壊できないだろうし、破壊できたとしても破壊してはいけない。

そんな代物なのだ。

出来れば、彼女には味方に、そして彼女の仲間にも味方になって欲しい。

が、現状を見る限りそう言い関係が築けるようには思えない。

そもそも協力的であるならば最初から魔法を超える魔法をこちらに教えてくれたはずなのだ。

そうでないにしてもここまで本格的に戦闘へとなることはなかっただろう。

いや、この状況はこちらにも多少比があるし、それに彼女の性だろう。

どちらにしても結果は変わらなかったかも知れないな。

「うーん、これって一瞬で作ってたけどなあ。そんなに凄いものだったのかあ。知らなかったわあ」

なんて言ってくる。

どう考えてもこちらの動揺を促していることは明白だった。

つまり、そろそろ仕掛けてくるということだ。

この世界に流されて数年。

そろそろ手に馴染み始めている神器を強く握り直した。

フィニアも先の台詞以降、ずっと詠唱を行っている。

相對する彼女は反応からしてフィニアの詠唱に気がついていないはずなのだが今の今まで何も仕掛けてこなかった。

余裕というか慢心というかそういうモノを抱いているのだろうか。ならばまだ勝ち目は無くなっていないということだろう。

慢心王も慢心で負けてたりしていたしね。

「デジャブ・リプレイ単一の上算！」

再び僕の秘奥を繰り出す。

今回は先程のように彼女が間合いを開けることはなかった。

逆に、こちらに突撃する形で突っ込んできていた。

空間がねじれ、僕の神器が彼女を切り刻もうと様々な方向からほぼ同時に襲いかかった。

が、全て宙空に滞空するナイフ群によって阻まれる。

信じられないことに、滞空している武器に衝突したにもかかわらず切りつけられたかと錯覚する程に通常の斬撃と同程度の威力が秘められていた。

その威力と速度は勇者にも匹敵、いや、凌駕するものがあつた。

正直、どんな原理でこうなっているのか理解出来ない構図だった。空間湾曲による高速斬撃を全て弾いてみせる。

その表情は余裕綽々といった表情だった。

「あれ？ アタシなんでこんなに戦ってた。伝言しに来ただけじゃん！」

そう叫ぶと彼女は突如構えを変えた。

マズイ、そう思う間が辛うじてあるか、という瞬間に僕の身体に衝撃が走った。

だが、ダメージはない。

明らかに手加減された一撃だった。

これが手加減されていないものであれば間違いなく僕は死んでいただろう。

一瞬の間に事実上殺された事を不思議と受け入れられる。

それほどまでに彼女との力量差があるのだ。

この勇者である僕よりもだ。

彼女は勇者であったとしても尋常ではない戦闘能力を秘めている。

それは先程から分かっていたことだったが、改めて実感せざるをえなく、もう否定することは出来ない事実として受け入れざるをえないものだった。

「ファクト・バレル！」

フィニシアは炎属性が効かないと踏んでか無属性上級魔法を放った。

無数の光線状の魔力弾が高速で彼女へと向かうも全てを弾かれ、打ち消されてしまっている。

彼女のあの防御は、魔法武器が云々という様な軽いものじゃない。いいい。

おそらく使用しているものがただのナイフでも同じ結果になっただろう。

あの防御は純粹な彼女の力量によるものなのだ。

「つく！ 我、力を求め」

フィニシアが防がれたと知ると再び詠唱を零すが、瞬間的に彼女が移動し、フィニシアを蹴り飛ばした。

吹き飛ばされるフィニシアは僕の腹へとめり込んだ。

「ッ！」

僕とフィニアは互いに咽つつ彼女へと視線を移した。

ここで襲いかかってこないところを見るとやはり、敵ではないの  
だろうか。

本当に先程の伝言にただけという台詞は攪乱でもなんでもない  
ものなのではないだろうか。

冷静になってきた頭を使ってみるとどうも、僕たちが先走ってし  
まっている気がしてきた。

「フィニア、彼女は本当に伝言を伝えにただけかもしれない  
」

僕がそう言うと、頭がかわいそうになってしまったと言わんばか  
りの目で僕を見つめた。

なんだか悲しい意味で胸が締め付けられる思いだった。

是非今直ぐその目を止めて欲しい。

「んー、そろそろ良いかなー？ 取り敢えず、魔族だっけ？ あれ  
が即行攻めてくるから注意しろってさ。アタシ達も適当に動いて何  
とかすると思うよー」

魔族が？

それは聞き捨てならないけれど、彼女の言葉を鵜呑みに出来るも  
のかと考えてしまう。

だけれど、本当である可能性もある。

個人的に言うならその可能性のほうが高いと考えている。

そもそも魔族が早く攻めてくると思って準備を早めること事態に  
デメリットはそれ程ついてまわらないし、彼女にメリットがあるよ  
うに思えない。

それ故にこれが事実である可能性が高いと考えたのだ。

準備を早め、勇者達が早めに来るように促す程度のこととはしても  
いいかもしれない。

「なぜ、僕達にその事を？」

「アタシは敵じゃないってー。ああ、でも何で伝言に來たかと言っ

たらアタシじゃなくてなー君が協力姿勢だからかなあ」

なー君というのが誰かは知らないが、言動から考えて、彼女の上に立つ存在のことだろう。

彼女自身は言い方からして敵対意識は抱いてはいないが友好意識も抱いてはいないということだろうか。

その上の存在がいること自身に驚きだけど、その上の存在は僕達人間に対しての友好的なのか、それとも僕達人間の中の誰か限定での友好的のかはわからないけれど　に協力的なのは大きいと言わざるをえないだろうね。

「貴女の言葉を鵜呑みにするでも思っているの？　こちらは貴女に兵を100人以上倒されてしまったのよ」

確かに、その事を軽く見ることは出来ないけれど、それでも尚、その上の存在と穏便に、正式に協力関係を築くほうが建設的だろう。その事を思うと、フィニアは冷静に慣れていないのかもしれない。

フィニアは突発的というか、常軌を逸した出来事に直面すると頭が真っ白になる傾向にあるらしいと以前兵の一人に聞いた覚えがあった。

「んー、まあそれは悪かったかなあ。でも、一人も殺してないし良いじゃん」

「ふざけないで！」  
軽い口調だったからか、フィニアは叫んだ。  
腹に据えかねるといふヤツだろう。

フィニアは勇者の僕とは違って元々彼ら兵と同じ立ち位置にいたので友人などが多かったのだろう。

フィニアは友人や知人を大切に作る人間なのだ。  
それ故に冷静さを保っていられたと考えるべきかなあ。

さて、今の問題は、ゴシヨウジマ　ウミネコ次第では友好関係を築けないという可能性があるということか。

もし、何らかのことが気に入らず、怒り、上の存在に友好関係を

覆すほどの何かを言ったとなると芳しくは無い。

もちろんそれは望むものじゃない。

「ぶざけてないよ。だってさー、今戦争をおっぱじめようって感じでしょ？ 戦争になったら敵に倒されて生きてるほうが少ないって戦争じゃなくて規模の小さい紛争でもそうだったんだしさー」

彼女は軽い口調を保ったままだ。

寧ろ、軽い調子意外は出来ない病気で患っているんじゃないかと思ってしまうほどだ。

だが、今はそれが良い方向に働いてくれていると信じるしかできない。

おそらく、彼女一人にさえ勇者全員が集まっても勝てないだろう。もし、彼女のような存在が複数人いるのであればそれはどの軍事力をも凌駕する戦闘力を秘めていることになる。

事実上世界を握っているということになる。

「うん、まあ伝える事は伝えたからもう行くねー。なー君待ってるしねえ。ワキワキあんまりできてないしー」

ワキワキというものが何かはいまいちわからないが、この緊張場が終了することが告げられた。

フィニアもようやく冷静さを取り戻したのかも叫ぶ事はなかった。

彼女を眺めるだけだ。

どうやら、彼女が敵対意識を抱いていないのは、こちらに悪い印象があるなしではなく、ただ単に興味がないかららしい。

興味の対象以外の事は完全にどうでもいいらしい。

「じゃ、また会うことがあったらよろしくー」

と、友人と別れる際のように元気に手を振り、瞬間的に掻き消えた。

出入り口の扉が揺れている事から、高速で立ち去ったらしい。

「……………どうするんですか？」

フィニアが声をかけてきたことで僕が険しい顔をしているらし

いことに気が付いた。

その顔を崩し僕は命令を下す。

「今すぐ、戦力を集結させよう」

彼女が伝えた言葉は信用に値するだろう。

こちらとしてもデメリットはそうある訳ではない。

決戦の場はそう 遠くは無い。

第二十八話 - 扉は開き収束を見せる - (後書き)

個人的理由により今まで通り定期的な更新ができなくなるおそれが出てきました。

更新を待つてくれている方がいましたら申し訳ない思いです。

催促などがありましたら、更なる善処を図りたいとは思いますが、無くてもある程度善処はしようと思えます。

第二十九話 - 魔王侵攻宣言 -

「たっただいまー！ 帰ってきたぞーちゃんと伝えてきたぞワキワキさせるやこらー」

早朝という時間帯による影響により普段はさして問題も無い出来事が迷惑になる可能性があるという事を全く考慮しない声が聞こえた。

主に迷惑になる行為は、大きな音を立てる事である。

普段は大きな音やら轟音やら爆音やらと表現されるが、早朝や深夜といった限定的な時期ではそれらが一切合財騒音へと表記が変貌される事になる。

その大きな音やら轟音やら爆音というのは主に今の様な大声が含まれる。

今の様な、だ。

「……………」

無言による意思疎通を量ってみる。

宇美音子さんは小首を傾げるばかりだ。

どう考えても、先の発声が必要な音やら轟音やら爆音に属して、限時刻の場合、例外はほぼなく騒音になる事に気が付いていないようだ。

いや、もしかすると、早朝である事にさえ気が付いていないかもしれない。

「……………御苦労さま」

通常であれば文句を五時間ばかり言い、それが終わると悪態をつく時間が始まるのだが、諸所の理由によりそれは却下された。

諸所の理由というのは、俺がエドルとユウトに魔族についての事を報告してくれという事を頼み、現在その帰りだという事だ。

後は、早朝であったが別段睡魔に身を任せていなかったからであるだろうか。

身を任せていた場合、この状況でも多少の悪態はついていたかもしれない。

睡眠とは生物にとって必要不可欠なものなのだ。

ベヒス嬢も同様に睡魔に身を任せていなかった為普段通り表情を表さずに宇美音子さんを眺めていた。

その顔は非常に真顔で汗が少し見られた。

と、いうのも、明らかに決戦と言われるであろう戦いが近いので少しばかり付け焼刃宜しく特訓をしていたのだ。

ベヒス嬢の剣技を俺が教わり、俺の武芸をベヒス嬢に教える。

こういう相互関係が生まれていた。

尤も、付け焼刃的なモノを文字通り付けるだけだと考えているので全てを会得するつもりはないし、決戦までそう時間が無いだろうことから時間的にも不可能だろうから意気込んでも無駄である。

「はいはい。んでねー、エドルだっけ？ 彼はユウトの元に戻るってさ。他の勇者にはアタシが手紙を届けておいたからすぐに集まると思うわよ」

そう言った後に、常人では聞き取れない程度の音量で、ポストが無いから門にめり込ましておいたけど、という呟きは聞かなかった事にした。

「でも、よくユウトとはいえ勇者に会えたな。正直、苦労したんじゃないか？」

経過時間的にそれ程ではないかもしれないが奮闘したのだろう。

「ん？ え？ あ、ああーあれね。うんうん。苦労したなー」

……。

嫌な予感がするが、気のせい

「穏便に伝言してきてくれたよな？」

「ん？ あ、あつははー、もっちろーん！」

気のせいじゃないな。

宇美音子さんは嘘が下手である。

頭に手を当てて普段はしない阿呆みみたいな笑い方をしている。

愛想笑いというやつに近い。

「……ま、目的達成できてるなら良いか」

と、言うとすぐに愛想笑いは打ち切られた。

「そうだよなー！ んじゃー、ワキワキをば……！」

そこまでされる覚えはないし、穏便に済ませてきても宇美音子さんに揉みしだかれるつもりは毛頭ない。

当然、全力で回避させてもらう。

あわよくば反撃も考えに入れる所存だ。

「っひ！ ひゃわっ！」

と、耳に覚えのない声が聞こえた。

いや、耳に覚えのある声だが、それが耳に覚えのない声に変化したという声だ。

事実上耳に覚えのない声である。

「うっへへへー、良いねーツルツルツヤツヤ！」

と、意味不明 という程ではないが、実際に宇美音子さんの様に変態的な行動には及んでいない為、その真偽を俺が行えないのであくまで想像の範囲内で考える限りでは意味がわかってしまうであろう台詞を吐きつつ揉みしだき始めた。

ベヒス嬢を。

信じられない、非常に信じられない。

それはもう、家の玄関を開けたらチュパブラが闊歩していて、さらに近所の空き地では絶賛ミステリーなサークルを見覚えの無い生物とこれまた見覚えの無い不可思議科学で浮遊効果を得た物体Xを目撃したと聞かされた時の信憑性以上に信憑性が無い。

だが、事実である。

現に目の前で巻き起こっている。

「んふふー！ なー君も良いけどベヒスちゃんも良いねえ」

「ひゃっ、あ！」

宇美音子さんの変態的だけれど一部の人間には扇情的であるだろう手つきの被害にベヒス嬢が選ばれていた。

嫌な選ばれし者である。

ベヒス嬢は被害報告をしているかの如く、被害に合わせて普段では考えられない声を上げていた。

一部の いやいや、殆どの人間の欲情を引き出しかねない光景が絶賛悪質精製されていた。

目視していは場合によっては精神が汚染される事請け合いである。

無論、俺はそんな危険に足を踏み込む訳が無いのでその精製場に対して背を向ける事で回避に成功した。

「わっしわしー」

「ひゃっつっつ！」

これは何時まで繰り広げられていて、俺は何時までこの構図を維持すればいいのだろうか。

決戦まで時間が無いというのにこれである。

まあ、今までの戦闘経緯を見る限り特訓なんて必要なさそうだけれども。

勇者側の陣営を援護する意味でならば特訓は必要なんじゃないかと思わなくもないが気にしては話が進まない。

いやいや、気にしていないからというか、前面に押し出していないから現在、停滞しているのだけれども。

さて、現状の混濁感差し置くとして、宇美音子さんは無事目的を達してきてくれたらしい。

穩便にという注文は無理だったようだが。

まあ、それに関しては宇美音子さんの事だから無理なんじゃないかと多少思っただけなのでまだ大丈夫だ。

許容範囲内というやつだ。

だが、言ってしまうえば完全にこなせたわけじゃあない。

となると、御褒美なるものも完全に与えられるなんて甘い事なんて無いだろう。

「宇美音子さん、そこまでにしといてくれ」

と、言ったがよく考えてみると宇美音子さんがこの状況で人の言葉を受け付ける筈が無かったのであった。

当然の様にワキワキと名付けられた対象は不快感やら虚脱感やら羞恥心を感じざるを得ないという魔の化身と誤解してしまうような手つきを止めるつもりはない様だ。

ベヒス嬢は何故脱出しないのかと疑問に思ったが、二人を見て合点が言った。

ベヒス嬢が脱出しようとした動作しようとした瞬間を狙ってその動きを最小限かつ的確に宇美音子さんが抑えつけていた。

椅子に座った状態で額を抑えられていると立てないというあれと同じようなものだ。

それを瞬間的にかつ複数行っているのである。

ベヒス嬢からすれば身体の自由が利かないという錯覚に陥っている最中だろう。

無駄な技術の乱用である。

こんな阿呆な事に武芸の境地に近い『先の先』を使う人間は宇美音子さんぐらいじゃないだろうか。

武芸を嗜む者が見たら卒倒するか激昂するかの二択ぐらいじゃないだろうか。

もっとマシな使い方があるだろうに。

いや、マシな使い方もするならまだ良いのだけれども、宇美音子さんはこういう碌でもない事を主軸とした事に御執心らしく、まともな事にはあまり使っていない。

こういう技術、小手先は戦闘中でもあまり使わないのが宇美音子さんなのだ。

ああ、当然使うモノは親でも使う俺はこの小手先は使う。

寧ろ小手先だけで済むように事を運ぶ傾向にある。

こう改めて考えてみると、俺はつるせことという称号が相応しい人間に見えてしまう。

その通りだと言われれば否定できない状況にあるのだが。

「で、これからどうするの？」

ようやく満足したのかベヒス嬢を開放した宇美音子さんが現れた。掌を返したかのような真面目な顔である。

一見真面目じゃない顔なだけれど。

ベヒス嬢に目をやると脱力したかのように地に伏している。

相当やられたなあれは。

全身に筋肉が弛緩してるんじゃないな。

鎧を装備していたはずだが、今はすっぴん状態になっているし防御対策も効果を見せなかったようだからそれはもう致命傷だっただろう。

俺も最初は鎧やらプレートやらを装備したりなんて事をしていたものだ。

過去の自分を見る様で何だか懐かしい。

経験上、あの程度で宇美音子さんの悪徳業者の悪徳さえも善良に思える程の悪徳さを秘めた手つきから逃げられない。

嫌な手腕である。

助言をしてやりたいし、してやれと思うかもしれないが、助言をすると、更にそれを無碍にするかのように実力を向上させた更に悪質な宇美音子さんが現れるのである。

これも経験上だ。

ベヒス嬢には悪いが、俺にはどうしようもないのだ。

助言するとそれをすぐに突破されるし、そうなると俺への被害も考えなければならなくなる。

その対策を考えるのには多少時間が必要なのだ。

その間、為すがままになってしまつのである。

ベヒス嬢が被害に遭っている間に先の悪質化をしたモノを想定して、その対策を講じておかなければなるまい。

何もしてませんでしたじゃ済まないのだ。

今回は数分で済んでいるものの、宇美音子さんの気分次第では数時間続いた事がある。

それを考えると慎重に事を進めざるを得ないのだ。

「これから、魔族側の大陸へと先駆けて行こうと思う」

それを聞いてベヒス嬢が制止に入ってきた。

すばやい復活である。

「ナーク、今現在、魔族との戦闘には勝利を収めてきていますが、それが続くという甘い考えは捨ててほしいです。あの魔族は研究員。魔法は研究員の方が一般人より明らかに強力ですが戦闘には慣れていません。魔族の兵士となると、研究員程ではありませんが魔法を嗜み、更にその身体能力や武器の扱いの熟練度などは一般人も研究員さえも凌駕する実力を秘めている筈です」

まあ、確かにな。

魔法は学問みたいなイメージがあるから研究員とか学問に特化していそうなヤツが魔法の熟練者になるというのは当然の考えという訳だ。

ああ、合ってるんだよそれでな。

俺みたいな例外もいるけども。

だが、ベヒス嬢が言う様に魔法が使えれば強いという単純な図式は成り立たないのである。

例えば、使用方法を知っていると確実に全ての道具を扱えるかと言われると断言できない様なものだ。

知識に経験が付随するものではなく、経験は時として知識に勝るといふ事だ。

どちらか一方が特化していても話しにならない。

いってしまえば片方が世界一でも両方が世界二位のヤツにはどうやっても勝てないという事だ。

「うん、まあそうなんだろうけどね。それでも、だな」

だが、この世界の住人　魔族も含め、だ　はそのどちらも一位ではない。

魔法は魔道書持ちである俺が掌握する事が可能だろう。

先の戦闘でそれを実感した。

研究員でさえわからない魔法を行使できるという事は大きい。

魔力を持たず魔法など奇怪なものを行使できないであろう宇美音子さんも魔族戦で後れを取らなかつた事を見ると体術面でも勝っていると考えていいだろう。

この世界では魔法があるばかりに武芸が発達していない。それゆえだろう。

どの程度の応用範囲と効力があるのかは確認していないが、丹分清さんから渡された不思議アイテムにて怪奇現象を行使できる可能性がある。

それを踏まえるとかなりこちらがリードしていると考えていいだろう。

油断は禁物だけれども。

武芸は極めるのに時間が一定以上は最低限かかるが、魔法は学問に近い。

となると、武芸の様に身体づくりなど物理的なモノは必要ではないので俺の様に例外が存在する。

この世界の住人が魔法に注目しているのは正しいと言える。

突飛的に異常な強さの者が現れる可能性があるのが魔法なのである。

それも、魔法はやり方によっては一方的な勝負に持ち込めるのである。

逆に言えば一方的な勝負に持ち込まれる可能性があるという事になる。

その辺りは警戒していかなければならないだろう。

特に、魔族はその魔法に特化した存在と聞いているし、先の戦闘を見る限り、やはり魔法主軸の戦闘になっていた。

肉弾戦は全く使わなかつた、そう断言して良い戦闘方法だった。

となると、肉弾戦は奥の手として置いてある場合と、軽視して使えない場合、そして適性が無く使用できない為やむを得ず魔法のみでの戦闘になっているかのどれかぐらいではないだろうか。

他にもあるかもしれないが、現状思いつくのはそれぐらいである。体つきを見た所、適性が無い訳ではないだろうが鍛えている素振りも見えなかった。

つまり、奥の手であるというのは削除しても良いかもしれない。

あの筋肉で武芸を行っても一般人相手ならともかく、宇美音子さんといった達人という存在に対しては効力は低いどころか皆無いや、寧ろ隙になる。

魔法の補助がある事を鑑みても、だ。

となると、武芸を軽視して使用しないというのが濃厚になる。

もし事実であるならばこちらが考えるべき事柄が大幅に削減される。

「しかし、危険すぎるのでは？ 良く考えて下さい」というベヒス嬢の声も理解は出来る。

理解は出来るがそうであるとはあまり思わない。

一見、危険であった先の戦闘だが、あれは別段危険という訳ではなく、寧ろ余裕の部類であったと思う。

おそらく、あのまま撃退しなくても魔法の一撃も喰らわなかっただろう。

俺の場合は魔道書があれば基本的に魔法は、無効化や反効果魔法による相殺などにより無力化が可能なので魔法は脅威ですらない。

魔法が脅威であるはずの宇美音子さんは、俺よりも素早い上に、俺の様に無闇で脆弱な特性が無いため、立体的な軌道で移動する事が可能なのだ。

俺で攻撃を食らう気にならないのだから攻撃があたるはずもない。

ベヒス嬢もこの世界の人間の中でも最強に位置する一人である。

魔族に後れを取るように思えない。

ベヒス嬢が負けるのであればおそらく人間の軍は間違いなくそれ以下であるのでそもそもが勝てないという事になる。

ま、そうなったら勝ち目は無いので逃げるだろう。

世界が滅ぶのは惜しいけれど、どうしようもないものは仕方が無

いと考えるだろう。

判明した瞬間から前線から離れ、別の世界へと移動する方法を考察するだろう。

魔法に関しては魔道書があれば参照できるため、なんら問題なく発見できるだろう。

俺としてはこの世界は滅んでほしくは無いが仕方ないのだ。

この先は実際に世界が滅ぶと判った時に考察する事にしよう。「ベヒス、宇美音子さんがいる今、少なくとも俺達三人の誰か一人でも死ぬ可能性は殆どないんだよ。もし、負けるのなら誰も勝てないだろうな」

そこまで断言できる程にこの世界は魔法にのみ特化してしまっている。

何か一つが強力であれば確かに強大で強力になれる。

なれるが、限界はあるし、バランス良く他のものも発展させたものと対峙した場合、間違いなく敗北を喫することになる。

それに、全ての項目が平等という訳ではない。

現状から鑑みると、魔法より武芸の方が強力である事が見て取れる。

現に、俺は殆どを魔法の行使無しで勝利を収めている。

宇美音子さんならば間違いなく魔族相手でも数人程度なら問題なく傷も負わずに魔法無しで勝てるだろう。

条件さえ整えば中隊やら大隊という様な規模でも対応できるのではないだろうかと考えている。

後者はあくまで推論にしか過ぎないが、前者は例外なく行える。

呼吸の様なものだ。

「死ぬ可能性が殆ど無いとは言っても、危険度が多少でも上がることに変わりはありません。私は、万が一でもナークやうみねこには死んでほしくないのです」

言われた側としては嬉しい限りである。

勿論、それを表現するために今直ぐ事実上の単身突撃は取り止め

にしたいところだ。

ところで、宇美音子さんという部分の発音、なんだかおかしかったな。

もしかすると、翻訳魔法を使用してもこの世界に存在しない呼び名やモノの名称は上手く聞き取れないのだろうか。

よく考えてみると納得がいく。

常識的に考えて、翻訳魔法は翻訳をするものだ。

無い言葉の翻訳は不可能。

そういう訳だろう。

この世界で話をするときは注意したほうが良いかもしれないな。

よく考えたらテレビとか無いし、勇者の前でそれ関連の話やらは禁則事項だな。

そういえば、フィニアがユウトを呼ぶ際も多少イントネーションがおかしかった気がする。

今からすれば遠い昔なので詳細に思い出すことは叶わないわけで、確認を取るすべはなかった。

「まあでも、このまま何もしないってのもな。魔族の大陸へ侵攻する組織がどれほどの戦力か知らないけどそれ程じゃないんじゃないか？ たとえそこそこ強かったとしても凶体がでかいからな。小回りがきく少人数でそこそこの戦力がある俺らが攪乱しといった方が成功率は上がるだろ」

下手したらこっち側が負けちゃうんだし。

「そうですね。その言葉は頷ける部分もあります。確かに、対軍決戦魔法兵器と戦術魔法が製造されたとは言え魔族と人間には差がありすぎます」

やけに魔族を知ったような口ぶりだな。

ここ最近魔族と触れ合う機会なんて無かったはずなんだが。俺の心境を読んだのか、それとも表情に出してしまったのかは判らないが

「エルフと魔族は多少なりとも繋がりがあったのです。元々エルフ

は魔族だったそうですし」

ああ、そういえばベヒス嬢はエルフとのハーフだったっけか。  
ん？

俺、エルフ見たことねえな、と聞いてみた。

「エルフといった魔族を除いた人間以外の存在は主に『盾の勇者の国ファンドラ』に住んでいますよ。そこ以外では滅多に見かけませんね。私が例外なだけで血をひく者も滅多に見かけないですね」

だから、魔力量が多いのだろうかね。

まあ、そこはどうでもいいから放置だけれど。

「ベヒスちゃんがエルフだってー！ それ初耳！ もっと早く言ってよ！ ワキワキしないと！」

と、知らなかった事実を聞かされて錯乱した振りをしてベヒス嬢をこね回し始める宇美音子さん。

自重というものを知らないのだろうか知らないだろうな。

出来れば覚えて欲しいけれどまあ無理か。

「ああっひゃうっ！」

ベヒス嬢、キャラ崩壊の兆しだな。

そして、南無南無。

「ご愁傷さまというヤツだ。

完全に宇美音子さんは調子にのっている。

先程より明らかに腕のキレが凄まじいのだ。

俺が妨害しようとしても一苦労だろう。

「あー、まあなんだ。その状態でいいから聞いといてくれ」

「た、助けてください！ 身体の自由が効かないのです！ うみね

こは本当に魔法が使えないのですか!？」

身体の自由が効かないわけじゃないんだがな。

魔法つてわけじゃあない。

事実上魔法みたいなもんだけどな。

「無理無理。助けるなんてとんでもない。宇美音子さんの顔見てみるよ。明らかにこの世ざる者になりかねん顔だ。止められたとして

も止めたくないな。何が起きるか判らん」

そういうと、一瞬絶望的な顔を浮かべ、もがきが強くなったように思えた。

と、いうのも、そのもがきも全て封じられてしまっているのを確認する方法がないのだ。

ベヒス嬢の先程よりも必死そうな顔を見る限りは先よりも暴れていると感じ取れるのである。

そんな状況にすぐわなくて話にすぐわかない場面はスルーすることにする。

俺に出来ることはこのまま話を続けることだけなのである。

今だけなら俺のことはレコーダーだと勘違いしてくれていい。

宇美音子さんの暴走のとはっちりが来なければ万事オツケーなのだ。

「あー、取り敢えずこれは決定事項だから。わかっているととは思いつけど、魔族側との予想戦力差が多すぎるだろ。幾ら軍を出すとは言っても海を渡るから少なくとも船の関係で一度に送れる人数は限られる。そう考えると、人数では勝てないし、戦闘能力で言うと圧倒的にこっちが劣ってんだし普通に考えて順当にやれば負けるよ。勇者が何とかするっていうのも何も知らない頃は挙げてただろうけど、カタブキとの戦闘を思い返す限りそれは無理だろうな。あくまで戦闘能力が高いだけだからな。まあ、盾やら薬といった勇者は名前からしてその辺いけるかもしれないけどな。後は良く解らん箱の勇者か」

ところで、箱ってなんだ箱って。

他と比べたら明らかに役立たず臭しか感じねえぞ。

さて、余計な思考はここいらで切り上げるとしよう。

「兎に角、だ。ベヒスの意見を尊重したいとこだし、正直俺も行きたくねえけど、このままだったらほぼ確実に負けるから先駆けて魔族の大陸へ行くぞ。ベヒス達が行かないって場合でも俺ひとりで行くつもりだ」

ベヒス嬢が反論できる状況でないことを良い事に、取り敢えず宣

言だけ取り付けておくのだった。

第二十九話 - 魔王侵攻宣言 - (後書き)

宇美音子さんのセクハラ無双です。

このセクハラは状況に合わずとも無双をやらかしそうです。

第三十話 - 鉄壁も決意も崩れるときは意図せず崩れる -

「これ、泳いで渡るの無理だな」

俺の目の前に広がるのは透き通った海だった。

牢獄島周辺の様な荒れ狂って水の純度等関係なく透き通らない海ではない。

荒れていないだけでなく水も澄んでいるのだ。

当然のように光は俺の眼球を伝い海が位置する場所に水がない場合の様相も伝える。

つまりは、海の底が見えていた。

それ自体に何ら問題はない。

いや、問題があるのだろうか。

だからこそここから進むことが出来ない。

俺は海のごとは牢獄島の時の様に考えてしまっていた。

完全な思い込みというヤツだ。

よく考えると、俺は荒れていない海はともかく、きれいな海は見ることがなかったのだった。

だからこそその失念というヤツだろうか。

「だよー、アタシやベヒスちゃんならどうとでもなるけどなー君はねー」

透き通る海は、浅瀬のうちはその牙を見せないが、徐々に深くなり、高所と同じような役割を果たす。

つまり、意識を保つことは非常に困難なのである。

意識を失ったまま運んでもらうという方法も無いわけではないのだが、目的地は魔族が拠点とする大陸である。

魔族と鉢合わせする可能性を考慮すればそれは早計である。

出来るだけそれは回避したい。

最悪、宇美音子さんに防衛をしてもらおうという事もできるが、やはり未知の領域であるし、魔法攻めをされたら宇美音子さんだけで

は押し切られる可能性がある。

ベヒス嬢も協力しての防衛であれば多少それはカバーされるだろうが、魔族の拠点ということを考えて、数の暴力になす我儘にされてしまうだろう。

俺としては目覚める頃にはベヒス嬢と宇美音子さんが地に伏しているなんて言う状況は避けて欲しい。

いやいや、その状況になってしまえば俺は目覚めることはなく意識の喪失から永眠へとジョブエクステンドしてしまうに違いない。

それは最悪の事態だろう。

実際の所、先の魔族戦を考える限りそれは訪れないだろうが、万が一がなくてはなしし過信は禁物である。

だからこそこの躊躇である。

「取り敢えず、何か案でも考えがてらあの街っばいところで茶でもシバきにいこー！」

海を見て沈黙が続いていると唐突に宇美音子さんが叫んだ。

無駄に発勁によって周囲に声を響かせるのは止めて欲しいモノだ。

一歩間違えれば 規模的に半歩間違えれば鼓膜が破損では済まず耳が吹き飛んで原子分解よろしく消滅していただろう。

そんな事をしている場合じゃなくて思いつかないなら俺を担いで進んでくれと言いたかったが、見てみると宇美音子さんは凄まじい勢いで息を吸っていた。

このまま芳しくない返事をすれば俺の耳は消し飛ぶ。

そして、残す俺の耳以外のパーツは彼方へと吹っ飛んでいくだろう。

ベヒス嬢の身も案じたいところであるので、致し方なく 宇美音子さん、怖い顔しないでくださいお願いしますご検討よろしくお願ひします。

喜んで街へと足を向けることにした。

ベヒス嬢も何も言わずに後を付いてくる。

こころなしか、宇美音子さん以外は率先して歩を進めている節が

あつたが恐らく気のせいだろう。

「これこれ、これ美味しいよねー」

と言いながら宇美音子さんは両手を使ってモノを口に放り込む。

最早、速度的に詰め込むと言つてもいいだろう。

だが、それを超越する速度で胃へとそれを流し込んでいる。

胃もそれに合わせてモノを詰め込まれている。

しかし、自然の摂理は気にくわないらしく、宇美音子さんの腹は膨らむことはない。

気分的にも物理的にも。

「船を借りればナークが意識を失おうと問題ないのではないでしょうか」

「いやいや、それだと甘いな。事前に意識を借りつつといてくれ。間違いなく意識は失うし、失う際に暴れる可能性がなくなるからな」

「わかりました。宙に放り投げれば良いのでしょうか」

出来れば回避して欲しい方法だけれどそれが手っ取り早いのか。

取り敢えずソレについては頷いておくことにする。

ああ、そういえば俺は船を所持していないし船の作成方法も知らないのだがらお手上げというものだろう。

「私も知りません。なので購入するか借用するのが無難でしょう」

そういえば、ここは魔族大陸に最も近い国だったか。

頻繁とは言わないけれど必ずいつかは使用する機会が多い。

それが船である。

この国、ファンドラ。

盾の勇者が属する国である。

基本は守りのイメージであるが海には繰り出すらしい。

国全体が港の役割を果たす。

いやいや、内陸側は流石にそれは無いが、巨大な川が存在し、中洲の様な形状になっている。

尤も、中洲程の規模ではなくソレなど比にならない程巨大であるのだが。

魚介類には困らなさそうな国であることは間違いない。

ソレ以外にこれは予想でしか無いが、宗教が根づいているのではないだろうか。

教会らしきものが数多く見受けられる。

それに、大通りに出れば間違いなく神父というような立ち位置臭い共通的な服装を見にまとった集団が闊歩していた。

幸いにも今の所一度も宗教勧誘の被害には遭っていないのだけだども。

「なーくん、これ美味しいってー。ほーらー」

と言いつつ何かを俺の口へと放り込もうとしたので回避運動へと移行した。

ベヒス嬢と話しているのだから妨害となる行動は慎んでほしい。

「させないわ！」

俺の回避運動が始まる寸前に力を阻害され口の中にもものを放り込まれた。

この味は。

何処かで食べた事ある様な味である。

厳密には、元いた世界には無い味だが、似通った部分が少なからずみられる、そんな味であった。

「で、借りるつつつても俺は銭あんまり持ってねえぞ」

エドルから借りてるといふか預かっているといふか、そういう銭ならば無くはないのだが。

「大丈夫です。私の手持ちがありますのでそれを使っただければ問題ないです。それに、港がこの国だけです。船がそもそも少ないのですが、魚介類の需要はありますから、相当な金銭が必要になってきます。おそらく、ナークが所持している金銭では賄えな

いでしよう」

それだつたら尚更出してもらつのは悪いと思つただけれども。

俺ならば金額が高いとなると寧ろ出したくなくなる。

これが当然の帰結であると思う。

「なー君、これもおいしいわよー。ベヒスちゃんは食べた事あるー？」

俺とベヒス嬢は今後に関わる真面目な話をしているのだが、それをせざるを得ない原因が俺にあるのであまり強くは言えないでいた。多少、この状況に陥つた原因としては罪悪感ぐらいは感じているのである。

「あー、宇美音子さん？俺は今腹へって無いんで気にしなくて良いよ」

嘘ではない。

寧ろ本音である。

先程から俺は宇美音子さんによって口の中、結果的には腹の中にだが、相当モノを放り込まれている。

今の所、口に合うモノばかりであったので大丈夫である。

この流れであるなら今後も俺の口に合うモノであるだろうと無理に放り込まれた際に不安に駆られる事も無いであろう。

それぐらい俺にとって安心できるモノを数々放り込まれたのである。

数々？

俺は凄く重要な事を忘れていているというか意識していない様な気がする。

「ええ、私はそれを食べた事がありますね。美味しかったですよ」  
ベヒス嬢を見ると何ら表情も変えずに宇美音子さんの応対をして  
くれている。

何も気にする事はないのだろうか。

俺がこの異様な不安感というか不思議な虚脱感とも言える感覚を抱くのはただの気のせいやら気の迷いやら気が狂ったからなのであ

ろうか。

それであるならばいい。

最後のはあまり良くないけれど。

取り敢えず、脈絡なく宇美音子さんがベヒス嬢をワキワキしようとし、それを必死　表情はそれほど変わらないがその気配がよく感じられる　に防いでいる光景を温かい目で眺める事にしよう。

勇者を筆頭にしているであろう混成軍というか人間の軍隊が攻め入るのはすぐではないはずだ。

常人の足で進むのであれば少なくともユウトがここに来るまでに数日は必ずかかる。

攪乱程度ならそれぐらいの猶予があれば可能だろう。

寧ろ余裕があるだろう。

ユウトが到着してすぐに出られる訳ではないだろうからその辺りも考えれば、という事も入れればという限定条件にはあるのだけれども。

かつて見る事が出来た未来を写す絵

あれを常時見る事が出来ない為未来が変わったかどうかが分からない事が辛い。

もしあの未来が俺達が攪乱やらをする事によって訪れる未来であるならば元も子もないからである。

気になるのは、あの未来の絵に写っていたキャストが揃っているのかはともかく、俺が知らないという事だ。

対応しづらい。

言ってしまうえばあれに写るキャストの誰かを殺してしまえば確実にあの絵の内容は変わる。

まあ、あの絵の構図は変わらず未来も変わらずに、あの絵からただ単にその殺したキャストのみが消失するという結果に終わりそうだが。

今の所、見ているのは、ユウト、カタブキ、フィニアである。

他の勇者は箱以外は大凡見当がつきそうである。

勇者自体はある意味その名に縛られた動きしかできない為大凡見当がつく。

問題はあの絵に写っていた姫っばいヤツと黒いオーラみたいなのを纏ってるヤツの二人が完全に誰かわからない。

姫っばいのは勇者側だから良いとしても、黒いオーラを纏っている奴は捨て置けない。

もしかすると、霸王かもしれぬ。

そうであるならあの黒いオーラについて考えておく必要があるだろう。

あれが霸王の戦闘方法に関わってくるものであるだろうと思うからである。

それはさておき、多少未来は変わっているのでは無いだろうかと思う。

いや、思いたいだけか。

俺がこの世界に来たからかは知らないが、タイミング的に俺が来たからだろう。

それで世界の未来が真逆に変わった。

厳密にはそうではない。

俺が来た事自体はどうでもいいことだ。

人一人なのだ。

大した差はない。

問題は、俺が魔王であることだろう。

前魔王が勇者共々傷ついていたのは、恐らくいるであろう黒幕と手を取り合っていたのは、前魔王が魔王であったからなのではないだろうか。

そして、前魔王は俺の出現によって魔王では無くなった。

それだけであるなら、まだ黒幕としては懸念する程ではないだろう。

魔王が変わったとしても魔力が膨大である種族、魔族に魔王が必ず現れる。

これまでは、だ。

俺が現れてから絵が変わるまでの空白期間は、魔族の中の誰が魔王になったのかというのを捜査する期間だったのではないだろうか。そして、魔族に魔王がいないと知るや否や戦術を変える事になった。

前魔王が裏切られたのは、その裏切りが必要な戦術であったのか、前魔王がそれ以前の戦術ならともかく、変更後の戦術に賛同してこなかったからだろう。

ただ、一つ言えるのは、実力は兎も角、総合的に霸王は前魔王よりも強いという事だ。

その程度で変わるとなると、宇美音子さんは恐らく彼らより遥かに強い存在だ。

それが現れたとなると未来は変わって然るべきではないだろうか。未来の絵に俺や宇美音子さんやベヒス嬢というメンバーが写っていないのは俺達がその未来の絵に対応していなかったからではないだろうか。

最悪を考えるのであれば、俺達が攪乱に専念していたのでその戦場にいなかっただけ、という事も考えられなくはないが。

少なくとも、その時は、ベヒス嬢は俺の味方ではなかったし宇美音子さんもこの世界に来てはいなかった。

宇美音子さんがこの世界に来たのは神としてもイレギュラーといえる程のことだっただろう。

神を脅迫してくるなど考えられるはずもない。

「ナーク」

ふ、と声の方を見ると、ベヒス嬢が俺の横まで歩み寄ってきていた。

何やら深刻そうな顔をしている。

視線は俺には注がれていない。

方向的に宇美音子さんが座っていたであろう席の方を向いている。そこに鎮座していたであろう宇美音子さんは何やら土下座をして

いる。

あ、いや、今俺の沈黙に耐えられないからかふざけが入って土下寝にシフトチェンジした。

一体何だっというのだ。

今までワキワキして御免なさいとかか？

それなら大いに嬉しい謝罪であるが、ベヒス嬢の顔を見る限りそれではなさそうである。

謝罪をもってしても悲しさが持続するモノ

そういうものではないだろうか。

まさか、ワキワキの攻防で店の壁を破壊したとかじゃないだろうか。

それならば大丈夫である。

全損したとしても修復できる能力が俺にはあるのである。

「あー、どーしたんよ。壁でもブチ壊したんなら直してやるよ」

と、言ってみたがベヒス嬢の憂いは晴れないし、宇美音子さんの土下寝 飽きたのか既に普通に寝転がっているだけになっている

は解除されない。

宇美音子さんに関してはある意味解除されている訳だけれども。

視線の先に目をやるがなんら異常は無い。

白い壁は健在である。

ん？

この店は木造で、内部は木目を数えられるレベルで気であったはずだが。

「船を借用するという案は、どうやら選択できなさそうです」

「ごーめーんー。カツとなっってないけどやった、今は特に反省してない」

宇美音子さんの言葉は、普通に寝転がっちゃってる所を見れば大いに伝わるわ。

取り敢えず、合点が言った。

この白い壁と認識したものは白い壁ではなかった。

白い事には違いないが、その用途は壁ではなく元は皿。  
つまり、宇美音子さんが馬鹿食いした結果だ。

明らかに身体全体の体積よりも多いのだが、魔法をいつの間にか  
扱えるようになったのだろうか。

料金表を見る限り、高いものばかりを頼んでやがる。

ベヒス嬢を見る限り、金が足りないという訳ではなさそうだが、  
それを支払った後に残る金では船は借りられないようである。

「取り敢えず、ここから出るか。被害が増大する前に」

俺が今できる事は、食事処で宇美音子さんから目を離すべからず。  
ただそれだけである。

「ナーク、どうします?」

このままだと俺は担がれて、二人は魔族大陸まで泳ぐ事になって  
しまう。

ベヒス嬢は鎧やらがあるし、宇美音子さんも見た目ではわかりに  
くいが、ナイフを隠し持っている。

それ故に泳ぎわたるのは相応の体力を消耗する事になる。

常人なら沈む所だ。

現在、無事にそして穏便に食事処から出ることに成功していた。

俺達は無事である。

ただし、財布は無事ではなく、養分を吸い取られてガリガリのペ  
ラッペラになってしまっていた。

エドルから貰った金なんて残ってなかった。

きつとそうに違いない。

頬が濡れるが、恐らくこれは雨が降っているのだろう。

見えない雨だ、そうに違いない。

「マジで担いでもらうしかねえかもしれねえ……」

俺の高所恐怖症をどうにかするのは絶望的だろうし。

海を荒らせば宇美音子さんは言うまでもなく、ベヒス嬢は兎に角、勇者の軍勢が渡れなくなるだろうから不可。

瞬間移動も魔族大陸の座標やら形状やらがわからないのでパス。

大体の方向しか判らないのだ。

後は気配を頼りに進むという方針だ。

宇美音子さんはここからでも魔族の気配がわかるらしいし、遭難することはないだろう。

なんて、若干良い事を考えてみたが、金が無くなったのは痛い。そう思うと、俺達は大通りで途方にくれるしか無いのだった。

第三十話 - 鉄壁も決意も崩れるときは意図せず崩れる - (後書き)

身勝手ながら、先に述べましたとおり忙しくなっ  
てまいりましたため、文章量が減量を企てて  
しまいました。あたたかい目で見守っ  
てください

第三十一話 - 重要登場人物もモブになりえる -

「なー君。あつちなんか面白そうだよー行こうよー」  
文字通り途方にくれていると宇美音子さんがそう言った。

根源的な原因は俺にあるのだが、この状況の根源的な原因は宇美音子さんにあるので空気を読んだ発言をして欲しいものだ。

これがウミネコさんではなければぶん殴っているところだろう。  
いやいや、ベヒス嬢も漏れ無く例外である。

完全な失念であった。

一生の不覚とも言つう。

「……この街には祭りというものは無い筈なのであの様な人集りが出来るような事はそうそう無いはずなのですが」

というベヒス嬢の台詞に反応し目をやる。

見ると遠くに人集りが出来ていた。

店に入る前は人集り所かそれらしい兆候さえ見受けられなかったのだが。

些か急すぎる変化であると思わなくもない。

待てよもしかすると、俺は今街に普通に入っちゃってるけど指名手配されていて俺がここにいてるってバレたから故のイベントじゃあるまいな。

殺気立っている訳ではない集団であるがその可能性は否定できないし、心当たりだけで語るならそれしか無いのである。

「あー、なー君は指名手配されてなかったわよー。もーそれは全然。なー君のなの字も無かったねえ。証拠無いからじゃない？」

宇美音子さんは空気が読めないので嘘はあまりつかないのである。その法則を信じるのであれば俺は指名手配されていないのである。  
う。

先の猟兵所でのイベントは完全に俺の先走りによる不必要なもので無駄なものだったということか。

変にこそそと侵入したので逆に目を引く形になってしまったのか。

まあ、あれはこそそしてなくてもジャリのせいだからどうしようもなかったかもしれないが。  
ふむふむ。

まあ、周囲を見る限りそれらしい指名手配書は貼り出されていない臭いし当面は宇美音子さんの台詞を信じて問題ないだろう。最悪、逃げ切れれば良いと思うし。

その場合、指名手配されていないであろうベヒス嬢と宇美音子さんは気にしないで良いし気兼ねなく逃げ切れるだろう。

逸れたとしても宇美音子さんが勝手に来てくれるだろうし。

あ、いやいや待てよ。

詳しくは知らないが、宇美音子さんはユウトの所で一戦やらかした臭いだった。

寧ろ今はそれが危険じゃないかと思わなくもない。

いざという時は見捨ててしまおう。

宇美音子さんなら勝手に生き延びてくれるだろう。

それならばあの人ごみは宇美音子さん捕縛部隊何かじゃあるまいな。

つと、疑心暗鬼になり過ぎか。

殺気も敵対心もなにも感じ無いし大丈夫だろう。

さて、不安も解消されたと言っている状態だし魔族大陸への渡り方を検討することしよう。

「あんなに空気読めなかったっけ？」

見ると宇美音子さんは人混みの方へと進んでいっていた。  
完全に空気を読んでいない。

いや、普段はここまでじゃないんだが、おそらくは街に入る機会がなかったから妙にテンションが高くなってしまっているのだろう。それに祭り並みの人集りに当てられているのもあるだろう。

宇美音子さんはああいう祭り臭い事が大好きなのである。

というかはしゃぐのが好きらしい。

だからこそかもしれない。

今は言うなれば空気を讀んだ上で敢えてぶち壊してるという状態である。

確実に一番質が悪いパターンである。

ボヤいても致し方ない。

あの人の集いに便乗するか宇美音子さんを引つ張って立ち去るか  
は未定だがどちらにしても宇美音子さんを追わなければなるまい。

あの人集りの奥に見えるのは巨大な教会であった。

そういえばここは宗教が根強い街だったか。

俺は全く興味のない、所謂無神論者というヤツである。

随分昔は仏教か何かだったはずだったのだが、その面影は最早無  
い。

俺を信仰者へと導いていた両親に少しばかり罪悪感を抱いた時期  
もあつた訳だが、それを釈明することは既に出来ないのも悩みは数  
日の後で消滅するという経緯を辿ることになった。

人集りに近づけば近づく程に人々の会話も耳に入る。

最初はざわめきが重なり重なって不協和音を作り出し、雑音で  
しか無かつたが、人集りの端から大凡50m程近づいた辺りからそ  
れは雑音から会話へと昇華した効果を俺に示した。

曰く、突如この騒動は発生したらしい。

曰く、この騒動はこの街で大きな権力を持つ新興宗教組織　ホ  
ーネイという名であるらしい　の重鎮が魔族大陸侵攻決定を祝し  
て突如決行するものであるらしい。

他にも色々と会話はあつたが、とるに足らないものばかりであつ  
た。

が、一番引つかかる台詞が聴こえた。

どうも会話からしてその話し手は情報通であるらしい。

その発言を聞く限り俺はこの場から立ち去るといふ選択肢を無い  
ものとして扱わなければならなくなってしまった。

曰く、多大な権力を持つホーネイの姫君が初めて大衆の前に姿を現すらしい。

未来を映す絵で解明できないうちの一つ、姫の様な格好の人物はもしかするとその人物であるかもしれない。

「なーくーん。この中が会場みたいなんだけど、限られた人間しか入れないんだってー」

と、言われて入る人間に目をやる。

格好を見る限り、貧富の差で決まるものではないらしい。

おそらくは、新興宗教らしく、これまでの信仰度みたいなモンを記録してそれで決めているとかだろうかな。

何にせよ無神論者の俺には入る資格は無いだろうが。

教会など入ったことどころか見たこともなかったからなあ。

作りのには俺が元居た世界の教会に似た様な形である。

ステンドグラスは無く、変わりに錬金辺りで作られたらしい合成物質が使われているようだ。

あれは扱ったことがないのでその詳細はわからないが。

何にせよ、教会独特の神秘感に似たモノを感じる事が出来る内装であることに違いはなかった。

おそらく、元居た世界でも教会で通るだろう。

そついう出来であった。

「宇美音子さん。どうせ俺が言わなくてもやっただろうけどこの中にバレ無いように入るから。中に用事が出来た」

そついうと、ニヤリと口の端をいやらしく持ち上げたか何とかな認識出来る間隔を空け消失した。

気配は既に教会の中から感じられた。

どうやら、許可された人間が入るために扉を開けた一瞬で滑り込んだらしい。

教会の扉はバカでかいのだ。

横にも縦にも。

つまりは、飛び上がって上の方から滑り込んだのだ。

そんな所を普通は通らないし通れないので誰も見ていないだろうし見ていても一瞬の出来事だろうから見間違いと思うだろう。

それに上空は人混みなど無いのである。つまり、迅速に移動ができる。

ソレ故の選択でソレ故の成功なのだろう。

残念ながら俺はそれを実行できないし、実行出来るならこの場に居ない。

さて、取り残された俺とベヒス嬢。

あれ。

ベヒス嬢、普通に入っていったな。

もしかして、許可ももらえてる人間なのか？

よく考えたら唐突なものらしいから事前にチケットみたいなものを購入したりなんて暇は無かったはずだ。

となると、一定以上の権限やコネがある人物が入れるということなのだろう。

現状を見る限りはその様に考えるのが妥当である。

「何か皆冷たいな」。黙っていつちまうなんてよ」

ま、中の人間の気配の位置的にもうすぐ始まりそうだし急いだほうがいいのは確かだ。

何はともあれベヒス嬢は教会内部へと入ることに成功したようである。

残すは俺だ。

幾らかの制限がある俺は、よくよく考えてみると一番難度が高いのではないだろうか。

宇美音子さんは上空という死角からの侵入が可能であるが俺はその死角を使用することは出来ない。

そして、ベヒス嬢は許可を得ていたのか何かは知らないが、少なくとも平然とあの中に入ることが出来る権利か権限かを行使して内部に入った。

当然、俺はそれも行うことは出来ない。

魔法での認証であれば或いは偽装できただろうが、それらしい素振りは全く無いのである。

認証方法が不明であるので迂闊に手を出せないというものもあるが。

削除法から言って侵入経路はあの入り口だけである。

宇美音子さんもベヒス嬢もあの入り口からの侵入であった。

今回はバレてはいけないのである。

だから壁をぶち抜いて入る事や地下通路を作成して侵入するという方法はバレルだろう。

仕方がない、普通に行くか普通に。

「お疲れさんっす」

と、妙な会釈をして侵入を試みるが、普通に止められてしまった。

やはり、誰も彼もが通れるわけではなく、そして俺はその通れない側の人間であるという事が判明した。

ふむ、ふむ。

門番は別段強者って訳ではなさそうだ。

レベル的には軍の兵士程度か。

ならば今度こそ普通に通らせてもらおう。

「閻代」

カタブキが扱う箕田月と同じ様に歩法が主軸として組み立てられている転白という流派の歩法である。

その系統は隠密歩法。

その中でもこの閻代という歩法は紛れる事に特化している。

擬態を更に進化させた領域にあるそれは阻害認識とも言えるモノである。

「すんなり入れすぎな気がするな」

門番は少しも気づく素振りも見せなかった。

あれで良いのかと突っ込みたいところだが今は空気を読んでよしとおこづ。

教会内部も教会らしかった。

ただし違うのは、教会というよりも劇場という表現の方が近いのではないかという形状であった。

その台上には巨大なオルガンが鎮座しているだけである。

ただ大きいだけのオルガンである。

天井まで届きそうなそのオルガンはその大きさから多少物珍しい訳だが、明らかにソレ以上の何かを持って会場内の人々はそれを眺めている。

皆が皆、目が輝いている　そう表現していい。

一体何があるのか。

ホーネイの姫君とやらはそれ程の期待を抱くに値する又はそう錯覚する程の人物という事だろうか。

まあ、未来の絵を知っていればそれも無駄だということがわかるだろうが。

ちよいと否定的になりすぎたか。

と、反省していると台上に仰々しい白に近い青が主軸の色彩のドレスを纏った人物が現れた。

遠方からであるので断定はできないが背丈は160cm程で肩程度までの金の髪。

この辺りは普通であるが、眼の色が違う。

いや、色がどうこうではない。

肉眼ではわからないが、その魔力の奔流が魔族に近い。が、魔族という訳でもない。

よくわからない。

人間とも言えるし魔族とも言える。

魔力の質はどちらでもない。

よく判らない存在だった。

全身を見るのならそう違和感はないが、目や指という重要な神経系が通う場所付近がおかしいのである。

、どうやらホーネイの姫君はなにやら挨拶か演説かをしてい

たらしく、今は何らかを言い終え、それを称える人々の声が聞こえ始めた。

他に誰か出てくることもない。

これで終わりかと思っただが、巨大なオルガンを弾く体制へと移行した。

一音。

それだけであるなら普通の音であると思った。

が、二音、三音と続くに連れてそれは只の音ではないことが判明した。

あれは 魔法か ？

これまでの魔法というものは魔法らしく詠唱によるものだった。

厳密には詠唱の後にその魔法の名前を宣言する事によって発動するという形式であった。

「あれは音響魔法です。一般的に広まっている発声魔法。私が扱う媒体に術式を刻んで扱う刻印魔法。高位の魔獣と一部の魔族が扱うらしい呼吸魔法。そして、ホーネイという宗教組織のみが後継しているというあの音響魔法。これらが主な魔法体系です」

名前からしてそして光景からしてやはり音によるものだろうか。

「音響魔法は音を媒体に、とも言えますが違うとも言えます。ただ音であれば良いというものではないのです。特定の楽器とそれが発する特定の音が揃った魔法で、存在する魔法体系の中でも最も才能を要求される使用者を選択する魔法体系だそうです」

全て、オッドルからの言葉ですが、とベヒス嬢は付け加える。

口ぶりからして緘口令らしきものが敷かれているのかもしれないな。

オルガンによる魔法は遊園地のパレード宜しく派手な照明効果を及ぼす魔法らしく、会場を華やかにした。

ホーネイの姫君がああ絵に写っていた理由はこれにあるのだろう。

現在確定しているか否かは置いておいて、おそらく、独自の魔法

体系を持つホーネイの助力を得るのだろう。

魔族も扱わないであろうそれはもしかすると魔族との戦いの決め手になるやもしれないのだ。

未来の絵を見る限りはそうではないのだが、あの絵が変わることが証明されている今としてはどんな方法でも講じてみる必要があるだろう。

俺ならばそうするし、ユウトもおそらくそうするだろう。

俺は最後まで見ることに無く会場を後にした。

俺としては用は済んだのである。

そうなたらすぐに魔族大陸へ行く方法を考えなければならぬ。機能停止した俺を宇美音子さんかベヒス嬢に背負って貰うという方法以外に思いつきそうもない。

いや、一応、船を奪うという方法もあるが、折角指名手配されていないのだ。

出来るだけ事を荒立てたくはない。

俺や宇美音子さんはとかく、奪った船にベヒス嬢が乗船している所を見られるのはまずいのではないだろうか。

ただ、背負って貰うよりかは安全である事には違いないと思うが。

「お、ナークじゃないか。こんな所まで来てどうしたんだ？」

俺の名を呼ぶ人物。

それも男。

現状、宇美音子さんが居るのでユウトとはあまり行動を共にしたくは無いですユウトであるなら早々に切り上げようと考えつつ視線を向ける。

「オッドじゃん」

完全に予想外である。

俺の中でオッドはあの建造物の中で引きこもっている変人という内容であった。

が、外に出ている。

それだけではない。

俺達はそのこの速度でここまで来たのだ。

馬車を使用しても限時刻に到着できるはずが無いのである。

「一応、質問に応えておこうか。取り敢えず、船を入手する方法を思いつかないから暇つぶしに来た」

オッドは友人であるので比較的俺の対応は素直になるのである。

ところで、オッドという呼び名であるが、非常に呼びやすい。

オッドルを早口で言うところルが聞き取れないのでおそらくは、提示されていなかったとしても自然とオッドになっただろう。

俺の中では不変の事実でこれは平行世界があったとしてもかわらないだろう事実である。

なにせ、オッドは早口なのだ。

後は言わずとも理解できるだろう。

「じゃあ、この中で行われている姫の何かは興味ないって事か？

いやー信じられないなあ」

それとなく棒読みである。

「お前も何をやっているか知らない上にまだその姫さんが頑張っている最中なのに外にいるだろ。お前も同類だ」

というと、オッドはクヒヒッと猟奇殺人者でも演じたいのかと問いたくなる音を口から漏らした。

「それでまだここにいてるって事は船の入手方法が思いつかないってことか。一体全体、船にどんな用があるんだ？」

オッドになら言っても良いだろうか。

俺の事をバラしていない様だし一応は大丈夫か。

それに、オッドとは友人である。

話して裏切られてもそれは俺の見る目が無かったと諦めるし宇美音子さんとベヒス嬢にも諦めて貰う事にしよう。

「散歩コースに魔族大陸を入れようかと思っただけ」

「というと、オッドは表記できない程良く分からない音を口から発した。」

「多分、あれは笑っているんだろう、と身体の動きで認識する事が出来た。」

「あれが声だけ聞こえているのであれば、笑い声であると認識する事はおろか、人間の声であるという事さえ認識できないかもしれないという程凄まじかった。」

「周囲からは奇異の視線が注がれている。」

「俺は少々オッドから距離を取る事にした。」

「オッドは周囲の視線など無いかのようにその挙動不審、それだけで一気に不審者又は変質者へとジョブチェンジしてしまうこと請け合いの音を発し続けた。」

「ツフクヒヒ。いや、申し訳ない。ツボに入っちゃったよ」  
「そのようで。」

「楽しそう良かった。」

「俺はお前の変態行為が収まるまでの10分を無駄にして更に羞恥心にかかる羽目になってしまった。」

「どうしてくれる。」

「船、ねえ。魔族大陸へ行く事が出来る乗り物ならなんでも良いんじゃないのか？」

「別に船に固執する癖がある訳ではないので問題はないのだが、海を渡る技術はそれ程発展していないはずだから船しかないと思っただけだ。」

「今から使う用事があったんだけど、それを使わなくて良い方法があるからそれを手伝ってくれたら貸してやるよ。事実上俺の私物だし」

「無論、俺は首を縦に振る以外に選択肢はなかった。」

「どうやら宇美音子さんは、海を自力で渡りたくはないらしく、この案に肯定的であったのだ。」

というのも、どこで聞いていたのかは知らないが、瞬間的に俺の首元には俺が作成したナイフの一振りが当てられていたのである。そして、「断れば」と意味深に途切れさせた台詞を言った。

この状況の原因の一端は宇美音子さんの暴食にあった訳だが、それを主張する余裕も状況も存在しなかったのである。

そして、このナイフは下手をすると確実に俺の首を掻っ切ると本能がそう訴えたのである。

俺が頷くと宇美音子さんは先の出来事など無かったと言わんばかりに満面の笑みである。

「なー君、冗談に決まってるわよー。本当になー君を二分する訳ないじゃない。首が取れたら流石に死んじゃうでしょ」

掻っ切るところか、俺の頭と胴体を生き別れに　すぐに死ぬので死に別れかもしれないが　するつもりだったのか。

恐怖が襲いかかるが振り払って律義にまだ姫さんを鑑賞しているであろうベヒス嬢を呼びに足を動かした。

第三十二話 ・デカけりゃ強いつてわけではないけど怖いだろうな ・

「んで、何しろってんだよ」

問うと、返答の代わりにオッドは遠方を指さした。

視線を向けると、平原と森の更に奥に塔らしきものの姿が見えた。見るからにおんぼろであるその塔が一体どうしたというのか。

塔自身には魔力も何も感じない為、現状、あれが摩訶不思議な現象を巻き起こしているようには見えない。

もしかすると、元々、何か摩訶不思議な現象を巻き起こしていて、今は故障してしまいこの状態であるのかもしれない。

そうであるならば、オッドが修理に向かうから護衛やら、俺の鍊金臭い能力で何か手伝ってくれとかそういう頼みなのではないだろうか。

そう、思った訳だが、オッドの顔へ視線を戻すとそれは否定する事になった。

どうも、余裕が無さそうな表情である。

厳密にはオッドが余裕がある状態なのか否かはわからないのだが、表情が硬くなっているかどうか程度であるならば理解できるのである。

勘の域を出ないが。

今、オッドの表情は硬い。

それ故の認識である。

「俺の知り合いを救ってほしい」

オッドの眼は信じられないくらい本気だった。

「どうやら、オッドの知り合いは、非常に出来が悪い人であるらしい。」

「厳密には、音響魔法の素養が無い、という事であるらしい。」

身体が大きく、力もある為、荷物の運搬など昔から力仕事ではお世話になった事があるらしい。

それに何度かは素材が崩れて落ちてきて、下敷きになりかけた所を助けてもらったそうだ。

それ故に、見て見ぬふりは出来ず、危機を知って乗り物を奪って助けに行こうとしていた所で俺を見かけたのだそうだ。

「んで、危機つてなんだよ」

俺たちは現状、その塔へと進んでいる。

ただ、あまり速度を出し過ぎるとオッドがついていけない為、担いで速度を速めたのだが、一定以上早めると、これまたオッドが肉体強度的に付いてこれなくなった為全速力という訳にも行かなかった。

通常であるならオッドは後で来てもらうという形式を取ったのだろうが、オッドが行かなければその塔内部へ入る道が分からない為やむを得ない策である。

壁をブチ抜いて突貫するという方法が挙げられたが、おんぼろである為塔が崩壊しては意味が無いと却下されるに至った。

「助けて欲しい人は、悪いけど本当に素養が無い。だからホーネイからも気にも留められていないんだ」

だったら、あの塔へ向かう理由が掴めない。

塔へ向かって危機があるのなら強い人物を送る筈である。

「そうだ。今まではそうだったんだ。だけれど、今は状況が違う。魔族との大戦が待っているから出来るだけ戦力が必要になった。それは可能性が少しでもあるなら何だって。けど、ほぼ可能性はないけど無くはない可能性で実力がある人物がサイレンが大戦に行かないなら行かないと言ったんだ。そして、サイレンを連れていくほど乗り物にも物資にも余裕はなかった」

サイレンはホーネイからしたら本当に木偶の坊扱いだからね、とオッドは苦笑いする。

その様子を見る限り、オッドは相当サイレンという人物に情があ

るようである。

それは、家族の様に。

「……内容はどうでもいいな。お前のその顔を見る限り、俺はお前を そのサイレンというヤツを助けなきゃならんらしい」

親友の頼み、だ。

それに、家族。

懐かしい響きで俺の根源となる単語である。

心が揺れる。

オッドが何かを言いかけたが、森へと入る為身をかがめさせた。

森は木々がプライベートなんぞ糞喰らえと言わんばかりに好き勝手伸びきっている。

森は森というだけで、事実上、柵に近い。

枝と枝が絡み合い補い合い入り組んでいる。

魔力も節々から感じる為、ただの木ではないようである。

「どっせーい」

殴って蹴ってみるも、ビクともしない。

あまりにも力を入れ過ぎると、おんぼろ塔が崩れるんじゃないか

という錯覚に陥る為躊躇してしまっているらしい。

「あー、これってホーネイにバレない様にやるべきだよな？」

オッドは首を縦に振る。

危なかった。

もし全力を出して殴る蹴るをくり返して、その振動でホーネイに

バレるかも知れなかった事を思うと俺の判断というか躊躇はナイス

である。

「あー、じゃあアタシがやるわぁ。お腹一杯だしー」

多少、あの暴飲暴食に罪悪感を抱いているのか宇美音子さんが名

乗り出た。

俺としてはこの森という名の柵をぶっ潰す方法は幾らかあったの

だが、バレる可能性を否定しきれない為任せる事にする。

宇美音子さんは魔力が無い為、現状の俺やベヒス嬢の様に、全力

を出せば魔力放出を抑えきれないという原理は働かないのである。

「んじゃ、頼みますわ」

「はいはい。じゃーちょっとどいてー」

そう言いながら俺たちをしっし、と犬でも追い払う様な手つきと台詞の朗読を行って見せた。

服の袖からナイフを一振り取りだし、似非居合い切りの様の溜めの恰好を取って見せる。

鞘の代わりに手で刀身を包んでいる。

あれは、素材が素材であるので鉄やら岩やらを簡単に両断する為、迂闊に刀身に触れてほしくないのだが。

というか、全部、鞘渡した筈なんだが。

「鞘？　すぐに戦闘態勢に入れなくなるしあんなの捨てたよお」

ひでえ。せめて売って換金してほしかった。

「んじゃ、いくよー」

一閃。

常人からすれば、おそらく構えの体制から唐突にナイフが消失し、構えを解除し、普通に立っている体勢へと変化しているようにしか見えない程の速度であった。

それに呼応するように森という名の柵の方から何やら切れたり潰れたりする音が響いた。

見ると、巨大な斬痕。

ああ、あのナイフは風の魔法が施されていたっけ。

早く振れば振る程風を取りこみ巨大な真空波を放てるという宇美音子さんがわざわざオーダーしてきた数本のナイフの内の一つである。

魔法自体はそれ程ではないのだが、あそこまでいくと酷いものだ。たまに、宇美音子さんが人間ではなく仙人とかそういう人を超越した存在なのではないだろうかと思う時がある。

この世界に来てからはその回数が増えている様な気がする。

宇美音子さんの基準で行くならば、鬼の部類だろう。

「っ」

背後からオツドが息を飲んでるっぽい音が聞こえた。

まー、確かに宇美音子さんみたいな達人クラスを見慣れてなかったら絶句するだろうなあ。

現状、気配察知的に考えて達人クラスはいないくさいし。

少なくとも、この国にはいないし、これまでの国にもいない。

足元に及ぶヤツさえいない。

魔族を見る限りは魔族もそうなんじゃないかと思わなくもない。

尤も、ガーゴイルは魔族ではなく、生体兵器で分類するのであれば魔獣であるため、事実上出会った魔族は先の森で戦闘した二人だけという事になる。

その為、魔族全体の戦力は正確には量かれていない。

魔法は学問に近いものがある為、研究者であつたであろう先の二人はそこそこ強い部類の魔族だつたんじやないかと思う。

そもそも、この大陸は人間側の勢力が主に分布しているのである。つまり、魔族側からすれば敵地でしかないのだ。

その真つ只中、先の森であるならば国の都市の1つに隣接していると言つて過言ではない位置に存在する。

そんな場所にたつたの二人つきりで派遣されるとなると、島流的扱いを受けたかそれでも大丈夫だろうと判断されたかではないだろうか。

人間にはない魔族の何らかの事情により他の理由があつたり俺が思いついていないなんて事もあり得る訳だが、概ねこんな感じじゃないだろうか。

まあ、油断は何も良いものを産まないだろうからそうは思つても気を引き締めておかなければならないだろうなあ。

兎に角、宇美音子さんの一振りにより森の一部が消し飛び通過可能となつた。

塔まで距離があるにはあるが、一直線である為そう時間はかからないだろう。

というか、今思ったんだけど、森を破壊しないで追っているサイレンという人物は向こう側に行ったのだろうか、いったいどうやって通ったのだろうか。

魔法が扱えないとなると空を飛ぶなんて不思議な事も確実にできないだろうしどうなってるんだろう。

「多分だけど、普通に迂回したんじゃないか？ 大体そうするし。それに、この辺りは凶暴な魔獣が多く生息しているからね。そういうえば一匹も見かけてないな」

問うてみると、答えと同じくして質問を投げ渡されてしまった。

「魔獣って野生動物だろ？ あれなら俺たちの近くには基本的にこねえよ。殺気飛ばしてるし」

そう言つと、オッドはなんだかあきれた顔をしてみせた。

「なんだ？」

「いや、何も無いよ」

明らかに何やら思っている顔であるが、言いたくないものは無理に聞き出すつもりはないし放置する事にしよう。

さて、問題の塔まで全く魔獣の姿を見ることはなかった。

今後も無いだろうと楽観的に先を見たいのだが、どうもそうは行かないようである。

塔から明らかに敵意を感じる。

それもそこいらの魔獣並みの気配ではない。

気配の位置から幸いにもサイレンとその敵意の主は遭遇していないらしい。

だが、森から塔までは遮蔽物のない平原であるのでおそらく侵入していること自体はバレているのではないだろうか。

となると、悠長には構えてられない。

敵意を向けられていることからこの塔には入りたくはないのだがやむを得ない。

「ベヒスとオッドはここで待機しといてくれ。どうも、住人には歓迎されてないらしい。今までの魔獣みたいに歓迎はせずとも不干涉

であるなら安心できたんだけどな」

おそらく、平和的に解決は出来ないと思う。

だからこそ、非戦闘員であろうオッドは置いていくべきである。

そして、俺だけであるなら妙な制約があるのでそのせいで中で息絶える可能性がなくてはならない。

宇美音子さんだけだと、戦力的には全く問題がないため安全に見えるが、なにやら暴走しそうであるので安心しきれないわけではない。ソレがなければ確実に行くのが面倒であるので宇美音子さんに押し付けて俺もここで待機することを選択したのだけれども。

ベヒス嬢はオッドの護衛という役目だが、一番遠距離攻撃が得意であるだろうと考えているので最悪、塔毎ぶった切ってもらおうと思っっている。

塔は古代ギリシャとかに建ってそうな形状で、窓が幾つもあるの声をかけるぐらいはできそうだからそれで連絡ができる。

まあ、それだけなら宇美音子さんに頼んでもいいのだけれども。

威力の調整ができる分、宇美音子さんよりも汎用性があると踏んだのである。

宇美音子さんの攻撃も威力の調節出来るはずんだけどしないんだよなあ。

「わかった」

オッドがそう言いベヒス嬢が頷いて剣に手を当てる。

二人共理解してくれたようで何よりである。

「えーだーるーいー。ワキワキさせてくれたら良いよー」

宇美音子さんは理解していないのか、理解して敢えてぶち壊しているのかよくわからなかった。

残念なことである。

「宇美音子さん。宇美音子さんだったらあの敵意向けてきている鬼を倒しにいくだろ？ 行かなくていいのか？」

一時期、自身の敵、または敵になるであろうモノを倒しに倒していたからな。

鬼狩りって宇美音子さんは言っていたけれども。

「えー、あれねー。あれって昔のことだからなー。それにあれは本位じゃなくて師匠。名前は忘れちゃったけど、その師匠の頼みだったからねえ。たいだい、今回は殺しになっちゃうからなあ。敵意向けただけで殺しちゃってたらアタシも鬼になっちゃうしー。魔が鬼かって言ったら魔がいいしー」

確かに、そんな設定があったなあ……。

まあ、そう言うなら仕方ないか。

俺ひとりで行けばいいかな。

「んー、まあそう言うなら俺ひとりで言ってもいいけどなあ。とりあえず、オッドはサイレンの出で立ちに関する記憶コピらせてくれないや」

「ああ、それなら顔写真があるよ」

ポケットからそれらしき人物が描かれた紙が取り出された。

見るからに女性である。

サイレンとは女性であつたらしい。

大きくて力持ちと聞いていたので完全に男性だと思いついていた。

どうやら顔に出していたらしくオッドは苦笑いしてみせた。

確かに、女性に対して男だと思いついてました、なんて言ってみると泣かれるかシバかれるかのどちらかになる可能性が経験上高い。

ベヒス嬢や宇美音子さんといった女性メンバーの鬢髻を買って俺の血によって血祭りを開催される前に立ち去ることにしよう。

「中くれえなあ。まあ、なめらかな勾配だから死にはしないけども」

ただ、暗闇に紛れて段差が存在しないという保証はないため慎重に進まざるをえない。

万が一誤って転落してみようものなら、確実に死んでしまうだろう。

精神が。

おそらく、浮遊感に絶えきれなくなつて精神が完全に乙つてしまふに違いない。

「外より魔物、好戦的だなマジで」

外では見守つてくれるだけであつた魔物と同種であるだろう気配を持つ魔物もここでは襲いかかつてくる。

とは言つても、戦闘能力で言うるとライオンの数倍程度であるので脇腹など弱い部分を突つついておけば負けることはない為それ程心配はしなくてもいいのだけれども。

形状自体はこの世界で最初に遭遇した狼型の魔物を巨大化したような形状である。

爪が長いとか牙が鋭いとかいう細かな変化もあるが。

まあ、それは微細な変化である。

驚異と叫ぶほどではない。

魔物が多いことは通常宜しくないことであるが、現在それは非常に喜ばしいことである。

なにせ、暗闇に所狭しと魔物がはびこっているのである。

つまり、その箇所には陸地があるという証明になっているのだ。

だから俺は最も恐怖すべき要因が削除されていることになる。

だからこそこの程度の魔物の頻出であるならば目を瞑ろうと思つのだ。

緩やかな勾配が続き、目が慣れたな、今出たら目が痛くなるだろうなあなんて考えていたわけだが、唐突に俺の目が激痛を訴えた。

どうも、急遽光源が出現したのか明かりが発生したのである。

が、それも一瞬であつた。

失明なんて面白いことにはならなかったが嫌な予感はある。

明かりが発生した瞬間爆音と熱気が立ち込めたからである。

この熱気は火あぶりにされた時と同系統の熱気であるのでおそらく火が発生したのだらう。

火元になりそうなものは石造りであるので無い為、おそらく火炎魔法だらう。

これ程の規模となると、呑気に焚き火をしようと魔法を使用したとは考えにくい。

魔力暴走によるこの規模であるならまだありえるが現実的ではないだろう。

魔力暴走する程度の魔物であれば既にそこいらで野垂れ死んでいくこと請け合いである。

「ありやー、こりやもう始まつちやつたんな」

サイレンという人物がこの塔で一際気配の大きい魔物が接触しないという可能性はおそらく潰えたのだろう。

サイレンが魔法を使えないという事を考えると魔物が火炎魔法を使ったのだろう。

大気中に拡散する魔力の残滓もそうだと訴えている。

魔物とサイレンの距離は離れているため安心していただけだが、どうもそれは阿呆の所業であつたらしい。

それから数回、既に火炎が放たれたであろう明かりと熱気が込みあげた。

サイレンの気配らしきものは未だ動き続けているためまだ死に絶えてはいないし、速度も落ちていないので火炎が命中してもいなさそうである。

速度的に、身体能力はかなり高いようである。

とは言っても、魔法がジワジワと追いついているようであるので時間の問題のようだ。

段差が多少気かりであるが、全速力で走るとは避けられないものであるらしい。



備も与えなかったのだろう。

魔族との決戦があるからとか適当な理由を述べて言いくるめていそうである。

ああ　　そういえば、俺も元の世界で政府の連中にそんな言い訳をされてキレて務所を一つ潰したことがあったけな。

あれは黒歴史で若気のいたりというヤツだな。

とりあえず、魔物の数が多すぎるので気配が混濁しがちだ。

襲ってきそうなのはあのふたりだけなのでソレ以外はシャットアウトしておくことにしよう。

「　　まあ、オッドの願いを叶えてやるとするかな」

個人的にホーネイ好きじゃないし、思い通りになるのは面白くないって理由もあるのだけれども。

「おわっ！　急がねえと！」

ちよいと余計なことを考えている間にサイレン（仮）がライオンもどきの火炎魔法と言う名の火炎放射に押され漏れ無くロースト肉を生成しそうになっていたので慌てて動くことになった。

「箕田月流　百歩先」

間に合うか微妙だったので高速移動の歩法を使用しなんとか距離を誤魔化してみた。

縮地とかだと間に合ってなかった臭いので選択は正しかったようだ。

「！？」

サイレン（仮）は突如割り込んだ俺に驚きを隠せないようだ。

割り込んだおかげで俺が変わりに又は漏れ無く共々ロースト肉になりそうであったのでその事に気を割いている暇はなかった。

生憎と俺は人で、それにRPG的に言うと魔法使いなのである。

武術はたしなみ程度である。

達人クラスの實力があればこの状況さえ回避できたのだろうから悔しい。

取り敢えず、武器を作成する猶予は無さそうで、現状手元に武器

やソレに成り代わるモノは存在しない。

無論、防具も同様である。

となると、女性がいるので回避は却下されるので素手でこの火炎魔法と相対しなければならぬことになる。

魔法を展開する暇も無さそうなのでかなり窮地と言ってもいい。俺の知る武術でこれに対抗できるモノの大半は武器が必要だったりと限定条件があるのである。

そして、現状それらの全てを満たしていない。

こんな状況に今までに何度か遭遇したことがある。

主に修行で、だ。

それもあのイカれた糞野郎　　どういう訳か師匠の一人になった綿名　宗右衛門の修行でである。

火炎魔法は、随分景気が良いらしく、人間一人では発生させられないだろうという程度の魔力を秘めていた。

物理兵器で例えるなら小型ミサイル程度である。

「癩だけどしゃーねーか」

頭の中で綿名がいやらしくニヤついている風景が浮かんだ。

明らかに癩とか言う1文字で表せるものではない。

多分、200文字ぐらい必要だと思う。

もしかしたらもつとかもしれないので、控え目で200文字という事にしておこう。

とにかく、死を回避するためには手段を選んでられないという事である。

「宗丹流刀剣術　生まれ刃」

幾つか手刀を放つと、その延長上が綺麗に断ち別れた。

火炎魔法も例外ではない。

が、消滅するわけではない。

軌道が逸れる程度である。

現状は、それで問題はないので気にしないのだけれども。

「あんだ、何者なんだよー」



の世界では気が際立てられる。

それ故に気を少しでも知る者なら気を前以上に扱うことが出来るのである。

俺は全く理解できていなかったためこの技は手順のみ把握していたのだがどうやら上手くいったらしい。

結果は言うまでもないだろうか。

火炎魔法は少しの熱気を残すだけで姿を消した。

携えるは大剣。

多分、背後にいるサイレン（仮）と同程度の刀身を持つありえないサイズの大剣である。

こればかりはイマイチ理解していないため、師匠が使っていた武器と同じ様なものを作成したのだがなんとかイケたらしい。

ライオンもどきを見ると、怯まず再装填しようとしている。

どうも、魔力はかなり膨大であるようだ。

それに、それを除外しても強靱そうな肉体と人を余裕で切り刻めそうな爪やら生物らしからぬ運動能力も驚異となる。

「<sup>リフト</sup>形状実装」

大剣は姿を崩し鉄脚へと変化した。

俺が何やらやらかす事に気がついたのか再装填をしつつライオンもどきの腕が振り下ろされた。

その衝撃で俺の足元がもれなく破碎された。

当然、このまま身をまかせると精神的に死に至る為、全力で回避することになる。

「地滑り！」

かなりギリギリである。

視界が赤く明滅するのは仕方がない。

ブラックアウトしないだけ自分を褒め讃えてやりたい思いである。

この地滑りは足場が不安定な場合のみ使用することが出来る直線高速移動歩法である。

瓦斑流古武術の一つだったかな？

よく憶えてないけど教えてもらっていたのが幸いした。  
根性で気絶を抑えられたのも大きい。

完全には宙に浮いていなかったため成せた奇跡である。

ライオンもどきの腕を回避して安心しきって話にならない。  
腕はまだあるのである。

鬱陶しい限りだ。

「……天空繋ぎ」

鉄脚を有効活用せんとばかりに特殊な蹴りを複数回放つ。

「なんとか上手くいったかあ。これ、異常にムズイから若干心配だ  
つたんだよな」

ライオンもどきが崩れる。

おそらく、もう立ち上がれないだろう。

いや、数カ月生きられたら生きられるのだけでも。

問題は、おそらく全身の関節が砕けて使いものにならないという  
ことだろうか。

天空繋ぎとは、瓦斑流古武術の奥義の一つにあたる技であるらしい。  
い。

師匠が言っていたのでその情報は鵜呑みには出来ないどころか信  
憑性マイナスなので気にしてはならないだろうか。

ライオンもどきは痛みのがあまりか声もあげずに意識を放り投げた。

「おう、もう大丈夫だぞ。んじゃ、さっさとここから出るか。意  
味分からん任務はおそらくやらんでも問題ないだろ。どうせ内情は  
理解してんだろ？」

俺に警戒心をあまり抱いていないらしい事を見る限りは理解して  
くれていると信じたい。

どちらかというところ、警戒する以前に啞然としてしまっているだけ  
かもしれないけれども。

「危ない！」

というサイレン（仮）の叫びと言える声を聞いてサイレン（仮）  
の視線の先を追うと火炎が目に入った。

どうやら、関節を潰して意識を失ったものの、その衝撃による激痛により再起動したらしい。

それだけならまだしも、そのまま恨みに身を任せたのか俺に向かって火炎魔法を放とうとしているらしい。

それにしても、やっぱり魔物は魔物だな。

魔族みたいに高度な知能がある訳ではないから一つ覚えみたいに魔法を扱っている。

算数で言つと、こいつは掛け算できるけどそれしかできない、という状態である。

それも、一桁のかけ算が限界つてとこかな。

取り敢えず、そんな訳だから俺は油断しきっていたというか見くびりきつていたというか。

何はともあれ、普段ではあり得ないであろう窮地に立たされることになった訳である。

既に火炎は放たれた後である。

形状実装リイドによりその火炎そのものを武器に込めてしまうという方法が浮かんだが、確か、他者が放ったものはすぐには込められなかったのではないかと魔道書を扱っていた経験が訴える。

他者の魔力という不純物ゆえだったかな。

オッドから引き継いだ記憶はこういう小ネタがあつて非常に役立つ。

オッドの記憶という事で、魔法陣を思い浮かべたが、間に合いそうにない。

魔法陣は筆記であるので最低限必要な発動時間があるのである。

魔力効率が良い半面であるといえる。

今回はそれが露骨に問題となった訳だ。

この間に合わないという展開は先程味わったばかりである。

懲りないな、俺も。

まだ先の影響で視界が赤く明滅している為、本調子ではない様である。

もしかすると、俺が本調子でなくダメージによって視界が赤く明滅しているのではなく、ただ単に炎にあてられて赤く明滅しているだけかもしれないけれども。

個人的には身体は前の世界の様では無いので本調子ではない

ああ　　そういえば、俺の身体は以前とは違う身体なまってに変化しまったのだったか。

なら、この状態はもしかすると絶好調かもしれないという訳である。

個人的には量りかねるのだけれど。

いやいや、方法はあった。

どうせ本調子でなければ今あがいてもどうしようもないし、本調子ならもう少し猶予が無くても何とかなる。

となれば、普段滅多に使わない方　とは言っても形状実装リイドもあり使わないのだけれども。

「本質探索ロート」

これは主に走査術である。

形状実装リイドの補助的役回りになりがちなのである。

が、その効果はかなり汎用性がある。

対象の採寸や、計量等を瞬時に行われ数値を知ることが出来るというものなのである。

前の世界ではこういうものは実験に実験を重ねた末に導き出す数値であるが、この世界ではこれ一発で把握できるのである。

ただ、問題点が二つある。

尤も、片方は問題点という程のモノではないのだけれど。

そう考えると問題点は一つなのかもしれない。

問題点とは、あらゆる数値は把握できると思われるが、それはそこまでで、用途等は全くわからないのである。

数値だけである。

だから名称不明であるなら名称不明のままなのである。

次に、耐久値が存在するモノのみ対象として指定する事が出来る。

まあ、こつちは事実上問題じゃない。

耐久値とは、崩壊　死が存在するという事である。

耐久値が存在しないという事は無生物であるなら永久にその形状を保ち劣化しない事を指し、生物ならば不死であるならば対象とできる。

後者はそうとう気持ちが悪い。

粉々に切り刻んでも死なないというのだから。

あと、強いてあげたら前者の数値計測には欠陥がある。

計測は自動ではないのだ。

つまり、先に俺は自身の身体を走査した訳だが、それは手足を量ろうと使用した訳である。

だから手足の長さなど、手足の情報しか提供されなかった。

もし、漠然と身体の数値が知りたいと思って使用すると失敗に終わる。

何のどの数値を計測するのかと指定しなければならぬのである。だからこそ、あまり多様出来ず戦闘などでは補助的役割になるのである。

その主な役割は地形の把握なのであるが、これはまた機会がある時に考えよう。

今は目前の炎に対抗する為の手段を講じなければならぬのである。

最悪、俺だけ燃えてサイレン（仮）を外に投げ出せば後は宇美音子さんが何とかしてくれるだろう。

何とかしてくれなかったら確実に柘榴へと変貌するだろうけれども。

取り敢えず、今は俺の身体の状態を知りたいので、バイタルを計測すれば良いかな。

後は各所の耐久値とかかな。

「ローテ本質探索」

各所計測開始

完了

各部計量開始

完了

総合計量開始

完了

記録出力開始

完了

計測が完了して要求した数値が頭に叩き込まれる。

それを見る限りこれは酷い。

身体の耐久値が鉄よりも高い。

人間って鉄より頑丈だっけ？

もしそうなら剣とか鉄で作らないよな。

よし、俺の変化後の身体が異常だと思っておくでしょう。

筋肉なども各所問題が無さそうである。

寧ろ、以前より良い方向に改良されていると考えていい。

やはり、この違和感は体調が悪いのではなく、寧ろ逆であつたら

しい。

身体に意識が付いていつていない、そう断言して問題はなさそう  
だ。

個人的に、身体を使う程に違和感が薄れていつていたので薄々気  
が付いていたと言えれば気が付いていただけれど。

視界の明滅はただ単に興奮状態による脳内薬物過剰分泌によるも  
のらしい。

なら、寧ろ今の状態は非常に戦闘向きという訳だ。  
グッジョブ

GJ俺の身体。

この状態にしたであろう神には感謝はしない。

無許可だし。

聞いてきてたら多少感謝はしたのだろうけれど、あの神のいい加  
減さ具合を考える限りどう転んでも聞いてくるなんて似合わない事  
はしないだろう。

神は神でも腐れ神なのである。

文字通り腐って死んでしまえば良いのに。

他にも神はいるような口ぶりだったから好感を持てる神だけが居残れば良いのである。

さて、閑話休題。

そろそろ炎が迫ってきているし、真面目に事に取り組んだ方がよさそうである。

「ここで見た事は俺の仲間以外には他言無用で頼みたいわ。無理なら止めないけども」

後ろにいるであろうサイレン（仮）に一応口止めをする。

俺の戦闘向きの能力の一端を仲間以外に使う訳だし。

万が一、魔王だけでなく将来的に敵に回る存在がいるならそういったも一切含めて知られてロクな事はないだろうし。

まあ、俺が対策されてもベヒス嬢や宇美音子さんがなんとかするだろうし、あんまり問題じゃないのだけれど。

正直、俺はそんなに活躍してる存在じゃないからそもそも気にも止められない気がしなくもない。

「ついでにあの火炎発生原もぶっ潰すかな。ま、大船とは言わねえけど少なくともお前は生かすから安心しろや」

生かすと言ってもその手段は外に放り投げるの一択だけれど。

第三十四話 ・分相応は良いけど、他にしわ寄せ行くよな ・（前書き）

超絶書けてませんが、取り合えず、書けている部分まで投下したい  
と思います。

第三十四話 - 分相応は良いけど、他にしわ寄せ行くよな -

火炎発生源を潰すとは公言してみたが、潰すという程でも無い気がしなくもなかった。

何せ、完全に関節という関節を潰してあるのである。

既に潰し済みというやつである。

なので、俺としてはあまりする事が無いのであるが、その状況でも迫り繰る火炎だけでなく、追い討ちで次なる火炎を放つ気満々である覇気が感じ取れる。

そう言う訳で残念ながら命を貰い受ける必要が出てくるのである。問題としては、どういう構造か、異様に硬いという事だ。

そうでなければ、先ほどの関節を破壊した際に、脊髄も同時に折るつもりであったがそうはいかなかったのである。

よく考えてみると、狼型の小型の魔獣も普通の狼より明らかに硬かった。

殴っても多少抉れる程度だった。

俺はそこで気が付くべきだったのかもしれない。

目視的な意味では硬度。

感覚的な意味では不可思議な気配。

今なら多少予想は付く。

宇美音子さんが以前の世界以上にハチャメチャに動いている事を考えて、あれは師匠達がよく言っていた『気』というヤツで間違いないのではないだろうか。

この世界での魔力も同じ様な効能を發揮するようだが、魔力は神の恩恵により認識できるので、心当たりから探る限りはそれしか残っていないのである。

師匠の一人である秋田山さんに気とは何ぞやと問うた時は思い込みみたいなもんだと教えられたけど実際、この世界での魔力の様に形はないが存在感のある存在だったのではないだろうか。

この思考には何度となく行き当たっている訳だが、ここに来て取り立てた理由は相対している魔獣にある。

魔力を感じる訳だが、この魔獣が持ちうる硬度を再現できる程の魔力は感じられないのである。

それに、この魔獣から魔力以上に多量の不思議な気配　　ここでは便宜上『気』と呼称するが　　を感じるのである。

魔力と同等の効力があると仮定すると、感じる気配と硬度はほぼ一致すると言つて良い。

俺が達人の域に到達できなかったのはこの辺りにあるのかもしれない。

まあ、修行をしていた当時は兎も角、今はやる気なんぞさらさら無いので現状伸び代は無いから知ったところで無意味だけれども。

強いて言えば生存率が多少上昇するぐらいじゃないだろうか。

それはザクがドムになる程の変動だが、特機が投げ売りされていると言つても過言じゃない状態であるので知れていると言えるだろう。

だからこそ、完全にスルーしてたのだが、案外知っておいた方が良いかもしれないと思わなくもない。

未来が描かれていた絵を見た限りでは今敵視している魔王共々何者かにやられていた。

魔王は魔法を極めし者ではなく魔力保有量が最も多い者を指すのだが、魔力保有量が多ければ多い程おそらくは魔法に打ち込む為、比例して魔法が扱えるはずなのである。

少なくとも知識はあるはずだ。

まあ、それに費やす時間が無かったり金が無かったりと挙げた事以外の原因で打ち込めないという事はあるかもしれないが。

この場合、魔王つてのは多少地位がありそうだし、魔族という魔法に長けた存在に属するのである。

少なくとも普通の人間以上に魔法の知識は最低でもあるんじゃないかと思う。

そんな存在が勇者と共闘したかは知らないが、敗北を喫したとなると、それ以上の何かの存在を疑わざるを得ないのである。

黒い霧のようなものを纏っているように描かれていた第三勢力は魔王と勇者に勝利しているであろう状況から、この第三者は人間ではありえない。そして、そこいらの魔族でも魔獣でもないだろうということになってしまふ。

だから、そいつは気も扱えるんじゃないかと踏んでいる。

正直、魔王やよりも強力な魔法となると戦術魔法以上の規模の魔法ぐらいである。

つつてもまあ、今は前魔王になっちゃってる訳だけれども。

まあ、重要な部分は事実であるなら変わらないうし問題ないけれど。

さて、取り合えず、目の前の火炎をどうにかしなきゃだな。

普通なら漏れなく焼死体を生産するところだけど、気らしき不思議な気配を繰る様に心がけて動いてみるとしよう。

「朧弓姫」

「!?!?!?!」

目の前の火炎球は消失し、魔獣の一部が爆発と共に燃え盛った。

魔獣は状況を理解できていないらしい。

背後を見ると、サイレン（仮）も同様に状況を理解できていないらしい。

「さて、次がありそうだったからさっさと潰して」

刹那、俺の本能がアラームを鳴らした。

まるで、前の世界での達人クラス数人と対峙した時のようである。通常ではありえない。

その域のアラームである。

視界に変化は無い。

突如、対峙している魔獣が覚醒でもして強力になったわけでもない。

魔獣は変わらず硬いだけのかい猫でしかない。

ただ、空気が変化した。

魔獣はこれを感じ取ってどう思ったのか、攻撃を中止している。追撃を放つ気満々に見えたがそれが突如として消えうせている。それを見るだけでもこの状況が異常であることがわかる。

魔獣のあの落ち着きようは、この問題があつた魔獣にとつて好意的なものであるのか、それとも足掻いても無駄であるので諦めているからの格好なのかは定かでは無い。

どちらにしても俺にとつてはろくでもないことであると思われる。『お前さんが現れてから目に余る行動が多すぎるのう』

頭に直接響く合奏音にも雑音にも取れる不思議な音が聞こえた。

それが声である事を認識するまで多少のラグが生じるほど人間離れ いや、この世離れしている。

あの神と呼ぶには抵抗を覚えるあいつからも多少同じ気配を感じたが同類だろうか。

現状、動けない。

その大きな理由として姿が見えないだけでなく直接頭に声が響いてくることから位置が特定できないでいるからである。

『神の裁きを受けるが良い。どういう訳かお前は力を持ちすぎている。この世界にいずれは匹敵する程の力をの』

何時の間にか俺と魔獣の間にスターウォーズのヨーダみたいなヤツがいた。

見た目的にはぶちスライムぐらい弱そうだが、どうもこのいやな感じはこいつから放たれているらしい。

『メルトフォール要素低落』

詠唱も無く呪文名が宣言され効果が目に見えて現れ始めた。

「 やべえな」

どうも、こいつは神と同類か神そのものであるらしい。

人間が使っていたものでも、魔族が使っていたものでもないであろう魔法が発動されているのである。

というのも、両者が使用する魔法は、基本的に指定した属性を秘

めるものに干渉するものが多かった。

これは違う。

地面に押し潰されるようになるこれは一見重力魔法である。

それだけであるならまだ土と風の魔法を組み合わせれば再現が可能だろう。

だが、これはそうではないし、そもそも規模が酷い。

崩れて生じた塔の穴から見える景色を視界に入れると意識を失いそうになったため即座に目を逸らしたが、ここを中心に隔離境界が構築され、その中全域にこの魔法の効果が及んでいることが見て取れた。

というのも、範囲内の木々が一斉に押し潰されているのである。

俺が何故重力魔法ではないと断言したかには理由が二つある。

片方は断言は出来ないわけだが。

単刀直入に言うと、重力魔法程度であるなら多少俺でも耐えられるはずなのにそうでないことである。

もう一つが決定的で、宇美音子さんも動けないでいるらしいということである。

尤も、後者は気配が動いていないからという安直な認定法の上であるけれども。

何にしてもこのいやな気配というかあのクソ爺に似た気配をヨードみたいなのいつから感じるのとは間違いのないようである。

あくまで俺の感覚を信じるのであれば、だけれども。

よく考えてみればあのクソ爺は俺の世界のことを全く知らないような素振りであったし、その住人である俺のことも大して知らないようであった。

世界を管理しているといっていたがあれでは職務怠慢であると思っただけなくも無かったわけだが、そこで思考停止してしまっていた俺は愚かであったといわざるを得ない。

クソ爺があの状態であるのはあいつがクソ爺であるからだと思っただけだが、逆に考えればすぐにわかることであったのだ。

あいつがあゝの状態でも問題が無いという状況であるのなら。そう考えればいいことである。

恐らく、この推測は間違つてはいないだろう。

『ああ、そうだ間違つてはいない。何故、上位神の事を知っているのかは問うた方が気にかかるがのう』

お墨付きも頂いたところで推測を続けるとしよう。

先の、クソ爺を上位神と呼んでいたことから大凡わかるだろうが、このヨードみたいなのはこの世界を管理するあいつの部下つてとこだろう。

んであのクソ爺はそれを統括する神つてとこか。

仮にも世界を管理する役職であるので、いくらヨードみたくても神の一種では無いだろうか。

そうなればこの世界の枠組みに囚われた存在に勝ち目は無い事になる。

生憎、俺はこの世界の出身ではないのだけれども。

「おい、お前つてサイレンつて名前か？」

取り合えず、ヨードは気にしても仕方が無いので一緒に地面に多しめり込んでいる女性に声をかける。

つてやべえな。

めり込んでるけど肩に乗せてた人形を庇つてやがる。

人形を庇うことにいっばいっばいなのか俺の質問には答えられないらしい。

どんだけその人形好きなんだよ。

それにしても解せないな。

なんで今頃起こつてきてんだよこのヨードはよ。

取り合えず、この状況をどうするかだな。

このままだつたら皆薄っぺらくなつちまうぞ。

絶対にモツが漏れて汚いな。

『人間にしては良く耐えるのう。そろそろ下にいるお仲間の一人が限界のようじゃが』

絶対にオツドだな。

『そろそろ終わらせてやろう』

やべえな。

オツドは兎に角、約束は果したい所だ。

そついう訳でサイレン（仮）に薄っぺらくなってもらっちゃ困るのである。

ふと、サイレン（仮）を見てみると何やら叫んでいるようだったが、全く聞こえない。

俺は口を開く気も出ないほどだるいのだが、サイレン（仮）は相切羽詰っているのか叫んでいる動作をしている。

その口の動きは、助けを求めているようにも見える。

まあ、言われなくてもどうにかしないとだが。

取り合えず、あのヨードをぶち殺せばとまるかなあ。

『お前には ただの生物には無理じゃ』

とか何とか言っただが。

声が頭に響いているので聞こえるのだろうか。

視界が暗くなる。

目が潰れたわけでも辺りが暗くなったわけでもなさそう。

ふむ、やっぱり想像通りかなこれ。

魔道書を弄つてみると、魔道書は全然重くなっていないようである事が分かった。

とはいっても、俺は全身が押さえつけられたかのように感じるので断言できないのだが。

錯覚かもしれんし。

（魔道書は重くなってねえなあ）

そう呟いたはずだが全く耳に届かない。

これは決定的だ。

おそらく、ありとあらゆる要素が地面に沈下してるんじゃないだろうか。

故に、光も反射せずに地面に沈下し続けている。

魔道書を展開すると必要な知識が流れ込んでくる。

どうも、あのヨードは神ではなく、神の化身と呼べる存在であるらしい。

そして、今張られてる結界は、内部を隔離して擬似的に神のあの白い世界と同等の性質に変化させるものであるらしい。

神の能力はあの世界限定での業であるらしい。

それを構築するこの術は上位の神の許可を得れば対応した場所でのみ使用可能となるらしい。

って、この魔道書やばいな。

なんで神に関わることもかいてんだよ。

明らかに人が知る域越えてるだろ。

まあ、魔道書に対抗する魔法が記述されているので事なきを得られそうである。

神は魔力を用いて魔法を行使するのではなく、別の力、言うなれば神力とかそういう感じだろうか　兎に角、それを使用しているらしい。

ただ、それを読み取って少し邪魔をするだけでこの術は解除されるらしい。

あ、そういや、こいつさつきから心読みまくってたから今も読まれてこればれてんじゃねえだろうな。

十分ありえるぞ。

何も言ってこないのは寧ろ畏か。

まあ、良い。

取り合えず普通にやるか。

この術発動してから感じるよくわからん力を　弄る、と。  
ん？

普通に解除されたな。

視界も元に戻ってるし。

ヨードは驚いた顔をしてるが。

『貴様、何者だ？　神ではないのだろうか？』

「神じゃないけどそれが何か？」

取り合えず、この調子で結界を潰せばこの場は逃げ切ることが出来るだろうが、次もそう進むとは限らない。

どうせ対策とかしてくるだろうし。

「なー君、そのヨード何？」

声の方を見ると異変に気が付いてか宇美音子さんが来ていた。

位置的に、明らかに外壁を走ってきたようである。

重力を無視するのはいい加減止めた方が良いと思うが俺の押し付けだろうか。

「なんか、神関連らしい。取り合えず逃げた方が良いと思う」

「だよな」

と言う返答を聞くと同時に俺の意識は途絶える事となった。

瞬間的に宇美音子さんが視界から消失したので恐らくは、宇美音子さんが犯人だろう。

そして、意識が途絶える寸前に結界を解除していないことに気が付いて急いで解除することとなる。

完全にけっかつちんである。

俺としては人知を超えた作業であるので余裕を持って取り組みたかったのだが、まさか宇美音子さんという身内のお陰で慌てる羽目になるとは思いもしなかった。って訳では無いけど、まあ起きて欲しくは無かった。

宇美音子さんが俺の意識を刈り取ったという事は、多分、上空へと舞うのだろう。

まあ、俺とサイレン（仮）を背負って飛び交うことぐらい朝飯前だろうし気がかりにせず目覚めてから問いただすことにしようと思う。

出来れば、サイレン（仮）が人違いでないことを願いたい。

第三十四話 ・分相応は良いけど、他にしわ寄せ行くよな ・（後書き）

氷河期での就活は非常によくはないものです。主に趣味の時間が消えますし。

後、永久に描写しなさそうなので書きますが、退治していた魔獣は漏れなくぺったんこ量産の被害に遭っています。

第三十五話 - 主人公は自分のフラグメーカーっぷりを自覚するべきだ - (前書

最近、多忙の為投下できずにいましたので少々ペースを乱しつつも投稿させて頂きたく思います。

文体を最近ハシナリオの進みっぷりが牛歩戦術よろしくであったのでシンプルイズベストを目指していましたが、どうもガラではないので再びグダグダ小説へと変貌することにさせていただきますました。これでまた牛歩戦術並の進行度になります。

第三十五話 - 主人公は自分のフラグメーカーっぷりを自覚するべきだ -

「何起きてるか一瞬わからなかったぞ」

目覚めるや否や飛びこんできたのはヨードの顔だった。

色が緑であるのでナメツク星人だと勘違いする可能性も思いついたが、どちらにせよ実在しない存在であるので俺の厨二病具合に頭を抱える事になった。

俺が目覚めた事に当然、ヨードは気が付いたらしい。

瞼を持ちあげると同時に顔のズームアップを自重してくれた。

これ程接近して生きていけるとなると、今すぐに俺をぶち殺すって事はないのではないだろうか。

酷い拷問趣味とかいうような残虐的な趣向を嗜む場合は話しは別だが。

周囲を見回すと 見回すまでもなくベヒス嬢は確認できた。

俺が目覚めた事にいち早く気が付いたらしく、近づいてきていたようである。

ベヒス嬢の肩越しに宇美音子さん、オッド、サイレン（仮）が見えた。

怪我はしていなさそうである。

宇美音子さんに至っては元氣よく手を振っているではないか。

『神の御使いとは思わず失礼した』

頭に音と勘違いしてしまいそうな声が響いた。

頭に直接響く為、どこから発せられているかはわからないが、恐らく、少し離れた位置でこちらを見ているヨードが発生源だろう。

あー、問答無用だったから説明しても無理かと思っただがそれでもなかったようだ。

こんなことならさっさと事情説明すりゃよかった。

よく考えたらあの糞爺は糞爺に違いないけど、位置付け的にはこのヨードより権力持つ存在だったな。

あまりの印象の屑加減で思いつきもなかった。

宇美音子さんを見ると、どうやら自体をここまで収めたのは宇美音子さんであるらしく、ドヤ顔をしてみせていた。

そもそも、魔族が分布している大陸へと渡る為の提案されていた手段を行使する素材であるお金を消失させる原因が宇美音子さんにあった為、ドヤ顔をするのは間違っていると思わなくもなかった。

取り敢えず、宇美音子さんに感謝はしないでおこう。

「ドヤ顔をしてるって事は宇美音子さんが尽力してくれたってことか？」

『お前が魔法を使用したから神の御使いだと気が付いたのだ』

つつても魔法は皆使ってる訳だが、まあ何にしても俺の安全は保障され、チキンハートの全力振動をどうにか抑える事が出来たわけだから良しとしようか。

まあ、あの糞爺（神）と同様に世界の事よく見てねえから最近の事知らなくて過去の尺度で物語ってるとかあり得そうだし。

神とかその化身的な存在ってどうせ長寿か不死だったりするのがあるそうだし。

色々突っ込んでメリットは無く、下手すれば俺のチキンハートがまたまたバイブ機能を惜しみなく発揮してしまいかねないので自重するのが無難かな。

そついう俺の思考に従順に従う事にした。

さて、取り敢えずすべき事は別段何もしていないにも関わらず態度が妙にでかくドヤ顔をしている宇美音子さんにその事を追求する程気力を持ち合わせていない為オッド又はサイレン（仮）を探す事にした。

とは言っても、先程視界に留めていたのですぐに発見できた訳だが。

「おいオッド。そいつであつてたか？ あんまり確認してないつちやしてないから間違つてたら最悪だなーと思わなくもねえんだよな」  
魔物以外の気配を感じたのはこのサイレン（仮）ぐらいであつた

のでもし人違いであるなら、等号としてサイレン死亡というフラグが確立してしまうのだけれども。

「いや、間違いなく彼女がサイレンであってるよ」

サイレンが生きていた事に対して多少なりとも喜びを感じてりるのかいつもよりオッドはオーバーアクション気味に身振り手振りをして見せた。

その身振り手振りは本当に必要なのかと思わざるを得ない具合に要領を得ないものであったが。

まあ、何にしても無為に人が死ななくて良かったなと思うだけである。

魔物も何体か身体の一部が抉れてたりするかもしれないが、生命力が凄まじいし死にはしないだろうし事実死んでいないだろう。

これまで明確に殺したのは最初であった狼型の魔物を筆頭に少しだけである。

俺が罰せられるのであればそれ以上に罰せられるやつが幾らかいてしかるべきであるだろうことから多少不自然だと不信感を抱かない事も無かった訳だ。

閑話休題というか軌道修正。

完全に話が回帰して堂々巡りを成立させる所であった。

「あー、別に俺は怒ってもないし多少も不機嫌になっただけからもう元の場所に戻ってくれていいよ?」

と、神の化身が何か定かではないヨードに提案してみる。

どうも、一応は命を狙われた訳であるので目的というかこの状況というかその辺りがイマイチ理解できていない所が無きにしても非ずであるので付近にいられるとあまり落ち着きを取り戻せないのである。

ヨードはそれを察したのかモノ言わずに空気に溶け込むかの如く姿を消して少しするうちに気配も消失した。

さて、オッドの頼みも達成した訳だしそろそろ元々の目的を達成すべく行動指針を定めないといけない所かな。

その目的達成に大いにかかりそうなのがオッドなのだけでも、感動の再会の所悪いが、どうも目的の為にはそれを中断して貰わなければならぬ様である。

「あー、わかっているとと思うけど何か知らんが魔族が住んでる大陸へ連れて行ってくれや」

「ああ、わかってる。丁度勇者をここまで運んできた船が空いてる筈だ」

船か。

だいぶん前にも思ったが、狙い撃ち地味にされそうで怖いんだよな。

オッドが言い出すとなるとその辺り考えた上での発言だろうから光学迷彩とか魔法反射とか無効とか少なくとも魔法防御術式ぐらいは組み込んでる気がしてならないな。

いやいや、今考えても仕方ないか。

どうせいざ乗ってみりゃわかるだろう。

やべえなら俺だけ乗れば良いしな。

「ところでどこだよ」

一応、先の塔が見えるからあまり移動はしていなさそうだが。

オッドがその返答として説明を始めたが地名とかさっぱりな俺にはさっぱりだった。

しかも、妙に話が長い。

聞いたのは俺であるので無下には出来んと仕方なく終わるまで待つことにした。

「おい、聞いているのか？」

「ん？ ああ、聞いているぞ」

右の耳から入って瞬時に左の耳から抜けていくような勢いで頭には入っていないけれども。

「じゃあ、もつたいぶらずに教えるよ。あのやたらとめちやくちな女性は誰だ？」

てめえ、この場所の説明してたんじゃねえのかよ。

全く違う話じゃねえか。

まあ、聞いてなかったから妙に文句言いつらいのだが。

「あー？ 彼女ってのは」

オッドの指が向いている方向に目をやると宇美音子さんが目に入  
った。

「宇美音子さんだな」

せっかく教えてやったというのにオッドはきょとんとしてやがる。

「なんだって？」

お前の耳は飾りかよほんと。

「宇美音子さんだって」

「は？」

聞き取れないのは良い。

だが、態々腹に据えかねる気持ちを大量生産せざるをえない顔を  
表現するな。

表情筋を最大限に活用するタイミングを誤っているとしか思えな  
い。

そんな俺の苛立ちに気が付いたのか慌てて口を開いた。

「いや、まてまて。握った拳を開いて　そうそう、それで下ろそ  
うか。これで良い？　いやまて、張り手の可能性がまだ消えてない  
」  
と言うので仕方なく、手を下す。

「その、ナークが彼女の名前を言っているらしい所だけ聞き取れな  
いんだよ。ノイズが入るといっか……。それ以外は全く問題なく聞  
き取れるんだけど」

なんじゃそりゃ。

一応聞こえてるっちゃ聞こえてるけど上手く聞こえないってとこ  
か？

そう言えば、俺の名前は暫定としてナークになってるけど、その  
原因がなー君というのをフィニシアが上手く聞き取れなかったから  
にある。

ユウトは反応からして聞き取れてたっばいけど。

つつか、よく考えてみたらフィニアと付き合いが長いユウトも文字面じゃ片仮名表記って事以外では読み取れないが、発音おかしかったな。

外国人が日本語を下手に発音する様な発音と言っても良い。

フタエミノキワミアツー程じゃないけれども。

あ、そついや

「冷蔵庫」

「なんだって？」

「死ねよてめえ」

「急に酷いな。聞き取れなかったのは不可抗力だ」

「掃除機」

「聞き取れないな……。わざとか？」

なんで電化製品名を口に出しているかという確認である。

多少前から薄々感じてはいたのだが、これで確信したし確定だろう。

「多分、俺の国の言葉はこの言語体系じゃ使わないとかで聞き取れないんだろ」

英語が大嫌いで鎖国してるのかと疑われて然るべきな俺が英語を聞いたら日本語でおくってなるようなヤツの強化版って感じじゃないかな。

翻訳魔法も効果を示さねえようだし。

前のと合わせるそんな感じってとこじゃないかなあ。

「う・み・ね・こ。U・M I・N E・K Oだぞ？」

これで無理だったらもう言つまい。  
一応言っておくが、大事なことから二度言った訳じゃないからな。

語句が無理なら一音毎に区切れればいけるんじゃないかという苦肉の策である。

「うみねこ？ 彼女の名前はそついつのか」

発音がおかしいというのが片仮名表記でしか表現できない訳だが、

兎に角発音おかしく認識してくれたようである。  
よしよし。

これは多分、世界を跨いでの発音だから聞き取れないとかそういう超常現象的なもんだろ。

発音故に聞き取れないにはおかしいし。

下手にこっちの言語で翻訳できない単語とかは言わない様にしないと意思疎通に滞りが出来かねない。

こっちの世界にあるモノを把握できてないから地味に辛い制限だな。

普段意識しないから完全にド忘れしちゃうし。

それはまあ俺の注意散漫具合のせいだけだ。

これって世界の強制力とかそういうモンなのかなあ。

それだったらこれってまさしく世界の神秘だよな。

何も嬉しくないけど。

「それでは、戻るか。飛行船は街にある」  
かったるいけどな。

人と接触する機会があればある程口クでもない事が勃発する事は目に見えているのである。

問題の発生しない街での滞在は現状ほぼ皆無である。

俺はトラブルメーカー宜しくの問題パッシヴスキルを会得してしまっただけなのである。

どう考えてもメリットは皆無だ。

いや、RPG的に考えるならばその分イベントが増えてアイテムやら仲間やらを得られる訳だが、どうにもこっちにもアイテムは必要性を感じないし、仲間はそろそろ大所帯だからいらねえだろ。

俺と宇美音子さんとベヒス嬢は言っしまえばパーティーメンバーである。

予備軍として考えられる関わりを持っているのがオッドとエドル。戦闘に出られるのは三人までとかかな。

だいたい事実上一人出撃で事足りてるが。

初期配置の街で俺。

次の街でベヒス嬢。

その次ぐらいで宇美音子さん。

そんな感じでパーティが確定してるからそろそろもう一人新たな仲間が出来かねないのである。

無いと思うが、万が一その新たな仲間（仮）の食欲が先の宇美音子さんの暴食レベルであるならばエンゼル係数は格段に上昇してしまうのである。

来ると確信できるモノではないがその恐怖は想定してしかるべきだろうか。

とにかく、街に戻るのはあまり得策じゃない気がしなくもないのである。

どうせロクなことがないのだ。

今回は例外、そんな事もあるだろうが、現状漏れ無くロクな事が発生していないのである。

個人的に例外なんてのは都合よく発生してくれないと思っている。それも確信の域で、である。

幸い、街と塔を隔てるように存在した遮蔽物である森は吹き飛ばしたためイベントが発生しそうな要因は格段に減少しているので街までは安心出来るだろう。

「ん？ ってかちよい待てよ。さっき飛行船って言わなかったか？」

そうオッドに問うと、それがなにか？ という様な顔を向けてきた。

完全に死活問題である。

迂闊だった。

船だと聞いて安心していただけのだが、オッドが関わっていることを考慮出来ていなかったとは一生の不覚と論じて問題ない失態である。

ああ、もしかしてロクでもないイベントってコレのことか？

だとしたら相当悪趣味だな。

下手に魔族やら魔獣に絡まれるよりも最悪である。

飛空船となると、空を自在に飛行できる代物である。

海を自由に走行できる通常機能のみを付属した船でさえ、走行している海の透過具合によっては俺の意識は俺の手を離れる可能性が高いというのに、空を自在に飛行できる代物となると俺が対応しきれないはずがない。

これは自明の理である。

そうになると、街へと向かいたくない思いが極大になる訳だが、残念ながらサイレンとオッドを街へと届けないと下手に魔獣に出会って、人間から魔獣の夕食へとジョブチェンジする事態になりかねないので街まで一度行く必要はあるのである。

危険地帯である森は先ほども述べたとおり消滅しているため一見危険は無いようだが、どうも俺か宇美音子さん辺りが周囲にさりげなくまき散らしている殺気を取り除くと魔獣が殺到して我先にと夕食か昼食かは知らないが、三食の何れかに俺たちを組み込もうと躍りになってくるようなのである。

オッドやベヒス嬢曰く、通常であれば街から塔まで至る間に数十回と魔獣に遭遇して然るべきらしいのである。

それが、一度も無いのだ。

何やら原因があると思ひ見回してみると地味に殺気を振りまいている宇美音子さんが目に入ったのである。

それからは俺も地味に周囲に殺気を振りまくことにしている。

無論、オッドとかには誤っても殺気を振りまかないように最新の注意は払っているが。

殺気に慣れてないヤツは一定以上の殺気を受けると意識が混濁したりする場合があるからな。

取り敢えず、無闇に周囲を警戒して気張っているサイレンとオッドとベヒス嬢にはその旨を伝えることにしたのである。

するとどうだろうか。

サイレンは驚いた表情をしてみせたが、少々半信半疑といった風であったが、少し歩いて魔獣のまの影も見えないため信じたよう

である。

それから少々の警戒を残して気張るのを止めるといふ状況である。これが普通の反応だろうか。

多少凶太い気がしなくもないが。

いやいや、俺が言えた立場でもないが。

さて、まあそれは普通の反応として置いておくとしよう。

俺が気になったのは、耳にした瞬間やたらとくつろぎだしたオツドである。

警戒を解く所か寧ろ隙さえ見えてしまうほどである。

塔に向かう際にも少し漏らしていた訳だが、どうも現状魔獣に遭遇指定ないことを思い出したらしく、それで俺の言葉を信じたようである。

というよりも、今の今までサイレンの事やらでいっばいっばいになっていたんじゃないだろうか。

宇美音子さん曰く、ヨーダっばいあいつが神の化身っばい事に気がついて教えたなら相当取り乱したらしいしそれも尾を引いてるのかね。

まるで休日に朝からレンタルビデオを大量に借りて徹夜する勢いで上映会を開催し、その後半みたいな状況である。

流石に寝転がったりとかはしていないが雰囲気はソレである。自走こそしているが、ソレと錯覚してしまいそうなのである。

その不可思議な現象は最早幻覚作用を催す有毒ガスでも用いたのかと問いたくなるほどである。

ベヒス嬢はそこその警戒を一応見せてくれてはいるが、先と比べるとどうも完全に警戒を解いていると言って問題ないレベルであった。

中々に俺や宇美音子さんに信頼を置いてくれているのか慣れてきたのか判断を窮するところであるが良しとしておこう。

第三十五話 - 主人公は自分のフラグメーカーっぷりを自覚するべきだ - (後書

そろそろ挿絵とかを入れることも考えていきたいと思います。

表現力が宜しく無いのでその辺で誤魔化しでもしなければ申し訳ないかなと思わなくもありませんし。

挿絵が欲しい場面とかあれば要望してください。

画力的に再現可能範囲であれば再現していきたいと思います。

第三十六話 ・RPGで宿屋が頻繁にあるのは贅沢過ぎるな・（前書き）

更新が滞りがちで申し訳ない思いです。

非常に多忙なためですが、徐々に進めていきたいと思えますので生暖かい目でも暖かい目でも自由な目で見守っていただけるとありがたいです。

後、今後はどの様に投稿するか悩んでいます。

- 1：短くていいから早く投下していけや
- 2：今までみたいながさで読みたいから遅くていいから今までのようにやれや
- 3：何か他に意見があればどうぞ

一応、活動報告でも同じ様な記事を作成しますから、そのコメントでもいいですし、感想として意見を送ってくださいなくても結構です。登録してください方であれば、メッセージを送るという手段でも構いません。

このサイトに登録していない方でも感想は送れるように設定していますから是非ともご協力お願いいたします。

第三十六話 ・ RPGで宿屋が頻繁にあるのは贅沢過ぎるな ・

「まさか本当だとは思わなかったな」

と、男としか思えない口調の台詞を吐いたのはサイレンだった。

背がでかいから男と間違えられることが多いらしく自然とこの様な口調になったらしい。

顔自体は大いに女性であるし気配も同様に女性の風であるのだけれども。

ああ、閑話休題。

端から横道まっしぐらであった。

台詞は消え去った森の件に対してである。

消し去ったというのを信じ切れていなかったらしい。

文字通り消え去っている森を見てそうサイレンは漏らしたのである。

「言っておくけどやったのは俺じゃないからな」

という信じられない、という様な表情を向けてきた。

なんだ？

俺じゃないと何か困る事でもあるのか？

それとも、この中でやらかしそうなのは俺だけとかか？

それだとかかなりシヨックだな。

宇美音子さんを差し置いてやらかしそうとか完全に反省しなければならぬパターンである。

涙と鼻水を土石流の様に垂れ流して土下座しつつ反省するレベルである。

あ、宇美音子さん。

心を呼んで睨むのやめてください。

実際には心を読む事は宇美音子さんには出来ない為勘なのだろうけれども。

だとしたら尚更問題だろうが。

勘だけで判断して人を殺せそんな殺気を飛ばすのは改めるべきだと思わざるを得ない。

少なくとも一般市民ならば卒倒しているレベルである。

しかもいい加減に飛ばしているから多少周りに拡散してしまっているじゃないか。

現状、今いるメンバーの誰も気が付いていない程の微弱なモノだから大丈夫だろうけれど。

サイレンの肩の上の人形が動いた気がしたが気のせいだな。

サイレンも殺気に気が付いた素振りが無いしサイレンの拳動という訳でも無さそうである。

「てつきり、全てはナークさんがやっているものかと思ったのだがな。何せ、こんな事をしてかせるのが何人もいるなんて信じたくないからねー」

まあ、確かにあの邪魔極まりない森を破壊できるのであれば既にやっているか。

主に、精神的に森林伐採とかやりにくいかじゃないかな。

魔法使えば森なんて即破壊できるし。

「あの森の破壊は以前から言われていたんだよ。中々に強力な魔獣がいる訳だしね。でも、強力な魔獣がいるという事は、同時にその土地は強力な魔力を内包していることになる訳だ」

サイレンは、何やら意味ありげな表情をして「だから破壊できなかったんだよー」と言った。

魔力の内包されたモノを破壊する際には、対象の耐久と魔力向上の総合の耐久度を上回る耐久度か魔力を持つモノで破壊を試みなければならぬ。

例えば、あの森がこの世界の何よりも凄まじい魔力を保有しているのであれば恐らくそれは世界とか神にしか破壊できないだろう。

サイレンの台詞を鑑みる限りは、少なくとも森を破壊するぞと云っていた奴等の魔力量又は全員の総合魔力量よりも多い魔力を内包していた事になる。

俺ならばまだ魔力量が神の恩恵で相当ある訳だから納得できない事もない、という訳か。

それを魔力を持っていないであろう宇美音子さんが破壊するというのは規格外過ぎるという訳だ。

何せ、森が内包している魔力と耐久値を総合したモノよりも、宇美音子さんの物理攻撃の方が勝っていたという事になるのだから。

魔法を殴り飛ばしてブチ壊すというところある不幸を叫ぶフラグメーカーの幻想を破壊する右手よりも酷い仕様である。

宇美音子さんが森を軽々と破壊していた訳だが、あれはこの世界基準で考えれば奇跡の産物、最早崇拜して良いレベルであったのかもしれないな。

金食い虫は崇拜する気にはなれないので俺は宇美音子さんを全く崇拜しないわけだが。

話を蒸し返す最低野郎に思われるかもしれないが、残念ながらそれを考慮した上でも言わざるを得ない程に銭と食物の恨みは引き摺るものなのである。

さて、この件は宇美音子さんが関わる以上考えても仕方がないな。基本的に宇美音子さん含め俺の知る達人クラスは規格外中の規格外であるのである。

場合によってはナメック星でイベントが発生している際に戦闘介入しても生き残れるんじゃないかと思ってしまう事もある。

それを考えるとサイレンの驚き具合にも納得である。

魔力量から言って俺が一番その存在に近いと思っていた所、ダイクホースの宇美音子さんがその存在だと聞けば取り敢えず驚くだろうな。

後の事は驚いてから考える、そんな結論に至るだろう。

サイレンは力を恐れない様である。

サイレン自身、森を破壊しなかった事から、森を破壊できない、または瞬間的に破壊する準備が整わないのどちらかである事は明白である。

前者であるなら明らかに、後者であるなら速度という点を見る限り宇美音子さんより劣っているという事になる。

現状、知り合いであるオッドの知り合いとはいえ、自身を簡単に殺す事が出来る存在と殺す事が出来る状況で共にいる事は通常恐怖するものなのだが、どうもその素振りはない。

ベヒス嬢の時は、ベヒス嬢は軍人であるので同じ様な状況に立ち会った事があるからなのかと納得していた訳だが。

言ってしまうえばサイレンもホーネスに所属している限りは軍人と大差ないのだろうが、動きをみる限りベヒス嬢と違い戦闘経験があまりなさそうなのである。

身体の動作は中々であるが、体内をめぐる魔力があまり精錬されていない。

つまり、あまり魔力を　魔法を使用していないということである。

サイレンはホーネイからしたら木偶の坊って話だったけど、それと何か関係あるんかね。

ホーネイは音響魔法による新興宗教ってイメージあるなあ。

それだったら前線で徒手空拳であるなら通常は死に至る訳だし、拳動と筋肉の付き具合を見る限り前線で生き残れる程徒手空拳での戦闘に長けていそうもない。

まあ、ガタイが　背が高いのでそこそこ戦えるようになるのは間違いなさそうであるが。

まあでも、肩に乗っている人形然り、少女趣味が露骨に抜けていない所を見るとあんまり血なまぐさいのって体験してないのかもなあ。

これは完全に偏見だから撤回して却下してしまっただけ問題ないのだけれど。

「まあ、宇美音子さんは例外に身を置く人間の一人だしな」

そういう事で片しておこう。

個人的に俺は魔力を多量に過剰に神によって内包する事になって

いる為規格外的な事柄を行えても問題はないと思わなくもない。あまり使用しないとはいえ魔法による恩恵は大きいのである。ただ、魔法が扱えるというだけで単純に手段が増えるからである。宇美音子さんは、俺と対するように魔力を持ち合わせていない。この世界では一般市民でも多少は魔力を保有していることから、魔力量だけで言うならばこの世界で最も弱い存在という事になる。単純計算、蟻よりも弱いという事になる。肉体が強靱である

それが戦闘力の大半を占めているのは大凡見当がつく。それ以外の要素を挙げるとすれば短刀術を心得ているぐらいであるが、そもそもその短刀術が異端的な部類に該当する短刀術である為、前提条件として肉体が強靱である事が挙げられるのである。

その事から、事実上、宇美音子さんの強さは身体の強靱さが挙げられるのである。

魔力が無いとは絶対的な差が生まれる。それは事実上宇美音子さんが蟻よりも弱い存在になってしまうという例で分かると思う。

ただ、現実はそのようではないようである。少なくとも蟻よりは確実に宇美音子さんは強いのは間違いないだろう。

俺の作成した武器の幾つかは魔法を込めている為に対応の魔力を内包している。

森を破壊する際に使用したナイフも魔法が込められていた為魔力の問題は改善されていたように見える。

だが、それであるなら尚更に不自然な点が出てくるのである。というのも、居合い抜きもどきの鞘代わりに手を使用していた。魔力が全てと言って過言ではない法則が成り立つのであれば今頃宇美音子さんの手は無いだろう。

が、実際は手が無いどころか、今はベヒス嬢をワキワキしようと怪しい動きを元氣よくこなしてみせているという迷惑ぶりである。

ベヒス嬢も宇美音子さんのあしらい方慣れてきたっぽいな、完全にスルーしてる。

さて、これらの謎はどういう訳か。

おそらく、師匠が言っていた気とか言うやつなんだろうってのは前からわかっている話だが、どうなんだろうか。

人間と魔族の戦いでは魔力依存だからその辺り重要そうだよな。

「ウミネコとはいったい何者なんだー？ 見た感じは何の変哲もない女性だがそうじゃねーだろう」

まあ何の変哲もなくはないな。

詳しくは知らんが。

過去の話って聞かねえし興味ないからな。

「俺からすりゃなんかよくわからんもんと棺と人形を常時背負ってるヤツのが何者なんだよって感じだよ」

そういうとサイレンは多少乾いた笑いをしてみせた。

どうも何やら深い理由があるようである。

個人的に棺と人形を常時背負うなんて只事じゃない、寧ろ異常の部類であるのだが、それを常時行う事になる理由となると深くないはずはないのである。

少なくとも、せざるを得ない事情があるのは間違いである。

それを想定しつつ突っ込んだ俺は若干鬼畜の所業だったかと反省する事にした。

「ナーク、おそらく彼女が背負う棺は音響魔法に使用する媒体、楽団回路ではないでしょうか」

……ベヒス嬢が俺の背後から介入してきてビビったわ。

前触れもなく背後に回って声を出すのは控えてくれ。

完全に気が付いてなかったら辛うじて仕事をしているチキンハートの振動が停止して俺の活動は停止してしまうではないか。

楽団回路ってのは魔法使いで言うと杖みたいなもんだったかな。  
な。

さっき街にいた時にちよいと耳にした気がする。

気にしていなかったのでそれが事実と合致する記憶かどうかは定かではないけれども。

さて、それは全く興味無いので問題ない。

どちらかというところ、それはサイレンが使用するものなのだろうか。先の戦闘では使用した素振りは見せなかったが。

死ぬかもしれないという状況で使用しなかった所を見ると、反動で世界が減びるとかそういうモノがあるか、又は使用できないかだ。個人的に、ホーネイに木偶の坊扱いされているぐらいだから使用できないって方が正解に近そうではあるな。

面白味を求めるなら前者だろうけれども。だけれど、それだったら俺の魔力と似たような状態だし二番煎じか。

そういえば、楽団回路ってのはなんだろうか。

重要な媒体だという事程度しか覚えてないや。

音響魔法の性質を見たりしたりしてる感じ演奏とかに関わりそうだからそれ楽器か何かだろうか。

それだったら棺が超変化してギターとかになるのだろうか。

街で見た音響魔法の雰囲気的にオルガンとかそういうのになりそうなのがするけれど。

変形するとなるとそれは男のロマン満載間違いないな。

そうであると願っておく事にしよう。

サイレンに聞くのが手っ取り早いのは明確なのだが、なんかさっきの意味ありげな笑いを察する所、聞くべきじゃないかなって思うから聞けないんだよなあ。

一応、空気ぐらいは読むのである。

空気を読んで敢えてブチ壊すことはあるかもしれないが。

ここで空気を読まない宇美音子さんが参戦してくる事を危惧する訳だが、大丈夫そうである。

宇美音子さんはこっちの話に全く興味を得られない様でオッドに手品を見せて反応を楽しんでいる。

対するオッドはこの世界に魔法があるからか手品が無い様で反応は激しい。

これなら宇美音子さんも当分楽しめるだろうから心おきなく話をする事にしよう。

もう話す事思いつかないけどね。

サイレンの事はホーネイ所属でオッドの知り合いで異常に背が高く棺と人形を装備してるってことぐらいしか知らないなあ。

これだけだと、知り合いの知り合いがホーネイに所属している変人って事になりかねない事に今気が付いた。

が、気にしない事にした。

こりゃ、気にしてたら時間が足りない気がするわ。

気にする事がこれだけで収まらない気がするからな。

オッドとサイレンの歩調 特にオッド に合わせていたらかなり移動速度が遅いな。

塔に行く時は俺と宇美音子さんの歩調であつたので即行着いたけれど、今はまだ一直線に道が作成された森に入って少ししたぐらいである。

道程の大半が森を占めているので進行度はかなり知れているという感じが。

この調子だと下手したら夜までに到着できねえぞ。

森で野宿だろうか。

幸い、ここの魔獣はそれ程強くない為殺気を飛ばせば近づいてこないが、稀に存在する力の差を読めない阿呆が近づいてきたとしても晩飯になる感じだな。

あー、そういえば肉とか野菜には困らなさそうだけどこの森、川無いし泉はあるかもしれないけど未確認だから水分補給が難だなあ。地下水を引き当てられれば楽そうなんだけど、現実的じゃない。

この世界には地下の様子を察する事が出来る機械とか無いしね。

あつたとしても少なくともあれは現在所持して無いし、持ち歩く様な物でも無いから誰も持ってないだろうしな。

もし、持ち歩いてるなら俺は間違いなくそいつの精神を疑うし、そいつへの評価は気が狂った人という事になる。

俺と宇美音子さんがサイレンとオッドを背負ってさっさと進行するとう選択肢が一番手っ取り早そうである。

思いつくや否や、当然俺はそれを提案する訳だ。

無論、返答は賛同を得られるものかと思っていたが、オッドとサイレンが反対意見であった。

塔へ向かう際は賛同していたオッドであったが、そんなものなど幻覚以外の何物でもないと言わんばかりの反対体勢である。

もしや、やはりオッドにとってあの速度は毒だったのだろうか。

個人的にそう思う所も無きにしても非ずであったので仕方がないと提案を取り消す事にした。

主に風圧とかが問題だったのかね。

俺が提案を取り消すと言った瞬間に俺が取り消した提案を提案してくる宇美音子さんは良い根性をしていると思ったのはまた別の話である。

少々、オッドから説明を受けていないので事情を知らないはずのサイレンも反対体勢であったのは気になる所であったが、目下の問題は夕食である。

この森の中で野宿になりそうであるから寝やすそうな場所を確保しなければなるまい。

岩とか無いし洞窟の作成はできなさそうだし、能力を使って作るのも面倒だから地べたで良いかな。

雨は降りそうが無さそうなので大丈夫だろうし。

雨なら屋根ぐらいいは欲しいしその辺りの予想は重要なのである。

取り敢えず、このまま進行しつつ木の実とか探して見かけたら手当たり次第確保しておこうかな。

なんか、木はあるけど実がなってる木があんまり見当たらねえんだよなあ。

獣も基本的に近づいてこないしなあ。

何やら地味に夕食に困りそうな雰囲気であったが、腹の中の住人は自重しそうな雰囲気を見せもしない上に、腹の中でまだかまだかと暴動を起こす時期を待っているのである。

たとえ一食であったとしても抜かりがあればそれ相応の対応は必ず、腹の中の住人はその様な考えであるようである。

既に先走ったやつが多少俺の食欲を刺激してきている。

悟りを開いてもこいつとは生き別れは出来ないだろうなと実感した瞬間であった。

第三十七話 ・ 組織は陰謀の塊 ・ (前書き)

久しぶりの投稿になります。

ちよこちよこ執筆してはいますので皆さん生温かい目で見守ってください。

第三十七話 - 組織は陰謀の塊 -

「以前から思っていたのですが、ナークの料理は見慣れないものが多いですね」

と、俺がこっそり素材同様どこかに仕舞っていたナケナシの貯蓄での料理を食しながらそう呟いた。

よくよく考えてみると俺がこの世界に来てから食したモノは奇抜なモノが多かった。

と言ってもマスターの料理だけなわけだが……。

緑色のアレは最早俺からすれば料理どころか食物であることさえ疑わしい域なのである。

認めたくはないが味は美味しかったのだけれども。

この世界の食材は、以前の世界になかった味がある　という訳ではない。

味自体はどの食材もどこかで食べたことあるような味が多い。

俺がまだ出会っていないだけの可能性のほうが高いけれども。

そうは言っても全く同じというわけではない。

寧ろ全くの別物だろう。

以前の世界の食物と比較してこの世界の食物は、味と見た目が合致していないのである。

俺の世界がイス取りゲーム開始時の配置であるとするならば、この世界はぐるぐる回って適当に座った状態のイス取りゲームである。

椅子が味で人が見た目という所か。

別段、逆で人が味で椅子が見た目でも表現上差し障りないが。

何にせよ、この世界の食材は混乱を極める場合がある。

何せ、林檎にしか見えないものが唐辛子とか砂糖の味である可能性があるからである。

一番ひどかったのは、苺だと思って食べてみたらそれはどうも紫蘇の味であった時であった。

臭いは苺でも紫蘇でも無かったので予想できるはずもない。

違う味であるだろうと予想こそできるが、苺に似た何かじゃないかと思っていたのである。

この差異はそれはもう酷いものである。

サンタを信じる夢見る子供に紛争地の前線を見せるようなものである。

だから、料理自体は見た目と味の組み合わせが変わるだけで同じ様な物があると思っていたのであるが、どうもそうではないようだ。運がいいのか悪いのか。

例えば、バナナは腐りかけが美味しいという。

だけれど、腐ってしまったら大変なことになるものがあるだろう。

例えば鮮度とかいって差別化を測る魚等の肉類だ。

もし、これにバナナの味が割り振られていたとしよう。

するとどうなるだろうか。

腐らせた際の味はおいしいものかもしれない。

だが、味は良くとも腐った魚やら肉は食すべきものではないことは明白である。

某不思議のダンジョンに出演していた場合、満腹度が元気の最大値が下がるところかhpも低下して見せるだろう。

それ程のものである。

そういう事から、以前の世界では味わえたものが味わえなくなる

何てこともあるのだ。

その逆も然り

当然、あるにはあるのであるが、そもそも発見が難しいし時間がかかる。

そのため殆ど出会えてはいない。

ベヒス嬢が食す料理はそんな中の俺の苦肉の策である。

形状は味付けした木の実に味付けした板みたいなものを含んでい  
るハンバーガーとも呼べない何かである。

が、それは元の世界で言うところのハンバーガーの味なのである。

この世界は、単純な味の変化はしない。

もしかすると、味と栄養の組み合わせも違うのかもしれない。

幸いは、この世界の住人と俺の味覚がほぼ共通しているということだろうか。

この世界の住人が上手いものは基本的に俺も食せる。

口にあうかはまた別だけれども。

単純な味の変化ではない　俺がこう述べるには理由がある。

というのも、先のバナナを再度例に上げるのであれば、腐らせれば腐ったバナナの味がするとは限らないのである。

腐らせると肉の味になるかもしれない。

もしかすると、泥の味がして食べられるようなものではないのかもしれない。

その様に滅茶苦茶な変化をしてみせるのである。

魔導書によると、どうも魔力による作用らしいのだ。

少なくとも以前の世界は魔力が少ない、または皆無であったらしい。

俺は平和な世界に生まれていたようである。

そんな訳で、この世界での創作料理は地獄を見る可能性があるため、一定水準以上の料理が出来たら、それを主に食という進化を見せない停滞を望む食生活になりがちらしいのである。

今から思うと、最初に泊まった宿屋の料理も無難そうなものばかりであった。

そういう訳だから、この世界での料理の種類は殆ど無いようなのである。

そんな中でのハンバーガーは新鮮に感じられたのではないだろうか。

「たまたま発見しただけだよ」

宇美音子さんが何か余計なことを言って、俺が異世界人だと周知にならないかと心配していたが、黙って食っているので杞憂そうである。安心してばかりである。

個人的にはバレても問題ないけれど、現在、漏らしかねないと考えてしまう所謂パーティ以外の人がいるのである。

サイレンはそうバラすとは思えない人種ではあるが、やはり付き合いが短いという事は欠点であるようである。

人は形の見えない”時”という概念の影響を多大に受けるものである。

それは今の様に他者への認識も例外ではないのである。

博愛主義者になろうと思えばこれを超越する事が条件の一つになるであろう。

そういう訳で俺は博愛主義者に慣れないのである。

#### 閑話休題。

たまたま発見したと言われてはそれ以上追及できないと何か感じつつも思ったのか少々訝しげ成分を加えた表情でベヒス嬢はそうですか、と頷いた。

先にも述べた訳だが、俺自身はこの世界から見ても異世界出身であるという事がバレても問題は皆無なのだけれど、ややこしい事や面倒な事が発生するかもしれないと思われるので量したり逸らしたりとしている訳だ。

そんな訳で誰に話して誰に話していないかとか覚えていないのである。

もしかすると、誰にもバレない様に話していないかもしれないし、もしかすると今のやりとりは完全に蛇足であると言わざるを得ない程に完膚なきまでにバレているのかもしれない。

本当の所、どうだっただろうか。

話していないならば、ベヒス嬢からすれば俺の事は何もわからないという事になるのである。

俺的に、話した事を忘れてるってのはなんだか宜しくない様に思えた。

と、言う訳で後日それとなる話しておく事にしよう。

俺だったら旅仲間の事を知らないままで他人以上の立ち位置に持

っていけないのはあまり好ましい事ではない。

さて、この話というか思考はここまでにしておこう。

このまま続けたとしても漏れなく堂々巡りになるだろうし。

「まあ、気に入ったのならまた機会があれば腕を振るう事にするわ」

「ありがとうございます。では、直の事、今回の件は成功させないといけませんね」

成功、か。

それがどの意を指すかに寄るだろうが、おそらくベヒス嬢は死ぬな、そう言いたいんじゃないだろうか。

「そうだな、んじゃまあちゃっちゃと終わらせてまた今のメンバーで飯でも食おうか」

「なー君のかっこつけー」

俺が地味に良い台詞を言った所、それはすぐさまブチ壊された。

犯人は言うまでもなく宇美音子さんである。

ふざけるのは食事量だけにしてほしいものである。

いやいや、食事量だけでも大迷惑なのだが。

うん、全体的に自重してくれ。

「別に恰好はつけてるつもりない。明らかに俺のキャラじゃないしな」

俺には似合わないよ。

というかな、この世界に来てから俺の恰好いいシーンは皆無で高所関連の出来事により意識を手放し敗北を喫する等の恰好悪いシーンは満載なのである。

寧ろ俺は格好悪いのだ。

宇美音子さん、俺のこの思考を読んでいるのかどうか知らないけれど、ニヤニヤしながらこっちを見るのは遠慮願いたい。

凄くみじめな気持になる。

何せ、宇美音子さんは何だかんだ言って明らかに俺より活躍しているのである。

「にやにやと嫌らしい顔を浮かべて俺の気分を奈落の底へ貶めるの

は止めてモス風味のこれを食べておとなしくしてなさい」

と、俺は亜空間かなにかは知らないがどこからともなくハンバーガーのお代りを取り出して宇美音子さんの口の中に放り込んだ。

宇美音子さんはむぐぐ、と多少苦しさを表わす声を発して見せたが顔は笑み満載であったので俺の不満は一向に改善される事は無かった。

寧ろ、不満は増大する方向である。

ついでにエンゲル係数も増大である。

幸いは現在の食事の構成物質は主に貯蓄からなるので財布は痩せる事も無く太る事もないという事だ。

もし、関与する形式であれば間違いなく痩せる方向へと変化を見せていただろう。

それも、みるみるうちに、という言葉を体現せんというばかりである。

とは言っても、既に痩せ細っている為、h pバロメータは真っ赤っかになってしまっているので致命的状態であるのは変わらないのだが。

その真っ赤になり具合は無限地獄に投入されてもお目にかかれないう程に紅蓮であるだろう。

どうやら宇美音子さんはハンバーガーの投入に気を良くしたのか更なるハンバーガーを要求してきた。

それに刃向かう事のみを目的として無視を極め込んでみたがニヤニヤ顔を展開して見せた。

致し方なくわんこハンバーガーを実施する事にした。

着々と在庫が減っていく為後日食材を自主的に入荷せざるを得ないなど未来の面倒に付いて俺は頭を痛める事になった。

そういう訳で俺は後日の食材入荷作業の負荷を緩和する為に今多少入荷しておく事にしよう。

ここは森なので食材に困る事はないだろう多分。

断言できないのは森が文字通り壊滅的であるので自然が維持できているかが甚だ疑問であるからである。

とか何とか言ってみた所で現実は変化を見せないなので歩を進めてみるしかない。

森の中心部に位置する場所が直線状に消失しているので自然のサイクルが乱れていない事を願うばかりだ。

消滅領域は、森の消滅前全体の総量と比較すれば大凡5分の1に匹敵するのである。

それは心配してしかるべきだろうし、俺の心境も理解してくれると信じている。

俺の家の5分の1が突如消失したら発狂しているのかと思われるレベルで暴れるのは間違いない。

森の動物たちが暴れ狂わないのが不思議である。

野生の動物たちは以前の世界とは違い、魔物であるので人間に物言える存在なのだがその状態なのである。

文字通り物言える存在もいれば以前の世界同様に言語を繰る存在でない場合もある。

が、総じて言える事はあるのである。

肉体言語という言葉を持ち前の戦闘能力で繰る事が可能なのである。

主に俺と宇美音子さんが殺気を放っている事に鎮静の原因があるのかもしれないが、雑魚なオッド辺りは捕食されていても大丈夫そうなのだが。

近くにいますから。

俺達が近くにいますからという原因はありそうではある訳だが、塔の内部の魔物の様に殺気だっているという訳でもないのである。

これは塔内部の魔物の殺気を感じた瞬間に思うべき事柄であった。何にしても余計な戦闘が発生しそうな事は大歓迎だ。

今まで、異常に戦闘回数が多かったからな。

牢獄島に引きこもっていた時とは大違いだ。

というか、この世界が物騒過ぎるだけなのだが。

以前の世界で完全に敵対しているヤツとガチバトルしたのって両手で数えられる範囲しかないぞ。

修行という名の虐殺は何度もあったけれども。

木の実を漁っていて分かったが、宇美音子さんがこの森を破壊してからそれにより発生した森の傷跡付近に魔物は来ていない様である。

というのも、衝撃で落ちた木の実が放置されたままなのである。

俺が魔物なら真つ先に拾いに行くがな。

今なら俺らが殺気を飛ばしている為納得できるが、通り過ぎたらこの場に出現しても問題ないはずなのだが。

もしかすると、俺たちを避けているのではないのかもしれない。

状況から考えてこの森の傷跡を避けているのではないだろうか。

そうでないならば現状の情報のみでは予想ぐらいしかできず、断定までは至れない。

当初考えていたのは、先に述べた俺らの殺気から逃げているというモノ。

他には宇美音子さんに渡した武器群の魔力量である。

最初は鞘で武器群の魔力を一時封印していたのだがどうも宇美音子さんはお気に召さなかったらしく鞘は全てどこかに捨てられてしまった為最初にこの森に来た時には恐らく魔力は解除されたままだったのだろう。

とは言っても、実際に使用するまではそれ程では無い。

が、異質さというのは感じ取れるはずなのだ。

俺は亜空間に収納している性質がその辺には疎くなっている。臭い匂いも嗅ぎ続ければ鼻がおバカになって感じなくなる様なモノと似ている。

それ故に気が付けなかったのだが、一応人間でも敏感で魔力センスがあるヤツは薄々気が付けるものであるので放置できないと今は使用时以外は鞘無しでも封印できるように細工を施してある。

宇美音子さんに教えると何だかんだと文句が来そうなので内緒で行った訳なので誰にも話せないが。

森が破壊されたとなると通常はその場所の様子を見にくるものなのだが、何やら矛盾が蔓延している雰囲気である。

何やら気になる所で、知っておいた良い雰囲気満載だが、どうしようもない為放置する事にする。

さて、俺が食材集めに来たのは、そのまま食材が不足したため補充という面もあるが今の様に思考を展開する為でもある。

というか、当面の問題ぐらい答えをある程度絞っておかないとどうしようもない。

突如答えを求められてわかりませんではこの世界での俺の立ち位置から考えて宜しくないのである。

#### 当面の問題

厳密には俺の問題ではないのだが思考しておく必要があるだろう。それはサイレンの扱いである。

現状、街へと帰還すべく歩を進めている訳だが、おそらくサイレンはホーネイにとって何らかの鍵やら弱みを握っているのではないだろうか。

後者の可能性は扱いからして極めて可能性が低いが、前者はあり得る。

例えば、家宝に伝説の剣みたいなのがあつて、サイレンはそれを受け継ぐ一族の最後の一人で死んだらホーネイが奪える状態にあるとか。

例えば、サイレンは一度死ぬと幽々な白書の魔族大覚醒みたいな事が発生して遠くない内にあるであろう魔族戦でかなり貢献できる存在になるとか。

例えば、サイレンは凄まじい財産を持っていて、他に親族がいなからこのまま死んだらホーネイに寄付されるとか。

ぱっと思いつくのはこれぐらいである。

何故これの考えに至るかは単純な話だ。

ホーネイが明らかにサイレンを殺そうとしているという事だ。しかも、世間的にホーネイの評価が下がらない様に遠まわしにだ。

おそらく、俺がオツドの頼みを受諾せずに助けが来なければサイレンは今頃魔物の夕食だっただろう。

そして、この任務はサイレン一人である必要はないし、態々こなさなければならぬ任務でも無い。

正直、なくても大丈夫なのだ。

サイレンは音響魔法が使用できないとのことなので戦力としては認識されていない。

それ故に殺すなんて安直で意味の無い事はしそつにもない為、確実に裏があると考えるのは当然であると思う。

先の案で一番可能性がありそうなのは、財産関連だろうか。

伝説の武器があるなら今すぐ使ってるだろうし。

誰か固有の存在しか使用できないという限定条件があるならば、ホーネイの事実上死ね宣言であるこの任務をこなそうとしているサイレンであれば普通にホーネイに寄贈するだろうからなあ。

まあ、細かい事情でそれが出来ないとかはあるかもしれないが。

多分だけれど、サイレンが持つモノの中で確定的な価値がないが、価値が発生する可能性があるものか、絶対に必要ではないが、あつた方が良くというモノがあるならば十中八九それが狙いなんじゃないだろうか。

それだつたら個人的に気に食わないし、サイレンの意見次第に成りはするが援助しなくもないかもしれないな。

多少、考えておく必要があると思う。

「さて

何だかんだと木の実やらを補給できたので戻るとしようか。

多少急ぐとして明日には確実に街に到着しているので準備をしておこうかな。

下手したら今度こそ指名手配にかもだし。

第三十八話 - 聖人と同じ風格でもカスはカス - (前書き)

最近、戦闘ばかりだ。

きつと、終盤に近付いているんだね

### 第三十八話 - 聖人と同じ風格でもカスはカス -

「サイレンさん、任務はどうしたのですか？」

街について と、言えればよかったのだが、そこまで行かず森を抜けた辺りでその声をかけられていた。

幸いにも俺に声をかけた訳ではないのでスルーしようと思うわけだが、残念ながら現在の俺の目標は魔族がいる大陸へ行くことである。

それを達成するのに必須となるのは現状、サイレンを無事街へと送り届けて飛行船を入手というレンタルすることである。

更に、依頼人であるオッドが身構えている。

どうも、関係的に宜しくない様である。

現状、幾つかの理由により、どちらに付いてもいい場合、オッドとサイレンを擁護してもいいと判断しているため、俺もやむなしで立ち止まる。

見てみると、俺以外全員が既に立ち止まっているようであるので、先の選択肢で『立ち止まらない』を選択していれば漏れ無く空気を読めない阿呆になるところであった。

「……失敗しました」

サイレンは苦虫でも噛んだ 現在進行形で噛んでいる様な苦渋の表情を浮かべそう言った。

まあ、あんなだけ魔物がいたりや、普通ミスるわな。

俺がサイレンの立場ならそもそも拒否ってるわ！

「それでノコノコ帰ってきたのですか？ 塔がある限り貴女は任務を続行すべきでしょう」

と言われサイレンからは暗い空気が溢れ出る。

ふむ、ふむ。

簡単に説明すると、この急遽現れた頭も服装もザビエルみたいなおっさんは事実上サイレンに死ねと言っている糞野郎ってことだ。

任務内容が重要であるならばわからなくてもないが、せめて単独で突っ込ませるとか阿呆みてえな事はすべきじゃねえのは明白である。俺としては上記のように色々と思うところはあるわけである。客観的に見えても正直、おかしい部分は目白押しであるのだ。

「が、俺は現状部外者である。部外者であるのでここは傍観に徹する方が話をかき乱さないだろうという判断である。」

心配であった宇美音子さんもどうやら空気を呼んでくれているように沈黙を保っている。

「口がうずうずしているのであまり期待はできないが。」

「申し訳ありません……」

と、下げる必要がないんじゃないかと思わざるをえない頭を下げるサイレン。

「まー、見るからにこのザビエル野郎はサイレンの上司であるのでおそらくそういう理不尽な現象は自然に発生するのだろ。」

そして、眼前で繰り広げられている理不尽対応劇もその一端に違いない。

サイレンが我慢して頭を下げているので俺達はそれをぶち壊さない様に沈黙を保つべきなのである。

再度言うが、宇美音子さんは口がうずうずしているので時間の問題である。

「猶予はあまりなのである。」

「謝罪必要ありません。申し訳ないと思うなら、今すぐにも引き返して任務を達成しなさい」

事実上の死刑宣言ですわわかります。

まあ、流石にこんな任務は拒否

「 わかりました」

マジかよ。

「ワザワザ死刑台に登るって言ってるんだぞ分かって言ってるのか？」

いや、わかっているんだろうが。

余程、このホーネイという組織に弱いらしい。命を投げ捨てる程に。

組織に属した覚えがない俺に取っては信じられないことである。

「いい加減にしろ！」

という怒声。

オッドが息を切らせている。

怒声はオッドからによるものらしい。

まあ、サイレンはオッドに取ってそこそこ重要な人物な様なのでブチキれるのは理解できるが。

いやはや、まあ我慢の限界だよねやつぱり。

俺がオッドの立ち位置なら間違いない、サイレンの代わりにあのザビエル野郎を塔に放り込んでいるところである。

「オッド主任といえども、口を出さないでいただきたい。何せ、彼女はホーネイの姫君直々の命令を反故にしたのですから」

うえ、この糞命令、このザビエル野郎の独断とかじゃないのかよ。ホーネイって組織、マジで腐ってるなあ。

「つく！」

と、オッドは黙る。

いやいや、反抗できないのかよ。

それ程にこのザビエル野郎の地位が高いのか、それともホーネイの姫君直々の命令とやらが重要視されているのか。

「あー、オッド？ 俺的に目的達成してえし助力しようか？」

と、若干ポリウムを落としてオッドに話しかける。

オッドは苦渋の表情でしばしの沈黙を保ったが、じきに首を立てに振った。

サイレンもそれを見ていたが、止めはしない。

ふむ、この糞ザビエルよりかはホーネイに反抗的か疑問を抱いているようである。

「あー、あー、すみません。そこのザビエルさん」

と、ザビエル糞野郎に声をかけると、こちらを向く。  
うむ、うむうむ。

見れば見るほど、歴史の教科書に載っている例のあの人にそっくりである。

転生体なんじゃないかと疑問を抱かざるをえない程である。

さてさて、今は問題を解決するでしょう。

よくわかんねーザビエルの転生体についての考察などどうでもいいのである。

「なんですか？」

小首をかしげてくるザビエル。

どの動作を取ってみてもイメージ通りの挙動であると言わざるをえない。

そんな挙動である。

「塔がある限り任務に従事しろってことっすよね？」

ザビエルに対する俺の発言はすべてチンピラ的な発音であると思っただけならば幸いである。

それを十分に再現できていたのか、ザビエルの顔が怒りで引き攣っている。

コレを見る限り、普段どれほど人の上にアグラを搔いていたのかわかるというものである。

そんなザビエルが首を縦に振るのを見届けると俺は口の端が釣り上がるのが分かった。

さて、塔を破壊してしまおうかな

直後、轟音が周囲を襲った。

あれあれ、俺はまだ塔ブチ壊してないぞ！

そもそもまだ何も行っていない。

だが、塔の方を見てみるが、その姿はない。

こうなると、心当たりというか諸悪の根源は基本的に独りだけである。

「我慢できなかったんだよーゴメンねなーくん」

語尾に やら？やら の記号が付属されてもおかしくないと判断できる猫撫で声で言ってきたも場は和みはしない。

ほらほら、激しくやったからかザビエルがキレてるじゃないか。頭髮の間から除く頭皮も真っ赤にしているじゃないか。

これは相当にご立腹に違いない。

うむ、ザビエルの後方から明らかに武装している集団が現れたな。こりゃ、間違はなくご立腹である。

これは、諸悪の根源である宇美音子さんに押し付けるとしよう  
「頑張つてね、なーくん」

再度、語尾に色々な記号が付属してもおかしくない猫撫で声で言っても許されはしない。

後ろの下がりやがって。

俺に全部押し付けようという魂胆が見え見えである。

せめて一緒に対処しろや。

そして、一緒になって俺を壁にするように後方へと移動している  
その他の面々も同罪である。

ちょっと躊躇しているベヒス嬢は罪状軽減してやろう。

ニヤニヤしているオッドと サイレンもニヤニヤしてるな。

この二人は重罪に違いない！

「なーくん、悠長にこっちに恨みの念を飛ばしてて良いのー？」

ニヤニヤ顔の宇美音子さん。

それが意味するのは

背後を見ると、武装したむさ苦しい男共が襲いかかってきた。  
当人であるサイレンとオッドが参戦しない臭いのになんで俺が戦われないといけないんだよ。

そう思うわけだが、世の中には理不尽な出来事は多々あるのである。

これもきつとそのひとつだ

そう思わないとやってられない事はあるのである。

寧ろ、ポジティブ思考でいこうじゃないか。

うん、音響魔法の使い手が集うホーネイと戦えるのは、音響魔法の使い手と戦ったことのない俺に取っては幸いなんだな。

まあ、魔族は使わないだろうから役に立たないんだが。

それに、俺は生憎とバトルジャンキーでもないのであるが。目と鼻から雨が振りそうである。

いや、雨程度の表現で収まりきらないかな。

下手すりゃ鉄砲水とか土石流のレベルである。

音響魔法と相対したことがない事で喜べるのはバトルジャンキーなら、バトルジャンキーではない俺はどう考えるか。

簡単な話、手の内がわからないどうしたら良いのかわからない、下手すれば足元すくわれて死んじやうよってという相手である。

何気に身の危険を感じるわけなのだ。

少なくともあのザビエルがそこそこ位が高い。

事実、ザビエルが襲いかかってきている武装集団を指揮している様に見えるし。

となると、そこそこ音響魔法を使えるかもしれないなあと思わなくもない訳で、魔道書を展開したらなんか感づかれるんじゃないだろうなと思わなくもないのである。

魔道書を展開出来ればあらゆる音響魔法を把握して對抗策を知り尽くせるんだけど、その選択は安全策でありながら最善策には思えないのである。

今更、魔道書ばれてもいいんじゃないかなって思わなくもないけど、手札を切らないことは命綱を残せるってことだしなあ。

武装集団やら武装したむさ苦しい男共とばかり表現しているが、その武装は一般とはやはり違うものである。

一見すると只の西洋騎士である。

全身を騎士甲冑で覆っているし、両刃剣を携えている。

剣は片手持ちのそう大きくない剣であるが、相手の首を掻っ切るには十分　そんな、死を作成するに当たって十全の牙を持っているのである。

これだけの表記であれば先も述べた通り、よく居る　いやいや、よくは居ないが　西洋騎士である。

一般が抱く西洋騎士との相違点は携えている剣にある。よくよく見てみると、弦が付いていたりどことなく弦楽器を想起する形状や特徴を兼ね備えているのである。

楽器という面で見ると、着込んでいる甲冑も吹奏楽器の様な箇所等、何らかの楽器の形状や特徴を兼ね備えたモノが見受けられる。

#### 音響魔法

正直、魔道書なんぞ使わなくても多少予想はついているのである。地味に漫画とかに出てきそうな名前だし。

と、思考に没頭しすぎるのは宜しくない。

現に、目前まで騎士が振り上げた剣が　楽器なのかもしれないが　迫ってきている。

剣を受け流して、カウンターをブチかましてやろうと考えたが、せまる驚異の数が多すぎる気がしたので考えを改める。

密度で言えば、きつと東京の人口密度超えてるなこれは。

幸いにも、まだ迫り来る途中であるので退避経路は十分にある。敵の配置と筋肉の付きからから見て後方へ回避を試みれば追撃はない　そう勘が言っているので後方へと滑るように移動した。

足も動かさずに文字通り滑るように　傍から見れば幽霊よろしく恐怖映像でしかないが　後方へと退避した。

#### 瓦斑流、地滑り。

武装集団からはそれに対して驚愕の雰囲気を滲み出していたので逃げ切ったと思ったのだが、後方から妙な大気の動きを感知し、更に横へと滑るように移動した。

見れば俺が先ほど居た場所には斬撃痕。

それだけであるならば、風魔法の一言であったのだが、何やら違和感を感じた。

そんな思考をしている間に背後に再び妙な大気の動きを感知。

無論、先の斬撃痕がある為、先程より真面目に回避をする。右へと滑りつつ後方へと回転し攻撃を視認しようと善処してみるのが、攻撃は瞬間的なものなのか見えたものは斬撃痕のみである。武装集団の誰かが隠密行動で背後に潜んでいた。その考えは遮蔽物があまりないこの場では現実的ではない。

それに、気配も感じない。

攻撃の瞬間は人一人以下の気配は感じた。

もしかすると、使い魔的な何かなのだろうか。

まあ、何にしても　もう慣れた。

武装集団は最初のように突貫はしてこなくなった。

一度である戦法は通用しないんじゃないかと考えたのだろう。

指示しているのはザビエルであるのでザビエルを褒めるのは個人的にやりたくはないが、良い選択だと思っておこう。

再度言うが、ザビエルは褒めたくないがな。

「なー君、ちゃっっちゃとちゃっっちゃってよー！　お腹すいてきたー」  
表記はしていないが、さっき朝食を終えたところである。

宇美音子さんか宇美音子さんの腹の住人かは知らないが、自重し  
ると思わざるをえない。

「終わらせるから外野は黙ってるや」

切実な思い出ある。

早くやれと言うならば、俺一人に押し付けずに協力してくれれば  
いいのに誰も出てきやしない。

ゲームとかみたいに関闘パーティは何人までとかいう制限はない  
のだし。

背後から迫り来る攻撃は魔道書なしだと知識ほぼ皆無な俺にはわ  
かるはずもないので探求にしては気にしちゃ駄目だと捨ておくこと  
にする。

まあ、漫画とかなら、この攻撃の正体を暴いたり防いだりして相  
手を驚かせるとか、その正体を見破った仲間側の誰かがそれを暴露  
して相手をビビらせるとかあるんだろうな。

残念ながらここは漫画じゃないぞ。小説かも　ゲフンゲフン。  
閑話休題。

兎に角、仲間側の誰かが協力してくれる素振りなどベヒス嬢以外皆無で、そのベヒス嬢を見てみるとどうやら協力しようとは出張ってくれようとしてくれている様だが宇美音子さんに妨害されているので無理そうである。

あれ、宇美音子さんってそんなに俺に恨みとかあったのかな。  
ありゃ、駄目だまた話が逸れている。

さつき閑話休題とか格好付けて思ったのに。  
どこが閑話休題なのやら。

一応言っておくけれど、閑話休題という言葉の意味を知らない訳ではない。

さて、目前の問題の解決方法であるけれど、超簡単。

なんか、よくわからん攻撃があつて困惑してるなら、さつさとその攻撃してるヤツをぶつ潰せばいいじゃない。  
そういう考えで俺は行くぞ。

転白流、朧弓姫。

一応、朧弓姫という歩法は回避体術なのであるが、何気に汎用性が高い。

縮地の極地と呼べる移動歩法である。

別段、回避のみに使用しなければならぬという制限はない。

まあ、転白流は気配遮断やら認識阻害という様な隠密行動等で構成されているので、回避専門と捉えるのは当然の帰結であるのだから。  
うが。

兎に角、朧弓姫を使用して武装集団の目前まで　　つてのは武装集団と戦うことになるのでザビエルの目前に躍り出た。

補助的な異常攻撃ってこういう指揮官がやらかしてそんな予感があるし。

ザビエルはまだ気がついていない。

何気にしゃがんで視界に入らないようにしてるしなあ。

コレでケリがつくとザビエルの腹めがけて拳を振るったが何らかの障壁 見えない壁だな。超えられない壁みたいなもんだなに阻まれてしまった。

その際に衝突音が発生し、ザビエルの目がこちらを向いた。驚いているようである。

若干の放心状態に襲われているようであるので一旦距離をおく。うむ、よくあるゲームみたいに武装集団には悪いけど雑魚的な配置の奴らを全滅しないと攻撃できないよ設定かな。

音響魔法というからには音を奏でてソレにより魔法を発生するとかなんだろうから、多分、武装集団をブチのめさなくても楽器破壊すりゃおっけーなんだろうがな。

個人的に専ら怪しいのは、甲冑に同化している吹奏樂器的な部分である。

武装集団は楽器を演奏している素振りが無い為、動くだけで、風が吹くだけで音がなりそうだという疑惑が満載な吹奏樂器部分に目をつけたのだ。

まあ、面倒くさいから全部破壊するけども。

瓦斑流、地滑り。

先と同じ様に滑るように移動する。

ザビエルは多少呆けたままであったが、武装集団はザビエルの指示を受ける存在であるが、傀儡ではない為、動き出していた。

振りかかる剣を横から押すことにより逸らし、都合のいい攻撃法を行う。

瓦斑流、倉砕き。

武器破壊

それに徹した攻撃方法である。

使いようによっては鎧破壊、簡潔に言えば装甲貫通ができるのである。

熟練度によっては戦車でもどんとこいと言えるぐらいに反則的な装甲破りになるのだ。

今回は無論、それにより鎧破壊を徹底して行う。

個人的にぶち殺す方が楽なんだけど、殺しても楽器があれば見えない壁は消えないよとかありそうだし。

鎧ごとブチ壊すとなると宇美音子さんと交代したい所である。

なんだかんだ言っただ魔道書無しだと高レンジな攻撃とかあんまりできなんだよなあ。

対一とか対多とかの技はあるけど、どこも無く受身的なのが多い気がするなあ。

まあ、良いや。

取り敢えず、武装集団　そういや、人数とか数えてなかったな

あ　の15の鎧を破壊した。

一応いっておくけど、これで武装集団の鎧は全て破壊してるし、少なくとも現状で確認している武装集団の人数と破壊した鎧の数は等号で括って問題ない。

一応、剣は脆かったのか受け流す拍子に全部ブチ壊れてしまったので、後からそういえば、剣にも楽器っぽいのがあったね！とかいうオチは事前に潰しておくことに偶然にも成功した。

現在、武装集団は武装集団にあらず。

パンツ一丁集団と化している。

もはや雑魚の極み。

下手すりゃ村人Aとかにも桑とかあるならフルボッコされかねない装備である。

ザビエルは今頃呆けから回復したが、既に手遅れというもの。

これからザビエルの顔を、歴史書などでらくがきされちゃって変わり果てた姿になったザビエルの様にしてやるとしよう。

主に肉体言語のみで。

第三十八話 - 聖人と同じ風格でもカスはカス - (後書き)

前書きで終盤に近づいてるって書いたけどすぐ終わるわけじゃないです。

もうちっとだけ続くんじゃない

第三十九話 ・特撮物のヒーローはやっぱりさっさと超必使うべきだよな ・

「な、何が起きた!？」

ザビエル武装集団が変わり果てた姿 宛然、魔界な村で後一撃でやられてしまうという状態になったおっさんの様 になった事を認めるとそう叫んだ。

武装集団も周囲の仲間の姿を見て目を見開き、そして、相手の態度を見、自身の身体に視線を移して再び目を見開く そんな流れが繰り返されていた。

無論、俺はそんな隙だらけな敵を放っておく訳がなく、ザビエルに止めを刺そうと間合いを詰めた。

武装集団が動くこうとするものの、間に合うはずがなく、間に合ったところで装備も何も無い状態でどうにか出来るはずもなかった。

ソレに対し、ザビエルは慌てふためくことはない。

一応は人を束ねるものだったか そう感心したわけだが、どうも風格を現すような行動ではなかったようである。

結論から言うと、障壁を破壊した手応えはあったのだが、その奥に更に見えない壁があった。

ちよいと力を込めて殴った俺の拳は「バツカ! おめえ、痛てえよボケ!」と絶賛俺に文句を言っている最中である。

俺はというと、飛び跳ねるほど痛いわけでも悶えるほど痛いわけでも無かったので少し顔を歪める程度である。

「つく、ははははははははっ! 少し驚きましたがそこまですたね! 一つ目の障壁が私の部下、聖戦和音、の装備によるモノだと気がついたのは褒めて差し上げますがね!」

この台詞は、兎に角腹の立つ発言 思いつく限り腹が立つイントネーションであると思っただければ問題ない。

極めて、そして芸術的に奇跡的にピンポイントに俺を逆撫でする様な発音である。

俺の心境としては、今すぐにもザビエルの顔面を中心に拳の流星群をプレゼントしてやりたい気分である。

ふ、とザビエルが右手に嵌めている指輪を掲げた。その指輪は奇妙な形をしている。

パイプオルガンの様でDNAの様に螺旋を描いた形状で神話に出てきても良いかかって思う様な形状である。

ザビエルが指を振るう 呼応して耳を突く音が鳴り響いた。

かんだ上に失敗した口笛の様な、金属同士が接触して生じる高鳴り いや、金属はちよつと違うかな。

兎に角、聞いていると鼓膜に激痛が走りそうな音である。

ザビエルが指を踊らせている。

ソレによって只の鼓膜の虐待だと訴えられそうな音であったが、一応のリズムを取り始めた。

街で見た姫さんの魔法と同じ様な雰囲気である。

音に魔力が籠っているというのだろうか、不思議な雰囲気音だが、鼓膜が痛いのは変りない。

不思議な音を聞いて感動すべき場所なのかもしれないが、奏者はザビエルだし、おまけに鼓膜が痛い。

すまん、鼓膜が痛いつてのを押し過ぎだな。

まあ、それぐらい痛いと思ってくれば幸いである。

寧ろ鼓膜をもぎ取って捨ててしまおうかと気が違ったような事を考えてしまいそうになるのである。

音響魔法 おそるべし！

などと思いながら苦しんでいると途端に音が止んだ。

俺は音を避けようと耳を両手で塞いで蹲る様な形になっていたが、顔を上げることにした。

耳はまだ両手で塞いだままである。

また例の鼓膜の虐待を再開されたらたまったものではないからである。

鼓膜が未だに鳴動して少しばかり三半規管に影響を与えているの

か俺の足は少し覚束無い雰囲気であった。

どの程度覚束無いのかは三半規管が正常ではないようであるので判断しかねるわけだが。

経験的には子鹿の様なフラつき具合だろう。

「くくつ、どうしたあ？」

声の方向に顔を向けるとそこには武装集団が立っていた。

先程までのあと一撃で間違はなくやられてしまっただろうという格好であったにも関わらず、今は最初のように完全武装で凄まじく強気な顔である。

いや、顔は見えないから、そんな顔をした雰囲気満載故の俺の予想で妄想だが。

まあ、声だけ聞けば皆が皆俺の意見に対して首を縦に振るだろう。ザビエルとこの武装集団は、毎朝人を不快にさせる発音の練習でもしているのだろうか。

そう思わざるをえない具合に神経を逆撫でする。

閑話休題。

兎に角、ザビエルが居る限りエンドレスって感じなのだろうか。

ぶち殺すって方法もあるだろうが、その戦法は取りたくない。

つつかね、宇美音子さんが協力してくれば一瞬で終わるような気がものすごくするんだけどこりゃなんだ？

俺がこの状況になっても宇美音子さんは背後でニヤニヤしてやがる。

そういえば、俺が修行をしていた時期も似た様な感じだった気がする。

山で森の熊さんとばったり出会った時も我先に逃げたし。

しかも俺の足を蹴っ飛ばして逃げられないようにしてから。

あの時もこんな感じで逃げたと思っただら背後でニヤニヤしてたなあ。

なんだろ、確か俺があの時問い詰めた末の答えは好きだからだよって言ってたな。

小学生かよと叫んじやったよ思わず。

流石にオッドとサイレンも俺を助けようと動こうとしてくれているようだけれどどういう訳か宇美音子さんが全力で妨害していた。

最初はツンデレと思い込んでなんとかやっていこうと考えてはいたが、そう上手くいかないのが世の中である。

宇美音子さんを出来るだけ避けようと頑張った時期があったのだが、そうすると寧ろ逆効果でやたらと絡んでくるようになったので諦めて流されることにしたのだ。

今となってはそこそ慣れてきたので文句を思うことはあれどそこまで不満には思わなくなってきたしまっている。

人間の適応力を悲しい形で示した瞬間である。

魔法つてのは完全に専門外だからどうしようもないよなあ。

つて、良く考えなくても俺は神のお陰で最強の魔法使いとも言える能力というかアイテムを得ていたのだった。

うーん。

サイレンに見られてなんとなく喚かれるかなって思って敢えて使つてなかったんだけどサイレンは結構真面目に助けてくれようとしてるし良いかなあ。

よく考えたら俺が魔王つてバレて困ることってあんまりなさそうなんだよな。

元いた世界みたいに警察みたいな情報網と包囲網が凄まじい組織つての無さそうだし。

うっむ。

それに気がついた今思うのは、この世界の状況とかをちゃんと踏まえた上で考えるべきだったよなあ。

明らかに以前いた世界の常識とか状態に囚われて考えてたよなあ。これ切り抜けたらもうちよいちゃんと考えてみようかな。

ファンタジックな思考回路は宇美音子さんに相談すべきな気がすごくするからその辺もちゃんとやっところかな。

っと、完全に思考が脱線してたな。

取り敢えず、現状はザビエルと武装集団の打破が目的だな。

俺の三半規管はもう本調子になったようなのでさっさと魔導書を展開した。

そこいらのゲームとか小説的に言えば、神に貰った特有アイテムとか間違いなく使用頻度がダントツに高くなる筈なのだが展開したのはかなり久しぶりな気がするな。

身体とか意識が魔道書と魔力を貰う以前の状態に引つ張られているのでその辺りの思考に流れつかないんだろっな。

思わず以前の戦法で対処しようとしてしまう。

こればかりはワザワザ変えていかないとだろっな。

魔法使ったほうが明らかに戦闘が楽だろっし。

さて、魔導書を展開しを得たので欲しい知識が溢れてくる。

判らなかつたことがみるみる内に私的に常識となる様はなんとなく爽快である。

さて、障壁は結構あっさりと崩せそうなので問題はなさそうだ。個人的に腹に据えかねるのはザビエルがダントツである。

武装集団で腹が立つのは先ほど逆撫での練習をしないと無理じゃないかと思う様な発音で言葉を発したリーダーらしきヤツである。

が、まあこれは言い方が腹立つだけであるので捨ておくことにしよう。

打倒ザビエルである。

打倒ザビエルを達成するに当たって問題は障壁であった。

障壁が俺のこぶしで打ち破れなかつたのはどうも質量が一定以上のものでなければ破壊できないような設定であるらしい。

良く考えてみるとこの世界では魔法が主体であるので高質量な攻撃はあまりない。

大体がベヒス嬢の様に火とかそういうモノで物理攻撃ではないのだ。

ベヒス嬢の火は魔力で構成されたものだしなあ。

実際の火とは訳が違っしどう足掻いても高質量に成り得ないのだ。

そう考えるとザビエルの障壁は穴を突いた感じで事実上最強になり得る防御を兼ね備えていると言って問題はないだろう。

今回は問題になるだろうけれどなあ。

俺にとつてその破壊は相当知れているのだ。

「やれやれ」

武装集団も余裕をこいてる訳だし猶予は潤沢だ。

こつやつてゆつくりと地面に指を突っ込んで見せても何も慌てた素振りを見せない。

以前の世界なら漏れ無く銃弾をプレゼントして貰える所である。

両手に力を込めつつ俺はニヤリ、と口の端を吊り上げてみせた。

それが気に入らなかつたのか何やらザビエルは喚き、武装集団はそれに頷いて剣を振り上げた。

「どっせい！」

残念ながら攻撃モーションに入るのが遅すぎた。

畳返し いや、地面の一部をひっくり返してるから地返して所か やつてみせると武装集団を巻き込んでザビエルへと擬似土石流が発生した。

ザビエルがいた場所には少しの丘が完成していた。

木の代わりにギャグマンガよろしく武装集団が生えていたりしている。

窒息でもされたら困るので一応、魔法でその辺りが発生しないように細工を施しておく。

今は衝撃で意識を失っているようであるので動きを見せないが、いざ目覚めたらすぐに脱出できるだろう。

ザビエル以外。

ザビエルだけは下敷きになるような格好なので武装集団の全員が脱出した上で土をどけてようやく、といった形である。

「おっそいよー、なーくん！」

事が済むや否や宇美音子さんがやってきた。

しかもこの言葉である。

労いさえ無いのである。

慣れたものだが。

「そう思うなら手伝ってくれよ……」

一応提案しておけば次回は改善されるのではないかという淡い期待を込めての発言であったが、この発言自体、以前の世界で幾度も繰り返したことであったので改善のない今を思うと無駄な行動だったと頭を抱える事になった。

「ナーク、さっきのムランブ教主が来たってことはホーネイがサイレンを いや、ベルバンドを本腰入れて自分のものにしてるの明白だ。悪いが舟を上手く入手できるか保証はできない」

と、俺が宇美音子さんに文句を言っている間に近づいてきたオツドは言った。

コイツも俺に労いは無しか。

まあ、重要な要件があった様だからそっちに気を取られるのは仕方ないが。

「いや、別にいいよ。ちょっと俺的に吹っ切れてな。それでちょい思いつくところがあつたから問題ないわ」

ソレにより今までの行動の大半が徒労だという事が判明して気持ちには底辺まで落ち込んでいる訳だけれども。

「と、言いますと？」

何気に少しばかり目を輝かせてベヒス嬢がそう聞いてきた。

どうも、昨日の夕食もだけれど俺にというか、俺の行う行動に興味の有るようである。

好奇心旺盛なんだなベヒス嬢は。

最初見た時だと想像できない性質である。

「いや、普通に魔族大陸まで瞬間移動すればいいんじゃないかと思つてな」

ここからでも魔族大陸の生物の気配の位置は大凡把握出来るし、というのも、どうもこの星にはこの大陸の人間以外に人間が生息

してる箇所はそうないみたいなのである。

となると、やたらと離れて密集しているのが魔族ということになるだろう。

残念ながら魔族大陸そのものを把握することは出来ないので下手したら山にめり込んだりするんじゃないかねえかなって思わなくもなかったのだが、魔族が移動するルートから計算すれば大凡の地形はわかrazとも、どこはまず山にめり込んだりとか破茶滅茶で防御不可能なイベントが発生しない場所であるか等は最低把握できる。

魔族が通過したゾーンであれば問題がないということなのである。「色々と転送魔法には制約があるんだが、ナークならその辺り関係ないんだろっな」

やれやれ、といった感じでオツドは肩をすくめて見せる。

「悪いけど、俺達も連れていってくれないか？ 役には立つつもりだ」

戦場というか死地へと向かうわけなのだがオツドはそう言っただけだ。

サイレンに止めるやボケがという視線を向けるも、サイレンもオツドと同意見であるようだ。

「オツドは兎に角、少なくとも私はホーネイに何れ消される身だからな。死んでも時期が変わるだけだ」

なんとなく悟り切ったような目をしているなあ。

「ところで、なんでサイレンちゃんは殺されそうになってるの？

ペロペロできるぐらいすんばらしく可愛いのに！」

最近、戦闘続きだったからこんなKYでもあたたかい目で眺められるわ。

「まー、大体わかってるよ。取り敢えず、それどーにかするか。後、サイレンの戦闘力部速の解消かな」

言った通り大凡把握できているのである。

魔導書を展開すれば一瞬だったという呆気の無さはなんとなく虚しかったけれども。

サイレンが担いでいる太った棺みたいな物の上に鎮座している人形の様なモノに腕輪やらネックレスやらイヤリングといった装飾品が装着される。

これは俺の腕輪のような魔法物質である。

「<sup>リット</sup>形状実装」

オッドから貰ったイカれた素材を一つ使用してバミューダトライアングルで様々なモノが摩訶不思議融合を果たしたような鉄の塊みたいなモノを作成する。

これは一応音響楽器である。

「まあ、戦うことになっただらこれを振り回してりゃ良いよ」

振り回すだけで辺りに破壊を撒き散らすのである。

少々危険だとは思うが、サイレンの戦闘力を考えれば妥当であると信じた所である。

「取り敢えず、追っ手とかがありえるし、魔族大陸に行ってから続きは話すか」

「……私としてもあなたの正体を知りたい」

太った棺の上に鎮座していた人形　実際は人形ではなかったのだが　が自身の足で地に立ち声を発した。

いざ動いてみるとただの子供にしか見えない。

宇美音子さんの目にも同じ様に写っただらしく抱きしめている。

文字通りペロペロとしゃぶりつきそうな勢いであったので流石に身の危険を感じたのか宇美音子さんを引き剥がしにかかっていた。

それを眺めるサイレンとオッド。

啞然という言葉はこういう際に出来たのかと思わざるをえない程に口をあぐりと開けて固まっている。

恐らく、この人形だと思っていた子どもがベルベンドなのだろう。内包している魔力を視る限りホーネイがサイレンを消してでも手中に収めたいと思う気持ちが理解できるというものである。

まあ、実際はそこまで知っていたって感じじゃ無さそうだがなあ。知っていたらあの程度の人数ではこないだろうし、サイレンをあ

んな遠まわしにブチ殺さずに普通に冤罪とかで処刑するだろうしな。  
「はいはい、宇美音子さん。一応感動の再開に近い状態だから抱き  
ついて邪魔はしないようにな」

そう言っただけでベルベンド（仮）に助力をする。

引き剥がしが成功すると少しばかり宇美音子さんに睨まれて背中  
が寒かったが馬鹿な事をしている場合じゃない。

「んじゃ、こいつらが目覚めるとか別働隊が来るとかそういう事あ  
りえない事もないしさっさと行くか」

魔族大陸へと。

つつか、さつさと瞬間移動の事気がついてりゃ即行だったのにマ  
ジで骨折り損のくたびれ儲けじゃねえかよ。

マジですまんかった！

第三十九話 ・特撮物のヒーローはやっぱりさっさと超必使うべきだよな・(後

ぐだぐだと続きます

第四十話 - 武器のバージョンアップとか無駄だから最初から最強をくれ - (前

お久しぶりです。

最近、酷い地震により凄まじい影響が出ましたが皆様は大丈夫でしょうか。

第四十話 - 武器のバージョンアップとか無駄だから最初から最強をくれ -

「おわっ！ 魔族ってやっぱ魔法発展してるだけあって道が舗装されてる！」

これで突如の崖に怯えなくていいじゃん。

先の台詞でわかるかもしれないが、無事瞬間移動で魔族大陸へと移動できたのである。

さて、取り敢えずベルベンド（仮）がものすごく何か言いたそうにしてるしさつさとどこかに隠れるべきだろう。

俺は空気がある程度読む人間なのである。

敢えて読んだ上で空気をぶち壊すときも無くはないけれども。

私的に言うのであれば、神の恩恵で破茶滅茶に魔法を使えるようになったが故に人外に入ってしまったてるんじゃないかと思わなくもないのである。

さて、無駄な思考はこの辺りでカットすることにしよう。

幾ら何でも、敵陣地と言える魔族の大陸に入っているにも関わらず道端で突っ立ってる状態は宜しくないだろう。

確実に正気の沙汰ではない行動である。

俺が慌てない理由としては、付近に魔族の気配が感じられないからというモノがあるからなのだが。

気配を感じられないとか、気配が近くにあるとかなら急いでそこいらに隠れている。

そのぐらいの思考が浮かぶ程度には頭を回転させているのが俺である。

さて、隠れる場所であるが、初めて来た場所なので心あたりがあるはずもない。

とは言ってみたが、ここにいるメンバー全員が初めて来たことになる。

例外が居るのであればその人物は魔族か魔族に繋がりのある人物

ということになるだろう。

前世は魔族でしたから、なんて電波的な事を言い出すのであればそれは電波的な方々の意見を否定すると自身の身の危険を発生させる要因になると勝手に先入観的なモノを作成してしまっている俺からするならばカウントせざるを得ない意見である。

まあ、そんな意見を吐く人物とは是非ともお付き合いになりたくはないので距離をおくことになる訳だが。

閑話休題しとこう。

いい加減に無駄な思考を切り上げておかないとだめだなあ。

決意でもしない限り無駄な思考がRPGゲームの雑魚キャラ並に無尽蔵に現れてくるとしか思えないので決意をする事にしよう。

身を隠すまでで良いかな、と自身の縛りを最大限緩めた状態の決意をする俺の決意は決意と呼べるのか首を傾げた。

その傾げた首を灯台のライトの如くグルグル回して周囲を確認するも、ここで舗装されていることのデメリットに気がつくだけでしか結果を出せなかった。

そこそこに長い間野性的というか原始的というか未開発的な地形の地域にいたので自然溢れる場所に慣れてしまっていた。

よくよく考えれば前いた世界で脱獄した際に一番困ったのは隠れる場所の確保であった。

今回はそれを思い出す形である。

舗装されていたら木とか無いしそりゃ当然の帰結だよな、と隠れる場所がすぐ見つかるかと安直に考えていた少し前の自分に少しの怒りと呆れを抱きつつ考えた。

野生化してしまったのか判りはしないが、少なくとも今は自然が恋しい俺は自然が溢れていそうな場所を探して歩を進めなければならぬ。

主に視界に入る緑を指すだけなので、緑の着色を施した家などがあるならばそこに向かってしまいかねないという欠陥を秘めているのだが、魔族が近くに居たら流石に宇美音子さんが言ってくれる

だろうと他人任せな思考であるので、ある意味で 悪い意味になりかねないけれど吹っ切れてみた。

船便やら空便を介さなくともこの魔族大陸に来ることが出来た感動を噛み締めるが如く大地を踏みしめる喜びを味わいつつも足だけは動かすことにした。

頭は現在、船便及び空便を回避したことを思い出して有頂天であるのでまともに稼動していないと言って問題ではないだろう。

喜ばしくない現象であるが、状態は喜ばしいモノである。

船便・空便はこの世界に来てから最も危機感を感じたモノであると断言できる。

ソレほどまでに危機的状況であったのである。

アレを回避するためであるならばよくゲームなどに登場する一切合切の幻想種等に喧嘩を押し売りして肉体言語で語り合うという明らかに無謀で視察行為で無意味な行動を執行するほうがまだマシだというものである。

目指していた緑は幸いにも建造物などの人工物ではなく森林であった。

幾ら文明が発展していて自然が少ないとは言え、自然がないわけではないようである。

森林の奥には山がある格好で、山に木は無い。

所々に見られる掘り起こされた人工的な洞窟やらつるはし等を見る限りここは鉱山の機能を果たしているらしい。

今はどういふ訳か周囲に気配を感じられず、沈黙を発生させる場所になっている。

見れば、所々に放置されている採掘道具には埃が被っており、どうも随分放置されている様である。

廃鉱山か何かだろう。

この辺りであればそうそう見つかることもないだろうと考えなくもないが、文明が発展していることは監視カメラのようなものが存在するやもしれないので注意は必要である。

銀行強盗を繰り返した経験があるので防犯カメラを探すことは慣れているためなんとかなるだろう。

そう警戒してはいたが見るからに何も見当たらない。

発展具合からして元いた世界ほど科学は発展してはいないようだが、それと並行して魔法が発展してはるはずなのだ。

少なくとも人間以上に魔族の魔法は発展している。

それを踏まえると警戒は怠れないのである。

魔法の面は魔導書を展開し、知識を潤わせる事でどうとでもなるだろうから、まあ当面は大丈夫といえば大丈夫なのだ。

ただ、魔法で言うならば遠見の魔法とかあるなら、下手すればこの状況も見られている、なんて事がありえ無くはないから魔法は厄介である。

こつちが使うなら便利な手段なんだけど。

廃鉱山には無数の穴があった。

やはり、これは掘り尽くした鉱山なんだろうな。

その中の一つを目指して歩を進め、皆はソレについてくる。

穴は大凡2mから3mといった程度の直径で、手作業で掘り起こした感満載の不恰好でシンメトリーを保っていない形状である。

よくよく見れば穴はまっすぐに奥に繋がっているわけではなく、若干左右にぶれたりしている。

科学が発展していると思っただが、あまり発展していないのだろうか、それともかなり手抜きで掘ったのだろうか　などと考えたが、別段鉱山道をシンメトリーに象る必要がないし、芸術性で評価が変わるわけでもない。

そう思うとこの一連の思考は正しく無駄であることを理解し、己の思考の流れ方を恨めしく思った。

無駄もまた必要なものであるとは思っているが、この思考は掛け値なしに無駄であるからである。

入った穴は鉱石採掘の為に作ったのではなく、迷路でも作っているのかと聞かざるをえない程度に中は入り組んでいた。

外から見える範囲では少し曲がった穴　その程度しか印象は受けなかったが、外から見えない所に来るやいなや本性を表したようである。

なぜコレほど無駄に入り組んでいるのか　非常に気にはなる。明らかに直線で掘ったほうが内部で採掘できたモノを運び出しやすいというのに。

歩いて数十分という距離は中々のものである。恐らく、ここである程度の音量でなら叫んでも外には響かないだろう　その程度の距離である。

この穴が開けられた鉱山はここまで大きいものではないように思ったのだが、中が入り組んでいたのでそれ程の距離は進んでいないが、時間だけを食ってしまったという可能性もなきにしもあらずであるけれど。

まあ、良いか　別段叫ぶわけでは無し、話すだけなのだから。

「んじゃ、この辺でいいかな　形状実装<sup>リフト</sup>」

俺は鉱山の一端を椅子に変化させ座れと促すと皆大人しく座った。今の今まで宇美音子さんが喚くわけでも茶化すわけでも反抗期に入るでもない事に対して驚嘆の念を抱かざるをえないだろう。

日本に本当にゴジラがいるレベルの驚嘆を送っておくのでしょうかな。

「　それで、あなたの正体を教えてくれるのよね？」

皆が座ると一呼吸も置くこともなくベルベンドが口を動かした。

「あー、うん。そうだな。簡単に言くと神に不可思議能力貰って異世界から飛ばされた一般人ってトコかな」

牢屋に入れられるパターンの一般人である。

語弊がありそうなら撤回して民間人と言い直してもいい。

宇美音子さん以外は「神」という単語を聞いて驚いた表情を浮かべている。

「その不可思議能力でこのあり得ないほど強力な封印を装飾品程度の媒体に付加できるって事？」

頷いてみせると「デタラメね」と、ベルベンドは肩を竦める。  
そうは言われても神はチートなのである。

この能力を望んだのは俺だけだな。

「摩訶不思議能力は幾つあるのです？ この装飾品を作った能力、先の戦闘での異常な動き 常人では得られないものだと思いますが」

「俺に与えられた能力は物質操作 なのかなあ。まあ、物質の變化が主な役割だしそれで間違いないだろう。で、さっきの戦闘の動きつてのは元からあったもんで神は関係ないよ。多少神に身体性能を勝手に上げられたようでそれで以前出来なかった行動が多少は出来るようになってるけどな」

信じられない そんな顔である。

んー、確かに武術の奥義に近いものになればなる程どう足掻いても会得出来ない人間ってのが出てくるからなあ。

才能というか適正というかそういうモノがあるんじゃないかな。  
と、一人顎に手をやり思う。

そう考えると、完全ではないにしろ多少は扱える俺はマシな部類だったってとこかな。

「まあ、特別な動きをするって技術だよ。簡単に言ったらだけどな内容については種類が多いから気になったヤツがあったら随時聞いてくれたらいいよと言いたいけど、俺よくわかってないしな。興味あるなら宇美音子さんに聞けばいいよ。少なくとも宇美音子さんの扱うモノならば明らかに俺より卓越してるし」

と、どさくさにまぎれて宇美音子さんに面倒そうな説明を押し付ける。

実際、原理などわからんし勘でやってるようなもんだしな。

説明のしようがない。

宇美音子さんも同様であるのか、恨めしそうな顔でこちらを見て

いや、あの眼力になると睨むってレベル でもないな。

ソレを超越した目だわ。

今、人を殺してきましたって目ではなく、今人を殺してますってレベルの目だな。

後が怖いのが逃げに徹すれば物理的にあの世に逝く条件を整えることとはなくて済むだろうとタカをくくってどっしりと構えることにした。

逃げという選択は明らかにどっしりと構えてはいないけれど。

腰が引けている。

どっしりの対義語があるなら今ここが使うタイミングである。

「あー、後、神からはこれも貰ってるよ」

宇美音子さんの視線を意識し続ける事に絶えきれず話をすすめる。沈黙は長時間に感じられたが、周囲の反応を見る限り一瞬だったようである。

身も竦む思いとはこの事だろうか。

今の俺は心臓も竦むどころか、心臓が裸足で全力疾走で逃走しかねない状態である。

心臓が逃げるとしたら足はないから血管を蠢かして足がわりにして逃げるのかな　なんて現実逃避としか効果を発揮しない思考に没頭しかけるレベルである。

さて、話を円滑に進める為に魔導書を展開し掲げる。

風の魔法で浮かばせて見えやすいようにと心遣いも発揮してみた。パツと見只の本である。

宇美音子さんを筆頭に頭にクエスチョンマークを浮かべているそんな顔である。

ただ、オッドは違う。

「それ、本物？」

恐る恐る、といった調子でそう漏らした。

顔は真っ青という程ではないが少し血行が宜しくないように感じられる雰囲気である。

オッドにそんな顔色をさせる程ヤバイものだったのだろうか。

もしそうだったら俺的には動力が核とかそんな感じのモノとかじ

やないかと思わざるをえない。

「一応神に貰ったモンだし本物じゃないかなあ。神器の変わり臭いしコレ」

魔の勇者の神器とかなら主人公真つ盛りとか戦隊モノで言うところから仲間になるヤツ的な立ち位置に成れただろうに。

後から仲間になるならカラーリングは白とか黒かな。

魔導書は黒とも取れるし紫とも取れるなんとよくわからない色だ。絵の具ぶちまけちゃったような色、つまりきつたねえ色と言ってもいいけど。

明らかに使い古してるか使ってないけど古いモンだし。

生物でもないのに貫禄を感じそうなレベルで年季が入っているのである。

「ちよつと見せてくれないか？」

誰でもない友人のオッドの頼みならば吝かではない。

当然俺は首を縦に振る。

オッドのことだから歓喜の声を上げつつ我武者羅に魔道書の中身を観るんだろうかと思っていたが、恐る恐る表紙を捲るだけである。表紙を捲ると文字通りオッドは固まった。

何だ何だと覗き込んだベルベンドも固まる。

俺以外が覗き込むと固まってしまふ魔法が施されでもしていったのだろうか。

そうであるならば大事であると俺が少々心配を生産する装置になりそうな所でオッドが再起動しベルベンドもソレに次いだ。

「一体どうしたのですか？ 私は魔道書に詳しくはないのでわかっていないのですが」

ベヒス嬢は最初から自分が見ても無駄だろうと思ったのか魔導書を見てもいない。

俺の今世紀最大とも言える告白に興味がないのだろうか。

短い期間だが旅の道連れの存在にそんな反応をされると少し寂しい思いである。

「ベヒスさん、君でも理解できるよ　これの名前は、想像天魔物証伝魔の章」という」

オッドの台詞に俺は首を傾げ、俺は理解出来ないからこの世界でちよつとばかり名が知れたマジックアイテム的なもんかね、とか思っていたのだが、その考えは甘いところにあるとベヒス嬢の顔を見て理解した。

「お伽話の、ですか？」

「ああ、そうだよ。やたらと過去の文献に名前が出てくるお伽話にしては資料がありすぎるアレだよ」

と、俺が聞いてもイマイチわからない事であったので聞かないことにした。

厳密には聞いているのだが、耳から入るや否や他の穴から飛び出てくる具合に聴き逃している。

興味ないし。

仕方が無いので宇美音子さんと話でもしようと思いを向けると未だに凄まじい形相だった。

他の皆が話し込んでしまったのでこの隙に乗じて殺されるんじゃないかと生命の危機を抱いてしまう表情だ。

取り敢えず、宇美音子さんの服　ここで敢えて言おう。宇美音子さんは手ぶらと思いきやそうではないらしくころころ服装が変わる。それも全て何かのキャラクターの格好である　が変わっていることに気がついたので褒めることにした。

結構いっぱいはいっぱいであるので自分が何を言っているかよくわからずに口を動かしているといつの間にか凄まじい表情はなかったかのように穏やかになっていた。

穏やかというか厳密には普段に戻ったってただけだが。

「おい、ナーク」

「あん？」

折角、宇美音子さんの機嫌を少なくとも外見レベルで言うなら元に戻せたというのに、水を指された。

返事がチンピラ宜しくな俺の印象が変わってしまうかもしれない内容になってしまったではないか。

これでしょうもない話しだしたらどうしてくれようか。

まあ、何だかんだ言っておツドならば俺的好感度がそこそこにあるので許してしまう事になりそうだけれど。

取り敢えず、返答をしてしまったからには仕方がないと宇美音子さんを視線から外し、声の方向へと振り向くと、ベヒス嬢、オツド、サイレン、ベルバンドがこちらを見つめていた。

見ている、という表現で表せない程度にこちらを注視しているのである。

ふむ、ベヒス嬢もこの状況の作成に貢献しているのでそこそこにまじめな事であるらしい。

と、俺の中での彼らの印象を少し遠まわしに漏らしてみる。

「ナーク、あなたのこの魔道書 想像天魔物証伝く魔の章」と言うのですが、これは神器よりも凄まじいモノです」

ベヒス嬢にしてはやけに引っ張るな。

というより、言いにくそうにしているというか、信じがたい内容なので口にしづらいというかそういう雰囲気である。

「これは 天地創造の一端を担うモノです」

重々しくベヒス嬢の口から出た事実は、あのいい加減な神を知る俺の耳に入っても「ふーん」という適当な返事しか返す事が出来ない程度の衝撃しか走らなかつた。

多分だけど、殆ど使っていないから実感湧かないんだと思う。

第四十話 - 武器のバージョンアップとか無駄だから最初から最強をくれ - (後

誤字脱字、発見し次第修正していきたいと思います。  
発見なさった方は是非ともご報告お願いいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8831k/>

---

魔王物語

2011年3月20日16時26分発行